仙台市文化財調査報告書第326集

南小泉遺跡他

発掘調査報告書

南小泉遺跡第52～57次
今泉遺跡第5･6次、大野田古墳群第12次
西台畑遺跡第6次、中田南遺跡第4次
茂ヶ崎城跡、伊古田B遺跡第2次
北目城跡第7次、北屋敷遺跡第4次

2008年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第326集

南小泉遺跡他

発掘調査報告書

南小泉遺跡第52～57次
今泉遺跡第5･6次、大野田古墳群第12次
西台畑遺跡第6次、中田南遺跡第4次
茂ヶ崎城跡、伊古田Ｂ遺跡第2次
北目城跡第7次、北屋敷遺跡第4次

２００８年３月

仙台市教育委員会

序　文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守れてきた文化遺産（文化財）の存在が挙げられます。実は、仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承いくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成18年度に発掘調査を実施した西台畑遺跡、大野田古墳群、今泉遺跡、南小泉遺跡の他、平成19年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、今泉遺跡、中田南遺跡、茂ヶ崎城跡、伊古田B遺跡、北目城跡、北屋敷遺跡の調査結果を収録しております。

西台畑遺跡の調査では関東系土師器が多く出土し、古代の仙台と関東地方とのつながりを解明する手がかりとなる貴重な資料を得ることができました。茂ヶ崎城跡では、仙台の伝統工芸品である堤焼の大甕を使用した、近世後半のものと思われる甕棺墓が出土しました。また、その他の遺跡の調査についても貴重な資料を得ることができました。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の文化財へのより深い関心とご理解の一助となれれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成20年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　言

1　本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う南小泉遺跡第52・53次、伊古田B遺跡第２次と、個人住宅建設に伴う南小泉遺跡第54・55・56・57次、今泉遺跡５・６次、大野田古墳群第12次、西台畑第６次、中田南遺跡第４次、北目城跡第７次と、仙台市関連施設建設に伴う茂ケ崎城跡、北屋敷遺跡第４次の各発掘調査報告書の合本である。

民間開発事業にかかわる調査は事業者の負担において、また個人住宅建設と仙台市関連施設建設にかかわる調査は公費で実施した。

2　本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議のもとに、長島榮一・鈴木隆がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　　任　長島　榮一：南小泉遺跡第53次
主　　事　加藤　隆則：南小泉遺跡第56次、中田南第４次、北目城跡７次
文化財教諭　早川　潤一：今泉遺跡第５次、大野田古墳群第12次、西台畑遺跡第６次
〃　　藤田　雄介：南小泉遺跡第52・54次
〃　　志賀　雄一：南小泉遺跡第55次、茂ケ崎城跡、伊古田B遺跡第２次
〃　　工藤慶次郎：今泉遺跡第６次、北屋敷第４次
臨時職員　森田　賢司：南小泉遺跡第57次

3　遺物実測やトレース等の整理作業は、主に向田文化財整理収蔵室の作業員にお願いした。

4　本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代については、仙台市教育委員会文化財課調査係の佐藤洋に鑑定をお願いした。

5　茂ヶ崎城跡より出土した人骨については、独立行政法人国立科学博物館人類研究部　坂上和弘氏に助言をいただいた。

6　本書にかかわる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

7　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠した。

8　断面図・平面図の標高値は、海抜高度を示している。

9　遺物図版の縮尺は、任意とする。

10　遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SK：土坑
SE：井戸跡　P：ピット　SX：性格不明遺構

11　遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ）　E：須恵器
F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品
L：木製品・杭材　N：金属製品　P：土製品

12　掘立柱建物跡の柱穴及びピット内の網かけは、柱痕跡の位置と範囲を示している。

13　土師器実測図における網かけは、黒色処理されていることを示している。

14　遺物観察表のカッコ内の法量は、残存値を示している。

15　平面図の座標値は平面直角座標系Ｘ（日本測地系）による。

目　次

序文
例言
目次

Ⅰ　南小泉遺跡第52次発掘調査報告書

1　調査要項……1
2　調査に至る経過と調査方法……1
3　遺跡の位置と環境……3
4　基本層序……4
5　発見遺構と出土遺物……4
　1）掘立柱建物跡……4
　2）溝跡……5
　3）土坑……6
　4）ピット……6
　5）出土遺物……6
6　まとめ……6

Ⅱ　南小泉遺跡第53次発掘調査報告書

1　調査要項……9
2　調査に至る経過と調査方法……9
3　遺跡の位置と環境……9
4　基本層序……9
5　発見遺構と出土遺物……9
　①1トレンチ
　　1）溝跡……10
　　2）ピット……10
　②2トレンチ
　　1）竪穴住居跡……11
　　2）掘立柱建物跡……12
　　3）土坑……12
　　4）ピット……12
　　5）性格不明遺構……12
　　6）河川跡……12
　　7）出土遺物……12
6　まとめ……12

Ⅲ　南小泉遺跡第54次発掘調査報告書

1　調査要項……21
2　調査に至る経過と調査方法……21
3　遺跡の位置と環境……21
4　基本層序……21
5　発見遺構と出土遺物……21

1）掘立柱建物跡……21
2）土坑……23
3）小溝状遺構群……23
4）ピット……23
5）出土遺物……24
6　まとめ……24

Ⅳ　南小泉遺跡第55次発掘調査報告書

1　調査要項……29
2　調査に至る経過と調査方法……29
3　遺跡の位置と環境……30
4　基本層序……30
5　発見遺構と出土遺物……30
①Aトレンチ
1）ピット……30
2）出土遺物……31
②Bトレンチ
1）溝跡……31
2）ピット……31
③Cトレンチ
1）土坑……34
2）ピット……34
3）性格不明遺構……34
④Dトレンチ
1）溝跡……35
2）ピット……35
6　まとめ……36

Ⅴ　南小泉遺跡第56次発掘調査報告書

1　調査要項……49
2　調査に至る経過と調査方法……49
3　遺跡の位置と環境……49
4　基本層序……49
5　発見遺構と出土遺物……49
1）溝跡……50
2）土坑……50
3）流路跡……51
4）出土遺物……51
6　まとめ……52

Ⅵ　南小泉遺跡第57次発掘調査報告書

1　調査要項……65
2　調査に至る経過と調査方法……65
3　遺跡の位置と環境……65
4　基本層序……65
5　発見遺構と出土遺物……65

1）溝跡……65
2）ピット……67
3）性格不明遺構 ……67
6 まとめ……67

Ⅶ 今泉遺跡第５次発掘調査報告書

1 調査要項……71
2 調査に至る経過と調査方法……71
3 遺跡の位置と環境……71
4 基本層序……72
5 発見遺構と出土遺物……73
1）溝跡……73
6 まとめ……74

Ⅷ 今泉遺跡第６次発掘調査報告書

1 調査要項……77
2 調査に至る経過と調査方法……77
3 遺跡の位置と環境……77
4 基本層序……77
5 発見遺構と出土遺物……77
1）溝跡……78
2）土坑……78
3）ピット……78
4）畦畔状遺構 ……79
5）出土遺物 ……79
6 まとめ……80

Ⅸ 大野田古墳群第12次発掘調査報告書

1 調査要項……83
2 調査に至る経過と調査方法……83
3 遺跡の位置と環境……83
4 基本層序……84
5 発見遺構と出土遺物……85
①Ⅲ層上面検出遺構
1）掘立柱建物跡……85
2）溝跡……85
3）土坑 ……86
4）ピット ……86
②Ⅴ層上面検出遺構
1）26号墳周溝……86
2）小溝状遺構……86
3）ピット ……86
4）出土遺物 ……88
6 まとめ……90

X　西台畑遺跡第6次発掘調査報告書

1　調査要項 ……101
2　調査に至る経過と調査方法 ……101
3　遺跡の位置と環境 ……102
4　基本層序 ……102
5　発見遺構と出土遺物 ……103
　1）竪穴住居跡 ……104
　2）溝跡 ……106
　3）土坑 ……106
　4）ピット ……108
　5）出土遺物 ……110
6　まとめ ……111

XI　中田南遺跡第4次発掘調査報告書

1　調査要項 ……125
2　調査に至る経過と調査方法 ……125
3　遺跡の位置と環境 ……125
4　基本層序 ……127
5　発見遺構と出土遺物 ……127
　1）竪穴住居跡 ……128
　2）ピット ……128
6　まとめ ……128

XII　茂ヶ崎城跡発掘調査報告書

1　調査要項 ……131
2　調査に至る経過と調査方法 ……131
3　遺跡の位置と環境 ……131
4　基本層序 ……132
5　発見遺構と出土遺物 ……133
　1）溝跡 ……133
　2）木槨甕棺墓 ……134
　3）出土遺物 ……134
6　まとめ ……136

XIII　伊古田B遺跡第2次発掘調査報告書

1　調査要項 ……143
2　調査に至る経過と調査方法 ……143
3　遺跡の位置と環境 ……143
4　基本層序 ……144
5　発見遺構と出土遺物 ……144
　1）竪穴住居跡 ……145
　2）溝跡 ……147
　3）土坑 ……147
　4）小溝状遺構群 ……147
　5）ピット ……148
　6）性格不明遺構 ……150

6　まとめ ……150

XIV　北目城跡第７次発掘調査報告書

1　調査要項 ……157
2　調査に至る経過と調査方法 ……157
3　遺跡の位置と環境 ……157
4　基本層序 ……159
5　発見遺構と出土遺物 ……159
　１）堀跡・溝跡 ……160
6　まとめ ……161

XV　北屋敷遺跡第４次発掘調査報告書

1　調査要項 ……165
2　調査に至る経過と調査方法 ……165
3　遺跡の位置と環境 ……166
4　基本層序 ……166
5　発見遺構と出土遺物 ……167
　１）溝跡 ……167
6　まとめ ……168

Ⅰ　南小泉遺跡第52次発掘調査報告書

1　調査要項

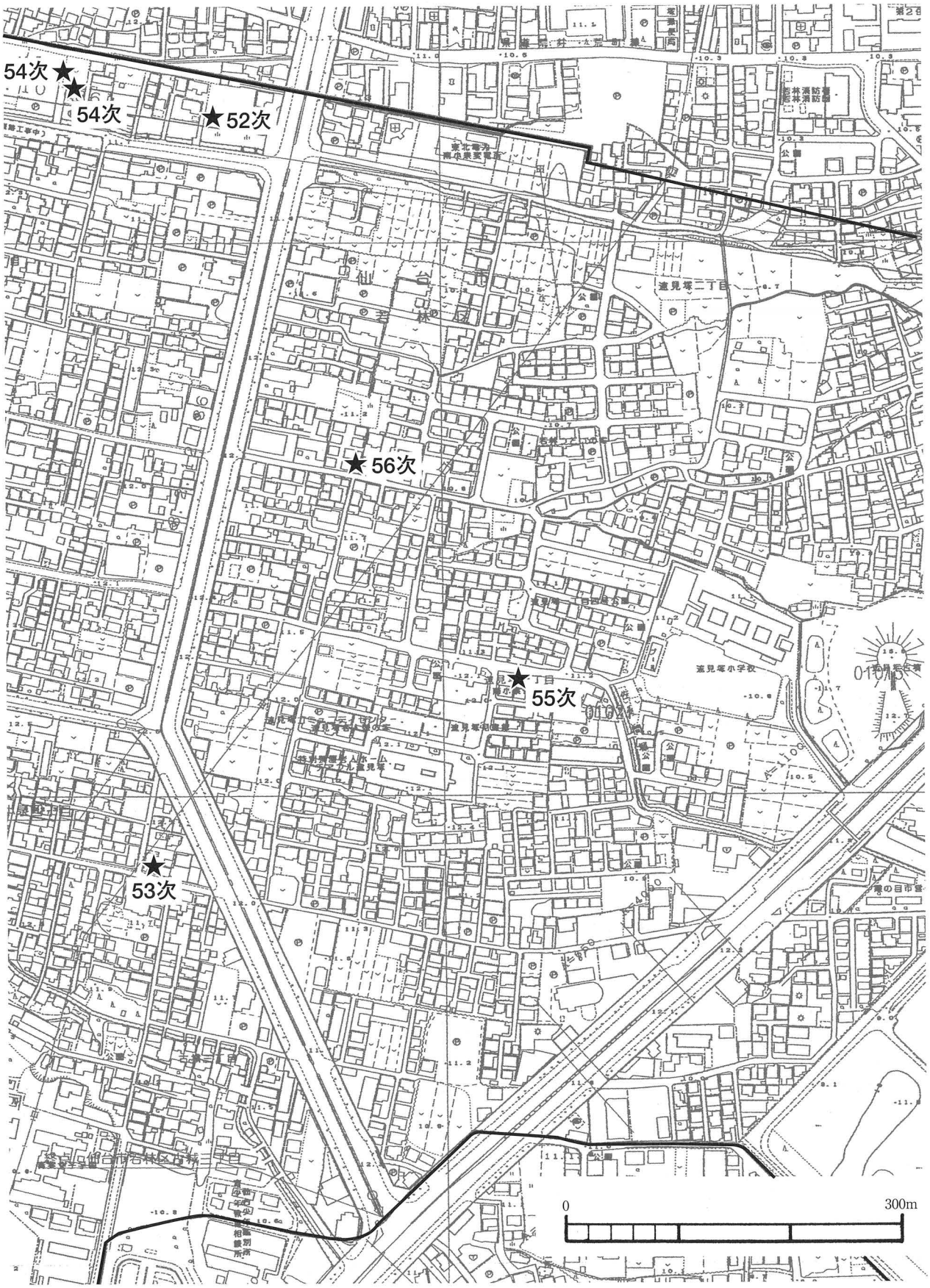
遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区一本杉町26－１
調 査 期 間　　平成19年１月29日～１月31日
調査対象面積　　96㎡
調 査 面 積　　約20㎡
調 査 原 因　　薬局建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤　哲司　　文化財教諭　早川　潤一　　藤田　雄介

2　調査に至る経過と調査方法

平成18年12月27日付で、地権者渡邉龍彦氏、渡邉好子氏より深さ４～4.5mの柱状土壌改良を伴う薬局の建築工事に係る「埋蔵文化財発掘の取扱い（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。平成19年１月29日に建物建築予定地に東西2.5m×南北6.5mの調査区を設定して確認調査を行ったところ、掘立柱建物跡や溝跡、ピットなどが検出された。調査区北半部で検出された掘立柱建物跡が調

番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	南小泉遺跡	集落	自然堤防	縄文～近世	9	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）	10	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
3	若林城	城館	自然堤防	近世	11	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	古代
4	養種園遺跡	城館	自然堤防	古代・中世・近世	12	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
5	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世	13	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
6	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	14	仙台東郊条里跡	条里遺構	後背湿地	古代
7	蛇塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	15	中在家遺跡	包含地	後背湿地	不明
8	猫塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	16	中在家南遺跡	集落・墓地	自然堤防	弥生～中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査地点の位置

査区西側に延びることが予想されたため、調査区北半部の西側を東西１ｍ×南北3.5ｍの範囲で拡張し、引き続き本調査を実施した。

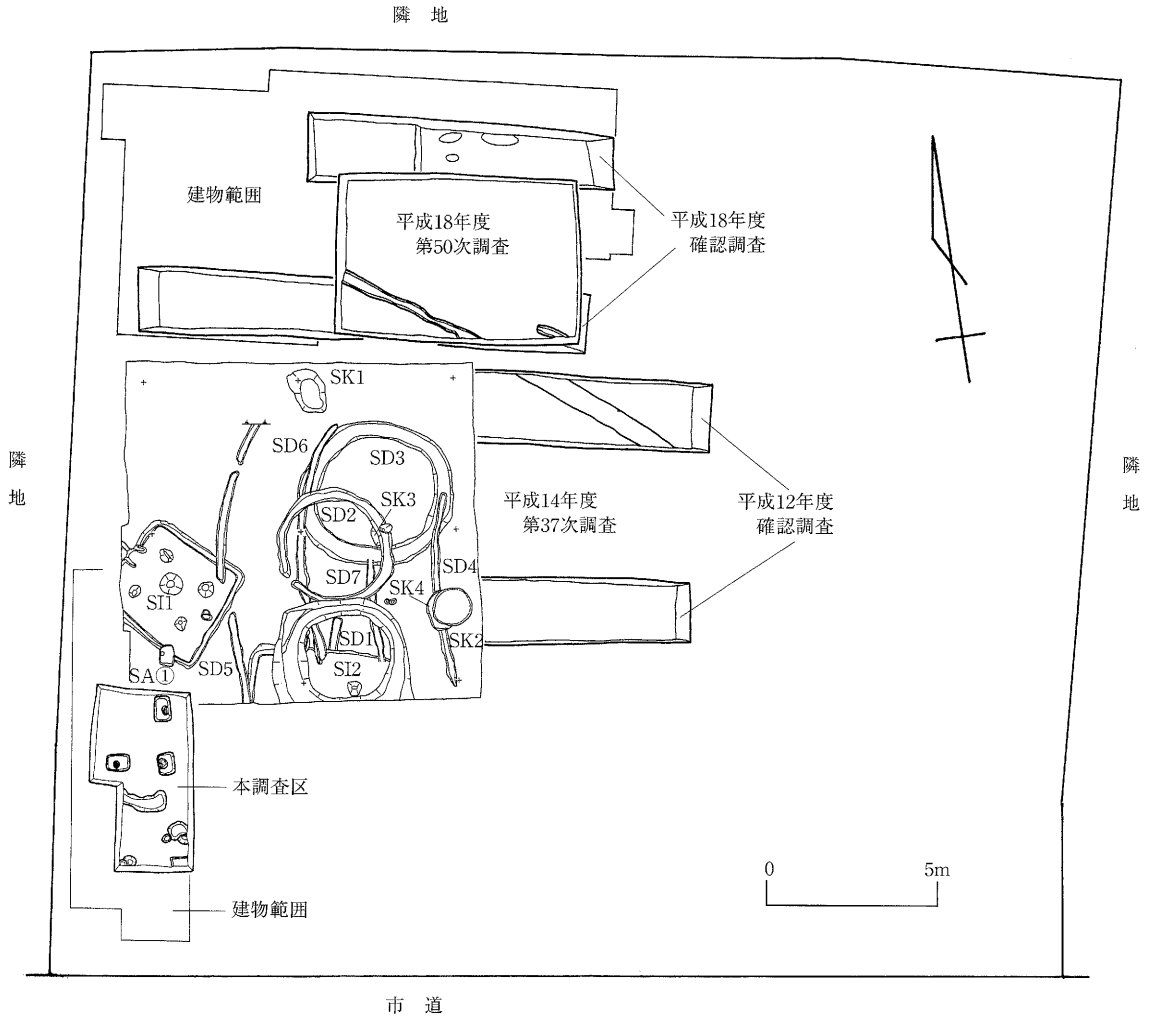
3　遺跡の位置と環境

本書所収の南小泉遺跡の調査は第52～57次で、位置は第２図に示したとおりである。各地点の周辺調査成果はそれぞれの項に譲り、以下では南小泉遺跡の位置と環境を概述したい。

仙台市は西部と東部で地形が大きく二分され、西部は奥羽山脈から派生する丘陵ないし段丘地形となっている。東部は、北から七北田川、名取－広瀬川、阿武隈川の３河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道からなる複雑な地形を形成している。

南小泉遺跡は仙台市の東部に位置し、七北田川と名取－広瀬川に挟まれた沖積平野の自然堤防上に立地している。遺跡の規模は、東西約２km、南北約１kmの範囲に広がる市内でも最大規模の遺跡である。遺跡内には遠見塚古墳（２）を含んでおり、西側では、南部で若林城跡（３）と、また北部で養種園遺跡（４）や法領塚古墳（６）、蛇塚古墳（７）、猫塚古墳（８）などの古墳群と接している。標高は西側で約13m、東側で約7.5mの西高東低である。

遺跡は、これまでに51次の調査が実施されており、縄文時代から近世の複合遺跡として理解されている。周辺遺跡との関わりからこれまでの調査成果を見ていくと、縄文時代では、第17次で大木10式～南境式期の土器が出土し



第３図　調査区配置図

たほか、第19次で大洞A式期の遺物包含層を検出している。

弥生時代は、第16・17次などで前期青木畑式期の土器を検出している。中期中頃は、昭和14・15年に霞目飛行場の拡張工事に伴って枡形囲式期の土器棺墓が発見された。他地点でも遺構の検出は依然少なく具体的様相は捉えられないが、多くの調査地点で土器片が確認されている。この時期に集落の拡大があったことは間違いないだろう。集落の中心は前代より東へ移っている。東方約1kmの中在家南遺跡（14）でも同様の集落変遷が辿れ、水田稲作を意識した汎仙台平野的な動態と理解される。

古墳時代は、中在家南遺跡で前期の方形周溝墓群が形成される。当遺跡内でも塩釜式期後半（4世紀終末～5世紀初頭）に東北地方4番目の規模を誇る前方後円墳の遠見塚古墳が造られる。同期の集落は、古墳南西の第20次で竪穴住居跡1軒を検出したほかは、第21・26次などで遺物を確認したのみで、次期の南小泉式期の集落が急増する状況と対照的である。南小泉式期の集落は古墳の西側を中心に広範囲にそして濃密に展開した。面的な調査がなく、断片的な調査の積み重ねではあるが、これまでに60軒以上の竪穴住居跡の検出例がある。後期の住社式～栗囲式期には、前時期に引き続いて古墳西側で集落が営まれる一方で、これよりさらに西側でも集落が営まれるようになる。同時期の古墳である法領塚古墳（7世紀前半）や猫塚古墳、蛇塚古墳、または若林城跡内の古墳などが遺跡西側に造られているのも、これと期を一にした現象と捉えられよう。当遺跡におけるこの時期の特徴に、いわゆる「関東系土器」の出土が挙げられる。第22次調査では、まとまった「関東系土器」の出土および大溝で画された集落配置などから「一般的な集落とは異なる」とし、同溝の人為的な埋め戻しとその後の集落の衰退を、広瀬川を挟んだ郡山遺跡に先行する集落の興りと関連付けて説明した（斎野1994）。郡山遺跡とこれに先行する集落については、長町駅東遺跡や本書所収の「Ⅳ　西台畑遺跡第6次」からも理解されるように、近年急速に大規模な調査が進み、関東系土器の出土状況とそこから推測される「柵戸」の様子が捉えられつつある。

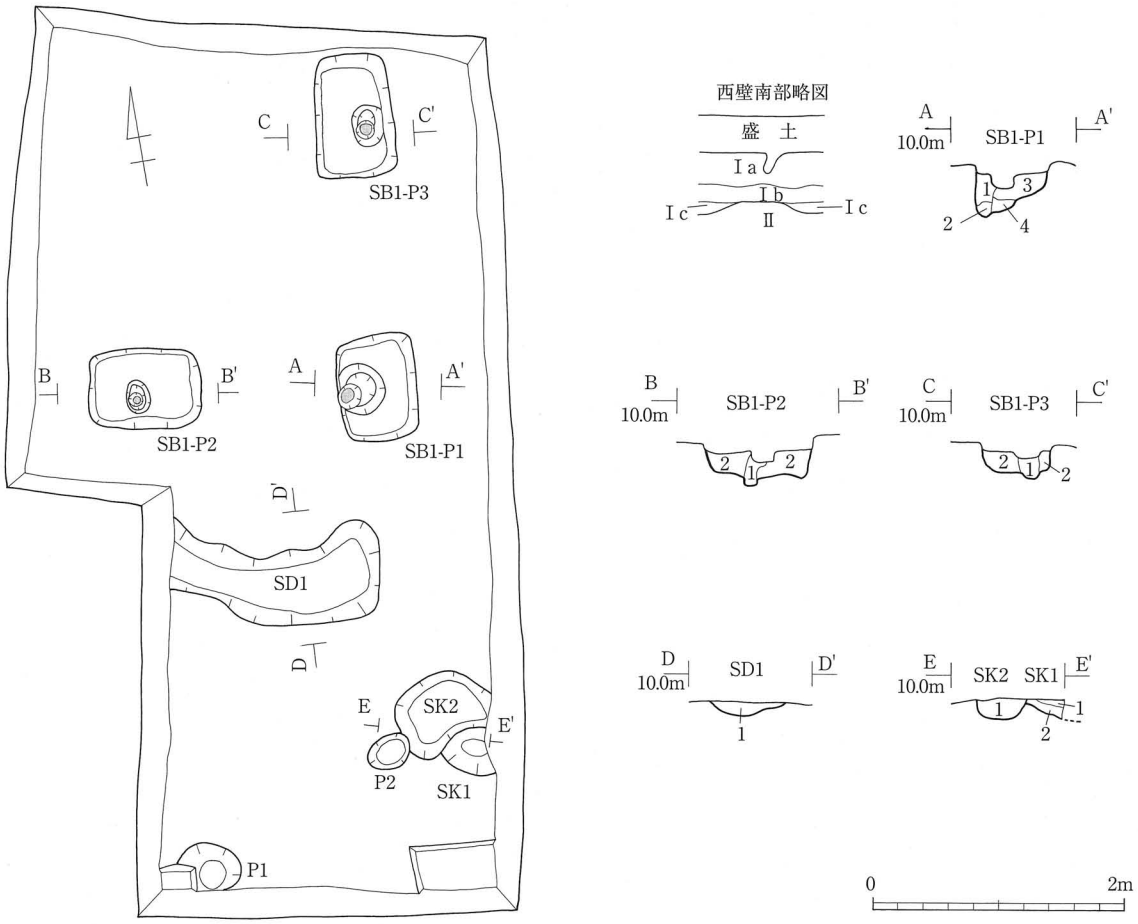
その後、奈良時代になると遺跡の北西約1kmでは陸奥国分寺、国分尼寺が建立される。遺跡内でもこれまでに集落の認められなかった北西部において竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。平安時代には遺跡内のほぼ全域にわたって生活の痕跡が残された。居住域のみでなく、各地点で生産域（小溝状遺構群）も検出されており、掘立柱建物跡のような倉庫群も併せ、周辺地形を含めた集落景観の構造的な把握が求められる。

当遺跡での中世の遺構は、第16次で13世紀前半～14世紀前半の屋敷跡と14世紀中頃～15世紀前半の城館跡を、また東側の第17次では12世紀後半～13世紀初頭頃の屋敷跡と、これを埋立てた13～16世紀の区画溝のある屋敷跡を検出した。これらの成果から、城館の周辺に方形の屋敷を構えた中世村落の景観が復元されている。周辺の同時期の遺跡では、今泉遺跡（城跡）や沖野城跡（13）などがある。両遺跡は、現在では広瀬川の右岸に位置しているが、当時は城跡の北側に河川が東流し名取郡と宮城郡の境界となっていた。「仙台領古城書上」によれば、今泉城は「須田玄蕃」の居住した中世城館、また沖野城は粟野氏に関わる城とされている。今泉遺跡の調査でも12世紀の屋敷跡が確認され、改変・整備を経て城館（今泉城）となったことが明らかになっている。沖野城跡（13）も時期的に並行している可能性があるが、検出された堀跡は時期の特定ができず詳細は不明である。

近世には、寛永4年（1627）、遺跡西側で伊達政宗が晩年の居城とした若林城が造営される。当遺跡や西側の養種園遺跡は、若林城下町の一部と考えられ、9次・11次・14次・17次で検出された遺構は城下町のうち武家屋敷に相当するものと考えられている。

4　基本層序

調査地点は約30cmの盛土がある。基本層は大別2層、細別4層を確認した。Ⅰa層は層厚約25cmで近年の畑耕作土である。Ⅰb層は層厚10～15cm、Ⅰc層は層厚約10cmで、ともに旧畑耕作土層である。Ⅱ層は黄褐色粘土で本調査の遺構検出面である。北側隣接地の第37次調査では、同層上面で8世紀前半以降の遺構を検出している。



基本層	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	最近の耕作土。ビニールを含む。
Ⅰb	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	旧耕作土。褐色土のブロックを少量含む。
Ⅰc	10YR4/4　褐色	シルト	旧耕作土。
Ⅱ	10YR5/6　黄褐色	粘土	基盤層。上部に暗褐色土をまばらに含む。
層　位	土　　色	土　性	備　　考
SB1-P1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土	焼土、炭化物を多量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	砂質粘土	焼土、炭化物を微量に含む。
3	10YR3/4　暗褐色	砂質粘土	大小の黄褐色土ブロックを多量に含む。須恵器片出土。土器片を含む。
4	10YR5/6　黄褐色	粘土	
SB1-P2-1	10YR4/4　褐色	粘土	にぶい黄褐色土ブロック（小）をまだら状に少量含む。炭化物を微量に含む。底部は浅黄色粘土に変化。
2	10YR5/4　にぶい暗褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロックをまだら状に少量含む。土器片を含む。
SB1-P3-1	10YR4/4　褐色	粘土	にぶい黄褐色土ブロック（小）をまだら状に含む。炭化物、焼土を少量含む。土器片を含む。
2	10YR5/6　黄褐色	粘土	焼土、炭化物を微量に含む。土器片を含む。
SD1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土	Ⅱ層ブロックを多量に含む。
SK1-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	焼土ブロックを多量に含む。土器片を含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	焼土粒、炭化物粒を微量に含む。
SK2-1	10YR3/4　暗褐色	粘土	焼土、炭化物ブロックを微量に含む。

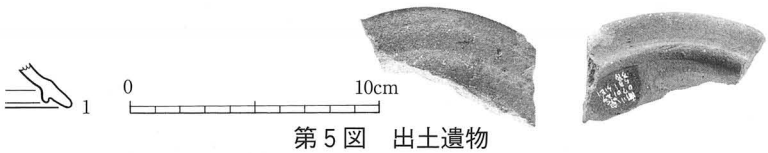
第４図　遺構平・断面図

5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、掘立柱建物跡１棟、溝跡１条、土坑１基、ピット２基を検出した

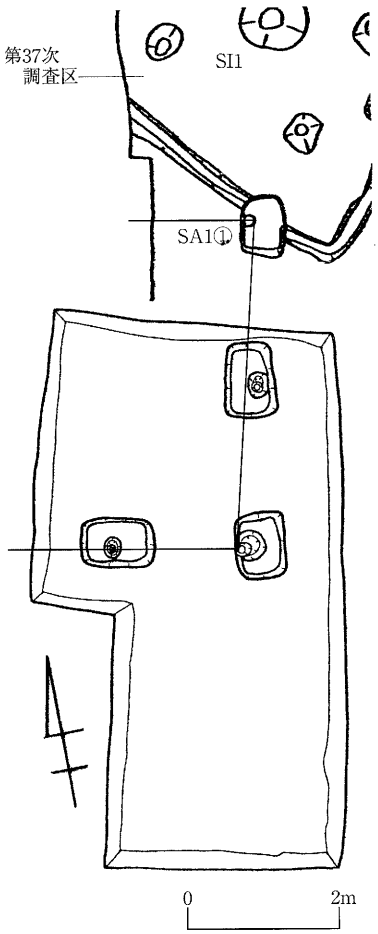
１）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　調査区北半部に位置し、北側および西側は調査区域外に延びる。北側隣接地の第37次調査で建物北東角の柱穴（SA１①）を検出しており、建物規模は、南北２間、東西２間である。南北方向の柱間は、SA１①－P３が220cm、P３－１が



第５図　出土遺物

216cmで、総長436cmである。また東西方向の柱間はP１－２が170cmである。柱穴の長軸は、東列が南北方向、南列のP２が東西方向で、規模は、SA１①が85cm×60cm、深さ40cm、P３が100cm×63cm、深さ34cm、P１が87cm×64cm、深さ45cm、P２が91cm×65cm、深さ42cmである。いずれも底面に柱痕跡を検出している。遺物は土師器片、須恵器片が数点出土したが、図示できたのは須恵器蓋片１点である。



第６図　SB1掘立柱建物跡

２）溝跡

SD１溝跡　調査区中央に位置し、西側は調査区域外に延びている。規模は検出長170cm、上端幅40～80cm、底面幅10～40cm、深さ５～10cmである。堆積土は暗褐色粘土で、黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいる。

３）土坑

SK１土坑　調査区南東に位置し、東部は調査区域外に延びている。北部はSK２土坑に切られている。平面形は長軸東西方向の長円形で、深さは約10cmである。遺物は、１層より土師器片が出土したが時期は不明である。

SK２土坑　調査区南東に位置し、東部は調査区域外に延びている。SK１土坑よりも新しくP２よりも古い。平面形は不整方形で、規模は長軸80cm、短軸約50cm、深さ10～15cmである。出土遺物はなく時期は不明である。

４）ピット

調査区南側で２基検出した。深さはP１が８cm、P２が15cmである。遺物はP２より土師器小片が出土した。

５）出土遺物

SB１掘立柱建物跡、SK１土坑、P２から土師器片、須恵器片量出土した。図化したのはSB１－P１出土の須恵器蓋である（第５図）。全体器形は不明であるが、小型のものと推定される。調整は内外面ともにロクロナデ、外面には段を有し、内面には端部の丸いカエリをもつ。時期は郡山官衙Ⅰ期～Ⅱ－A期に位置づけられる。

6　まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面で掘立柱建物跡１棟、溝跡１条、土坑２基、ピット２基を検出した。SB１掘立柱建物跡は第37次調査のSI１竪穴住居跡（８世紀前半）を切ることから、時期は８世紀前半以降となる。

＜参考文献＞

斎野裕彦1994『南小泉遺跡第22次・第23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集

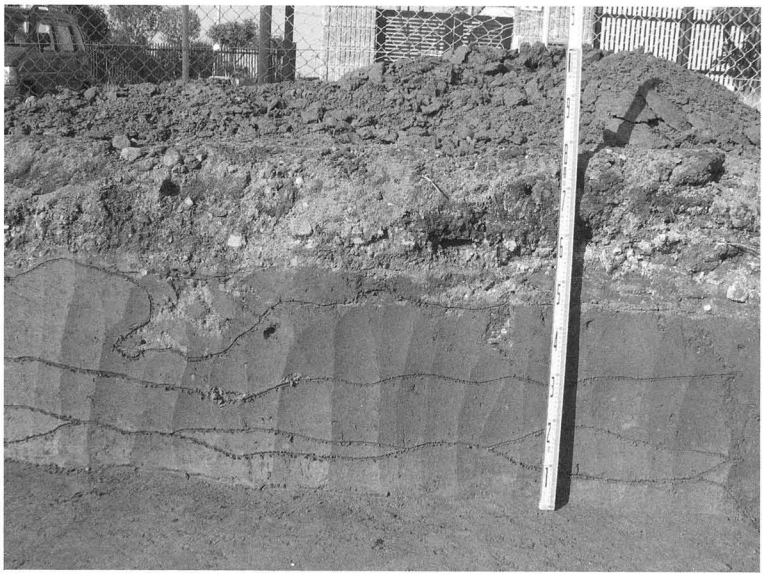
長島榮一2005『郡山遺跡発掘調査報告書』総括編１　仙台市文化財調査報告書第283集

藤田雄介2007「南小泉遺跡第50次発掘調査報告書」『松森城跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第310集pp.51-57

渡部弘美2003「南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第266集pp.157-172

1　遺構検出状況
（北西から）

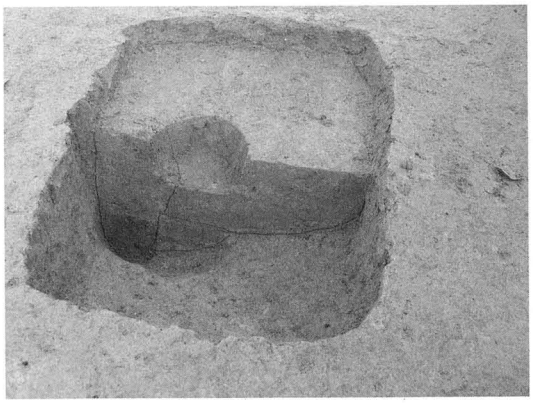
2　遺構完掘状況
（北西から）



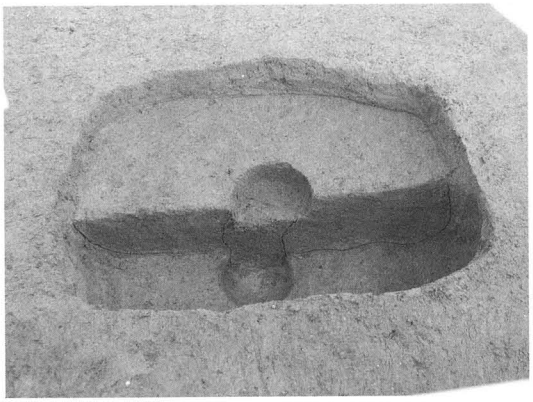
3　西壁断面
（南部）

図版１　調査区全景・基本層序

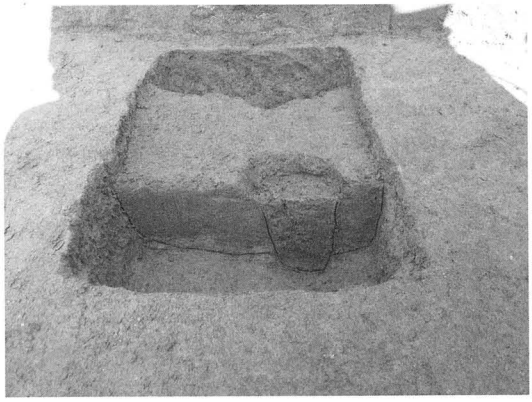
1　SB１掘立柱建物跡検出状況（北から）



2　SB１－P１断面（南から）



3　SB１－P２断面（南から）



4　SB１－P３断面（南から）

5　SK１・２土坑断面（南から）

図版２　遺構検出状況・断面

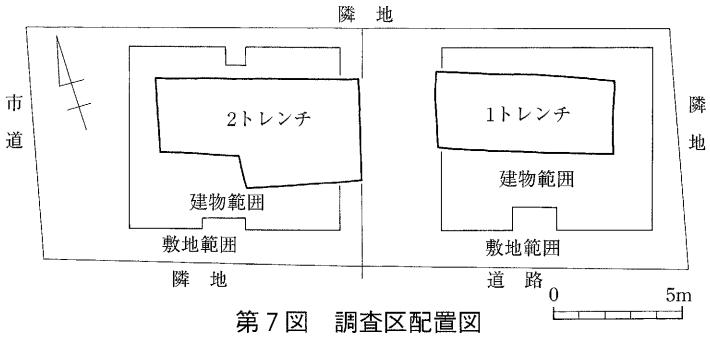
Ⅱ　南小泉遺跡第53次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚一丁目６－29
調 査 期 間　　平成19年２月19日～２月22日
調査対象面積　　119.24㎡
調 査 面 積　　42㎡（１トレンチ21㎡、２トレンチ21㎡）
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤　哲司　　文化財教諭　今野　秀治　　早川　潤一

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成18年11月２日付けで、敬信商事株式会社代表取締役　堀信男氏より、深さ2.5ｍの柱状土壌改良を伴う建売個人住宅２棟の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施するとした。確認調査は２月19日に着手し、２棟の建物建設予定地にそれぞれ東西７ｍ×南北３ｍの調査区を設定した（東から１トレンチ、２トレンチ）。Ⅱ層上面で精査を行い、両トレンチで遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。また、２トレンチでは東部で竪穴住居跡が検出されたため、東西５ｍ×南北１ｍの範囲を拡張した。



第７図　調査区配置図

3　遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境については第52次発掘調査報告書を参照されたい。調査地点は遺跡の北西部に位置する。

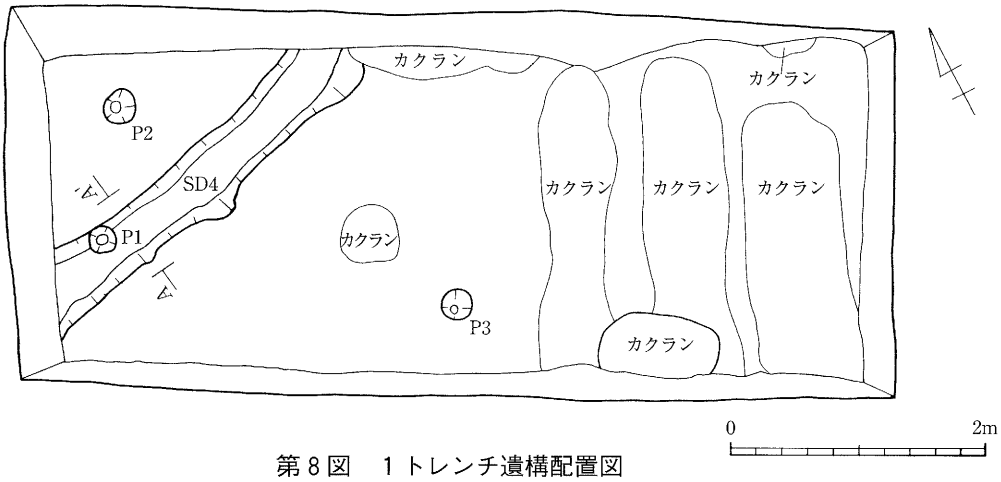
4　基本層序

調査地点では約90cmの盛土が確認ある。基本層序は地表下1.1ｍまで、Ⅰ・Ⅱ層の２層を確認した。Ⅱ層は粘土質シルトであるが、下位は砂質シルトになる。上面は古代の遺構確認面である

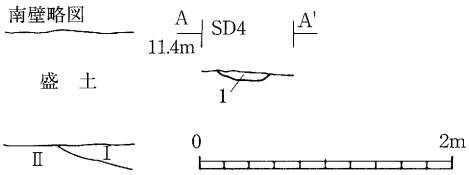
5　発見遺構と出土遺物

①１トレンチ

溝跡１条、ピット３基を検出した。調査時に番号を付したSD１～３溝跡は、調査の結果、畑の耕作に関わる天地返しであることが判明したためカクランとして扱った。



第８図　１トレンチ遺構配置図



基本層	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	調査区に部分的に残存。
Ⅱ	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	下部は砂質シルトに変化。
層　位	土　　色	土　性	備　　考
SD4-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。

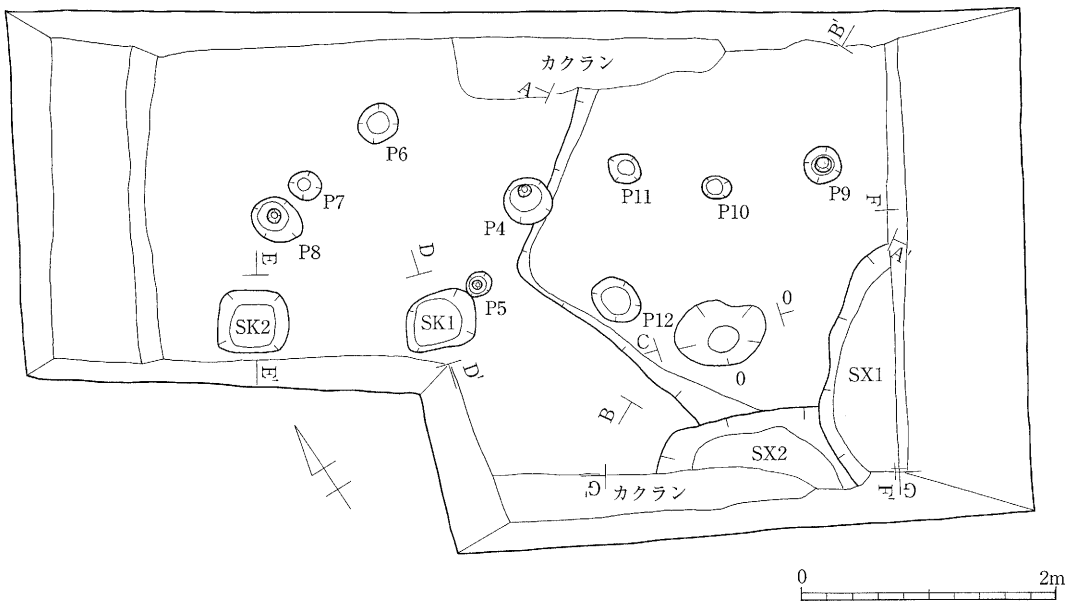
第９図　１トレンチ南壁断面略図、SD４断面図

１）溝跡

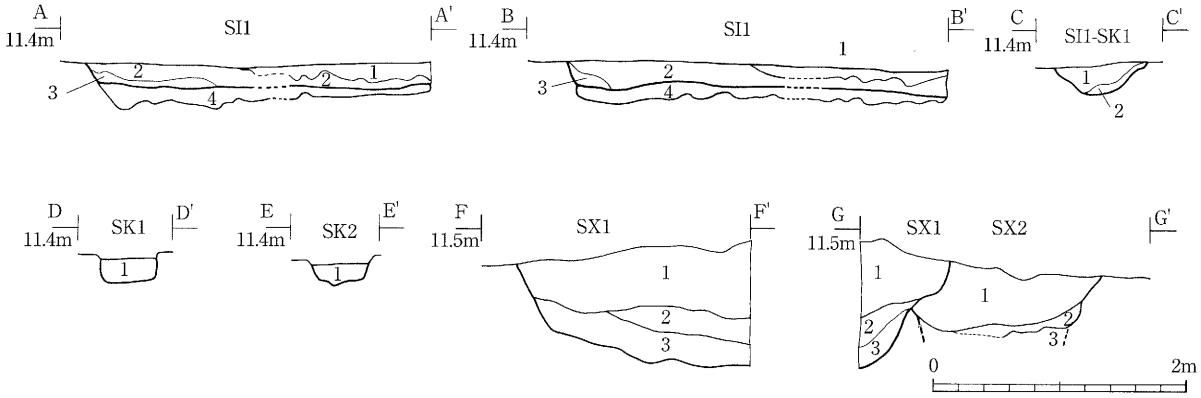
SD４溝跡　調査区西側で検出した。西側でP１に切られている。方位はN－40～50°－Eで、規模は上端幅約50cm、下端幅約30cm、深さ約８cmである。断面形は皿状で、堆積層は１層である。出土遺物はなく時期は不明である。

２）ピット

３基検出した。P１はSD４溝跡を切っている。P１は柱痕跡が見られることから柱穴の可能性がある。規模は直径20～25cm、深さ15～30cmである。出土遺物はなく時期は不明である。



第10図　２トレンチ遺構配置図



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SI1-1	10YR3/2　黒褐色	シルト	炭化物、土器片を多量に含む。黄褐色土、焼土、灰を少量含む。
2	10YR4/6　褐色	シルト	黒褐色土を少量含む。
3	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	褐色土を少量含む。
4	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	掘り方埋土。暗褐色土、にぶい黄橙色土を多量に含む。
SI1-SK1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
SK1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
SK2-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	褐色土粒、炭化物を微量に含む。
SX1-1	7.5Y3/2　オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物粒を少量含む。
2	5Y2/2　オリーブ黒色	シルト質粘土	黒褐色土を縞状に含む。炭化物粒、木片、小礫を少量含む。
3	5Y2/2　オリーブ黒色	シルト質粘土	木の根を多量に含む。小礫を少量含む。
SX2-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む。酸化鉄を霜降状に多量に含む。東端部はグライ化。
2	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を霜降状に多量に含む。東側はグライ化。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土	

第11図　2トレンチ遺構断面図

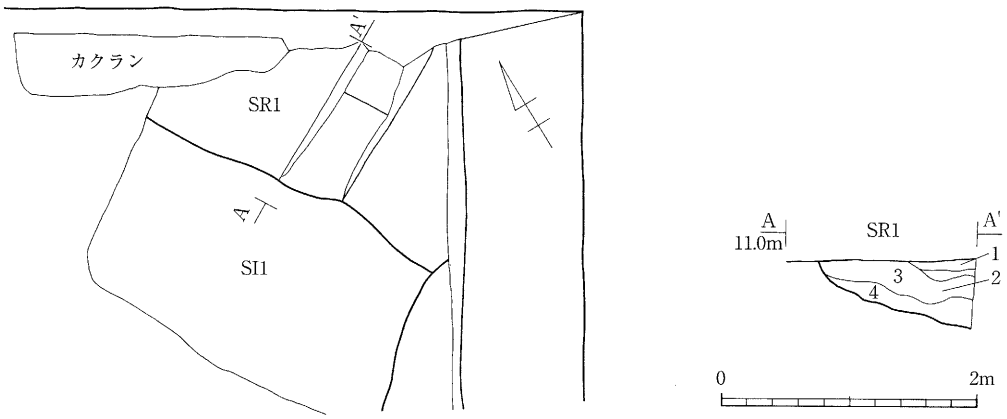
②2トレンチ

竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑3基（うち1基は竪穴住居跡内で検出）、ピット8基（うち3基は掘立柱建物跡を形成、別の2基は竪穴住居跡から検出）性格不明遺構2基、河川跡1条を検出した。

1）竪穴住居跡

SI1竪穴住居跡　調査区東側に位置し、北側、東側は調査区域外におよんでいる。南側はSX1・2性格不明遺構に切られている。確認面からの深さは約20cmである。住居内からはSK1土坑とピット3基を検出した。SI1内土坑としたものは住居内の南側床面で検出した。平面形は不整円形で、長軸74cm×短軸54cm、深さ30cmである。

遺物は堆積土中からロクロ使用の土師器が多数出土しており、時期は9世紀前半でも中頃と考えられる。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SR1-1	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	
2	10YR4/4　褐色	粗粒砂	
3	10YR5/6　黄褐色	シルト質砂	にぶい黄褐色シルトをまだら状に含む。
4	10YR3/4　暗褐色	粗粒砂	にぶい黄褐色粘土を縞状に含む。

第12図　SR1流路跡平・断面図

2）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　調査区中央北寄りで検出され、北側は調査区域外に延びている。東西２間以上の建物で南北は不明である。柱間はP８－４が200cm、P４－９が240cmで、東西の総長で480cmである。柱穴の規模は、P８が38cm×34cm、深さ32cm、P４が38cm×36cm、深さ50cm、P９が30cm×28cm、深さ35cmである。いずれも底面に柱痕跡が見られる。時期は、P９から17世紀頃の陶器が出土したことから、江戸時代前半頃であろう。

3）土坑

SK１土坑　調査区中央西寄りに位置する。平面形は方形で、東西57cm×南北44cm、深さ約20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、堆積土は１層である。出土遺物はなく時期は不明である。

SK２土坑　調査区西側に位置し、平面形は隅丸方形である。東西54cm×南北50cm、深さ約15cmで出土遺物はない。

4）ピット

掘立柱建物跡を構成しない単独のピットを６基検出した。P５では柱痕跡を確認している。それぞれのピットの深さは、P５＝42cm、P６＝30cm、P７＝43cm、P10＝17cm、P11＝９cm、P12＝11cmである。

5）性格不明遺構

SX１性格不明遺構　調査区南東に位置し、東側は調査区域外に延びている。SI１竪穴住居跡およびSX２性格不明遺構を切っている。平面形は不整形で、底面は未検出である。規模は検出範囲で南北２m、東西0.5m、深さは最深部で約１mである。遺物は明治期と思われる陶磁器が出土しているため、近代の遺構と考えられる。

SX２性格不明遺構　調査区南東に位置し、南側は調査区域外に延びている。SX２性格不明遺構に切られ、SI１竪穴住居跡を切っている。平面形は不整形で、底面は未検出である。規模は検出範囲で東西1.5m、南北0.5m、深さは最深部で0.6mである。掘り込み形状から井戸跡の可能性もある。堆積土は３層で出土遺物はない。

6）河川跡

SR１河川跡　調査区北東、SI１竪穴住居跡の掘り方底面で検出した。完掘は行わず、一部掘り下げを行い土層堆積状況の確認に留めた。東西方向に延びており、堆積土は４層である。出土遺物は、ロクロ不使用の土師器片が数点出土している。新旧関係および出土遺物から、時期は平安時代以前と思われる。

7）出土遺物

遺物はSI１竪穴住居跡とSR１河川跡から出土している。ロクロ使用の土師器坏（第13図１～３）は底部回転糸切りで、内面が黒色処理、ヘラミガキされているものである。また、大型の椀（同図４）も同様の特徴を示している。ロクロ使用の甕（同図６）は、口縁部が外傾し、受け口状を呈している。第13図５は底部が欠損しているロクロ使用の坏である。使用痕跡の明瞭な砥石（同図８）も出土している。SR１流路跡からはロクロ不使用の単孔式の甑も出土している。

6　まとめ

①　１トレンチでは、溝跡１条、ピット３基を検出したが、時期は不明である。

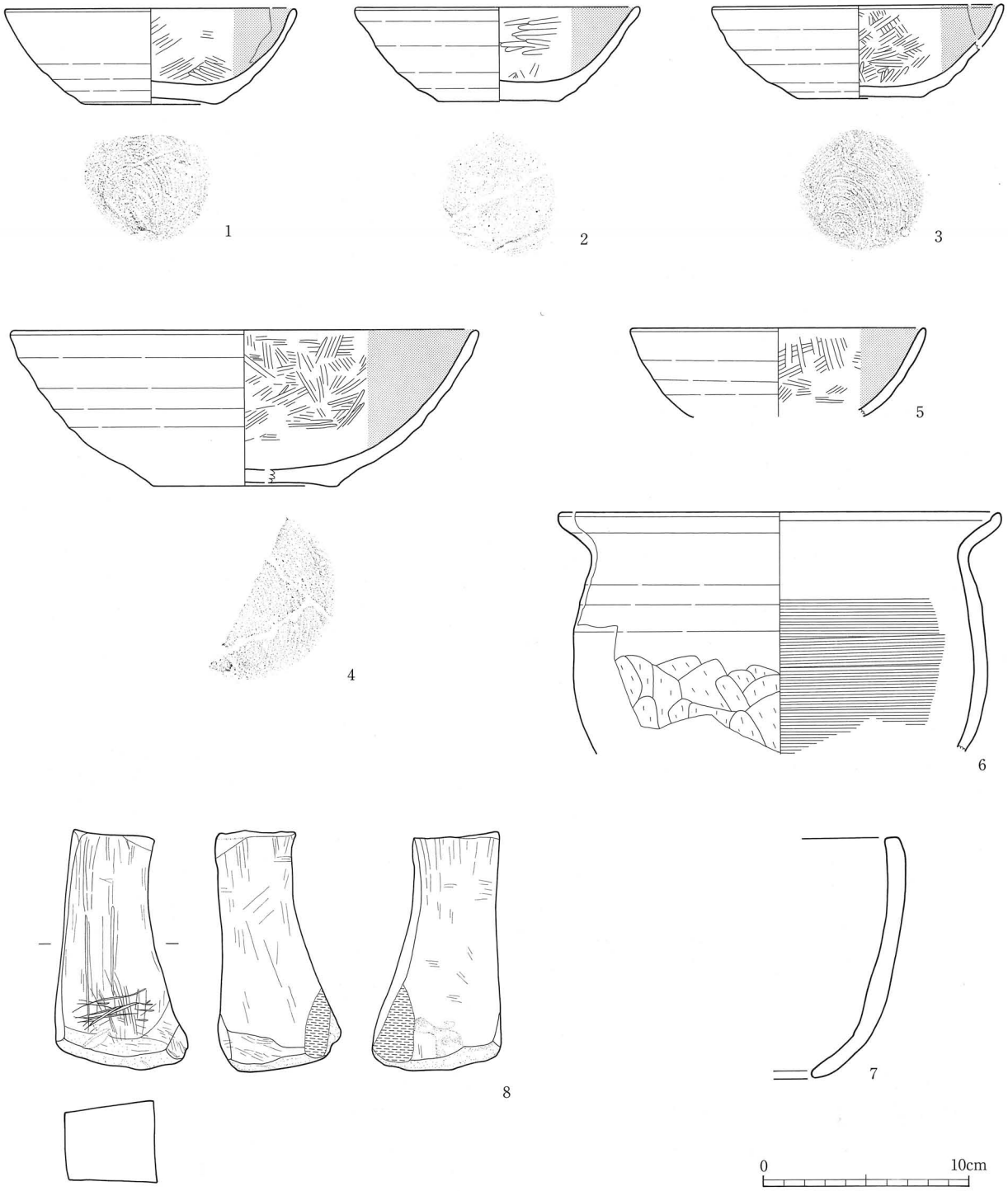
②　2トレンチでは、平安時代以前の河川跡1条、平安時代の竪穴住居跡1軒、近世の掘立柱建物跡、近代の性格不明遺構2基のほか、土坑3基、ピット6基を検出した。

＜参考文献＞

工藤哲司2006「南小泉遺跡第44次発掘調査報告書」『前田館跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第301集pp.81-93

今野秀治2005「南小泉遺跡第45次発掘調査報告書」『山田本町遺跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第287集pp.127-134

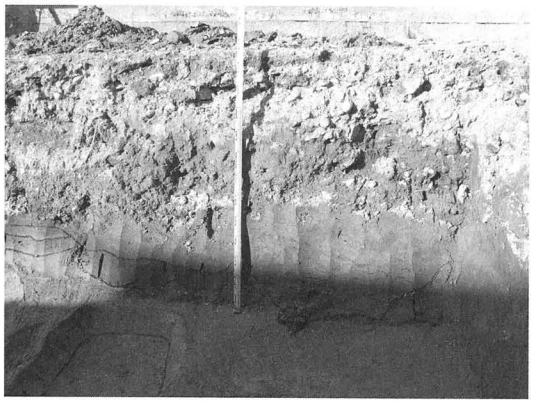
渡部弘美2003「南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第266集pp.157-172



図中番号	登録番号	出土地点 遺構名	遺構層	分類 種別	器種	法量（cm・g） 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	D-1	SI-1	1	ロクロ土師器	坏	4.7	14.1		6.4	外面：ロクロ　底部回転糸切　内面：ヘラミガキ、黒色処理	7-1
2	D-16	SI-1	2	ロクロ土師器	坏	4.6	13.8		5.9	外面：ロクロ　底部回転糸切　内面：ヘラミガキ、黒色処理	7-2
3	D-17	SI-1	2	ロクロ土師器	坏	4.5	14.2		6.0	外面：ロクロ　底部回転糸切　内面：ヘラミガキ、黒色処理	7-3
4	D-2	SI-1	1	ロクロ土師器	坏	7.6	(22.8)		(9.1)	外面：ロクロ　底部回転糸切　内面：ヘラミガキ、黒色処理	7-4
5	D-4	SI-1	1	ロクロ土師器	坏	(4.3)	14.3			外面：ロクロ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	7-5
6	D-9	SI-1	1	ロクロ土師器	甕	(11.7)	21.4			外面：ロクロ、体部ヘラケズリ　内面：ロクロ後体部ヨコナデ	7-6
7	C-3	SR1		非ロクロ土師器	甑					内外面磨滅	7-7
8	K-1	SI-1	2	石製品	砥石	11.8	6.5	6.0	480	線状痕あり　図中のトーンは節理面	7-8

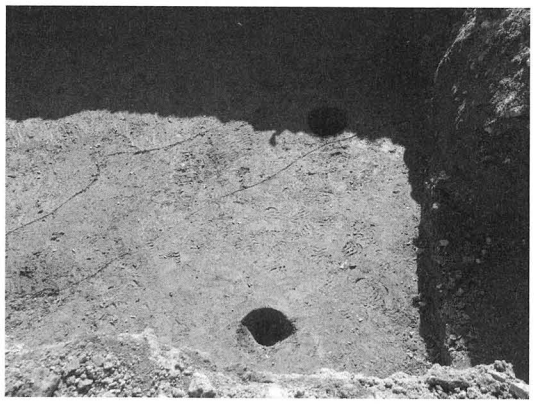
第13図　遺物実測図

1　第１トレンチ遺構検出状況（東から）

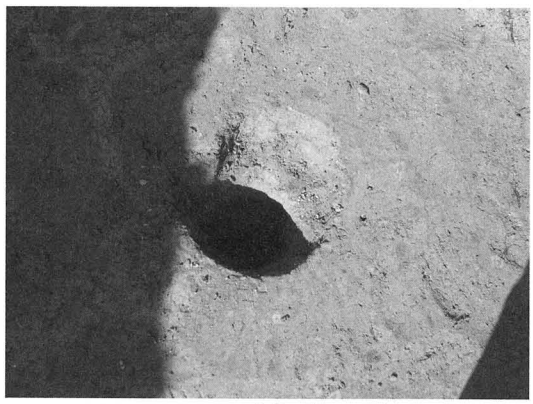


2　基本層序（北壁）

3　SD４溝跡（西から）

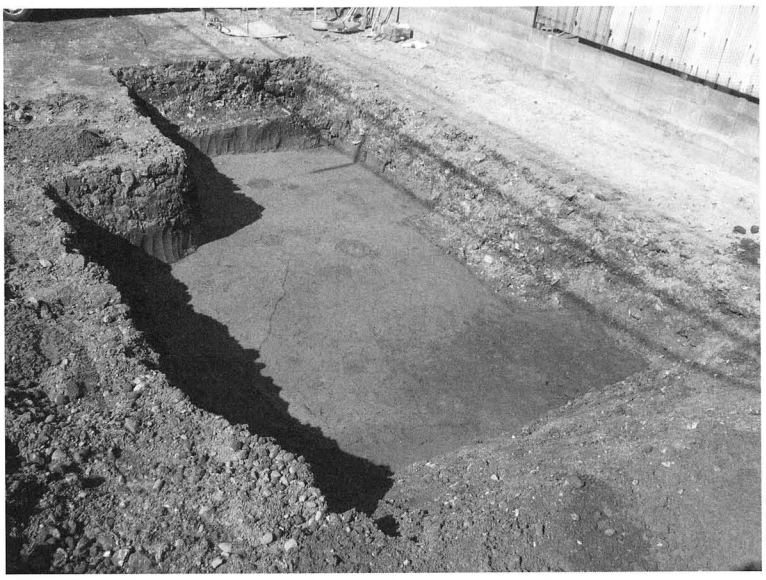


4　P１・２完掘（北から）

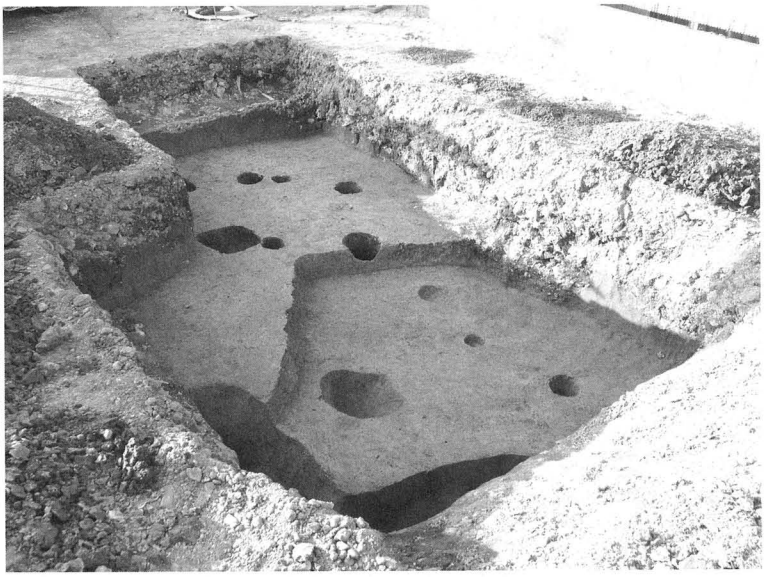


5　P３完掘（北から）

図版３　第１トレンチ



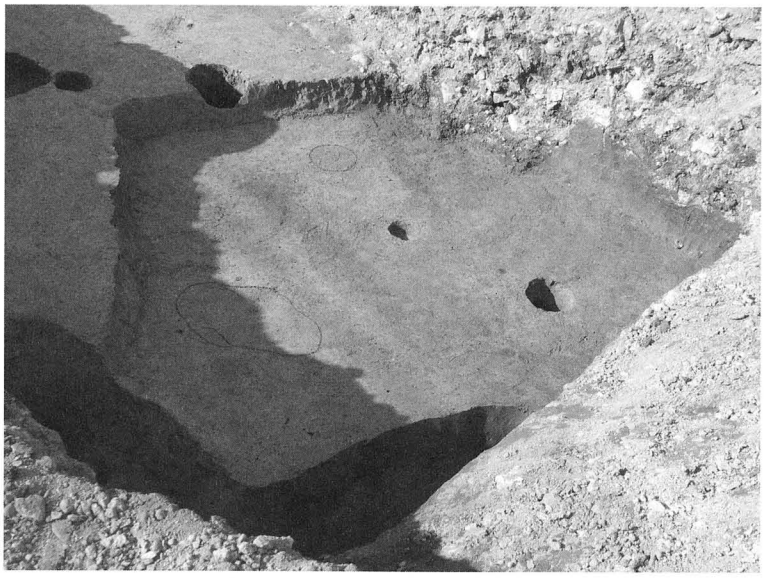
1　第２トレンチ遺構検出状況
（南東から）



2　遺構完掘状況
（南東から）

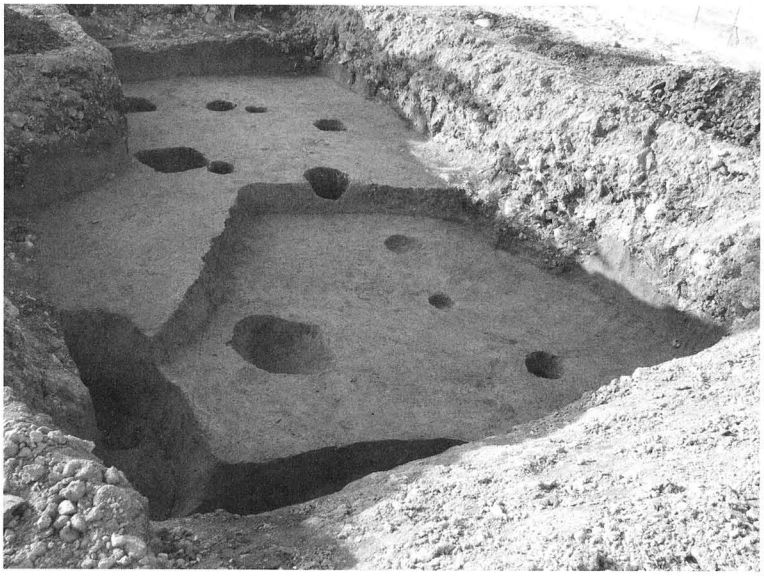
3　遺構完掘状況
（南西から）

図版４　第２トレンチ



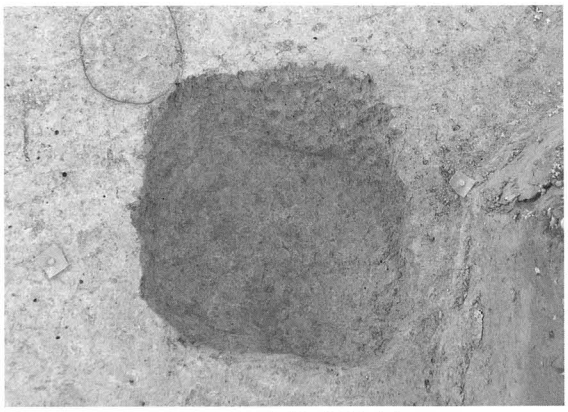
1　SI 1・SK 1・P11・12検出状況
（南東から）

2　完掘状況
（南西から）

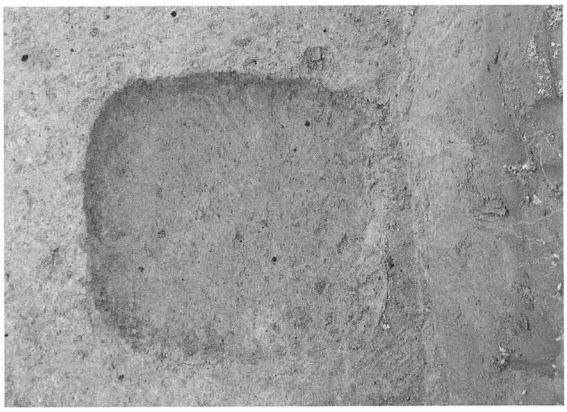


3　完掘状況
（南東から）

図版 5　SI 1 竪穴住居跡



1　SK 1 完掘（西から）



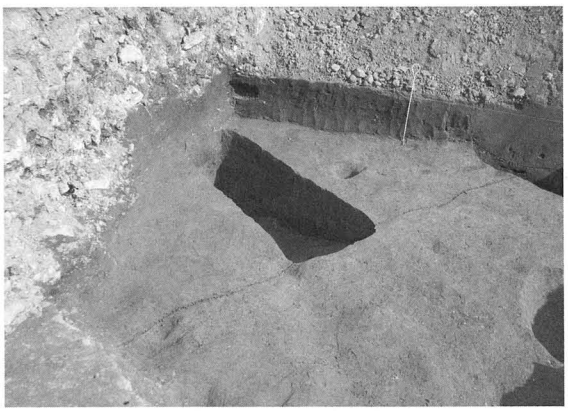
2　SK 2 完掘（西から）

3　SX・2 性格不明遺構（南から）

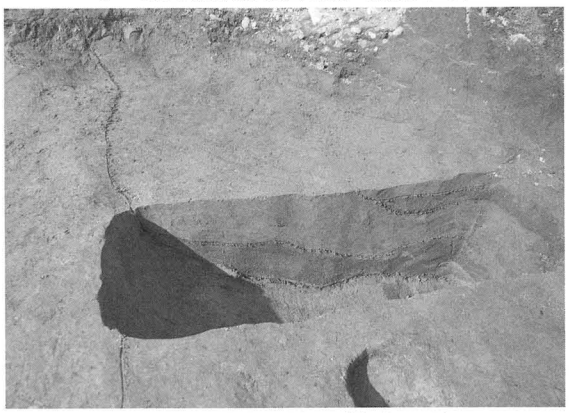
4　SX 1 性格不明遺構断面（西から）

5　SX 2 性格不明遺構（西から）

6　SR 1 流路跡検出状況（南東から）

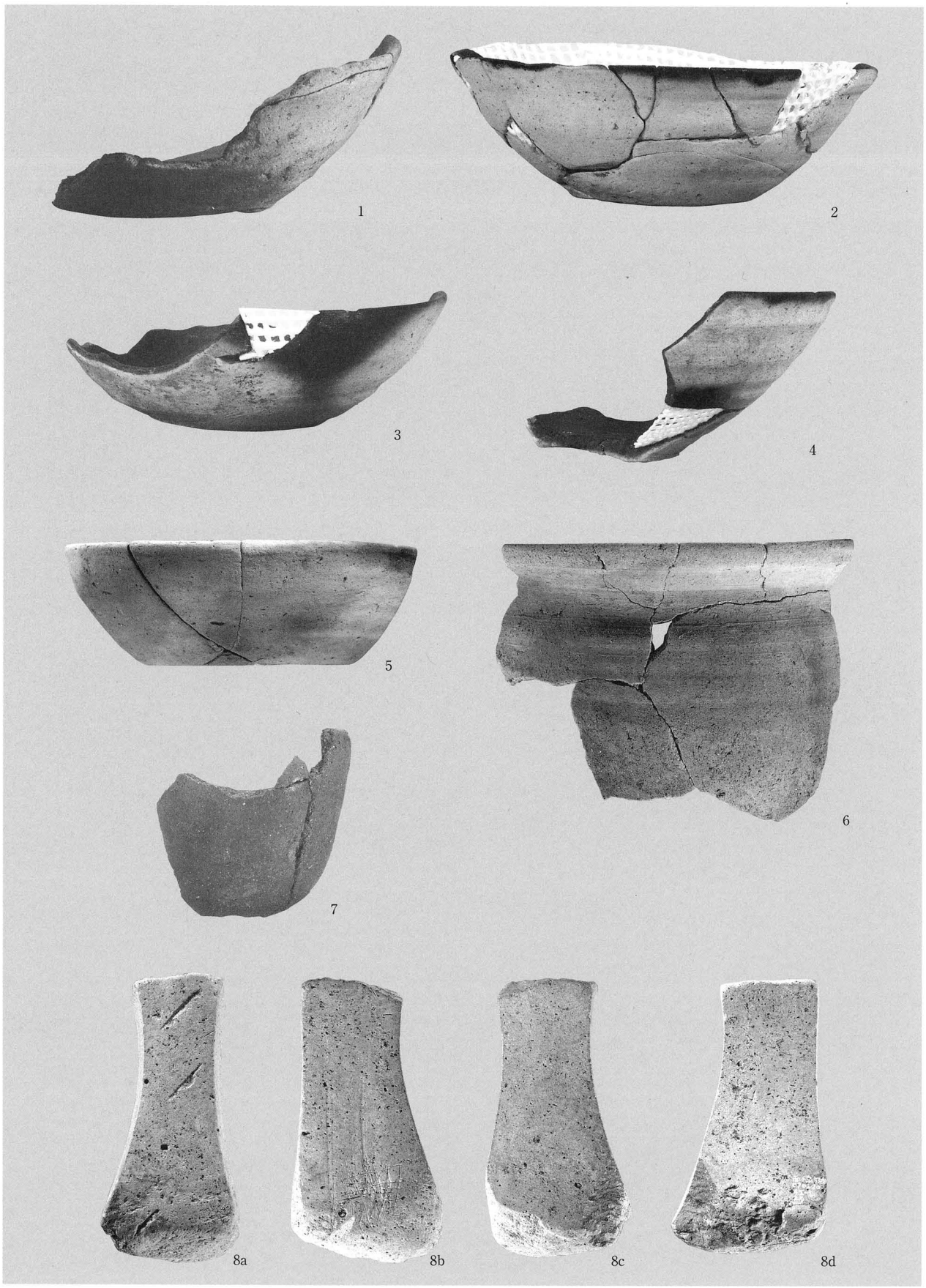


7　SR流路跡検出状況（西から）



8　SR 1 流路跡断面（南東から）

図版 6　土坑・性格不明遺構・流路跡



図版７　南小泉遺跡53次出土遺物

Ⅲ　南小泉遺跡第54次発掘調査報告書

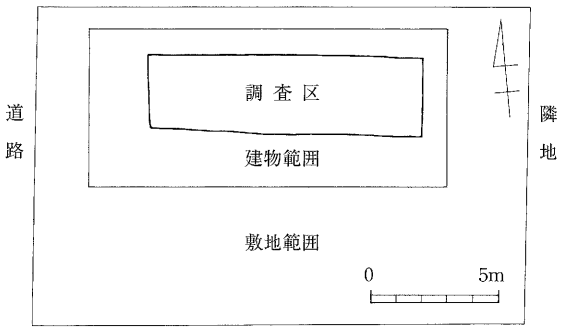
1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区一本杉町22－９
調 査 期 間　　平成19年３月５日～３月７日
調査対象面積　　89.59㎡
調 査 面 積　　約33㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤　哲司　　文化財教諭　今野　秀治　　藤田　雄介

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年１月26日付けで、地権者武者辰夫氏より深さ2.75～3.75mの柱状土壌改良を伴う２階建て個人住宅の建築工事に係る発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。

確認調査は、平成19年６月１日に実施した。建物建築予定地に南北３ｍ×東西11ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、調査区内から掘立柱建物跡や小溝状遺構群などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。



第14図　調査区配置図

3　遺跡の位置と環境

南小泉遺跡の位置と環境については、本書の「Ⅰ　南小泉遺跡第52次発掘調査報告書」を参照されたい。今回の調査地点は南小泉遺跡の北西部に位置しており、標高は約12mである。

4　基本層序

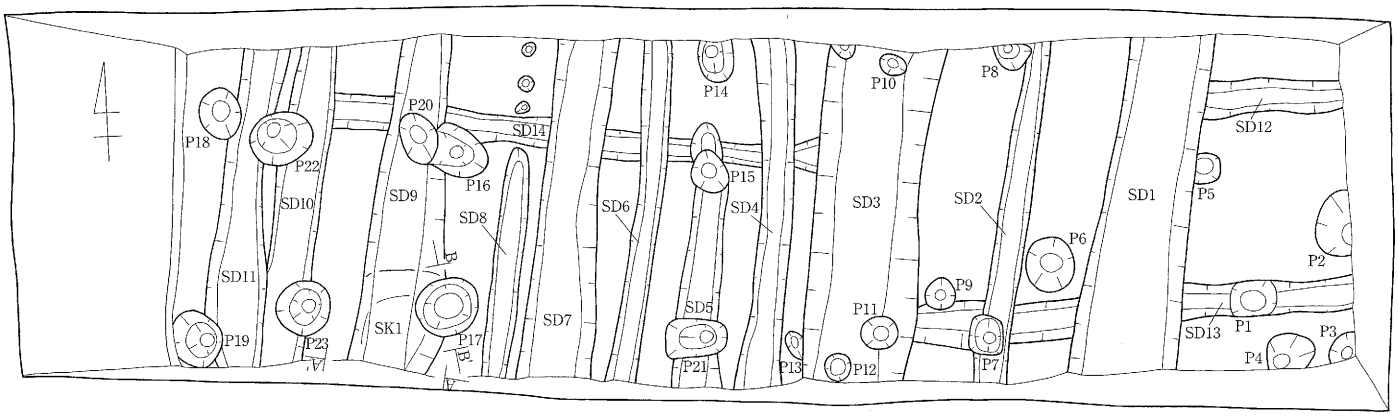
調査地点は50～75cmの盛土がある。その下のⅠ層は層厚５～15cmのシルト層で、近年の畑耕作土である。Ⅱ層以下はシルト質粘土層で土色により分層される。層厚はⅡ層が5～10cm、Ⅲ層が層厚5～10cm、Ⅳ層が層厚5～15cmである。Ⅳ層は旧耕作土と推定され、土師器片、須恵器片を少量含む。Ⅴ層は基盤層で遺構検出面である。

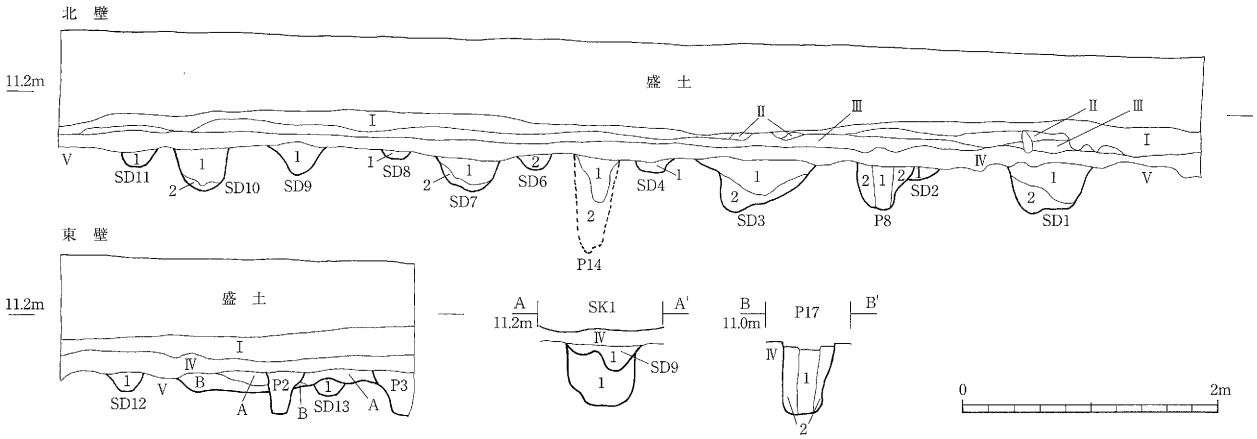
5　発見遺構と出土遺物

Ⅴ層上面で、掘立柱建物跡１棟、小溝状遺構群４群、土坑１基、ピット19基が検出された。

１）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　調査区の中央やや東寄りで４基の柱穴（Ｐ７、８、14、21）が検出された。Ｐ８は、小溝状遺構１c群を切っている。Ｐ７およびＰ21は、それぞれ重複する小溝状遺構１c群を掘削した際に検出されたが、Ｐ８と１c群の重複関係から、Ｐ７およびP21も各小溝状遺構を切っていると考えられる。P14は他遺構と重複がない。

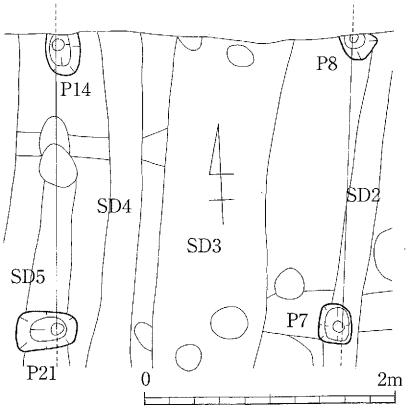




基本層	土　色		土　性	備　考
Ⅰ	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	畑耕作土。一部はグライ化して黄灰色に変化。
Ⅱ	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む。
Ⅲ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含み、下部に集積する。
Ⅳ	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄およびマンガン粒を含む。土師器片、須恵器片を含む。旧耕作土か。
Ⅴ	10YR5/6	黄褐色		シルト質粘土 基盤層。砂を多量に含む。
層　位	土　色		土　性	備　考
SB1-P7-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡。黄褐色土粒を微量に含む。底部に酸化鉄が集積。
2	10YR5/6	黄褐色	粘土	掘り方埋土。黄褐色土ブロック、マンガン粒を多量に含む。
SB1-P8-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡。黄褐色土粒を微量に含む。
2	10YR5/6	黄褐色	粘土	掘り方埋土。黄褐色土ブロックを多量に含む。マンガン粒を少量含む。
SB1-P14-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	柱痕跡。炭化物、黄褐色土粒を微量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	粘土	掘り方埋土。大小の黄褐色土ブロックを多量に含む。土師器片を含む。
SB1-P21-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡。炭化物、黄褐色土粒を微量に含む。
2	10YR5/6	黄褐色	粘土	掘り方埋土。褐色土ブロックを多量に含む。
SD1-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒を含む。
2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土ブロックを多量に含む。
SD2-1	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	黄褐色土、暗褐色土ブロックを多量に含む。
SD3-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土をまだら状に微量に含む。
2	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	暗褐色土ブロックを多量に含む。
SD4-1	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	暗褐色土ブロックを少量含む。
SD6-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロック、粒をまばらに含む。
SD7-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを微量に含む。
2	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土ブロックを含む。
SD8-1	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	暗褐色土ブロックを少量含む。
SD9-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロック、粒をまばらに含む。
SD10-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを微量に含む。
2	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土ブロックを含む。
SD11-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロック（小）をまばらに含む。
SD12-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを特に下部で多量に含む。
SD13-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを多量に含む。
SK1-1	10YR5/6	黄褐色	粘土	粘土（10YR3/4）ブロックを多量に含む。マンガン粒を少量含む。
P2-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを下部でまばらに含む。
P3-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒を多量に含む。
P17-1	10YR3/4	暗褐色	粘土	褐色土粒、炭化物粒を微量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを多量に含む。
A	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	小溝状遺構の堆積土か。
B	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	黄褐色土、暗褐色土ブロックを多量に含む。小溝状遺構の堆積土か。

第15図　遺構平・断面図

検出部の規模は東西１間約230cm、南北１間約230cmである。南北両方向もしくは一方に延びていると推定されるが建物の規模、柱穴配置は不明である。方向はＮ－10°－Ｅである。柱穴は隅丸長方形を基調とし、長軸30～50cm、短軸20～30cmを測る。検出面からの深さは30～75cmである。柱痕跡は４基とも検出されており、円形で直径10～15cmを測る。柱は４基とも抜き取られている。P14の掘り方埋土中から土師器片が数点出土した。



第16図　SB１掘立柱建物跡平面図

２）土坑

SK１土坑　調査区西部南壁際で検出された。南部は調査区外に延びている。SD９小溝状遺構、P17に切られている。平面形は隅丸方形で、南北長軸80cm以上、東西短軸約60cmを測る。断面形は不整なＵ字形で、深さは25～40cmである。

３）小溝状遺構群

調査区全面にわたって溝跡が14条検出された。検出規模や方向、切り合いなどの関係から、

・調査区の東半部で検出され、南北方向で比較的大規模なものを小溝状遺構１a群
・調査区の西半部で検出され、南北方向で比較的中規模なものを小溝状遺構１b群
・調査区の西部2/3で検出され、南北方向で比較的小規模なものを小溝状遺構１c群
・調査区の全面で検出され、東西方向で比較的小規模なものを小溝状遺構２群

と分別した。

小溝状遺構１a群　調査区の東半部で検出されたSD１、３である。小溝状遺構２群とＰ５、10～13を切る。検出部の規模は長さ約2.7m、上端幅70～90cm、下端幅45～60cm、深さ30～40cmで、断面形は不整なＵ字形である。調査区を南北方向に横切り、心々距離220cm前後でほぼ平行して２条検出された。堆積土中から土師器片が少量出土した。

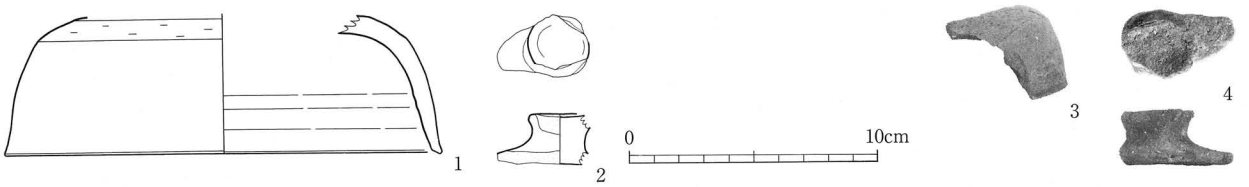
小溝状遺構１b群　調査区の西半部で検出されたSD７、９、11である。小溝状遺構１c群と小溝状遺構２群を切り、SK１土坑、P16～20、22に切られている。検出部の規模は長さ約2.7m、上端幅40～70cm、下端幅20～40cm、深さ20～35cmで、断面形は不整なＵ字形である。調査区を南北方向に横切り、心々距離130cm前後でほぼ平行して３条検出された。堆積土中から土師器片が少量出土している。

小溝状遺構１c群　調査区全域で検出されたSD２、４～６、８、10である。小溝状遺構２群を切り、SB１掘立柱建物跡と小溝状遺構１b群、P15、22、23に切られている。検出部の規模は長さ2.1～2.7m、上端幅10～40cm、下端幅10～20cm、深さ5～30cmで、断面形は船底形である。調査区を南北方向に横切り、心々距離60cm前後でほぼ平行して６条検出された。

小溝状遺構２群　調査区全域で検出されたSD12～14である。SB１掘立柱建物跡と小溝状遺構１a～１c、２群、P９、15、16、20に切られている。検出部の規模は長さ1.1～3.9m、上端幅20～30cm、下端幅10～20cm、深さ２～10cmで、断面形は船底形である。調査区を東西方向に横切り、３条が検出された。配置に規則性は見られない。

４）ピット

調査区全域で19基のピットが検出された。平面形は直径20～50cmの円形もしくは楕円形で、深さは10～65cmで



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	E-1	Ⅳ			須恵器	蓋	5.5	17.5		外面：ロクロ　肩部回転ヘラケズリ　内面：ロクロ	3
2	C-1		P14	2	非ロクロ土師器	蓋				つまみ部のみ	4

第17図　出土遺物

ある。柱痕跡は、調査区西部で検出されたP16、17、19、22、23の５基で確認された。柱の並びが想定されるものはない。P15、23の堆積土中から土師器片が数点出土した。

５）出土遺物

Ⅳ層より土師器小片、須恵器蓋が出土したほか、SB１掘立柱建物跡のP14の掘り方埋土、SD３、７小溝状遺構、P15、23より土師器片が出土した。Ⅳ層出土の須恵器蓋は端部から上方へ立ち上がる器形であり、器高5.5cmを測る（第17図１）。端部は平坦に整形されている。この器形の蓋は壷蓋と想定され（長島2005、他）、郡山遺跡第65次調査の報文では同種の蓋を宮城県黒川郡大和町鳥屋窯跡出土遺物（東北学院大学考古学研究部1975）と比較し、遺物の時期について８世紀前半としている（長島1992）。郡山遺跡の他の出土例もⅡ期官衙に伴う遺構から出土しており、第17図１の須恵器蓋は７世紀末～８世紀前葉のものと考えられる。

また、SB１掘立柱建物跡のP14の掘り方埋土より土師器蓋が出土した（第17図２）。ツマミ部のみであり、全体形状、時期は不明である。ツマミ中央が凹み、リング状を呈する。他に時期を特定できる資料は出土しなかった。

６　まとめ

① 基本層Ⅴ層上面で、掘立柱建物跡１棟、小溝状遺構群４群、土坑１基、ピット19基が検出された。

② 掘立柱建物跡および小溝状遺構群に関しては、時期を決定する資料の出土はないが、近接する調査地点の対応する遺構検出面から、古墳時代から平安時代の建物跡や小溝状遺構群が検出されていることから、この年代の遺構と推定される。土坑やピットも検出状況などからほぼ同時期の遺構と推定される。

＜参考文献＞

工藤哲司2005「南小泉遺跡第41次発掘調査報告書」『山田本町遺跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第287集pp.121-126

今野秀治2007「南小泉遺跡第51次発掘調査報告書」『松森城跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第310集pp.59-63

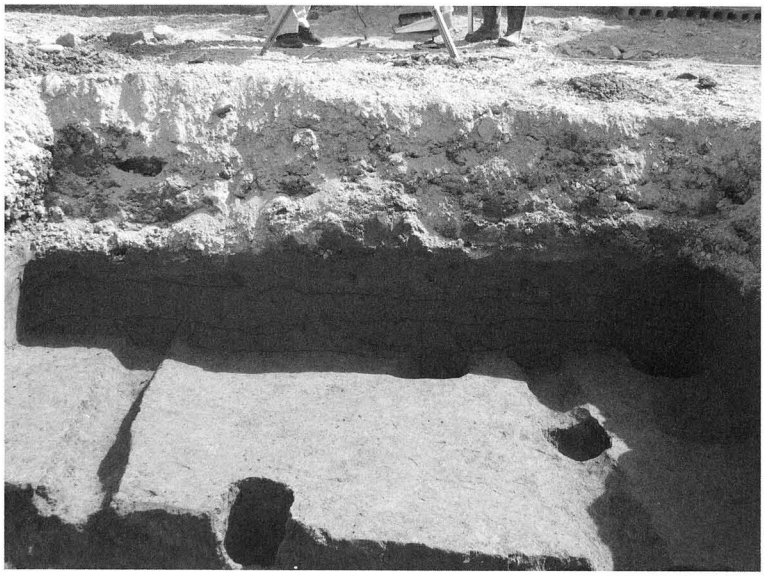
東北学院大学考古学研究部1975「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』９ pp.1-90

長島榮一1992『郡山遺跡』仙台市文化財調査報告書156集

長島榮一2005『郡山遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第283集

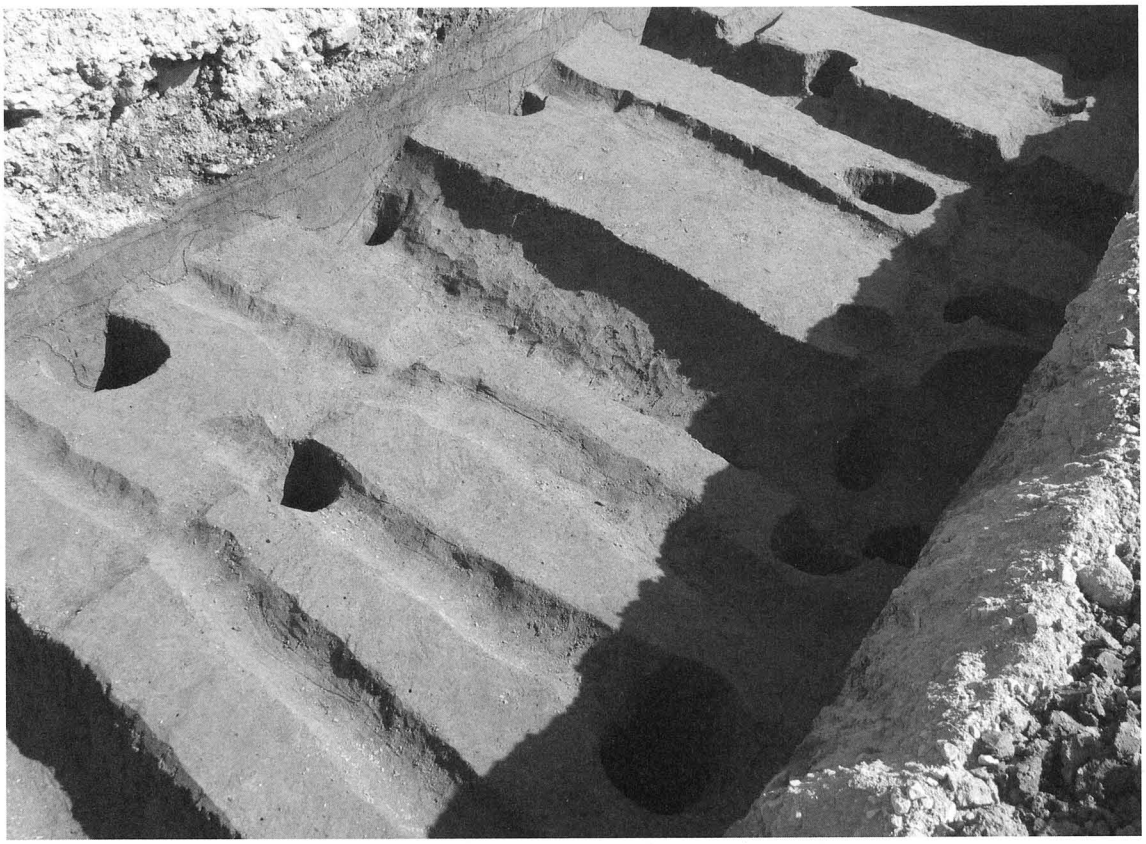
1　遺構検出状況
（北東から）

2　遺構検出状況
（南西から）



3　基本層序
（北壁）

図版８　検出状況・基本層序

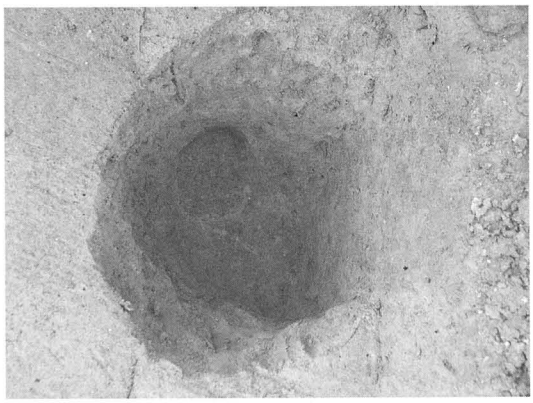


1　SB１掘立柱建物跡（南西から）

2　SK１土坑とP17（西から）

3　SK１土坑断面（北から）

4　P17完掘（東から）

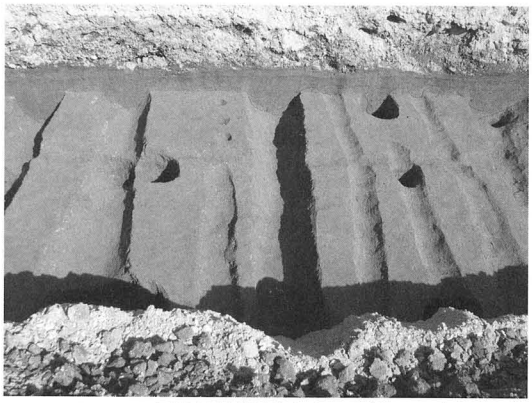


5　P19完掘（西から）

図版９　掘立柱建物跡・土坑・ピット

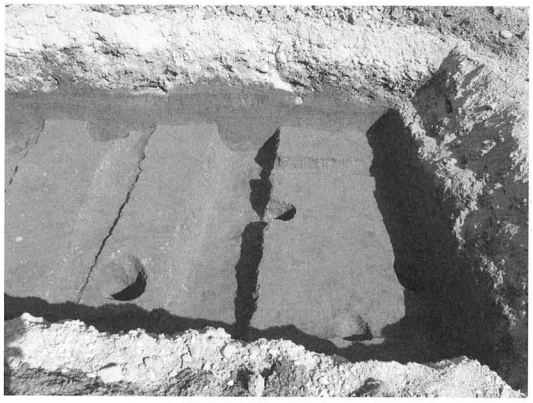
1　小溝状遺構群（南西から）

2　小溝状遺構群西部（南から）



3　小溝状遺構群中央西（南から）

4　小溝状遺構群中央東（南から）



5　小溝状遺構群東部（南から）

図版10　小溝状遺構群

1　遺構完掘状況（西から）

2　遺構完掘状況（東から）

図版11　調査区全景

Ⅳ　南小泉遺跡第55次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　（Aトレンチ）仙台市若林区遠見塚一丁目44－５の一部
（Bトレンチ）仙台市若林区遠見塚一丁目44－51
（Cトレンチ）仙台市若林区遠見塚一丁目44－52
（Dトレンチ）仙台市若林区遠見塚一丁目44－53
調 査 期 間　Aトレンチ　平成19年４月18日～19日
B～Dトレンチ　平成19年６月７日～８日・11日
調査対象面積　（Aトレンチ）67㎡　（Bトレンチ）58.79㎡
（Cトレンチ）56.31㎡　（Dトレンチ）69.77㎡
調 査 面 積　（Aトレンチ）21㎡　（Bトレンチ）20㎡
（Cトレンチ）28.6㎡　（Dトレンチ）27㎡
調 査 原 因　個人住宅建設
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主任　長島　榮一　主事　加藤　隆則
文化財教諭　志賀　雄一　工藤　慶次郎

2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、同じ造成地内での隣接する４棟の住宅建築に伴うため、一括して第55次調査として扱った。それぞれ西からA～Dトレンチとし、調査区を設定して確認調査を実施した。

（Aトレンチ）

平成19年３月２日付けで、菅澤貞美氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行うこととした。建設予定地に７×３ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、調査区内から土師器甕などの遺物や柱痕跡を伴うピットなどの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

（Bトレンチ）

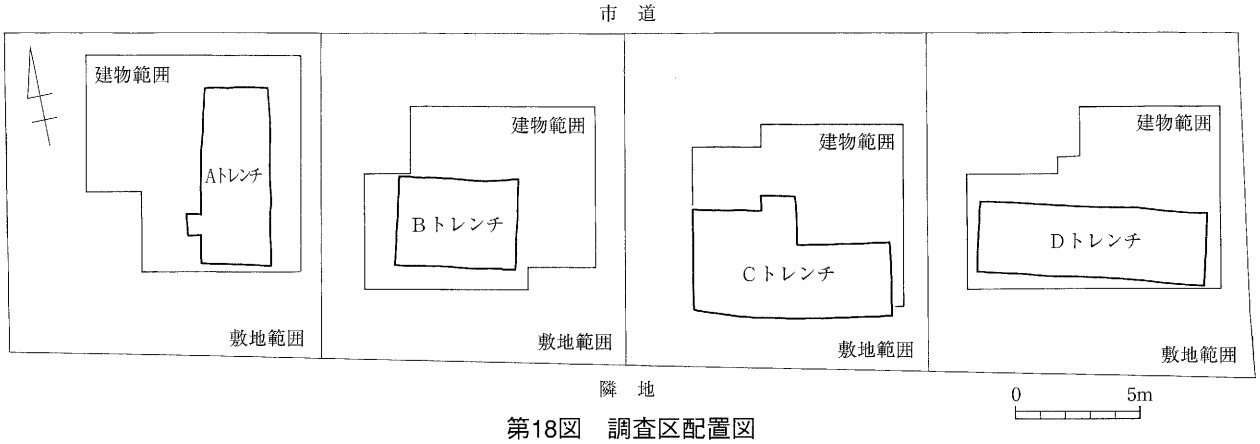
平成19年４月20日付けで、高橋徹氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行うこととした。Aトレンチ東側の建設予定地に４×５ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝跡・ピットなどの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

（Cトレンチ）

平成19年４月20日付けで、志賀理雄氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行うこととした。Bトレンチ東側の建設予定地に３×８ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、甕・壺などの遺物や土坑などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

（Dトレンチ）

平成19年５月31日付けで、見田智氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので確認調査を行うこととした。Cトレンチ東側の建設予定地に３×９ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ溝や



第18図　調査区配置図

ピットなどの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

遺跡の環境については本報告書掲載の南小泉遺跡第52次発掘調査報告を参照されたい。

今回の調査区は遺跡のほぼ中央部で、遠見塚古墳の西側220mに位置する。周辺では昭和63年度に、今回調査区の北側で、宅地造成に伴う道路部分を対象とした第18次調査が行われている。その際に調査区南側のⅡ区では、竪穴住居跡３軒、溝跡８条、小溝状遺構群などが発見され、古墳時代後期の集落や中世の遺構群の広がりを確認している。特にカマドや貯蔵穴がある竪穴住居跡からは、土師器坏・壷・甕・甑などの遺物が出土したりしている。また、平安時代の遺存状況が良好な住居跡も発見されている。

4　基本層序

Ａ・Ｃ・Ｄトレンチの北壁、Ｂトレンチの東面で基本層の観察を行った。ＡトレンチとＢ～Ｄトレンチとの層序の違いがあったため、4トレンチのうち、Ｂ～Ｄトレンチの基本層序のみ共通のものとした。

（Ａトレンチ）

調査地点には15cm～30cmの盛土がある。その下のⅠ層は旧耕作土である。Ⅱ層は褐色粘土質シルトであり、調査区東側のみ堆積している。Ⅲ層は黄褐色砂である。このⅡ・Ⅲ層が遺構検出面である。Ⅳ層は褐色砂であり、砂礫を多量に含んでいる。

（Ｂ～Ｄトレンチ）

15cm～25cmの盛土がある。Ⅰ層は旧耕作土であり、大部分がグライ化している。Ⅱ層は褐色シルトで、遺構検出面である。ＡトレンチのⅡ層に対応しているものと考えられる。Ⅲ層はにぶい黄褐色砂であり、ＡトレンチのⅣ層に対応するものと考えられる。

5　発見遺構と出土遺物

①Ａトレンチ

Ⅱ・Ⅲ層上面から、ピットを16基検出した。また、土師器甕や土師器坏、平箱1/4程度の土師器片が出土した。

1）ピット

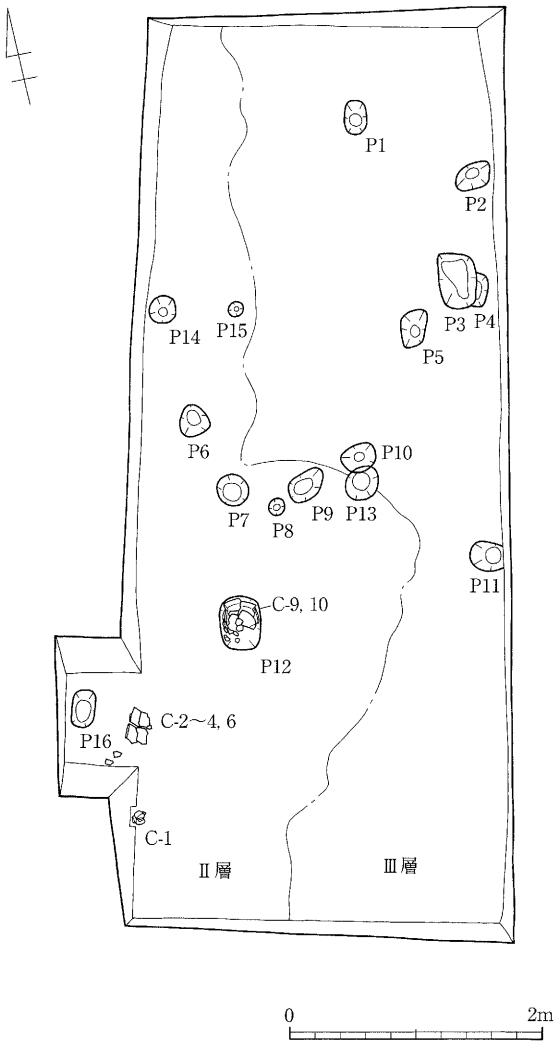
Ｐ９　Ⅱ層上面の、調査区中央部で検出した。直径約12cm、深さ16cmで、柱痕跡が唯一検出され、柱材を伴った小規模な柱穴と考えられる。

P12　Ⅱ層上面の、調査区南西部で検出した。長軸42cm、短軸35cm、深さ32cmの楕円形である。底面から、ロクロ不使用の土師器甕、小型甕が出土した。

甕（第23図４）は、体部が縦長の楕円形で、「く」字状に外反する口縁部を持つ。底部は口径が小さい平底でやや安定性を欠く。外面の体部がヘラミガキ、内面の体部がヘラナデである。

２）出土遺物

Ⅰ層の上面からほぼ完形の土師器坏が、Ⅱ層上面から土師器甕が、Ⅱ層中から弥生土器が出土した。また、Ⅲ層上面から坏、高坏、小型壷、甕、甑が出土した。いずれもロクロ不使用の土師器である。Ⅰ層上面出土の坏（第23図１）は、平底で体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部になりやや内弯する。外面は、口縁部がヨコナデ、体部から底部までヘラケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキである。以上の土師器は、器形、調整の特色から東北地方の土器編年でいう南小泉式（古墳時代中期）に相当するものと考えられる。Ⅱ層出土の弥生土器（第23図３）は甕の破片で、表面に沈線文がある。



第19図　Ａトレンチ遺構配置図

②Ｂトレンチ

Ⅱ層上面において、溝跡２条とピット12基を検出した。また、SD１から石器片、陶器片、土師器片、SD２から瓦片、青磁片、土師器片、ピット群から土師器片が出土した。

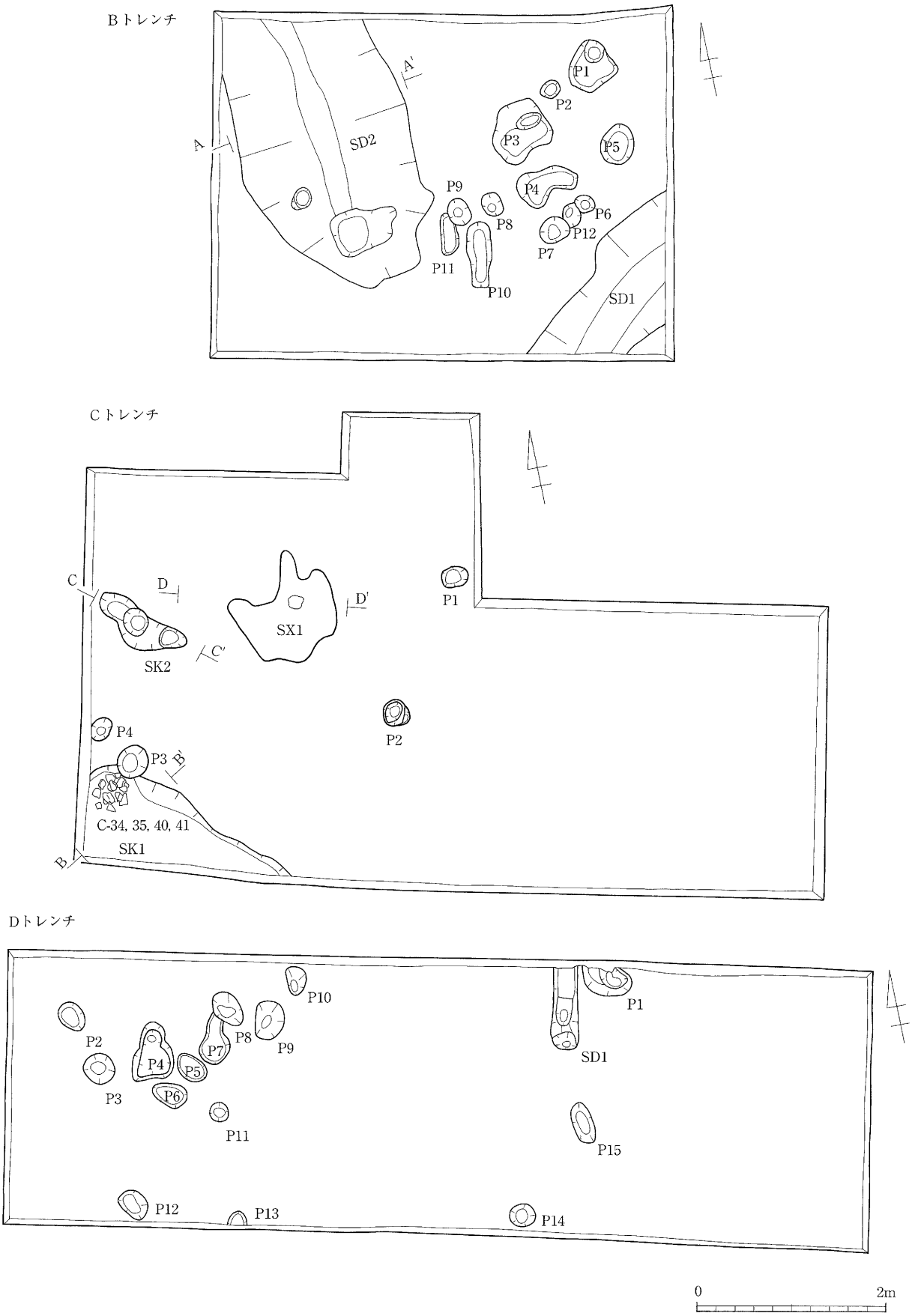
１）溝跡

SD１溝跡　調査区南東隅で検出された。南西から北東方向に延びる幅80cm～100cmの溝跡で、調査区外に延びている。断面はほぼU字型を呈し、堆積土は１層である。堆積土から石器片、陶器片、土師器片が出土した。土師器片はすべて非ロクロ成形である。

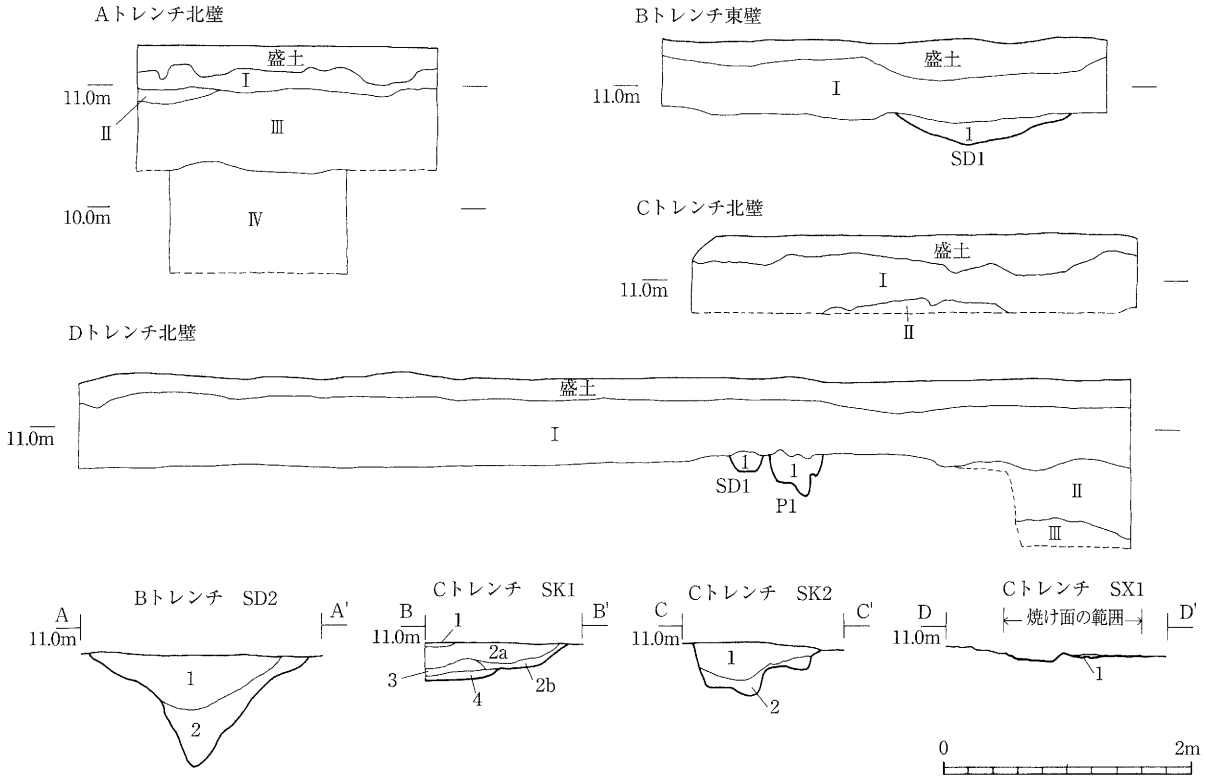
SD２溝跡　調査区北西部で検出された。南北に伸びる幅160～180cmの溝跡で、調査区外に伸びていると考えられる。断面形はV字型であるが、南端部分のみU字型に深く掘り込んである。堆積土は２層である。堆積土から青磁片、瓦片、石器片が１点ずつ、土師器片が数十点出土した。瓦片は、形状から玉縁の部分で時期は平安時代であると考えられる。また、青磁片は中国青白磁小皿の体部および底部の一部で、形状等の特色から鎌倉時代（13世紀か）のものであると考えられる。

２）ピット

調査区全域から、計12基のピットを検出した。検出面はいずれもⅡ層上面である。平面形は不整形を基調とし、


Bトレンチ
A
A'
SD2
P1
P2
P3
P5
P4
P6
P12
P7
P8
P9
P11
P10
SD1
Cトレンチ
C
D
D'
SX1
P1
SK2
C'
P4
P2
P3
B'
C-34, 35, 40, 41
SK1
B
Dトレンチ
P10
P1
P2
P8
P9
P7
P4
P5
SD1
P3
P6
P11
P15
P12
P13
P14
0
2m

第20図　遺構配置図



Aトレンチ	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	旧畑耕作土。
Ⅱ	7.5YR4/4　褐色	粘土質シルト	遺構検出面。東半に分布。
Ⅲ	10YR5/8　黄褐色	砂	遺構検出面。西半に分布。
Ⅳ	7.5YR4/6　褐色	粗粒砂	0.5～50mmの砂礫を多量に含む。
B～Dトレンチ	土　　色	土　質	備　　考
Ⅰ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	グライ化した土を多量に含む。
Ⅱ	10YR4/4　褐色	シルト	
Ⅲ	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂	
層　位	土　　色	土　性	備　　考
B-SD2-1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
2	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	黄褐色シルトブロックを含む。
C-SK1-1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
2a	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	
2b	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	砂を多量に含む。
3	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む。
4	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト質粘土	炭化物を少量含む。
C-SK2-1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	
C-SX1-1	5YR6/6　橙色	焼土	

第21図　遺構断面図

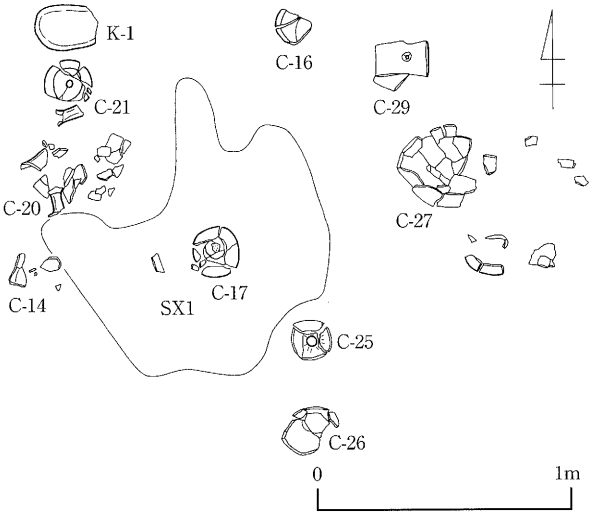
大きさからは直径20cm～50cmで、検出面からの深さは４cm～40cmである。柱痕跡を検出できたものはない。Ｐ１、４、５からそれぞれ土師器片が出土した。ロクロ使用のものと不使用のものが含まれている。

③Cトレンチ

Ⅱ層上面においてピット４基、土坑２基を検出した。また竪穴住居を著しく削平した跡とみられる性格不明遺構SX１を検出した。遺物は、SK１土坑とSX１およびその周辺のⅡ層上面から高坏や坏などのロクロ不使用の土師器等がまとまって出土した。さらにピットからも土師器片等が少量出土した。

1）土坑

SK１土坑　調査区南隅のⅡ層上面で遺構の一部を検出した。遺構の全容は明らかではないが、調査区内における幅は東西約２m30cm、南北80cm、深さは約25cmである。堆積土は４層である。堆積土から、土師器高坏が６点、土師器甕２点、土師器坏１点、手捏ね土器出土した。



第22図　Ｃトレンチ遺物出土状況

高坏は、調整は不明瞭であるが脚端部のみ欠損したもの（第25図９）、同様の形態で坏部のみのもの（第25図８）が出土し、その他に口縁部の破片のみのものが４点ある。第25図９は、坏底部と体部の境があまり明瞭でなく口縁部まで立ち上がる。脚部は円錐状で中央がやや膨らんでいる。調整は、内面の脚部はヘラケズリである。第25図８は外面は口縁部がヨコナデのちヘラミガキ、体部はヘラケズリのちヘラミガキ、内面はヨコナデのちヘラミガキである。甕は２点出土した。第25図７は、口縁部および体部上部の一部のみである。口縁部は「く」字状に外傾している。外面、内面ともにヨコナデ、頸部はナデのちヘラミガキである。また第25図８は、口縁部の破片のみである。折り返し口縁で、表面が磨滅しており調整は不明瞭である。

坏（第25図６）は、口縁部が屈曲し、体部内面には明確な稜がつく。体部はふくらみをもちやや肩が張る。底部は平底である。手捏ね土器（図版19－６）は、底が丸みを帯びた平底である。

第25図８は口縁の形状から、塩釜式または南小泉式初期と考えられる。また、その他の土師器は器種、形状等の特徴から南小泉式に相当すると考えられる。塩釜式の土師器は、今回調査地点の近接で実施された第21次調査、第26次調査でも出土していることから、この遺構の時期は古墳時代中期が中心ではあるが、前期までさかのぼる可能性も考えられる。

SK２土坑　調査区西側のⅡ層上面で検出した。東西約１m、南北20～40cm、深さ約40cmの土坑である。平面形は楕円形を呈し、堆積土は２層である。遺物は出土しなかった。

2）ピット

調査区中央部から西側で、４基検出した。いずれも平面形は円形である。大きさは直径20cm～30cmで、深さは20cm～30cmである。Ｐ３、Ｐ４から土師器片が１点ずつ出土した。いずれも器種、形状等は不明である。

3）性格不明遺構

SX１性格不明遺構　調査区北側、Ⅱ層上面で検出された。東西約650cm×南北20cm、深さ約７cmの不整形を呈し、東西方向に広がっている。貼床やピットなどは検出されなかったが、遺物の出土状況や炉状の焼土痕跡などがあることから、竪穴住居が著しく削られた跡である可能性がある。SX１およびその周辺から出土した遺物は、礫石器１点、高坏７点、坏５点、甑２点、甕２点、坩１点、小壺１点等である。出土した土師器はすべてロクロ不使用のものである。

礫石器（第23図５）は中央に敲打痕のある磨凹石である。不整な楕円形で、長軸42cm、短軸35cm、厚さ21～48cmである。

高坏はほぼ完形のものが３点出土した（第24図４・５・６）。第24図４は、下端が直線的になるが、中位が胴張り状に膨らみ、坏部ですぼまるものである。外面は口縁部がヘラミガキ、体部、脚部はヘラケズリ、内面は坏部がヘラナデのちヘラミガキ、脚部がヘラミガキである。第24図５は同４に比べ脚部の立ち上がりが直線的である。外面は坏部がヘラナデとヘラケズリ、脚部がヘラナデである。内面は脚部がヘラケズリ、内面は口縁部は磨滅している。脚部がヘラケズリである。第24図６は、同４・５に比べ坏部の体部と底部の境に明確な稜がつく平底である。外面は体部がヘラミガキ、ヘラケズリ、脚部がヘラケズリ、内面は口縁部がヘラナデのちヘラミガキ、脚部はヘラケズリ、ヨコナデである。第24図３は坏部のみである。いずれも口縁部は直線的に外傾し、平底風である。

坏は、底部から口縁部まで残存するものは２点出土した（第24図１・２）。いずれも丸底で、体部から口縁部へ全体に丸みをもって立ち上がる。第24図１は口縁部がほぼ直立するのに対し、同２は口縁部がくびれ外反する。調整はいずれも外面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデである。この他に坏では口縁部と体部の一部のみではあるが、２点出土した。第25図５は口縁部と体部の境に明瞭な角がつき、口縁部は直立気味に立ち上がる。外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリのちヘラミガキ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。また、第25図４は内、外面が赤彩されている。体部から口縁部へ丸みをもって立ち上がり、口縁部は屈曲している。調整は磨滅のため不明瞭である。

甑は２点出土した（第25図２、第24図９）。第25図２は口縁部が「く」字状の屈曲をもち、体部は丸味があり、底部は単孔式である。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデのちナデ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデのちナデ、底部がヘラケズリである。第24図９は体部の一部のみである。中央部には把手がつけられている。外面は口縁～体部がヘラナデ、把手付近はヘラケズリ、内面にはハケメが施されている。

甕は２点出土した（第25図１・３）。第25図３はほぼ完形である。最大径が体部中央にあり、球形であるがやや縦長である。底部は平底で安定している。外面は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデのちナデ、内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデのちナデ、底部はヘラケズリである。同１は底部と体部の下部のみである。平底で、調整は体部がヘラケズリで火燃を受けている。坩（第24図７）は、口縁部と体部上部のみである。口縁部は直線的に外傾し、体部は球形であると推定される。調整は、口縁部の内面がヘラナデで、外面は磨滅している。

土師器は器種ごとに形状や調整の違いは多少あるものの、いずれも南小泉式に相当するものと考えられる。したがってSX1は、古墳時代中期の遺構であると考えられる。また、高坏の出土が多いことが特徴的である。

④Dトレンチ

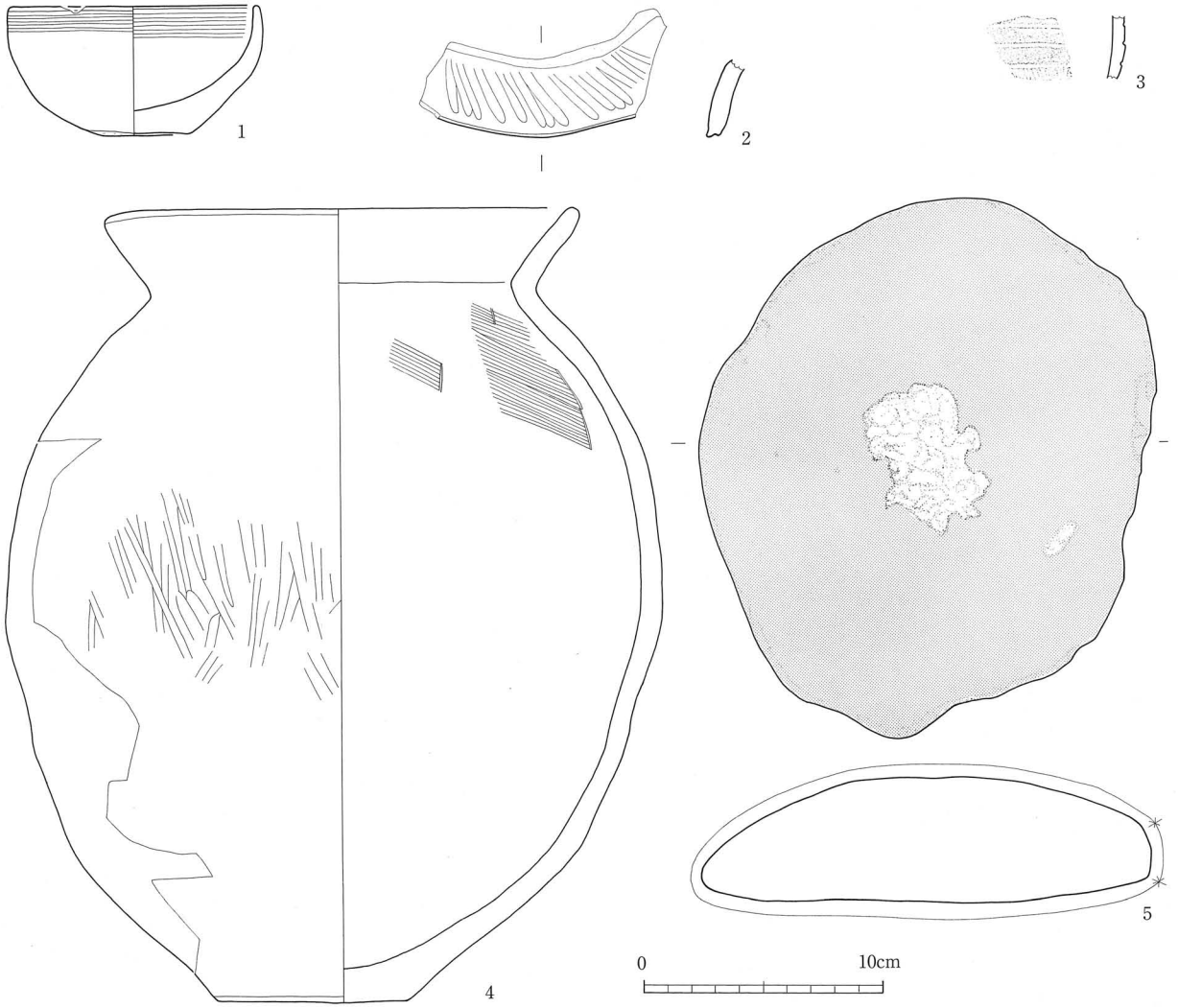
Ⅱ層上面で溝跡を１条とピットを16基検出した。また、Ⅱ層上面や溝跡、ピットからは磁器片が出土した。

１）溝跡

SD１溝跡　調査区北壁から中央部にかけて検出し、調査区外に延びている。南北方向に延び、幅が約30cm、深さ約16cm～28cmの溝跡である。断面形はU字形を呈す。遺構の堆積土から土師器片が数点出土した。器種等の詳細が明らかでないが、いずれもロクロ不使用の土師器である。

２）ピット

調査区東側に13基、中央部に３基検出した。P６はP14を切っており、P10はP11を切っている。P１の北側とP16の南側は調査区外に延びている。いずれも堆積土は1層である。P２、４、５、８から土師器片が出土した。器種等の詳細が明らかでないが、いずれも形状からロクロ不使用の土師器である。



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量（cm・g）				特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		区	基本層	遺構名	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	C-1	Aトレンチ	Ⅰ層		1	非ロクロ土師器	坏	5.4	10.3	4.2		外面：口縁部ロクロナデ、体部～底部ヘラケズリ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	19-1
2	C-42	Aトレンチ		P12		非ロクロ土師器	不明					外面：ヘラミガキ　内面：ヨコナデ	19-3
3	B-1	Aトレンチ	Ⅱ層		17	弥生土器	甕					沈線文	19-2
4	C-10	Aトレンチ		P12		非ロクロ土師器	甕	33.3	19.9	8.1		外面：体部ヘラミガキ　内面：体部ヘラナデ	19-4
5	K-1	Cトレンチ			5-13	礫石器	磨敲石	22.5	19.1	5.3	3280	両面に磨り面（網かけ部分）、敲き痕は片面のみ	19-7

第23図　出土遺物１

6　まとめ

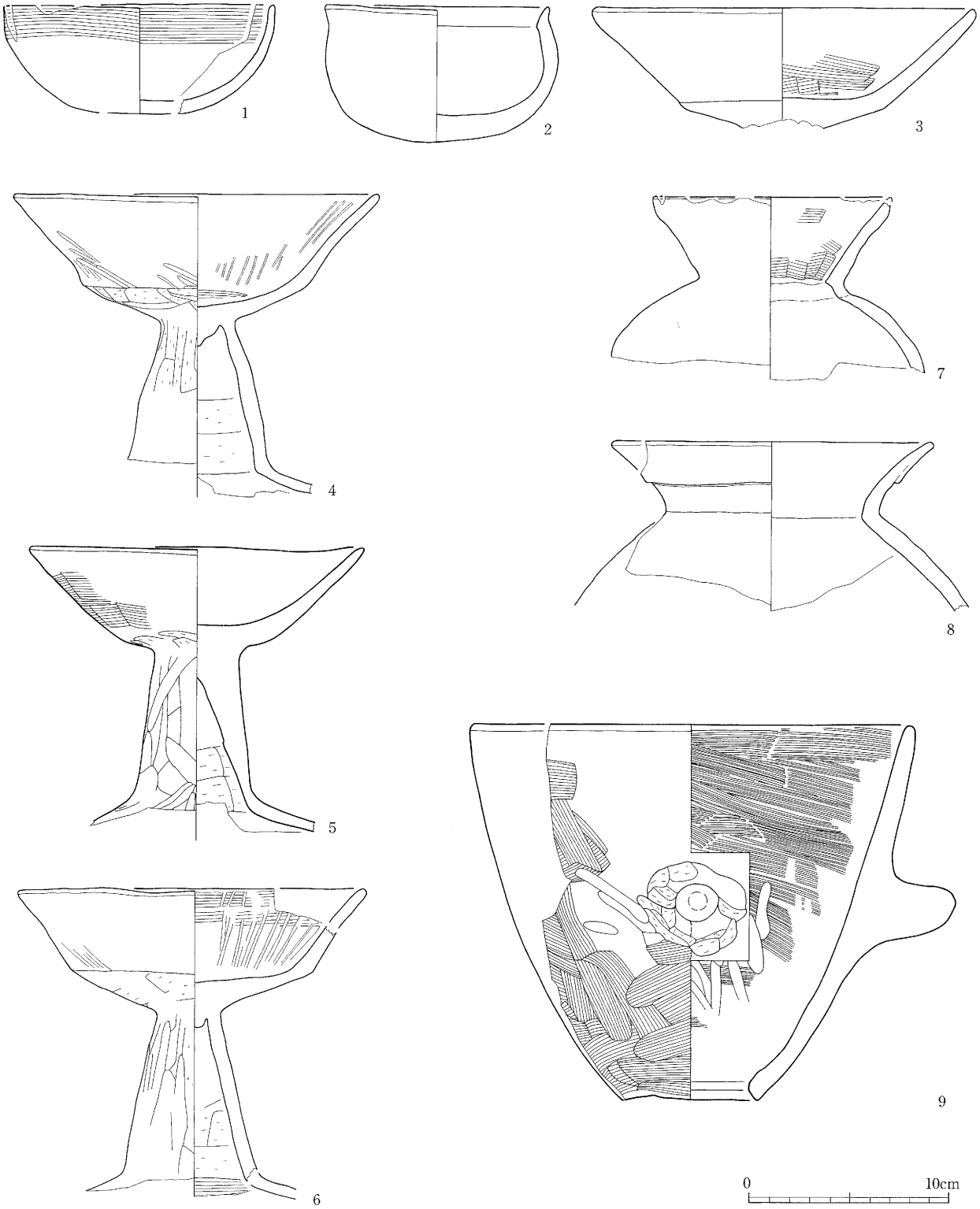
① 今回の調査区では、溝跡３条、土坑２基、ピット48基、性格不明遺構１基が検出された。

② Ａトレンチで検出されたピットのうち、P12は、出土遺物から古墳時代前期の遺構と考えられる。他にも、その時期まで遡る遺構がある可能性がある。

③ Ｂトレンチで検出されたSD２溝跡は、遺物と遺構の形状から、塀などの抜き取り溝である可能性が考えられる。鎌倉時代の中国産青白磁片が出土しており、中世まで存在した遺構であると見られる。

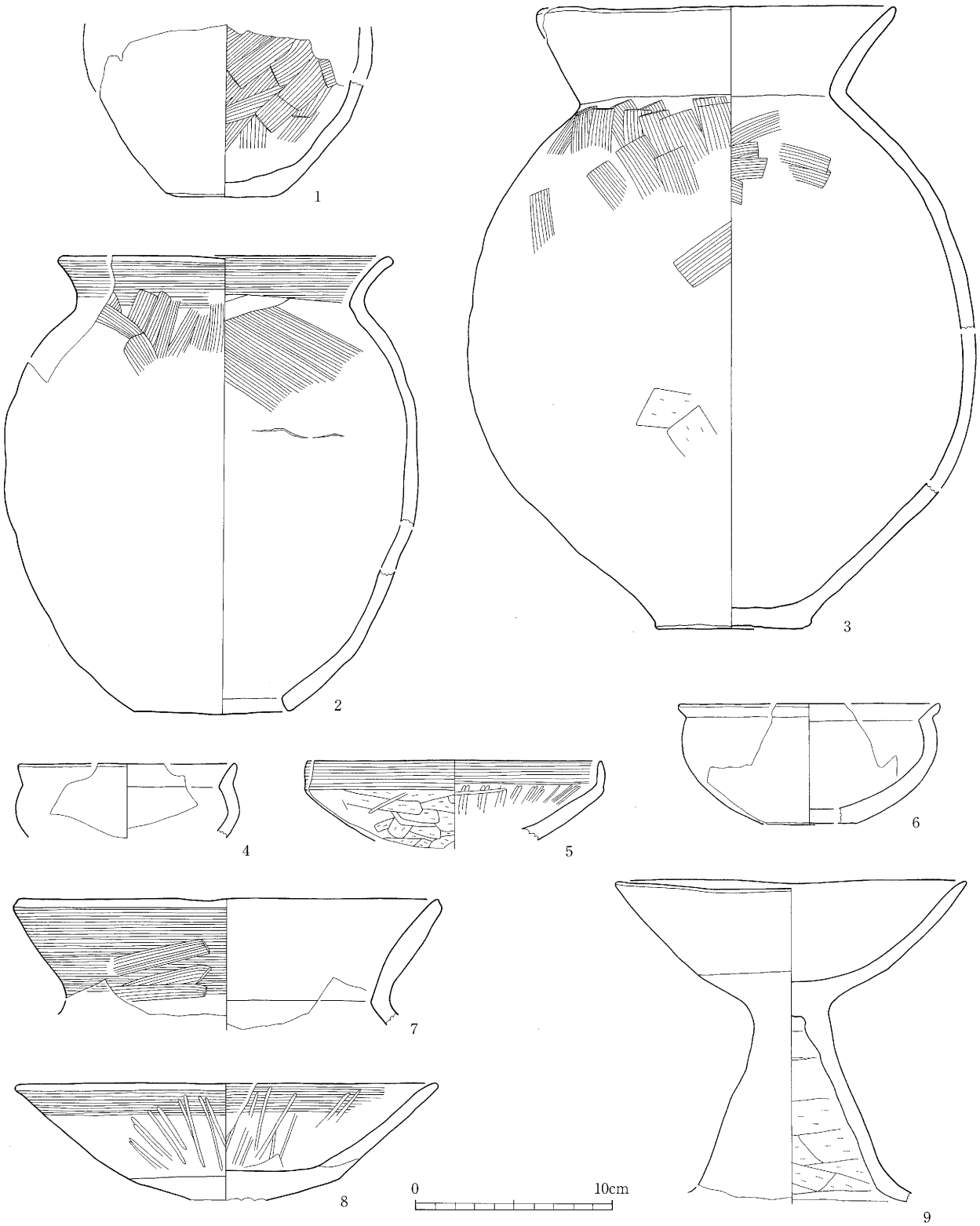
④ Ｃトレンチで検出された性格不明遺構は、検出面が浅く耕作等で削られた部分が多いため、不明な点も多いが、焼土や生活の中で使ったと見られる扁平な磨石が検出されたことから、竪穴住居を伴う生活の場であった可能性がある。出土遺物から時期は古墳時代中期頃と考えられる。また、同じくＣトレンチで検出された土坑は、遺物から古墳時代前期までさかのぼる可能性が考えられる。

⑤ Ｄトレンチから複数の土師器片が出土した。いずれもロクロ不使用の土師器である。



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm）			特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		区	基本層	取上No.	種別	器種	器種	口径	底径		
1	C-14	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-1	非ロクロ土師器	坏	(5.6)	13.6		外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	20-1
2	C-16	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-7	非ロクロ土師器	坏	7.0	11.2		外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	20-2
3	C-17	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-4	非ロクロ土師器	高坏	6.2	19.1		外面：マメツ　内面：坏部 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	20-3
4	C-19	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-2	非ロクロ土師器	高坏	15.4	18.2		外面：坏部 口縁部ヘラミガキ、体部～脚部ヘラケズリ　内面：坏部ヘラナデ後ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	20-4
5	C-20	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-2	非ロクロ土師器	高坏	(14.5)	16.4		外面：坏部ヘラナデ、ヘラケズリ、脚部ヘラナデ　内面：坏部マメツ、脚部ヘラケズリ	20-5
6	C-21	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-3	非ロクロ土師器	高坏	(15.9)	(17.6)		外面：体部ヘラミガキ、ヘラケズリ、脚部ヘラケズリ　内面：口縁部ヘラナデ後ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ、ヨコナデ	20-6
7	C-25	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-5	非ロクロ土師器	坩	(9.4)	12.0		外面：マメツ　内面：口縁部ヘラナデ、体部マメツ	20-7
8	C-31	Cトレンチ	Ⅱ層上面	2	非ロクロ土師器	甕	(8.7)	(16.3)		折り返し口縁	20-9
9	C-29	Cトレンチ	Ⅱ層上面	5-8	非ロクロ土師器	甑	19.1	22.0	6.8	把手付　外面：口縁～体部ヘラナデ　把手付近ヘラケズリ　内面：ハケメ	20-8

第24図　出土遺物２



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量（cm）			特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器種	口径	底径		
1	C-26	Cトレンチ	Ⅱ層上面			5-6	非ロクロ土師器	甕	(8.8)		4.9	外面：マメツ　内面：体部ヘラナデ	21-3
2	C-28	Cトレンチ	Ⅱ層上面			5-2	非ロクロ土師器	甑	23.4	16.9	7.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ後ナデ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ後ナデ、底面ヘラケズリ	21-1
3	C-27	Cトレンチ	Ⅱ層上面			5-9	非ロクロ土師器	甕	31.8	18.1	7.2	外面：口縁部、体部ヘラナデ、ヘラケズリ　内面：体部ヘラナデ	21-2
4	C-13	Cトレンチ	Ⅱ層上面			3	非ロクロ土師器	坏	(3.8)	(11.0)		赤彩（ベンガラ）あり	21-4
5	C-12	Cトレンチ	Ⅱ層上面			3	非ロクロ土師器	坏	(4.1)	(14.9)		外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	21-5
6	C-34	Cトレンチ		SK-1	2	19-1	非ロクロ土師器	坏	6.2	(13.1)	(4.8)	内外面摩滅	21-6
7	C-41	Cトレンチ		SK-1	2	19-1	非ロクロ土師器	甕	(6.7)	(21.8)		外面：ヨコナデ　内面：ヨコナデ、頸部ナデ後ヘラミガキ	21-7
8	C-35	Cトレンチ		SK-1	2	19-1	非ロクロ土師器	高坏	(6.0)	21.1		外面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面：ヨコナデ後ヘラミガキ	21-8
9	C-40	Cトレンチ		SK-1	2・3	19-2	非ロクロ土師器	高坏	(16.6)	17.9		外面：マメツ　内面：坏部マメツ、脚部ヘラケズリ	21-9

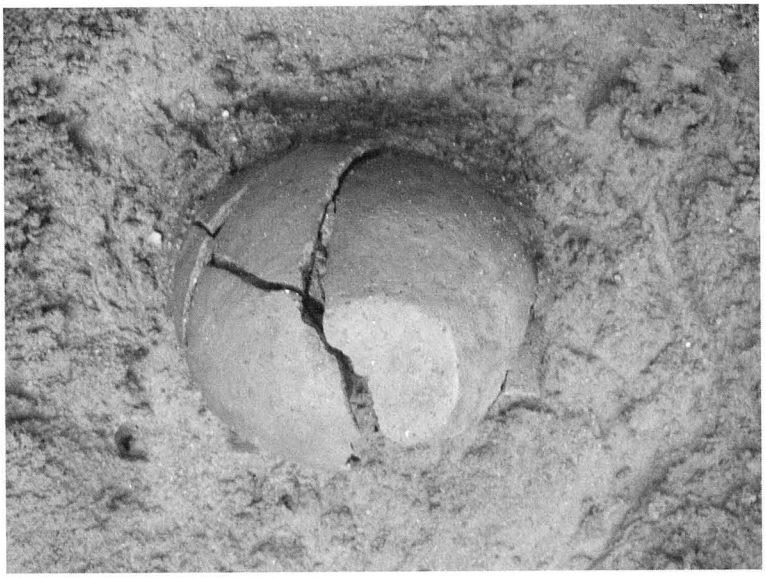
第25図　出土遺物 3

1　遺構検出状況
（南から）

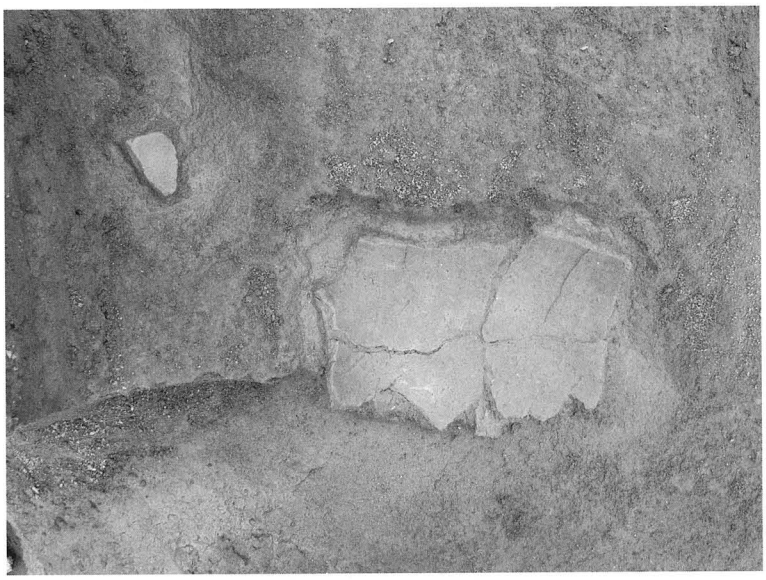
2　遺構完掘状況
（南から）

3　北壁断面

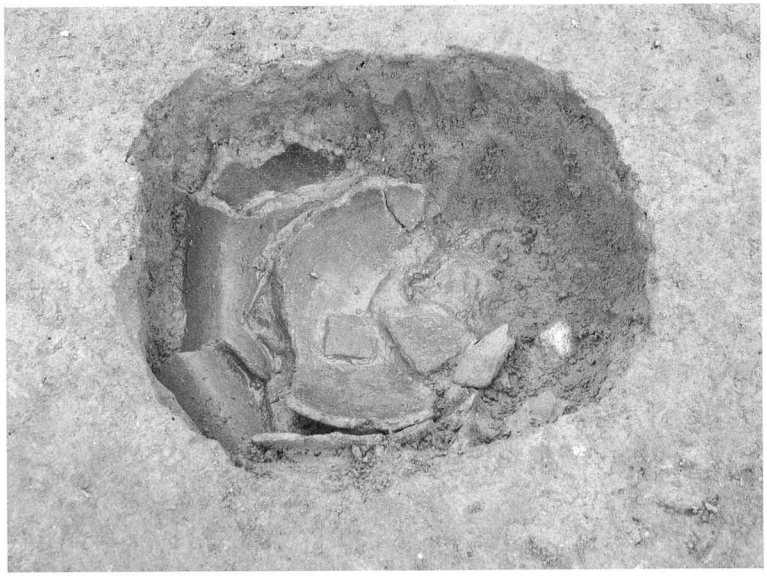
図版12　Ａトレンチ遺構検出・完掘状況・断面



1　Ⅰ層土師器坏出土状況
（東から）



2　Ⅲ層上面土師器甑出土状況
（南から）

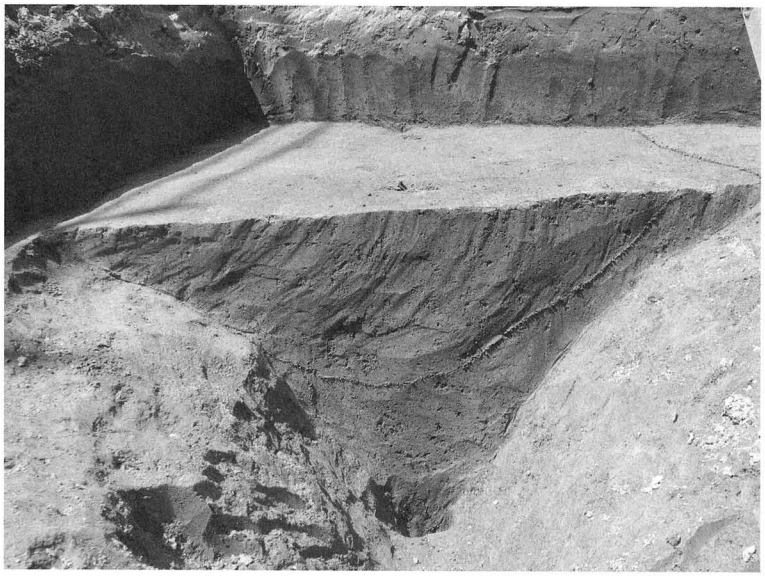


3　P12土師器甕出土状況
（西から）

図版13　Ａトレンチ遺物出土状況

1　遺構検出状況
（南から）

2　調査区完掘状況
（南から）



3　SD２溝跡断面
（南から）

図版14　Ｂトレンチ遺構検出・完掘状況・遺構断面

1　遺構検出状況
（西から）

2　調査区完掘状況
（西から）

3　SK１土坑検出状況
（南東から）

図版15　Ｃトレンチ調査区全景・土坑

1　検出状況
（西から）

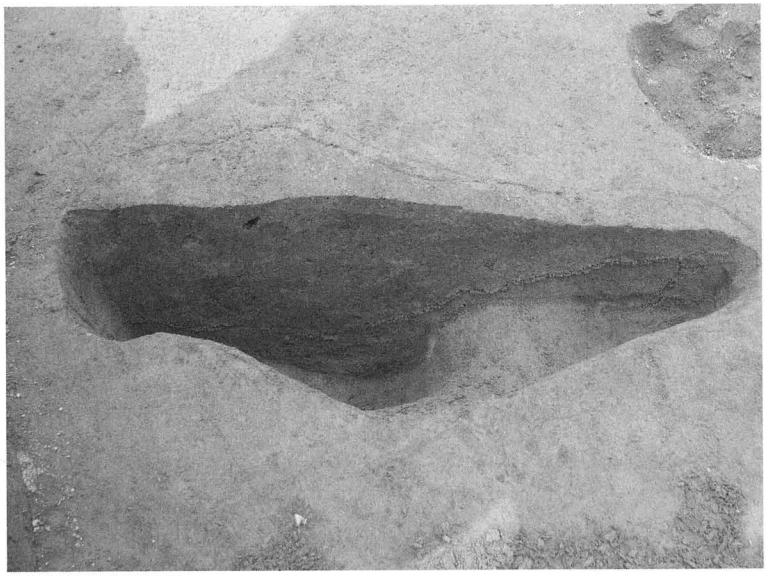
2　遺物出土状況
（西から）

3　断面
（南東から）

図版16　Ｃトレンチ SX１性格不明遺構

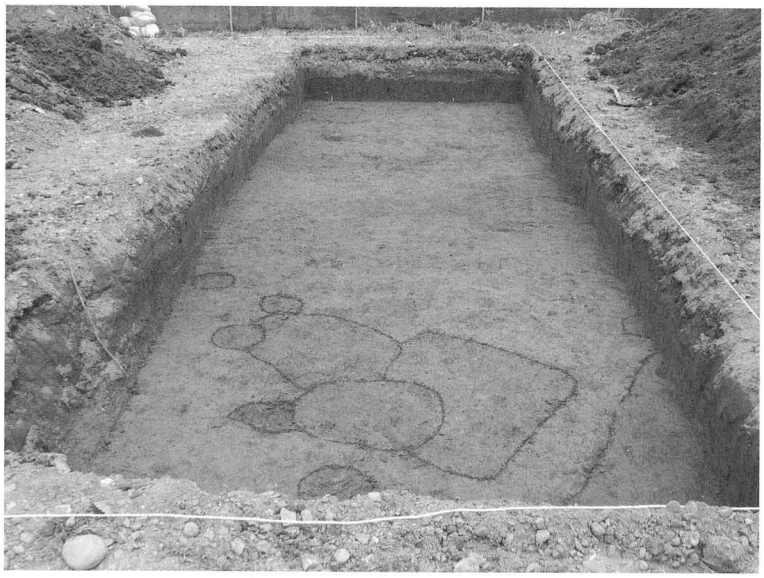
1　SK 1 土坑高坏出土状況
（北東から）

2　SK 1 土坑高坏出土状況
（南から）

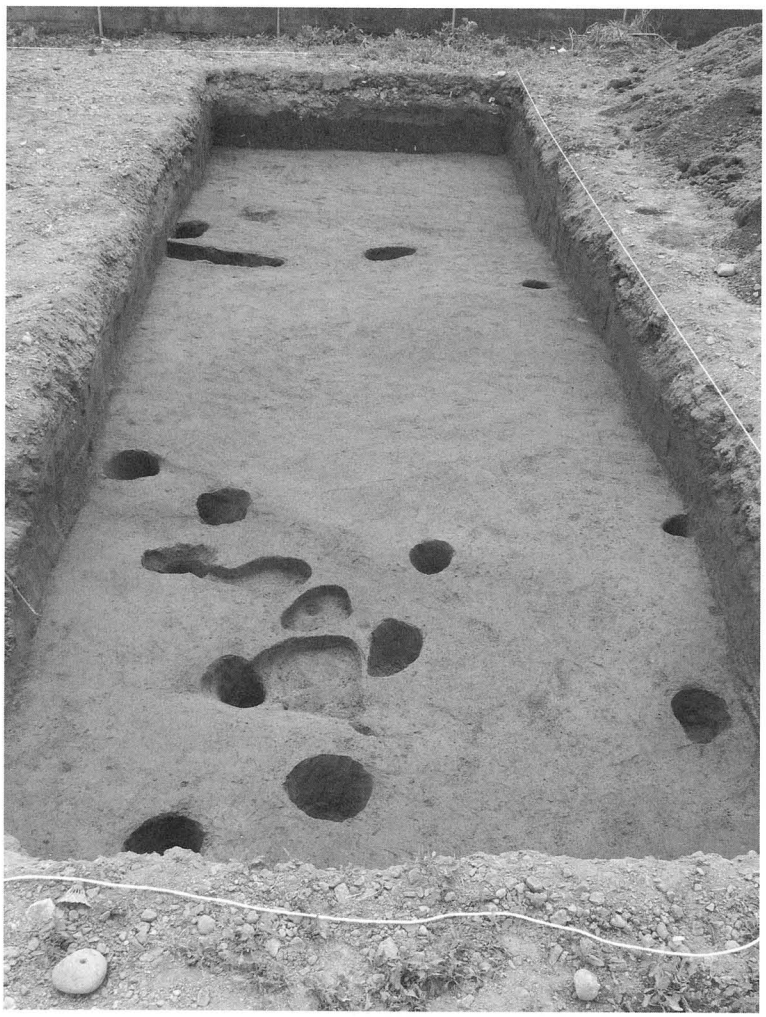


3　SK 2 土坑断面
（南西から）

図版17　Ｃトレンチ遺構断面・遺物出土状況

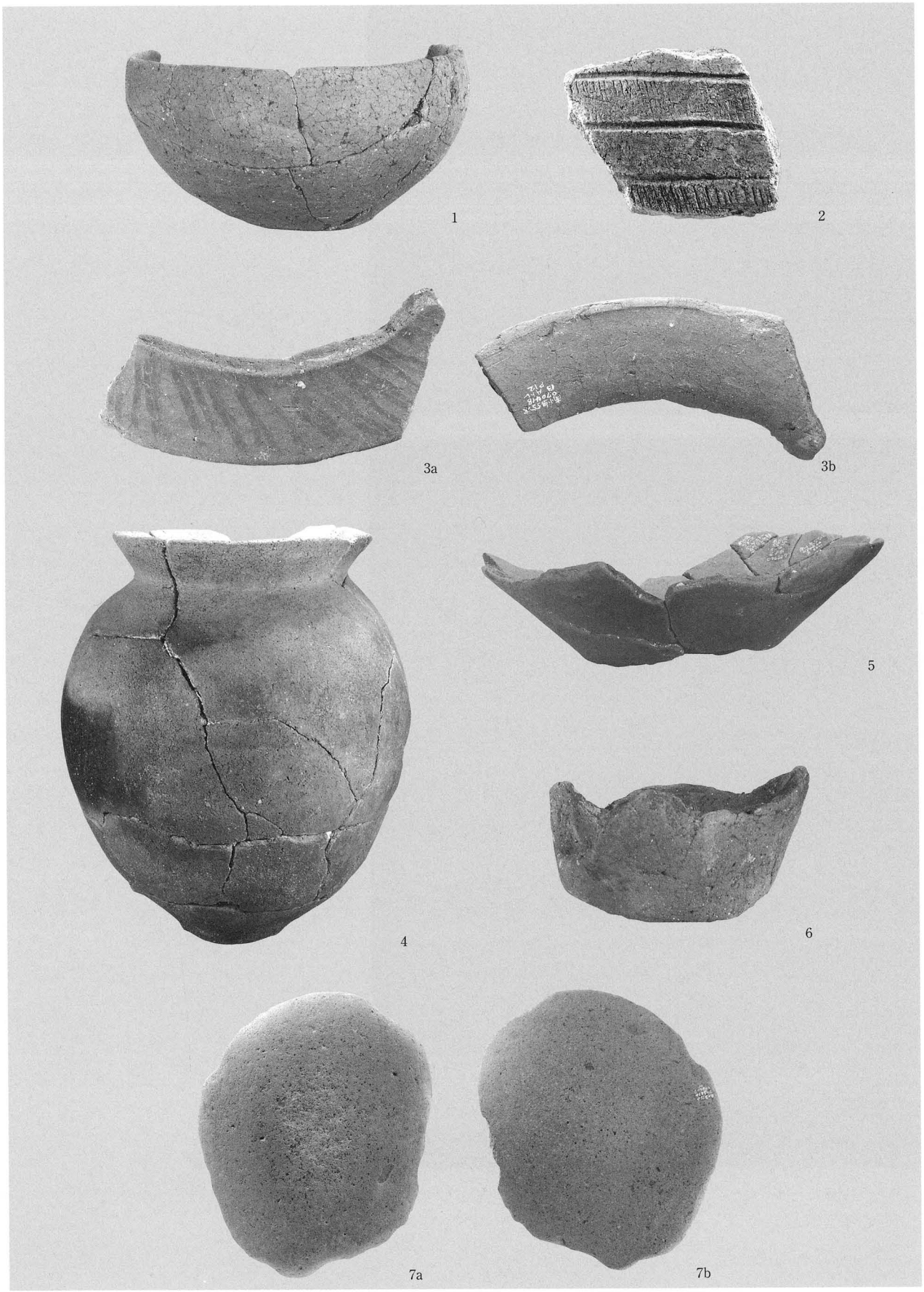


1　遺構検出状況

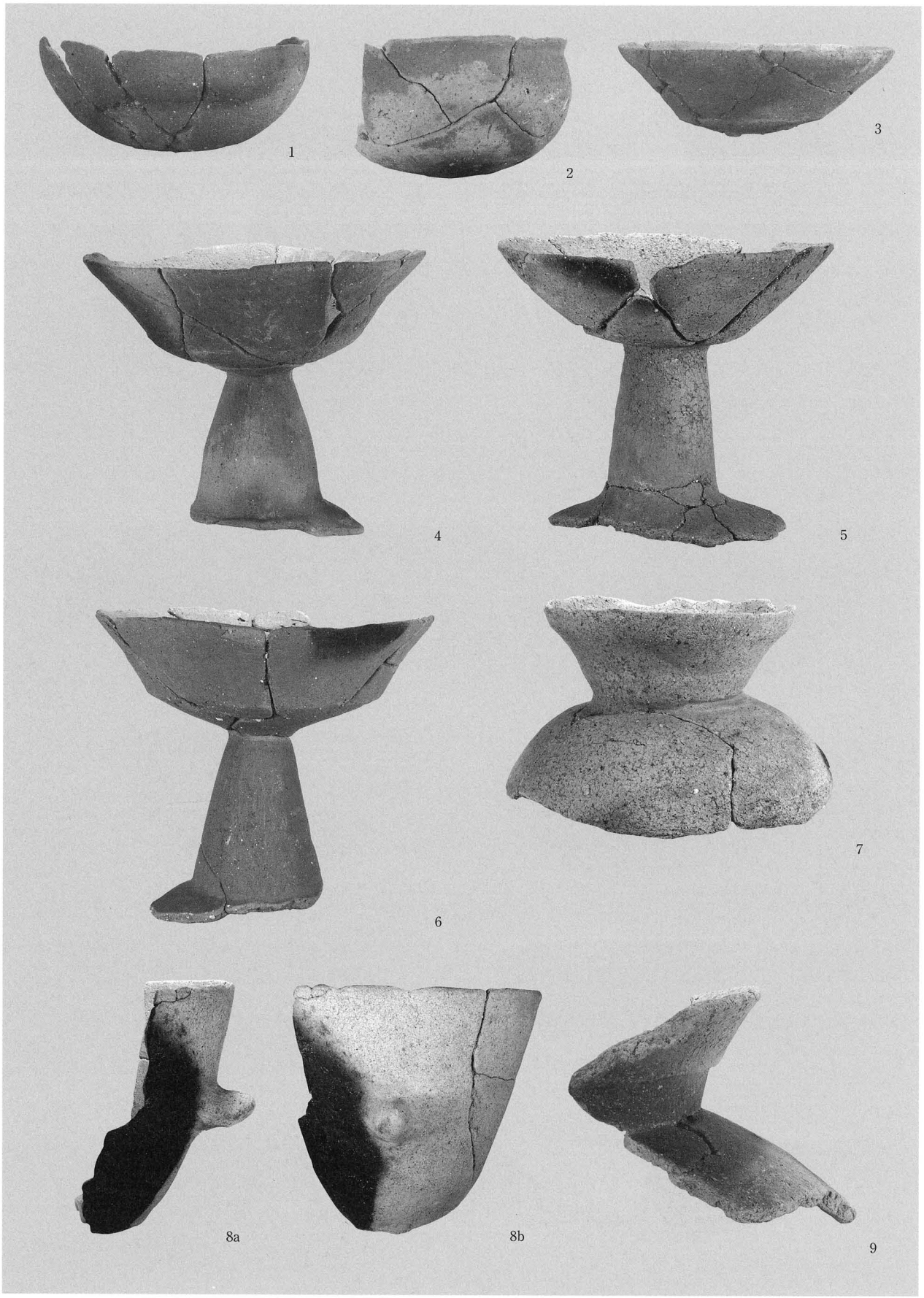


2　遺構完掘状況

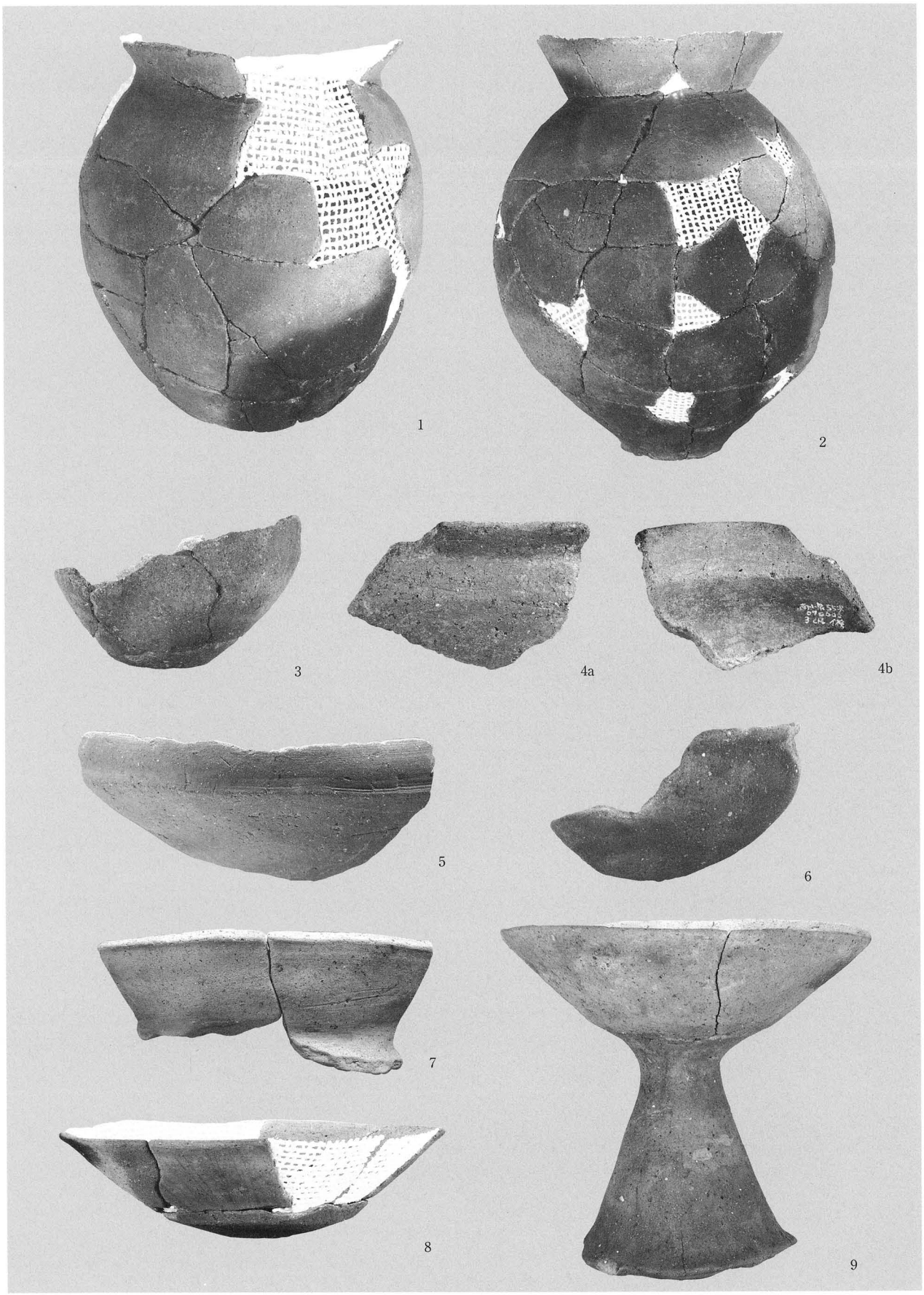
図版18　Ｄトレンチ遺構検出・完掘状況



図版19　南小泉遺跡55次出土遺物１



図版20　南小泉遺跡55次出土遺物 2



図版21　南小泉遺跡55次出土遺物 3

Ⅴ　南小泉遺跡第56次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区遠見塚２丁目140・577
調 査 期 間	平成19年５月14日～18日
調査対象面積	73㎡
調 査 面 積	19㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事　鈴木　隆　　加藤　隆則　　文化財教諭　工藤　慶次郎

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年４月13日付けで、本間一宇氏より、杭打ちを行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行い、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。建設予定地に2.7m×7.1mのトレンチを設定して調査を行ったところ、土坑・井戸跡などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

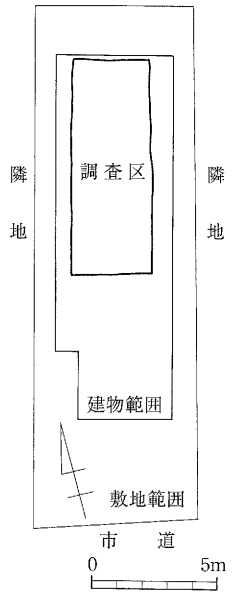
3　遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境については、本報告書掲載の南小泉遺跡第52次発掘調査報告書を参照されたい。

今回の調査地点は、本遺跡の北西部に位置する。今回調査地点の北東50mの地点で行われた第15次調査では、古墳時代中期の住居跡、土坑等が検出され、土師器、須恵器、石製品などが出土している。同じく120m南方地点において行われた第19次調査では中・近世の掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが検出された。

4　基本層序

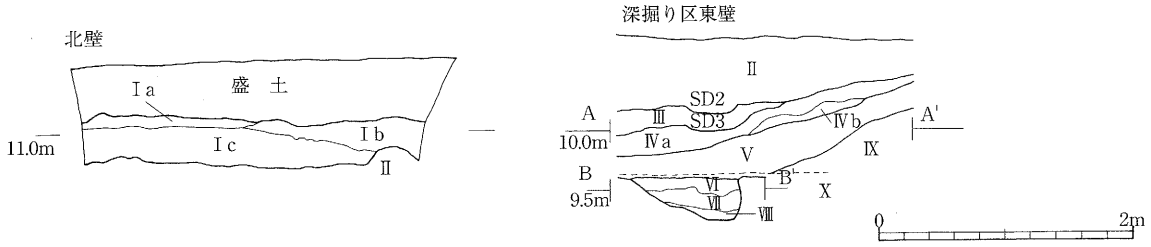
調査地点は40～60cmほどの盛土がある。調査地点の土層は、全体的に酸化鉄を多く含む砂質シルト土が堆積する。基本層はⅠ～Ⅹ層を付したが、Ⅱ～Ⅹ層は、流路跡ないしは堀跡のような窪地に堆積した土層で、北側に向かって傾斜している。なお、調査の結果、窪地底面に東西方向に延びる溝状の落ち込みを検出したため、本報告ではSR１流路跡とした。Ⅱ層上面は幕末～明治期に廃棄されたSK１土坑を含む土坑３基の確認面で、標高は南側で約11.0m、北側で10.7mである。北側への傾斜はⅡ層に始まり、流路跡の底面にはⅧ層が堆積する。流路跡の堆積層は砂質シルト層であるが、下層のⅥ～Ⅷ層は粗粒砂や細粒砂層となる。流路跡形成以前の基盤層はグライ化の著しい粘土である。



第26図　調査区配置図

5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層を除去した段階で土坑３基、溝跡２条を検出した。なお調査区北側の下層調査で検出された溝跡（SD１）は、東西方向に延びる流路跡と判断したため欠番とした。



基本層	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	10YR4/4　褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを多量に含む。
Ⅰb	10YR3/1　黒褐色	砂質シルト	炭化物粒をやや多量に含む。下位に酸化鉄沈着。
Ⅰc	10YR4/6　褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを微量に含む。砂質シルト（10YR5/3）ブロックを少量含む。
Ⅱ	10YR4/4　褐色	砂質シルト	マンガン、酸化鉄を多量に含む。
Ⅲ	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を極多量に含む。炭化物ブロックを少量含む。
Ⅳa	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。
Ⅳb	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を極多量に含む。砂を少量含む。
Ⅴ	10YR4/6　褐色	細粒砂	酸化鉄を少量含む。下位に酸化鉄沈着。
Ⅵ	5Y4/2　灰オリーブ色	粗粒砂	酸化鉄を少量含み、下位に沈着。
Ⅶ	10YR4/6　褐色	粗粒砂	酸化鉄を含む。1～3mm程度の砂礫を少量含む。
Ⅷ	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	砂礫	1～10mm程度の礫を極多量に含む。
Ⅸ	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘土	酸化鉄を多量に含む。
Ⅹ	10BG4/1　暗青灰色	粘土	グライ化。

第27図　調査区断面図

遺物は、SK 2 土坑から幕末～明治期の陶磁器96点に伴って、瓦、木製品（漆器、下駄、木枠、木杭など）などが出土した。

1）溝跡

SD 2 溝跡　調査区北側に位置する。深掘り区のⅢ層上面で検出した。規模は検出長160cm、幅25～30cm、深さ10cmである。堆積土はⅡ層で、出土遺物はなく時期は不明である。

SD 3 溝跡　調査区北側に位置する。深掘り区のⅣa層上面で検出した。規模は検出長140cm、幅55cm、深さ10～15cmである。堆積土はⅢ層で、出土遺物はなく時期は不明である。

2）土坑

SK 1 土坑　調査区中央に位置する。平面形は円形で、規模は直径約120cm、深さ45cmである。堆積土は 4 層でいずれもシルト質粘土である。出土遺物はなく時期は不明である。

SK 2 土坑　調査区南側に位置し、西側は調査区域外に及ぶ。検出範囲での平面形は隅丸方形で、規模は南北2.6m、東西は1.5m、確認面からの深さは1.0mである。壁面は全体的に外傾して立ち上がるが、南壁及び東壁の中腹にはテラスが設けられる。このテラス部分で 3 ～ 4 枚の板材をL字形に組んだ木枠を検出した。木枠は、本来、30～40cm間隔で板材の両側に交互に打込まれた縦杭で固定されていたと考えられるが、東側は内側に向かい倒れた状態であった。堆積土は 8 層見られる。1 層は炭化物・焼土ブロックの集積層である。1、2、3 層上部ではまとまった量の陶磁器と少量の瓦、ガラスが出土し、3 層下部では下駄や漆器椀などの木製品、板・竹材、大量の木屑などが集積している。木片などの有機物は 5 層まで含んでおり、6 層は基盤層に近い土層（崩落土）が確認される。

SK 2 土坑は、出土した陶磁器の年代から、遺物が一括廃棄された幕末～明治期には既に崩落等により半ば埋没していたものと考えられる。

SK 3 土坑　調査区北側に位置し、西側は調査区域外におよんでいる。検出範囲での平面形は円形で、規模は南北2.5m、東西1.5m、検出面からの深さは1.3mである。掘り込みは、北半がやや急である。堆積土は 5 層見られ、1 層以外はシルト質粘土である。井戸跡等の可能性が考えられるが、出土遺物はなく時期は不明である。

3）流路跡

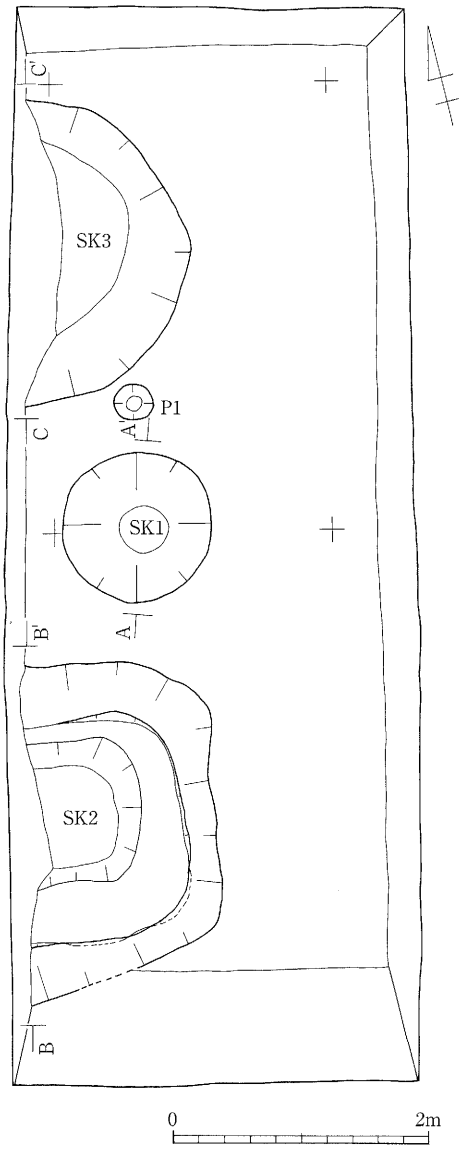
SR１流路跡　調査区北側で基本層の傾斜を確認した。傾斜はⅢ層以下で見られ、Ⅱ層の堆積によって概ね平坦となる。落ち込みの南限は未確認であるが、上下層の関係から、本来は本調査区中央付近に北側傾斜の始まりがあったものと思われる。緩やかな傾斜は、標高9.6m付近で変換し、ほぼ垂直の落ち込みとなる。この落ち込みは東西方向に延びており、北側の立ち上がりは南側に較べ緩やかである。前述のSD２・３溝跡のようにこの落ち込み部が流路を利用した溝跡である可能性も考えられるが、詳細は不明である。堆積土は、上位が粘土で、落ち込み部はⅥ～Ⅷ層の粗粒砂や細粒砂層で、同層に磨耗した土師器片を包含している。

遺物は、Ⅵ～Ⅷ層から非ロクロ土師器片が約20点出土した。器種は、甕、小型壺、坏などで時期は古墳時代から古代のものであろうが、流れ込みの可能性があり流路跡の時期を特定することはできない。しかしながら、SK２土坑との切り合い関係から近世以前と考えられる。

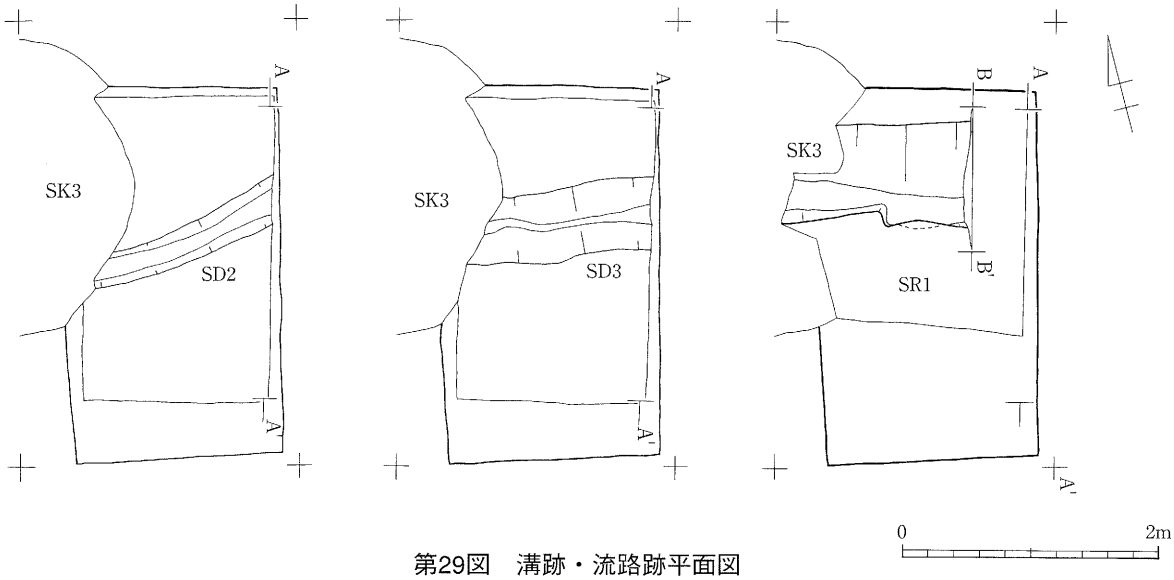
4）出土遺物

今回の調査では、陶磁器104点の他、漆器椀１点、下駄４点、その他多数の木・竹材が出土した。ここではSK２土坑から出土した96点の陶磁器についてその概略を述べる。

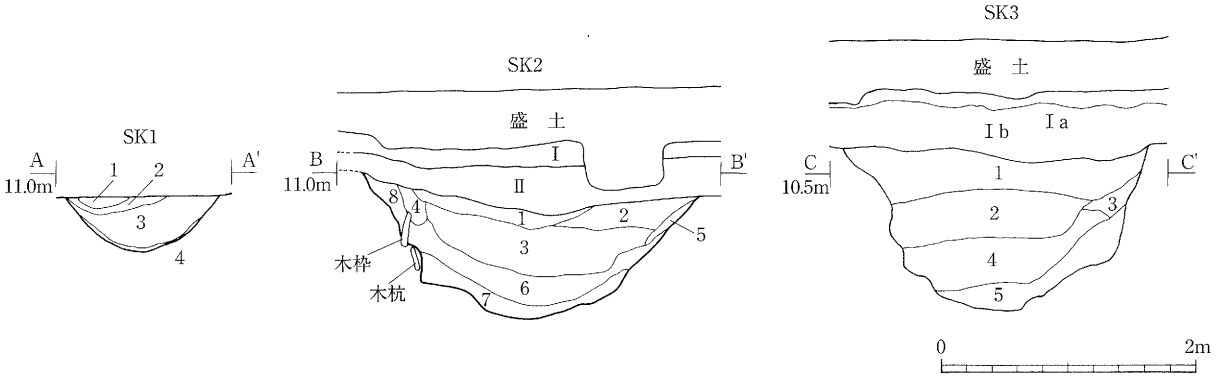
種別の内訳は、陶器39点、磁器56点、瓦質土器１点である。陶器の産地別組成では、大堀相馬が22点と６割弱を占め、堤５点、美濃２点、小野相馬１点、常滑１点と続く。他８点は不明である。陶器の器種組成は、碗９点、皿（油受皿を除く）６点で陶器全体の39％を占める。他には土瓶７点、擂鉢５点、焙烙４点、徳利３



第28図　遺構配置図



第29図　溝跡・流路跡平面図



層 位	土 色		土 性	備 考
SK1-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガンを多量に含む。2層ブロックを微量に含む。
2	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガンを極多量に含む。酸化鉄を少量含む。黒褐色（10YR3/1）土ブロックを微量に含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガンを多量に含む。下位に酸化鉄が多く沈着。1層に類似。
4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む。
SK2-1	10YR2/1	黒色	シルト質粘土	炭化物・焼土ブロック集積層。
2	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	酸化鉄・マンガンを多量に含む。炭化物ブロックを少量含む。
3	10YR4/4	黒褐色	シルト質粘土	上部に陶磁器が集積。下部は木材、竹材、木屑の集積に混じり木製品（下駄・漆器椀など）を含む。
4	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	8層ブロックを多量に含む。炭化物を少量含む。
5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	下位に酸化鉄沈着。
6	2.5YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	木片を少量含む。
7	7.5GY4/1	暗緑灰色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む。部分的に腐食した木片が集積。
8	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガンを少量含む。
SK3-1	10YR4/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを多量に含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物ブロックを微量に含む。砂質シルト（10YR5/3）ブロックを少量含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	灰黄褐色	酸化鉄を多量に含む。
4	10Y4/1	灰色	シルト質粘土	
5	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	炭化物ブロックを微量に含む。

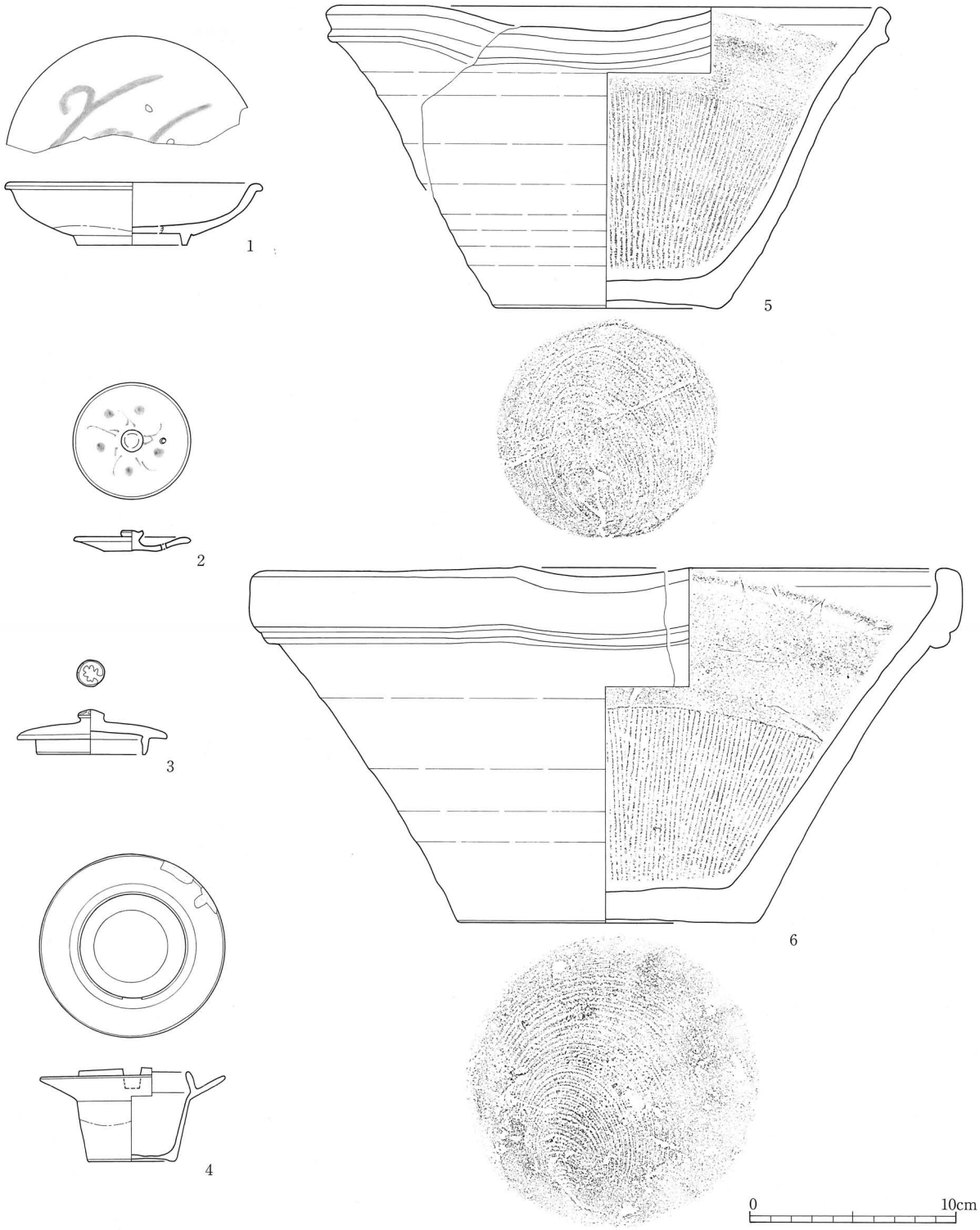
第30図　土坑断面図

点、油受皿２点、甕２点、鉢１点が出土した。特に常滑産の大甕（第32図２）は仙台市内での出土例が少なく注目される。磁器の産地別組成は、肥前29点、瀬戸美濃21点で半数を占め、切込４点、平清水（？）３点と続く。磁器の器種組成は、碗29点、皿13点で磁器全体の75％を占める。他には徳利６点、鉢３点、段重、急須、酒杯、各１点が出土した。磁器は、特に染付に関して明治時代後半に出現する銅版転写によるものが全く見られず、手描きまたは型紙摺りによる絵付けを主体とする点に特徴がある。これらの年代は19世紀代を主体とし、明治期に入った19世紀後半の中で一括廃棄されたと考えられる。また、これらの資料に気泡を多く含むガラス瓶が共伴する点は、今後その廃棄年代についてより詳細に検討していく上で重要である。

6　まとめ

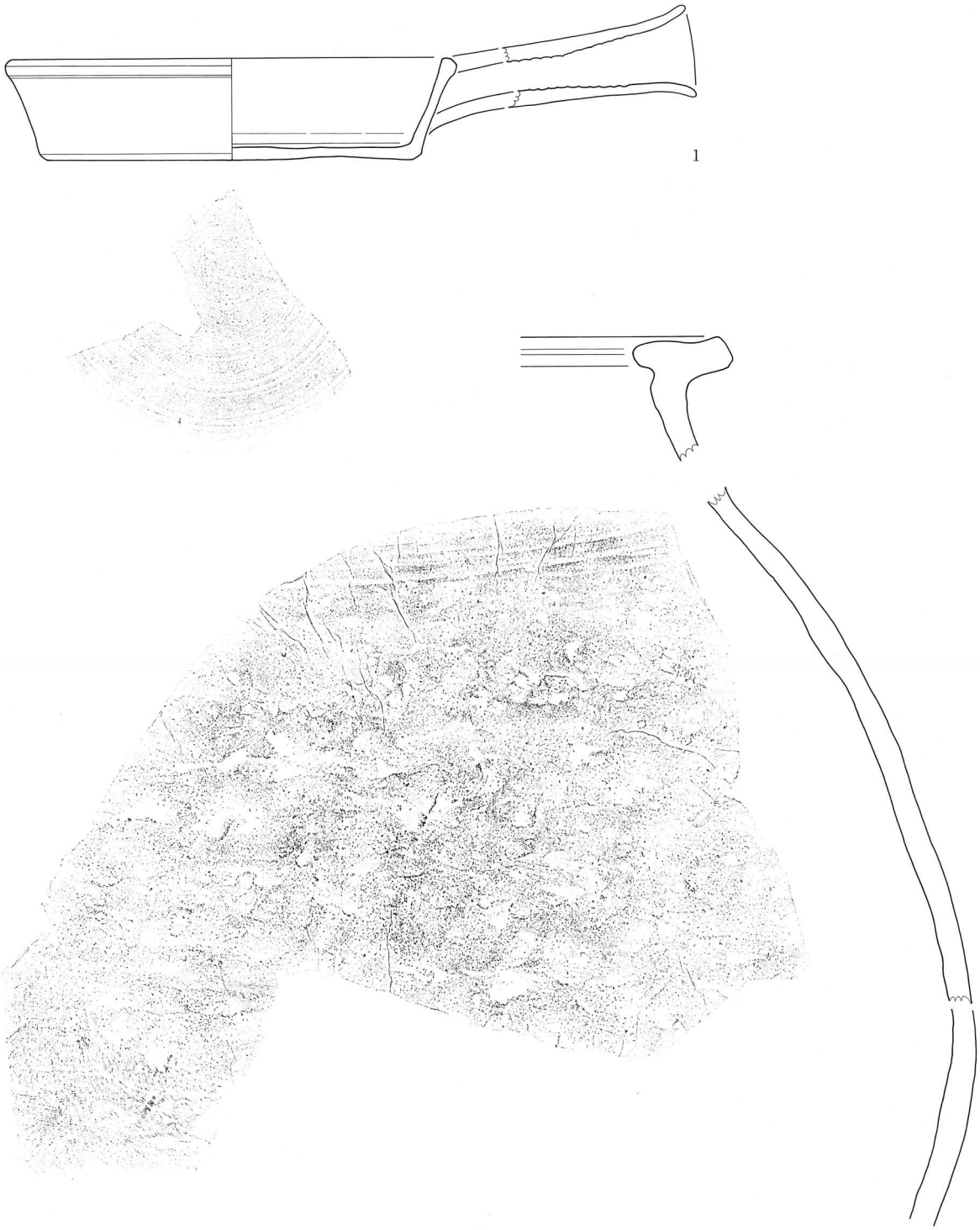
今回の調査では溝跡２条、土坑３基の他、時期不明であるが東西方向に延びる流路跡を確認した。土坑３基の内、特にSK２土坑の性格については、深さが１ｍと浅く、板材も東側と南側にのみ見られることから井戸等の可能性は低いと考えられる。部分的な検出であるため、その評価については今後の課題としたい。

SK２土坑の廃絶後に一括廃棄された陶磁器、木製品、ガラス等は、幕末から明治期における遺物の変遷、引いては時代の変化に伴う生活の変化を検討する上で良好な資料である。特に染付については、銅版転写による絵付けが盛行する前段階として、輸入コバルトを用いながら、型紙摺りを含む手描きによる絵付けを主体とする段階が存在した可能性が推測される。今後周辺の調査事例の蓄積を待って検証していく必要がある。



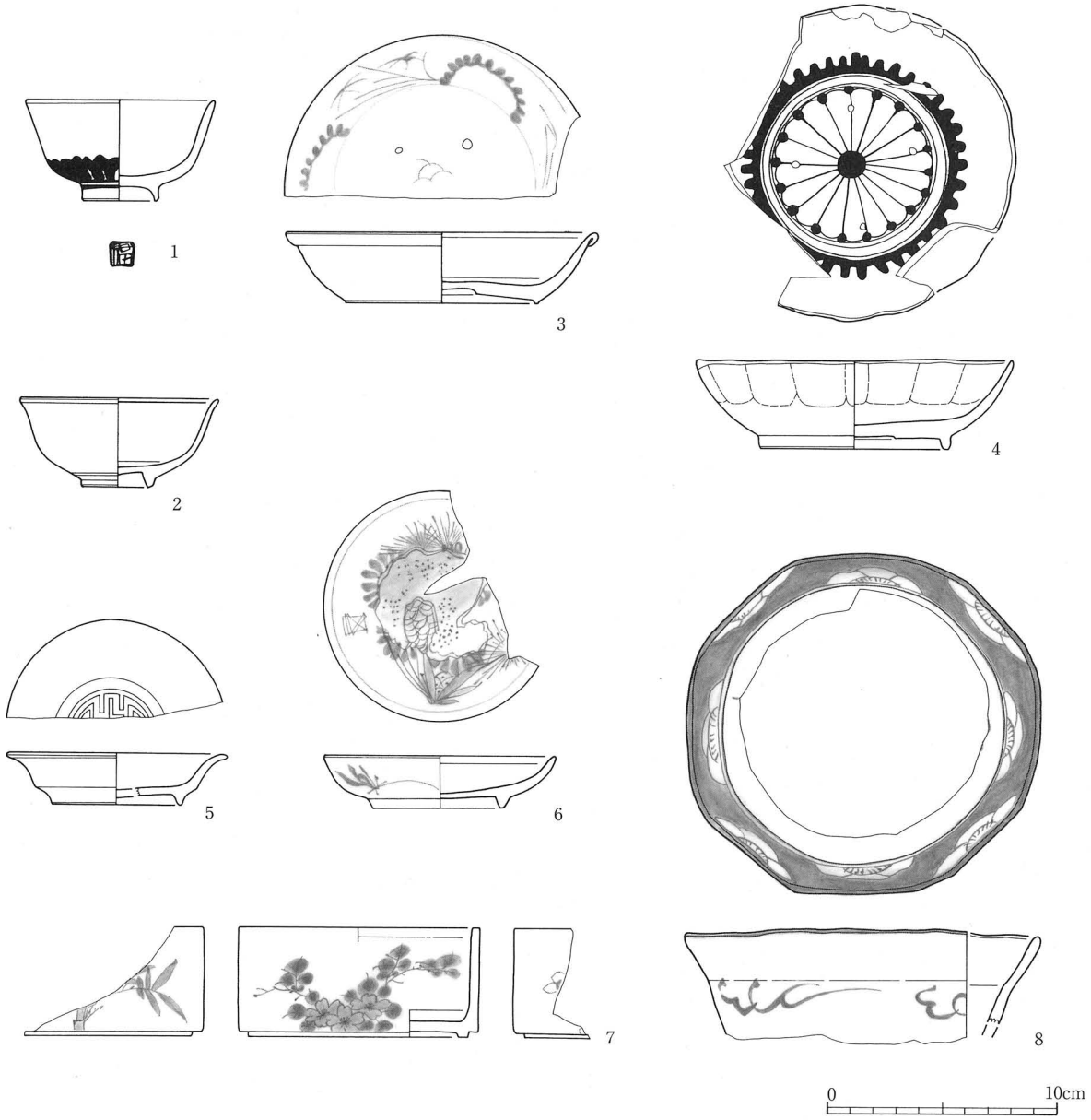
図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴・備考（産地・釉薬・文様等・時期）	写真図版
		遺構	層位	種別	器種	器高	口径	底径		
1	I-1	SK2	1	陶器	皿	3.1	12.2	5.3	大堀相馬　灰釉端反皿　見込鉄絵文様　19c前	26-1
2	I-3	SK2	1	陶器	蓋	1.0	5.7		大堀相馬　色絵　土瓶蓋　19c前～中	26-2
3	I-8	SK2	3	陶器	蓋	2.2	5.4		大堀相馬　藁灰釉　19c中	26-3
4	I-2	SK2	1	陶器	油受皿	4.7	9.1	4.4	大堀相馬　鉛釉油受皿　19c前	26-4
5	I-5	SK2	1	陶器	擂鉢	14.8	26.7	10.8	産地不明　鉄釉　底部回転糸切　近世	26-5
6	I-6	SK2	1	陶器	擂鉢	17.5	33.3	14.4	堤　底部回転糸切　19c前か	26-6
	I-4	SK2	1	陶器	土瓶				大堀相馬　色絵　土瓶　19c前～中	26-7
	I-9	SK2	3	陶器	碗				大堀相馬　灰釉鉄絵　19c前	26-8
	I-10	SK2	3	陶器	皿				美濃　鉄絵皿　17c	26-9

第31図　出土遺物１



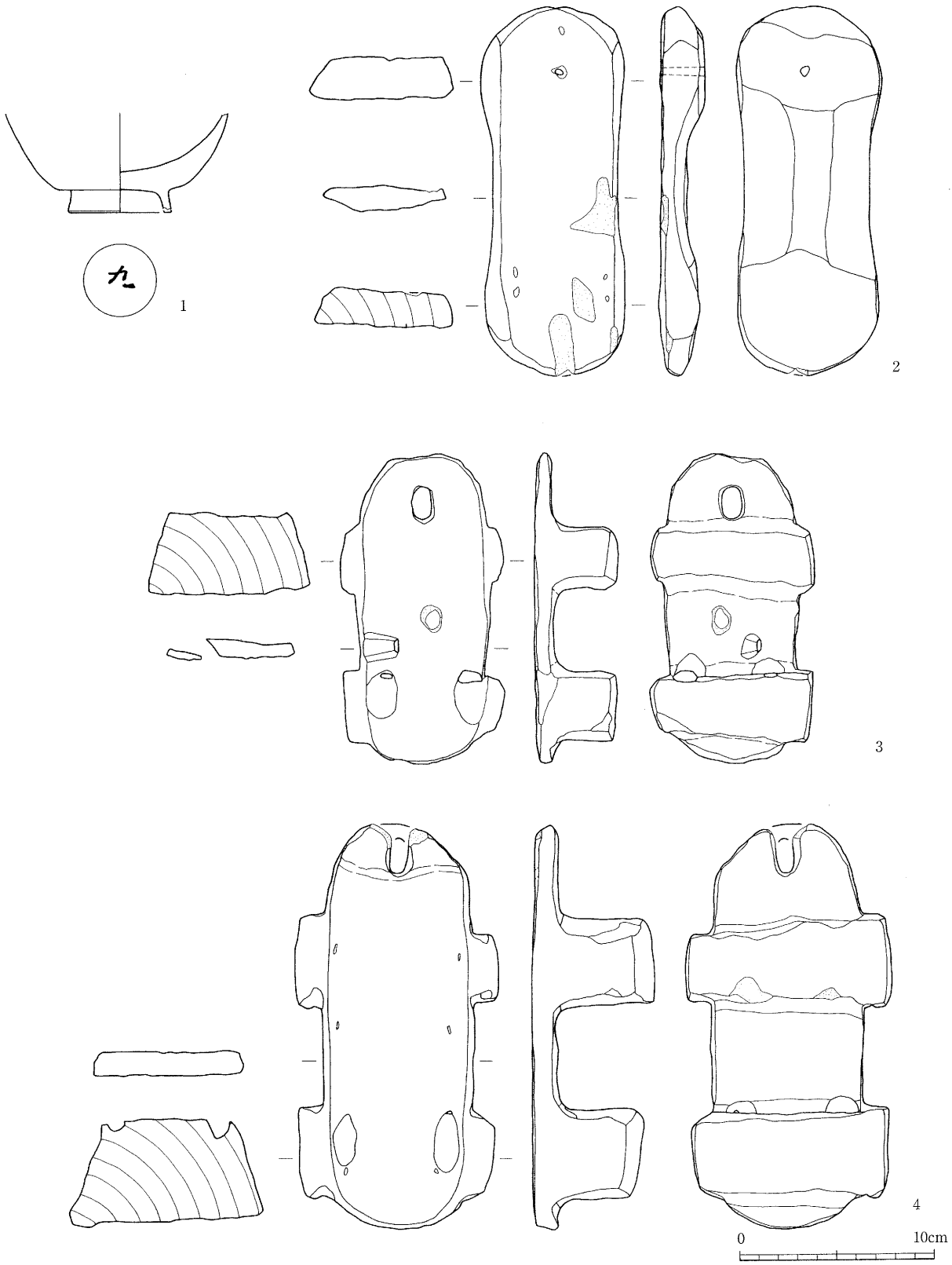
図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴・備考（産地・釉薬・文様等・時期）	写真図版
		遺構名	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	I-7	SK2	3	陶器	焙烙	4.9	20.6	17.2	堤　鉛釉　19c	27-1
2	I-11	SK2	1	陶器	甕				常滑　近世	27-2

第32図　出土遺物 2



図中番号	登録番号	出土地点 遺構名	遺構層	分類 種別	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	特徴・備考（産地・釉薬・文様等・時期）	写真図版
1	J-3	SK2	1	磁器	碗	4.4	8.2	3.2	瀬戸美濃　染付　端反碗　腰部に蓮の連弁　口錆　19c中～後	27-3
2	J-4	SK2	1	磁器	碗	3.9	(8.7)	(3.2)	瀬戸美濃　染付　端反碗　口錆　19c中～後	27-4
3	J-2	SK2	1	磁器	皿	3.1	(13.6)	(8.3)	切込　染付　玉縁皿　笹文　見込み目跡2つ　蛇ノ目凹高台　19c前	28-4
4	J-19	SK2	3	磁器	皿	3.9	(13.9)	8.3	肥前　染付　輪花皿　見込み目跡4つ　蛇ノ目凹高台　18c後～19c前	28-5
5	J-1	SK2	1	磁器	皿	2.3	9.6	5.7	瀬戸美濃　白磁　型押端反皿　見込み寿字文　19c前～中	28-7
6	J-18	SK2	3	磁器	皿	2.2	10.0	5.7	産地不明　染付　草花文小皿　19c後	28-6
7	J-20	SK2	3	磁器	段重	4.8	10.4	9.5	瀬戸美濃　染付　段重　梅・桜・竹文　19c中	28-11
8	J-5	SK2	1	磁器	鉢	(5.0)	15.3		瀬戸美濃　染付　花文輪花鉢　19c中～後	28-15
	J-6	SK2	1	磁器	碗				産地不明　色絵　見込み銘あり　19c中～後	27-5
	J-7	SK2	1	磁器	碗				切込　染付　端反碗　19c前	27-7
	J-8	SK2	1	磁器	碗				切込　染付　端反碗　源氏香文　19c前	27-6
	J-9	SK2	1	磁器	碗				瀬戸美濃　染付　端反碗　源氏香文　口錆　19c中	28-1
	J-10	SK2	1	磁器	碗				瀬戸美濃　染付　摺絵　19c中	28-2
	J-11	SK2	1	磁器	碗				産地不明　染付　人物文　摺絵　19c中	28-3
	J-12	SK2	1	磁器	皿				肥前か　染付　型押し角小皿　19c前～中	28-8
	J-13	SK2	1	磁器	皿				瀬戸美濃　染付　19c中	28-10
	J-14	SK2	1	磁器	皿				肥前　染付　中皿　蔓草文　18c後～19c初	28-9
	J-15	SK2	1	磁器	鉢				瀬戸美濃か　染付　端反鉢　草花文　19c後	28-13
	J-16	SK2	1	磁器	急須				産地不明　染付　草花文　19c後	28-12
	J-17	SK2	1	磁器	瓶？				平清水か　19c後	28-14

第33図　出土遺物 3



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴・備考（調整・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚		
1	L-1	SK2	3	木製品	椀	(5.0)		5.2	内外面黒漆　高台内銘「九」赤漆あり	29-1
2	L-2	SK2	3	木製品	下駄	19.0	7.3	2.3	鼻緒：前後各2箇所に木釘留め痕　台裏抉り有り　板目	29-2
3	L-3	SK2	3	木製品	下駄	15.9	8.3	4.3	完形　板目　台部小判型　歯部は台部より垂直におりる　鼻緒穴は楕円形	29-3
4	L-4	SK2	3	木製品	下駄	20.8	10.1	6.3	ほぼ完形　板目　台部は小判型　台表に木釘留め痕あり	29-4

第34図　出土遺物4

1　遺構検出状況
（南から）

2　遺構完掘状況
（南から）

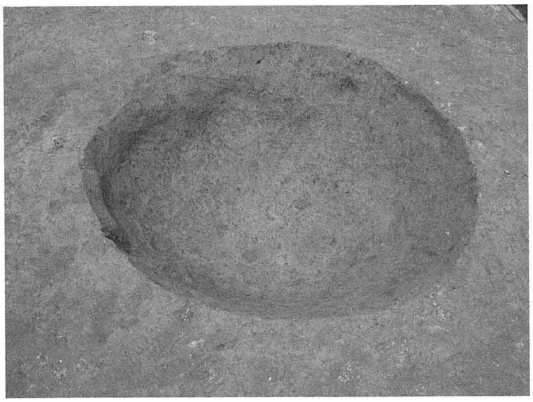
3　遺構完掘状況
（南から）

図版22　調査区全景

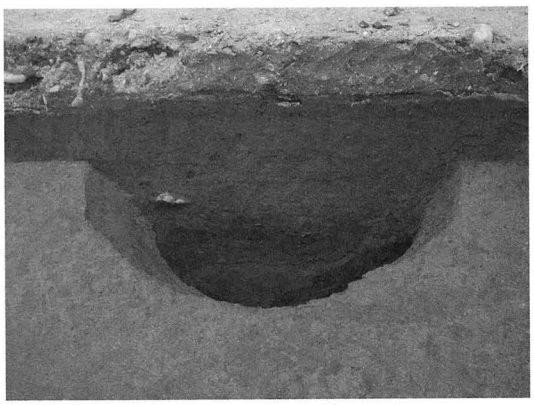
1　北壁土層断面

2　SD 2 溝跡（東から）

3　SD 3 溝跡（東から）



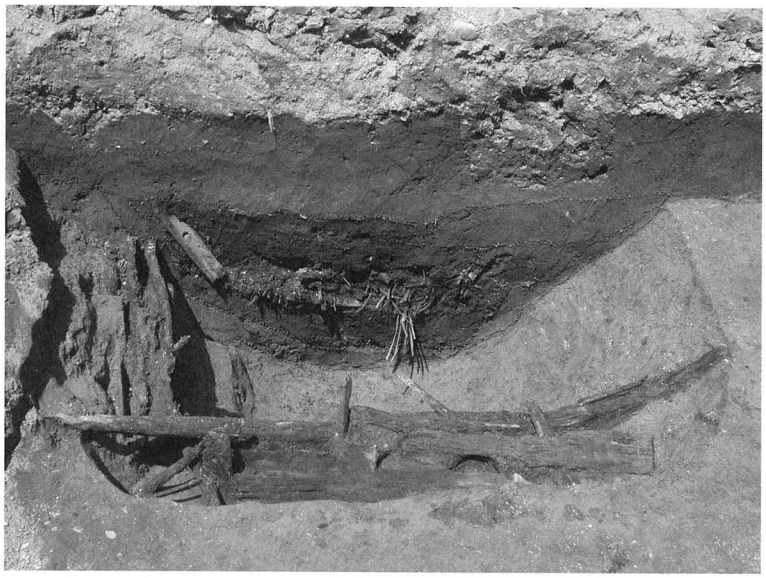
4　SK 1 土坑（東から）



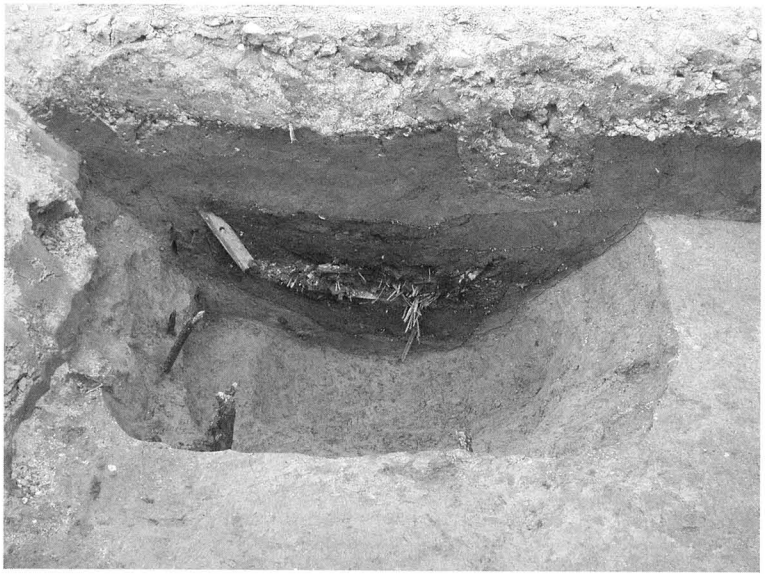
5　SK 3 土坑（東から）

図版23　基本層序・遺構

1　木材出土状況
（北から）



2　木材出土状況
（東から）



3　完掘状況
（東から）

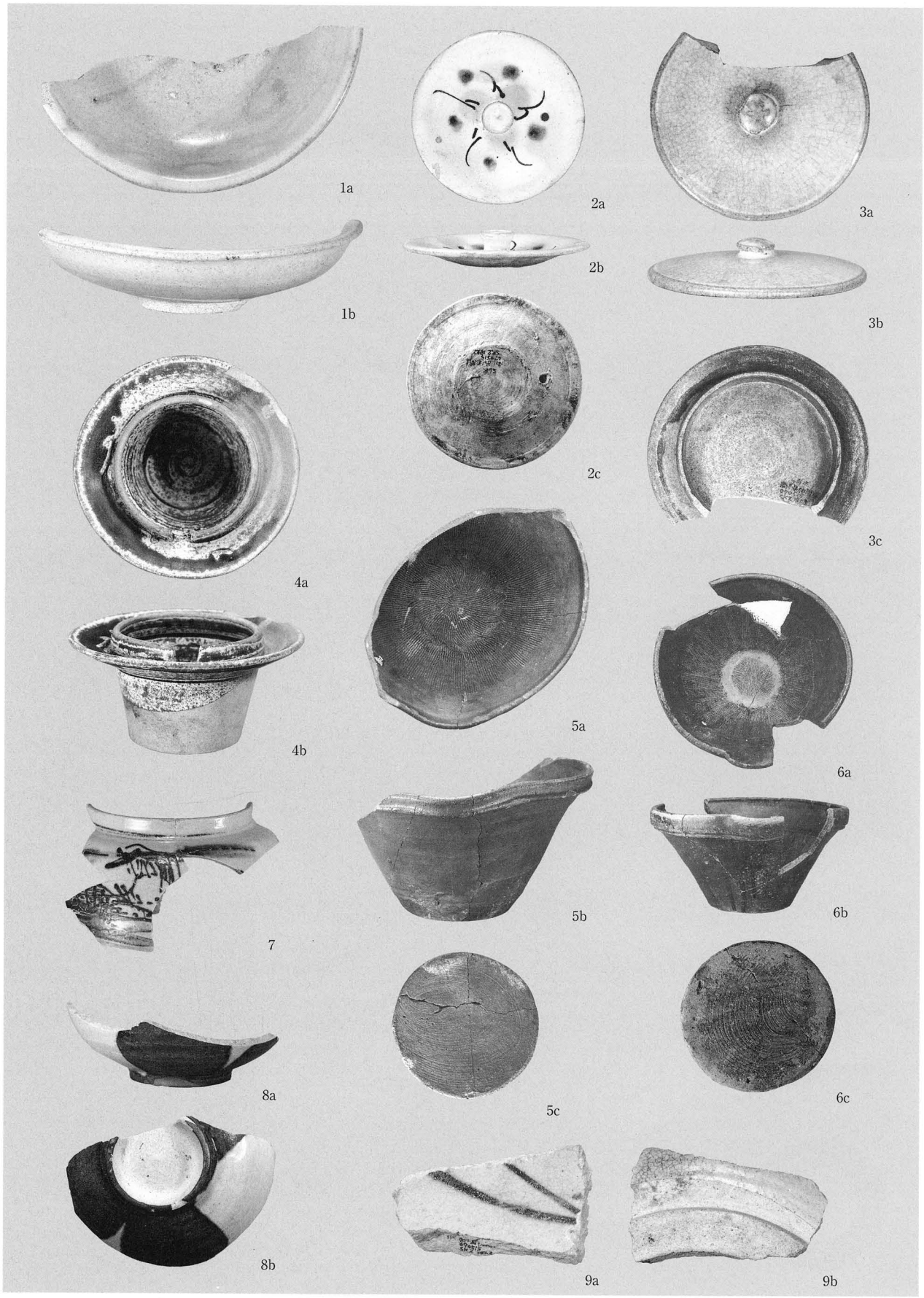
図版24　SK２土坑

1　SR 1 流路跡断面
（西から）

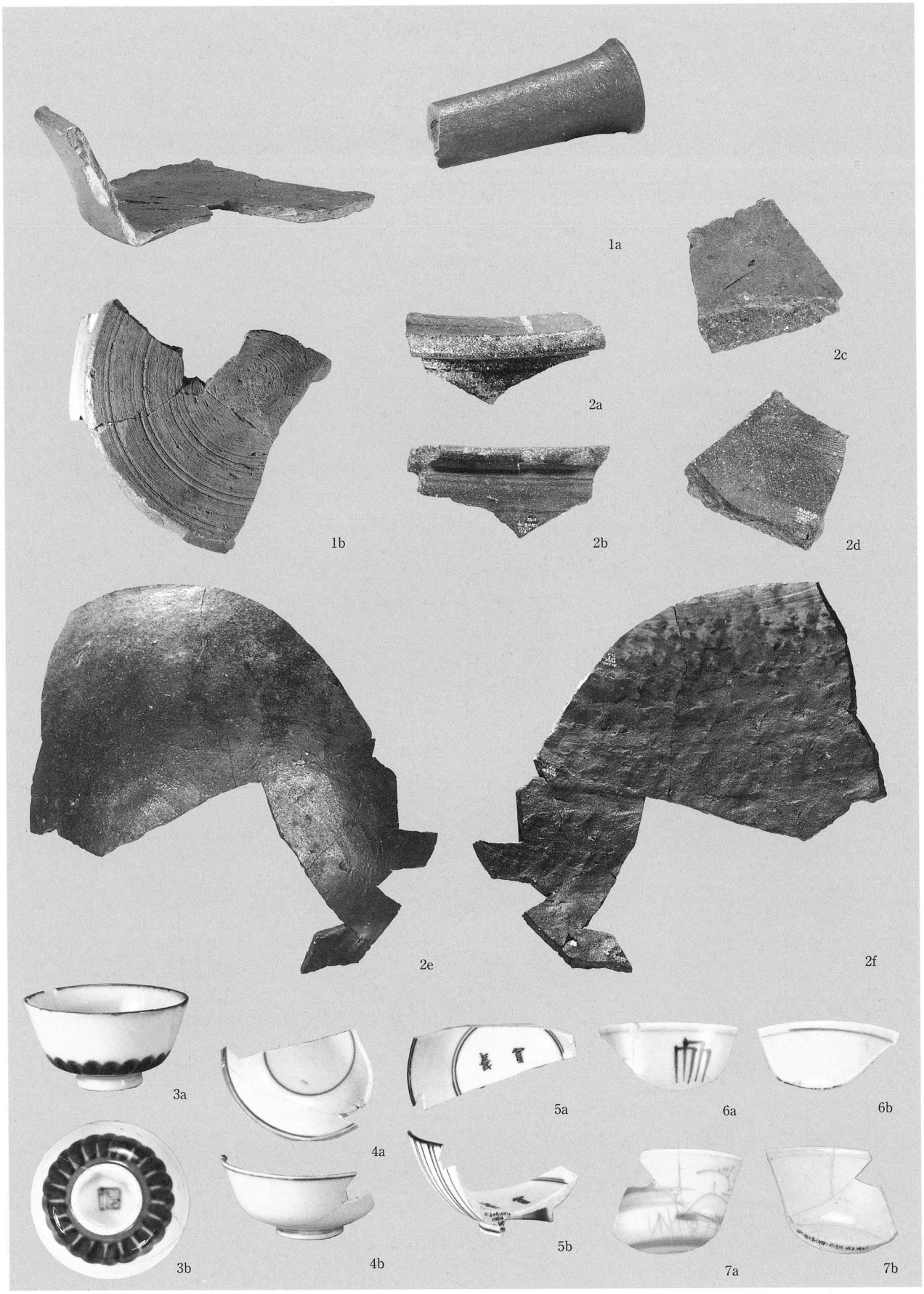
2　SR 1 流路跡
（西から）

3　SR 1 流路跡
（北西から）

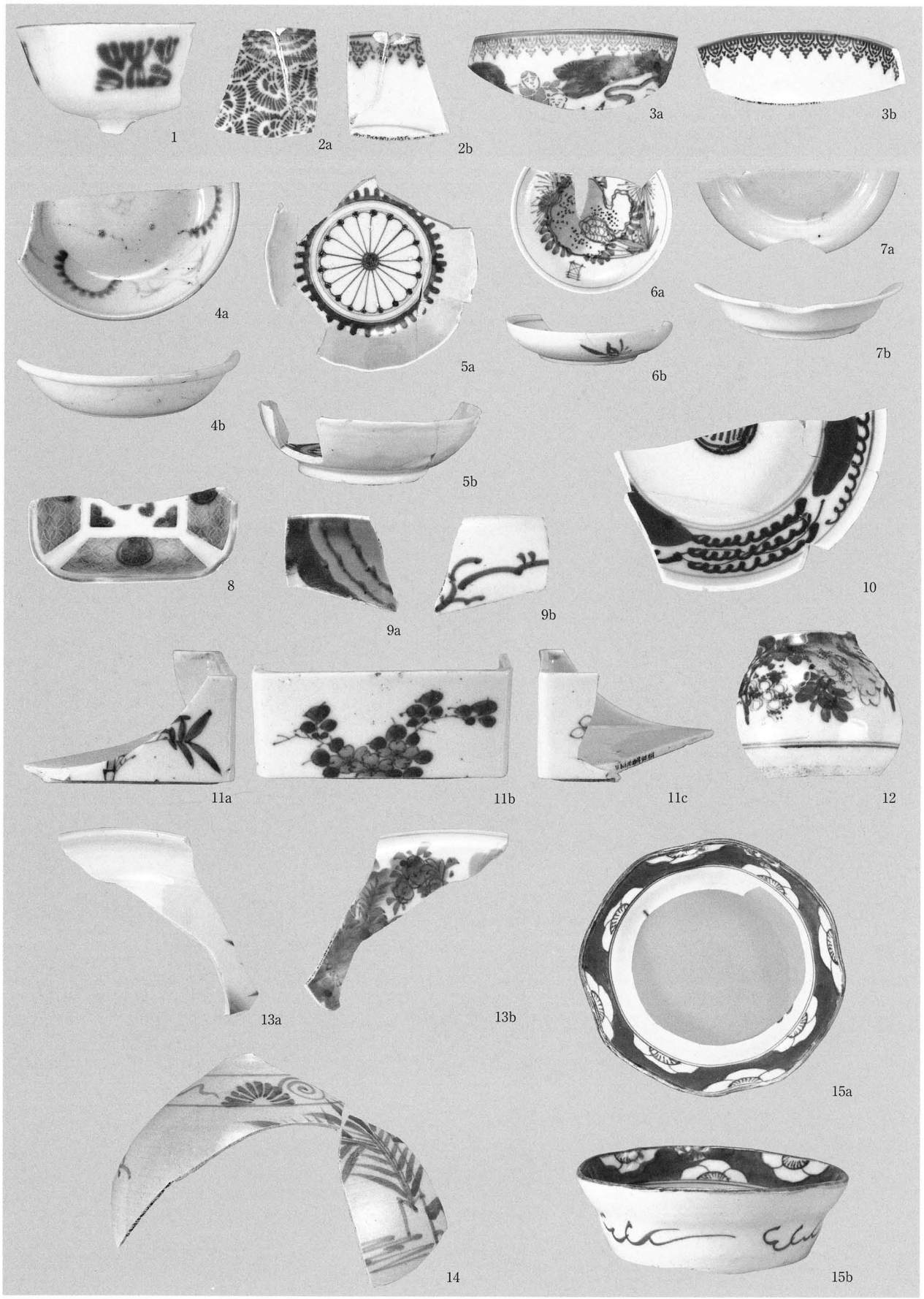
図版25　SR 1 流路跡



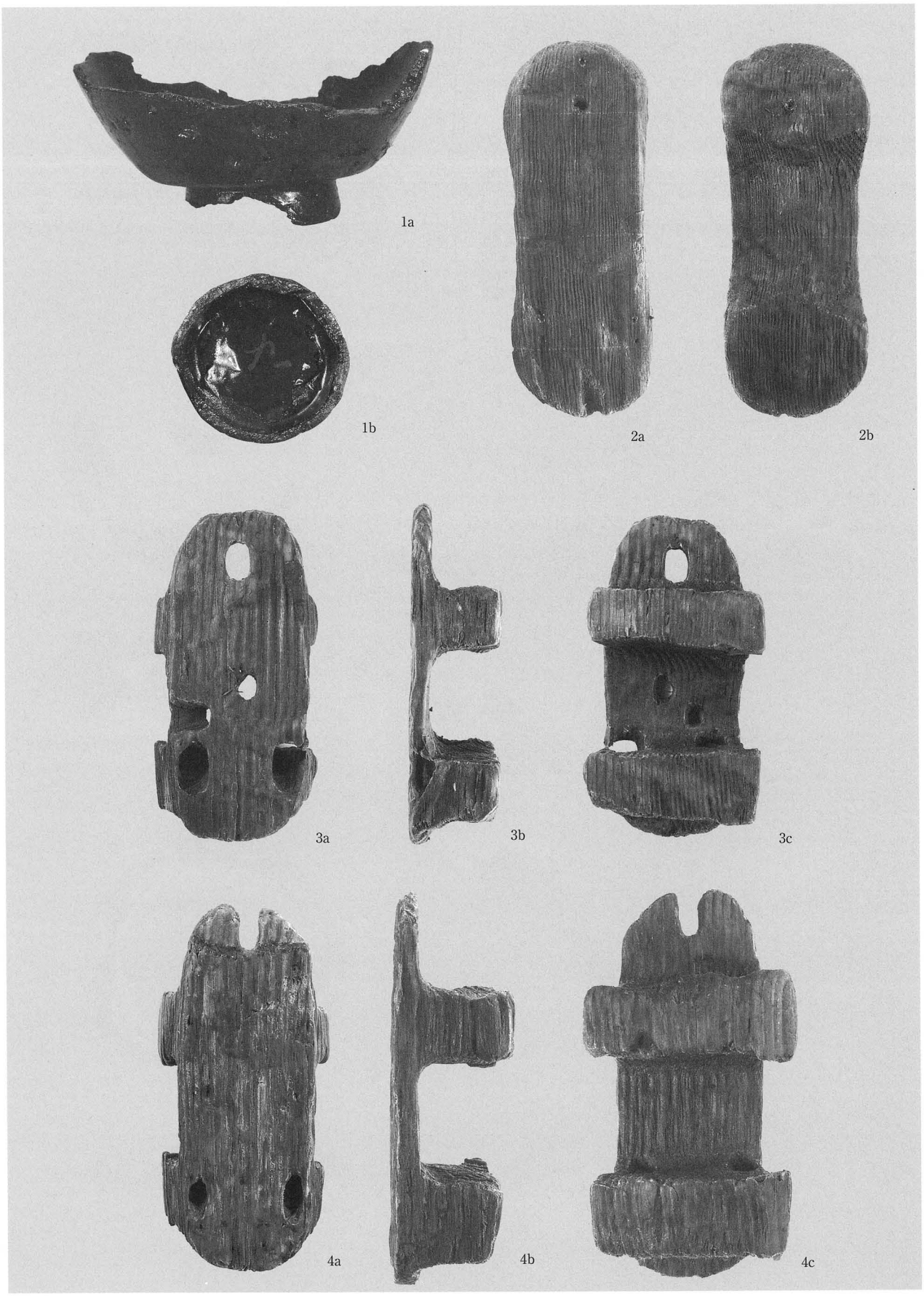
図版26　南小泉遺跡56次出土遺物 1



図版27　南小泉遺跡56次出土遺物 2



図版28　南小泉遺跡56次出土遺物 3



図版29　南小泉遺跡56次出土遺物 4

Ⅵ　南小泉遺跡第57次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区一本杉町22－７、８
調 査 期 間	平成19年10月15日～10月18日
調査対象面積	106.55㎡
調 査 面 積	40㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事　鈴木　隆　　文化財教諭　志賀　雄一　　臨時職員　森田　賢司

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年８月10日付で、佐藤セツ氏より深さ3.5～４mの杭打ちを伴う鉄骨造２階建個人住宅建設に伴う発掘届が提出されたため、まず確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成19年10月15日より着手し、建物建設予定地に東西７m×南北３mの調査区を設定して調査を行った。その結果、溝跡、柱穴などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

南小泉遺跡の位置と環境については、本書の「Ⅰ　南小泉遺跡第52次発掘調査報告書」を参照されたい。当地点は南小泉遺跡の北西端にあたり、第54次調査地点に北接する。

4　基本層序

調査地点では50～70cmの盛土が確認された。基本層序はⅠ～Ⅳ層が確認され、Ⅰ層は粘土質シルト、Ⅱ層以下が粘土層であり、Ⅱ層が遺構確認面である。

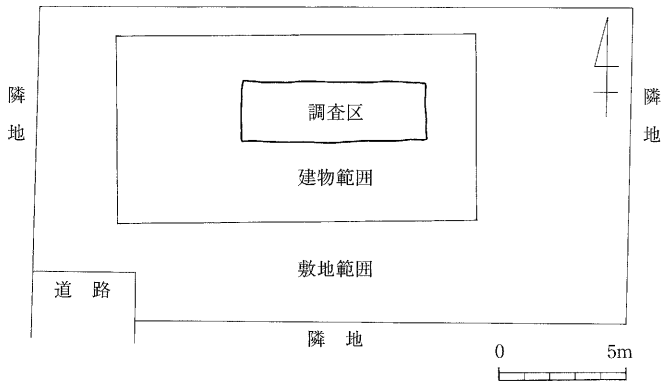
5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡２条、ピット12基、性格不明遺構１基が検出された。

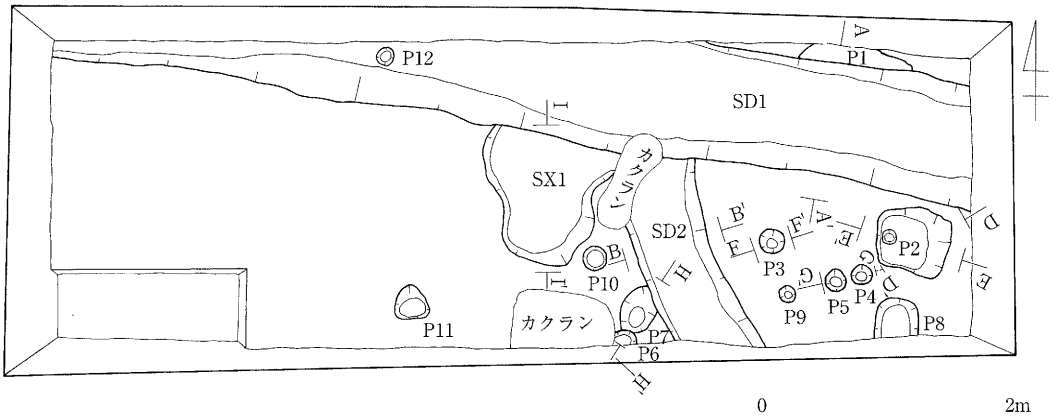
１）溝跡

SD１溝跡　調査区北側で、北西から東方向に横断する溝跡である。検出面での幅は約１m、深さ30～50cm、底面幅約60cmで、断面形は扁平なU字形、底面は平坦である。堆積土は１層で暗褐色のシルト質粘土層である。堆積土中より、長胴形の土師器甕片を含む土師器片が10点出土した。

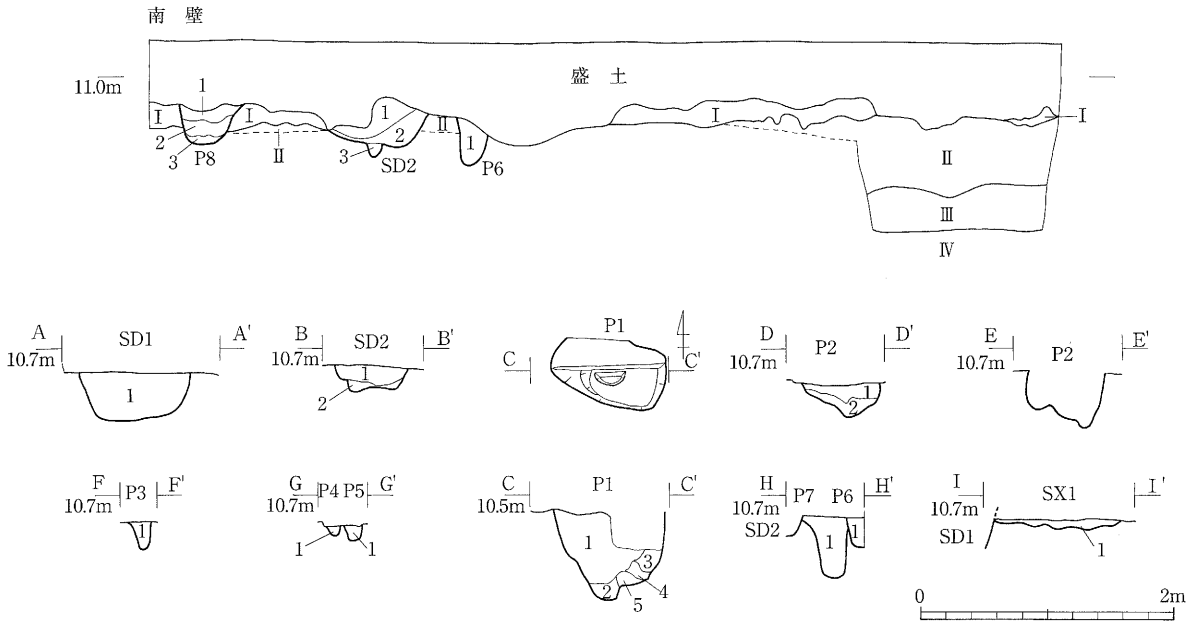
SD２溝跡　調査区東部で検出され、北西から南



第35図　調査区配置図



第36図　遺構配置図



基本層	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。粘土（10YR6/1）ブロックを極多量に含む。
Ⅱ	10YR4/4　褐色	粘土	シルト（10YR4/4）を少量含む。酸化鉄、マンガン粒、粘土（10YR6/1）ブロックを多量に含む。
Ⅲ	10YR4/4　褐色	粘土	マンガン粒、粘土（10YR6/1）ブロックを多量に含む。酸化鉄、炭化物粒を少量含む。
Ⅳ	10YR2/3　黒褐色	粘土	炭化物粒を多量に含む。
層　位	土　　色	土　性	備　　考
SD1-1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	粘土（10YR6/1）ブロックを多量に含む。
SD2-1	10YR2/3　黒褐色	粘土	粘土（10YR6/1）ブロックを多量に含む。粘土質シルト（10YR5/6）をまだら状に多量に含む。
2	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	粘土（10YR2/3）ブロックを多量に含む。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒を多量に含む。
P1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土	Ⅱ層ブロックを特に下部で多量に含む。酸化鉄を少量含む。マンガン粒を多量に含む。
2	2.5Y6/3　にぶい黄色	粘土	柱痕跡。酸化鉄を多量に含む。特に輪郭に沿って帯状に沈殿する。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土	掘り方埋土。マンガン粒を多量に含む。Ⅱ層ブロックを少量含む。
4	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	掘り方埋土。酸化鉄を少量含む。P1-1層ブロックを微量に含む。
5	10YR4/4　褐色	粘土	掘り方埋土。P1-1層ブロック、酸化鉄を少量含む。
P2-1	10YR2/3　黒褐色	粘土	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に少量含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	粘土（10YR2/3）をまだら状に少量含む。
P3-1	10YR6/1　褐灰色	シルト質粘土	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に多量に含む。
P4-1	10YR2/3　黒褐色	粘土	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に多量に含む。
P5-1	10YR2/3　黒褐色	粘土	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に少量含む。
P6-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒を多量に含む。炭化物粒を少量含む。
P7-1	10YR6/1　褐灰色	シルト質粘土	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に多量に含む。
P8-1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック、マンガン粒を多量に含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロックをやや多量に含む。マンガン粒を多量に含む。
3	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロックを極多量に含む。マンガン粒を多量に含む。
SX1-1	10YR2/3　黒褐色	粘土	粘土（10YR6/1）ブロックを多量に含む。粘土質シルト（10YR5/6）をまだら状に多量に含む。

第37図　調査区・遺構平・断面図

東方向へ延びる溝跡である。北側はSD１溝跡に切られている。検出面での幅は約60cm、深さ10～20cm、底面幅40～45cmで、断面形は逆台形に近いが、底面には凹凸が目立つ。堆積土は黒褐色粘土層と黄褐色シルト質粘土層の２層が確認された。出土遺物は土師器片が１点である。

２）ピット

調査区全体で12基のピットが検出された。Ｐ１、２は柱痕跡が確認されており、他と比較して規模も大きい。いずれもⅡ層上面で検出された。

Ｐ１　調査区北東隅で検出され、柱痕跡が確認される柱穴である。南半分はSD１溝跡に切られており、北部は調査区北壁に接する。平面形状は隅丸長方形を基調とし、掘り方は検出面で長軸（東西）90cm、短軸（南北）50cmである。深さは約70cm、底面幅は東西50cmである。また、底面近くまで柱抜取穴が確認されることから、柱全体が抜き取られたと考えられる。底面中央には柱痕跡が確認され、直径約25cmの円形である。堆積土については、３～５層の粘土層が掘り方埋土として確認され、柱抜き取り後の堆積土として粘土層の１、２層が確認された。

Ｐ２　調査区東部、SD１溝跡の南側で検出された、柱痕跡が確認される柱穴である。平面形状は隅丸方形で、掘り方は検出面で一辺約50cmである。深さは約50cm、底面幅は一辺約40cmであり、底面は凹凸が激しい。また柱痕跡は直径約10cmで、掘り方西部で確認された。検出面では柱痕跡が確認されず、柱は抜き取り、又は切り取られた可能性が考えられる。

上記以外のピットでは、Ｐ８がⅠ層から掘り込まれているほか、P12がSD１溝跡の底面で確認された。それ以外のピットはすべてⅡ層上面から掘り込まれている。平面形は直径10～30cmの円形または楕円形で、深さは２～50cmである。Ｐ３から土師器片が２点出土した。

３）性格不明遺構

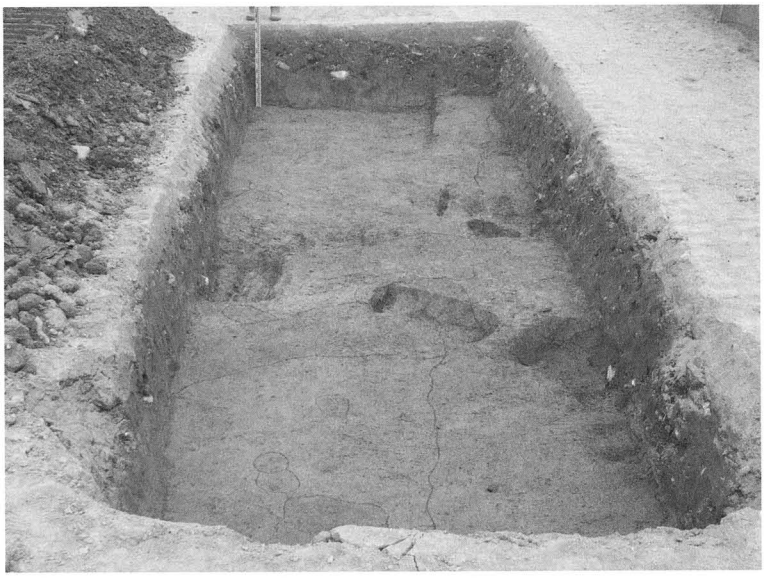
SX１性格不明遺構　Ⅱ層上面で検出され、不整形を呈する。北部はSD１溝跡に切られており、残存部最大長は東西、南北とも各１mである。深さは５～８cmと浅い。

6　まとめ

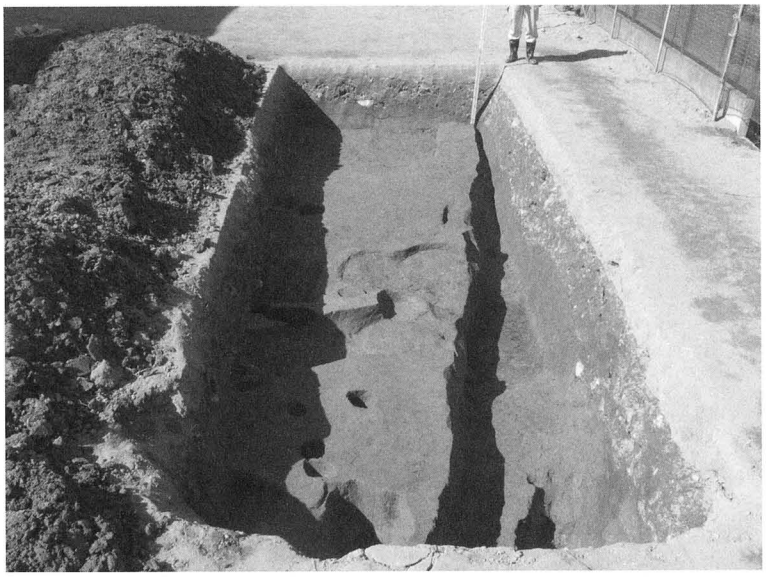
① Ⅰ層上面からピット１基、Ⅱ層上面で溝跡２条、ピット11基（SD１溝跡底面の１基を含む）、性格不明遺構１基が検出された。

② SD１溝跡については、堆積土より７世紀後葉から８世紀前葉の遺物が出土したが、時期比定の根拠としては不十分であり、遺構の時期は不明である。

③ Ⅱ層上面検出のSD２溝跡、Ｐ１、SX１性格不明遺構はSD１溝跡よりも古い遺構であることが確認されるが、出土遺物は小片であり、詳細な時期は不明である。



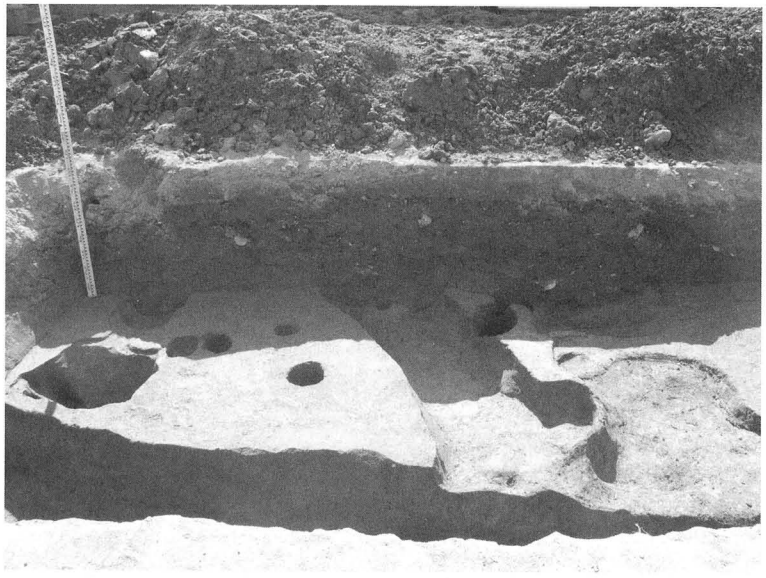
1　遺構検出状況
（東から）



2　遺構完掘状況
（東から）

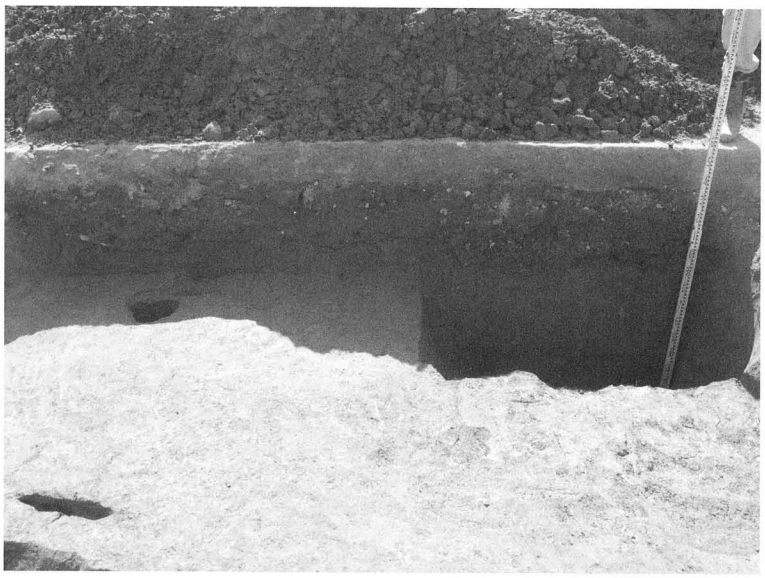
3　基本層序
（南壁西端）

図版30　調査区全景・基本層序



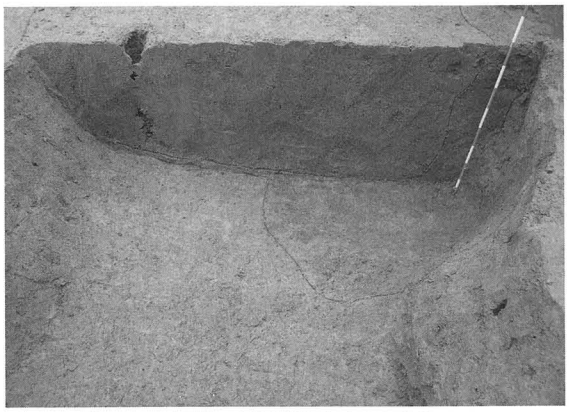
1　南壁断面
（東部）

2　西壁断面
（中央）



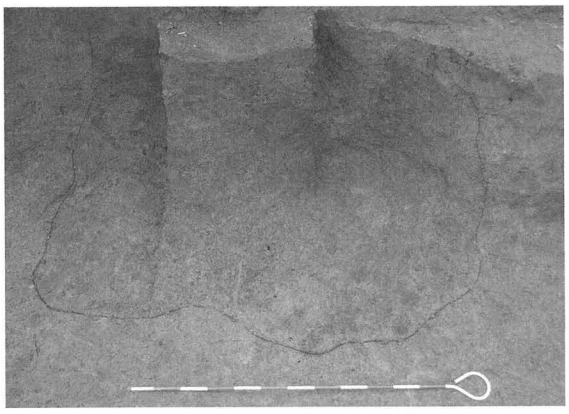
3　南壁断面
（西部）

図版31　基本層序

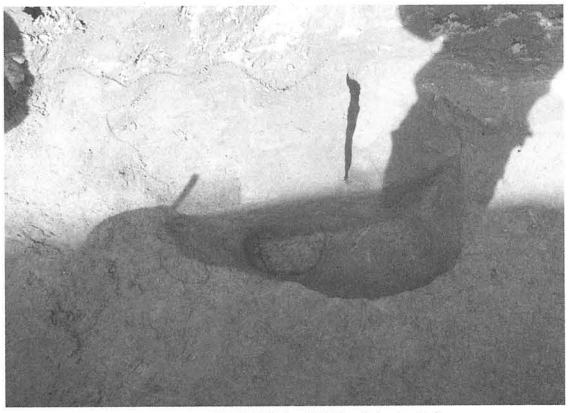


1　SD１溝跡断面（東から）

2　SD２溝跡断面（南から）

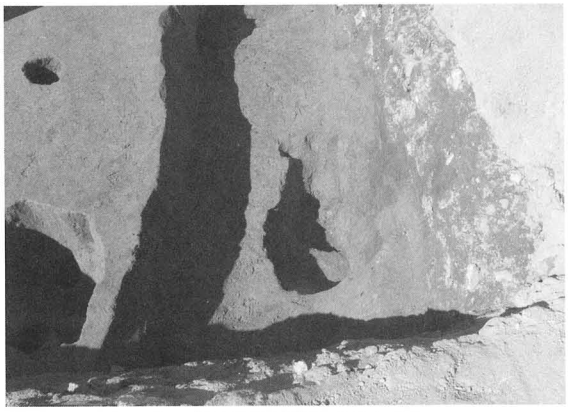


3　P１検出状況（南から）

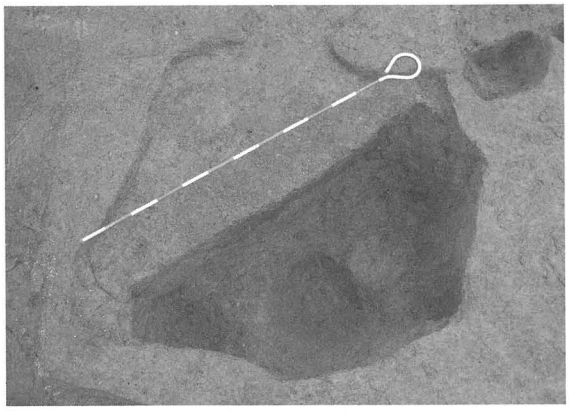


4　P１柱痕検出状況（南から）

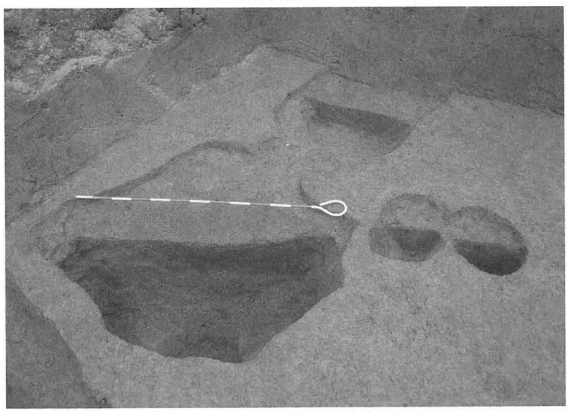
5　P１柱痕半裁状況（南から）



6　P１完掘状況（東から）



7　P２柱痕検出状況（北東から）



8　P２・４・５断面（北西から）

図版32　溝跡・柱穴

Ⅶ　今泉遺跡第５次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	今泉遺跡（宮城県遺跡番号01235）
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目82番４、82番８
調査期間	平成19年２月13日
調査対象面積	77㎡
調査面積	21㎡
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査　工藤　哲司　　文化財教諭　早川　潤一　　藤田　雄介

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年２月１日付で、地権者松岡達也氏より、柱状改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。建設予定地に東西４ｍ×南北８ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝跡を検出したため、引き続き本調査を実施した。表土および旧耕作土が80cm前後確認された時点で、排土場を確保するために東西幅を３ｍに縮小した。溝跡については、調査区西側を約１ｍ幅で掘り下げて、規模、土層観察を実施した。溝跡からの出土遺物は少なく、また地盤の軟弱化を避けるため、検出部の全掘は行わなかった。

3　遺跡の位置と環境

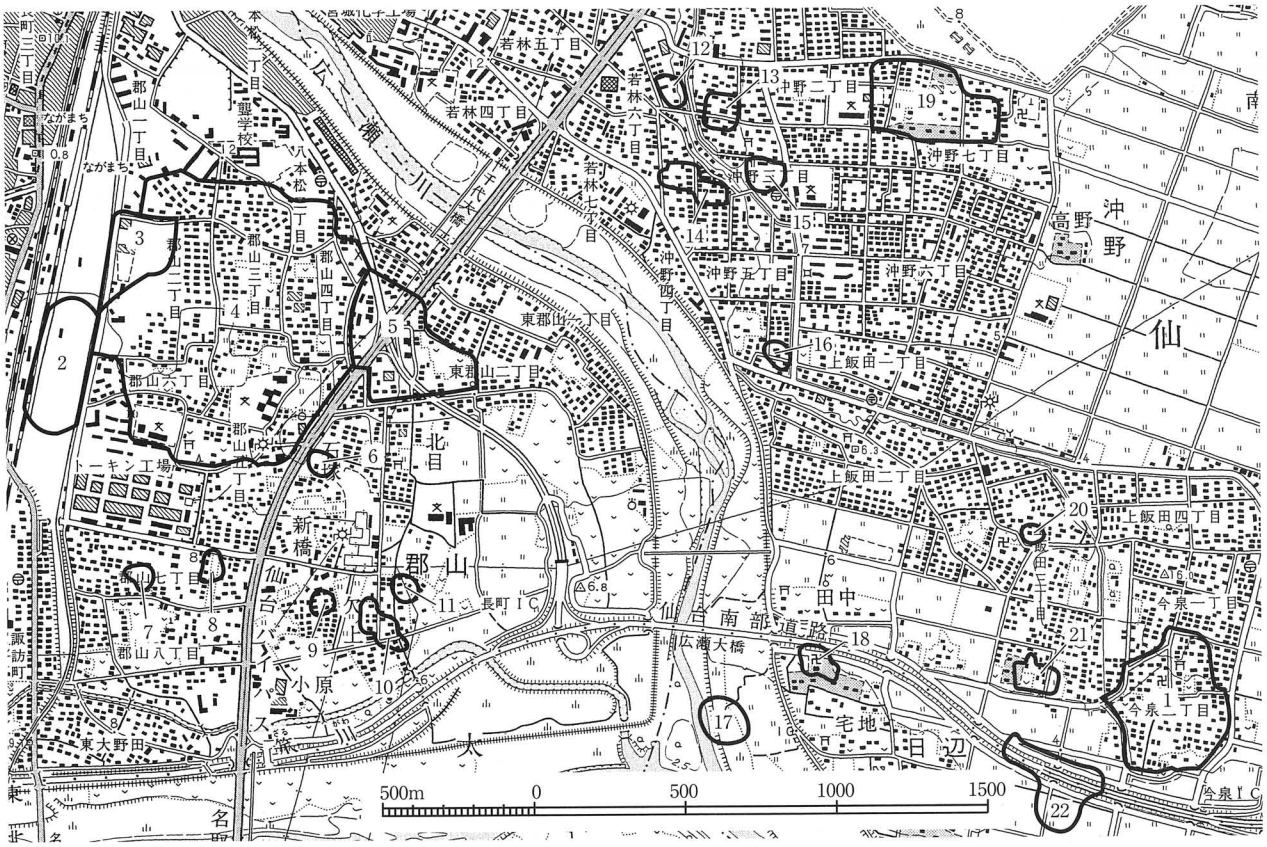
本遺跡は、ＪＲ仙台駅の南東約6.5km、仙台南部道路今泉インターの北西約500ｍに位置する。標高２～３ｍの自然堤防に立地している。本遺跡周辺には、西部に高田Ａ遺跡、南西部に高田Ｂ遺跡、北西部に上屋敷遺跡などが所在している。本遺跡は文献などにより、須田玄蕃が居住した中世の城館として古くから知られていたが、昭和54年、同56年、平成５年、同６年の調査で、縄文時代後期から近世にかけての広い時代幅をもつことが明らかにされた。

なかでも、中世の城館である今泉城跡に関わる遺構群が中心である。城館の構造は不明確であるが、南辺の外堀の一部が発見されている。その内部には掘立柱建物跡や井戸、溝跡などの遺構が数多く見つかっており、12世紀代に屋敷が成立し、南北朝時代に城館として改変、整備され、17世紀前半ごろまで使われていたものと推定されている。12～17世紀の出土遺物は多彩で、常滑産や瀬戸産の陶器・中国産の青磁や白磁、漆器、木簡、箸、曲物容器、下駄、大足、草履、茶臼、砥石、銅鏡、中国銭、鎌、鉄鏃などがあり、ここに居住した武士の生活の様子を垣間見ることができる。

他の時代に関してみると、昭和56年の調査で縄文時代後期の土器が出土し、海岸線に近い低地においても、この時期の遺跡が存在する可能性を示した点で注目される。弥生時代中期に墓域が形成されており、土器棺墓５基が発見されている。調査区内からは、弥生土器とともに、石包丁や太型蛤刃石斧などの弥生時代を特徴づける石器も出土しており、周囲に居住域、生産域の存在が推定される。また、古墳時代前期と中期の土坑、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、近世の溝跡などの遺構も見つかっている。

今回の調査地点は本遺跡のほぼ中央部に位置し、外堀推定ラインの内側にある。西側約50ｍの地点で、昭和54年

度に宅地造成に伴う第１次調査が実施され、弥生時代から近世にまたがる時期で、掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡、土坑、溝跡、柱穴を含むピット約1200個が検出された。遺物は土師器片、近世陶磁器片、木製品などが出土している。また、当該地から南西約30mの地点では、昭和56年度に宅地造成に伴う第２次調査が実施され、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土坑、橋跡、柱穴を含むピット800基の遺構が検出された。遺物は、土師器、須恵器のほか、陶磁器、瓦、木簡５点を含む木製品などが数多く出土している。

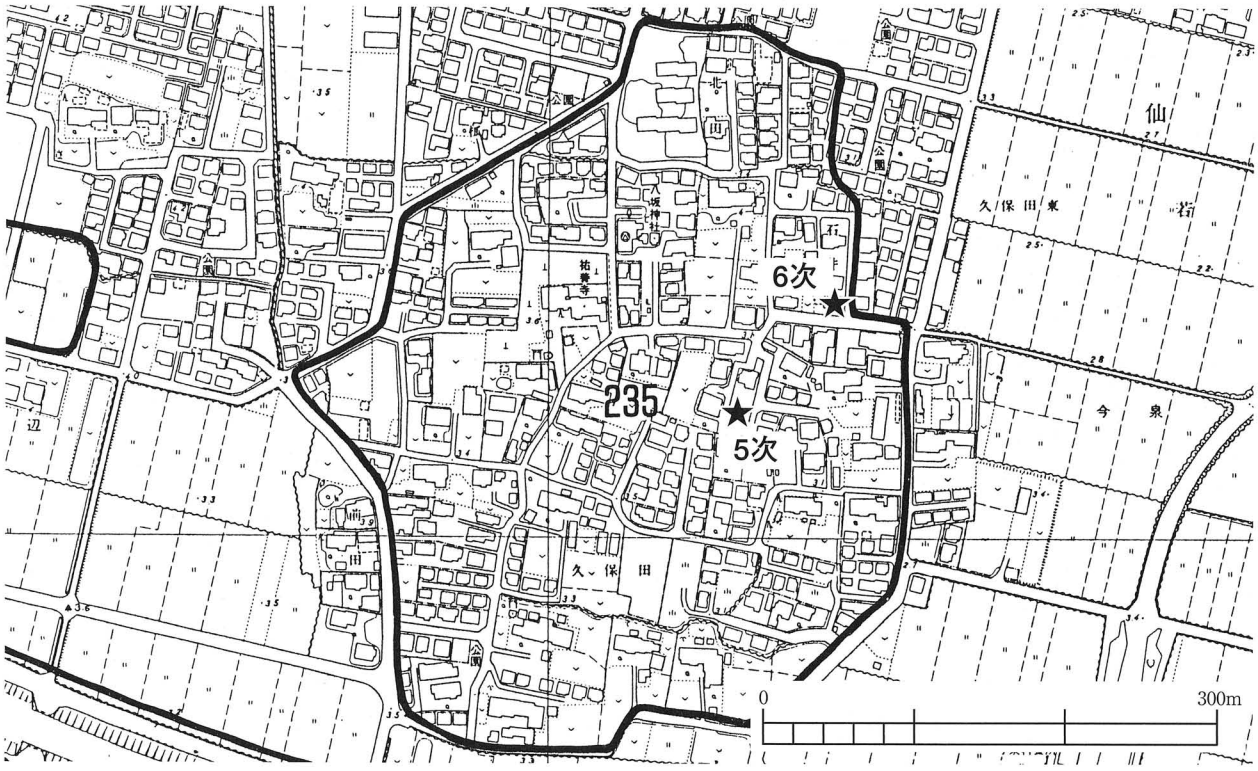


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	今泉遺跡	集落跡、城館跡、包含地	自然堤防	縄文～近世	12	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
2	長町駅東遺跡	集落跡	鉄道敷地	弥生、古墳末、奈良初	13	神柵遺跡	建物跡、包含地	自然堤防	奈良、平安
3	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳	14	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
4	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初	15	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～平安
5	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文後、弥生～近世	16	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
6	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	17	日辺遺跡	散布地	河川敷	古墳
7	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	18	日辺館跡	城館跡	自然堤防	中世
8	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	19	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
9	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳～中世	20	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
10	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世	21	高田A遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
11	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	22	高田B遺跡	集落跡、建物跡、水田跡、河川跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安～近世

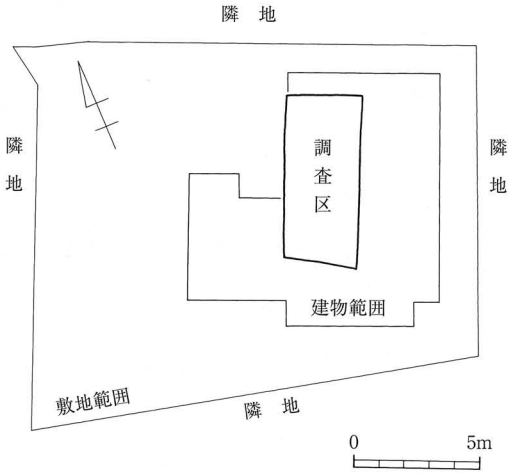
第38図　遺跡の位置と周辺の遺跡

4　基本層序

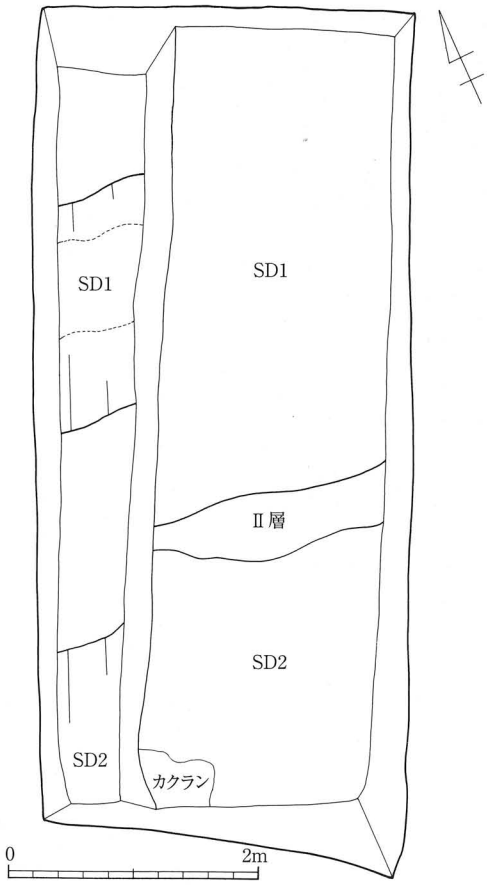
調査地点の盛土は山砂で、約10～20cmの厚さがある。土色、土性により、基本層は大別２層、細別３層に分けた。Ⅰ層は、表土および旧耕作土のⅠa層と旧耕作土のⅠb層に分けた。層厚はⅠa層が28～50cm、Ⅰb層は30～50cm、Ⅱ層が140cm以上である。SD１溝跡の５層以下はオリーブ灰色に変化する。



第39図　調査地点の位置



第40図　調査区配置図



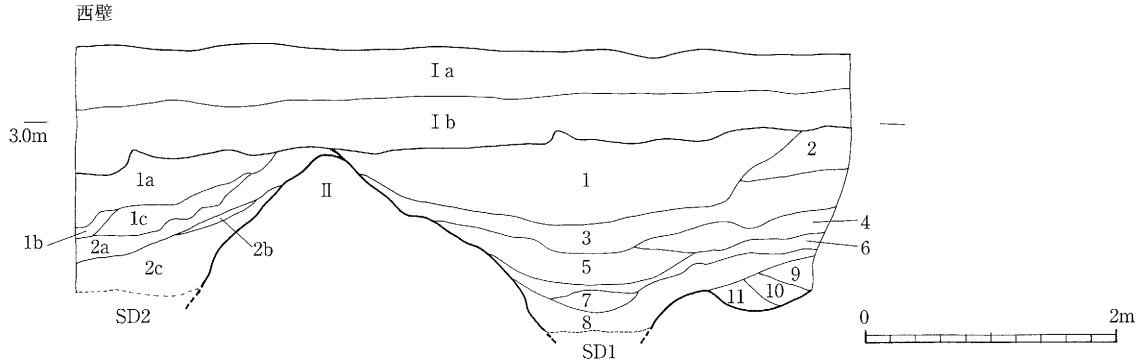
第41図　遺構配置図

5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡２条を検出した。

１）溝跡

SD１溝跡　調査区北壁からほぼ中央部にかけて検出し、北側は調査区外である。おおむね東西方向に延びており、SD２溝跡を切っている。検出部分の規模は上端幅約4.2m、下端幅約80cm、深さ約1.5m以上である。湧水のため底面は検出していないが、ボーリングでは10cm前後で底面となる。断面形は舟底形と推定される。堆積土は11層に分けられる。土層断面の



基本層	土　　色		土　性	備　　考
Ⅰa	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	盛土および旧耕作土。盛土は10～20cm。
Ⅰb	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	旧耕作土。黄褐色粘土ブロックおよび細粒砂、炭化物粒を含む。
Ⅱ	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土	基盤層。酸化鉄をまばらに含む。SD1-5層より下部がグライ化。
層　位	土　　色		土　性	備　　考
SD1-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色、にぶい黄橙色、暗褐色、黒色粘土ブロックを多量に含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒を微量に含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を霜降状に含む。
4	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを下部に含む。灰黄褐色砂を縞状に含む。
5	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	植物遺体（木片）を多量に含む。
6	5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	砂を縞状に含む。炭化物を含む。
7	5Y2/2	オリーブ黒色	粘土	砂を含む。
8	10Y3/1	オリーブ黒色	粘土	灰色粘土ブロックを多量に含む。
9	5GY5/1	オリーブ灰色	砂質シルト	黒色粘土ブロックをまばらに含む。
10	10Y3/1	オリーブ黒色	粘土	灰色粘土ブロックを多量に含む。
11	10Y5/1	灰色	粘土質砂	オリーブ黒色粘土を微量に含む。
SD2-1a	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質粘土	下部に酸化鉄をまだら状に少量含む。
1b	10YR5/3	灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒を霜降状に少量含む。にぶい黄橙色土ブロックをまばらに少量含む。
1c	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質粘土	酸化鉄粒を管状に少量含む。灰黄褐色土ブロックをまばらに少量含む。
2a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒をまばらに少量含む。炭化物粒を微量に含む。にぶい黄橙色土ブロックをまばらに少量含む。
2b	10YR2/1	黒色	粘土	木片を含む。
2c	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	炭化物粒をまばらに少量含む。酸化鉄を管状に少量含む。下部はオリーブ黒色粘土ブロックや灰色砂を縞状に含む。

第42図　調査区断面図

状況から掘り直しが行われ、９～11層が古期の堆積土の可能性がある。遺物は５層から剥片１点、弥生土器と思われる土器片２点が出土した。

SD２溝跡　調査区の南寄りで検出し、南側は調査区外である。おおむね東西方向に延びている。規模は上端幅約2.1m以上、下端幅約１m、深さは１m以上であり、底面は検出していない。壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別２層、細別６層からなる。遺物は２a層からロクロ土師器甕の胴部の破片１点、２b層からヒョウタンの一部が出土した。

6　まとめ

① Ⅱ層上面で溝跡２条を検出した。建物範囲の大部分が溝跡に含まれるものと考えられる。

② SD１溝跡の規模は幅６m前後、深さ1.5m以上、SD２溝跡は幅４m前後、深さ１m以上と推定される。

③ SD１溝跡がSD２溝跡より古く、ともに推定される外堀よりも内側に位置している。今泉城跡の内堀もしくは屋敷地を画する溝の可能性も考えられる。

＜参考文献＞

渡部弘美1994『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第185集
渡部弘美1995『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第201集

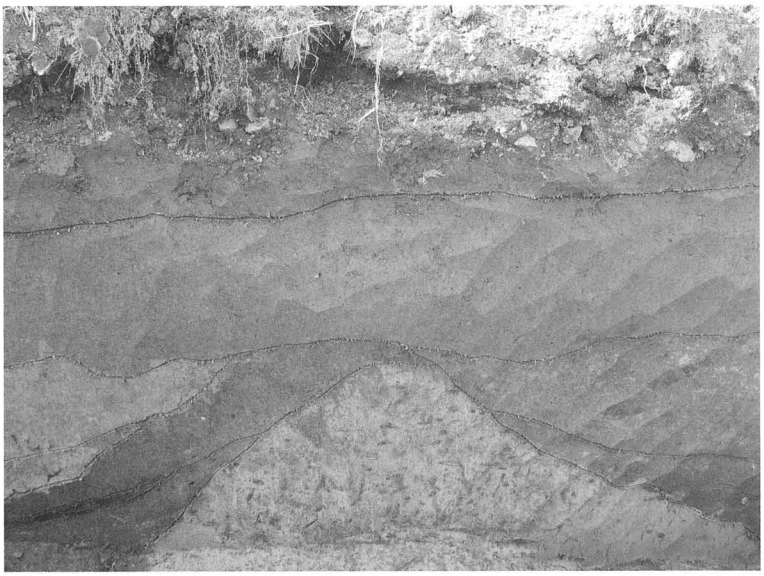
1　遺構検出状況
（北から）

2　西壁断面
（北西から）

3　SD 1 溝跡北部断面
（東から）

図版33　調査区全景・西壁・遺構断面

1　SD１溝跡中央部断面
（東から）



2　SD１溝跡・SD２溝跡断面
（東から）

3　SD２溝跡断面
（北東から）

図版34　SD１・SD２溝跡断面

Ⅷ　今泉遺跡第６次発掘調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名　今泉遺跡（宮城県遺跡番号01235）
調査地点　仙台市若林区今泉二丁目4799
調査期間　平成19年７月２日～６日
調査対象面積　64.45㎡
調査面積　24㎡
調査原因　個人住宅建設
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　工藤　慶次郎

２　調査に至る経過と調査方法

平成19年４月27日付けで、伊東弘貴氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行い、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。建設予定地に東西７ｍ×南北３ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝や土坑・ピットなどの遺構を検出したため、引き続き本調査を実施した。

３　遺跡の位置と環境

詳しくは、本報告書掲載の今泉遺跡第５次発掘調査報告書を参照されたい。なお今回の調査地点は、本遺跡の北東部に位置する。

４　基本層序

基本層序は、約50cmの盛土下に、次の７層を確認した。

Ⅰ層は現代の耕作土で、層厚は８～16cmである。

Ⅱ・Ⅲ層はともに耕作土である。Ⅱ層の層厚は８～20cmで、近世の陶磁器を含んでいた。Ⅲ層は層厚が６～20cmで、南側にはほとんど分層しない。直径１～３mmの炭化物粒をやや多く含んでいた。

Ⅳ層は鉄分をやや多く含み、水田土壌の可能性がある。層厚は２～18cmである。

Ⅴ層は鉄分を多量に含む。下面に著しい凹凸が見られ、水田土壌である。層厚は２～12cmで、調査区南半分でのみ検出された。

Ⅵ層は部分的に鉄分を多く含む。下部に一部細砂が集積し、下面には凹凸が見られる。層厚は２～32cmである。

Ⅶ層は基盤層で、層厚は２～20cmである。

５　発見遺構と出土遺物

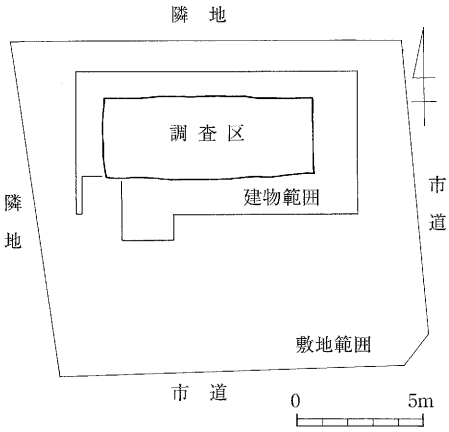
Ⅱ・Ⅲ層上面からは溝跡３条・土坑３基・ピット４基を、Ⅵ層からは畦畔状の高まりを検出した。また、近世の陶磁器片、馬のものと見られる歯、木製品が出土した。

1）溝跡

SD１溝跡　調査区西側で検出した南北方向に延びる溝跡である。検出面はⅢ層上面である。西側の立ち上がりについては、調査区を拡張したものの確認できなかった。上幅は３ｍ以上、深さは50～60cmである。堆積土は１層で一度に埋められたものと考えられる。

SD２溝跡　南北方向に延びる溝跡で、西側のほとんどをSD１に切られる形で部分的に検出した。正確な規模は不明であるが、上幅１ｍ以上、深さ50cm程度と考えられる。

SD３溝跡　調査区北側で検出した東西方向に延びる溝跡である。SD１・２に切られる。プランは南側のみ部分的に検出した。上幅1.5m以上、深さ40cm以上である。また、馬のものと見られる歯が１点出土した。



第43図　調査区配置図

2）土坑

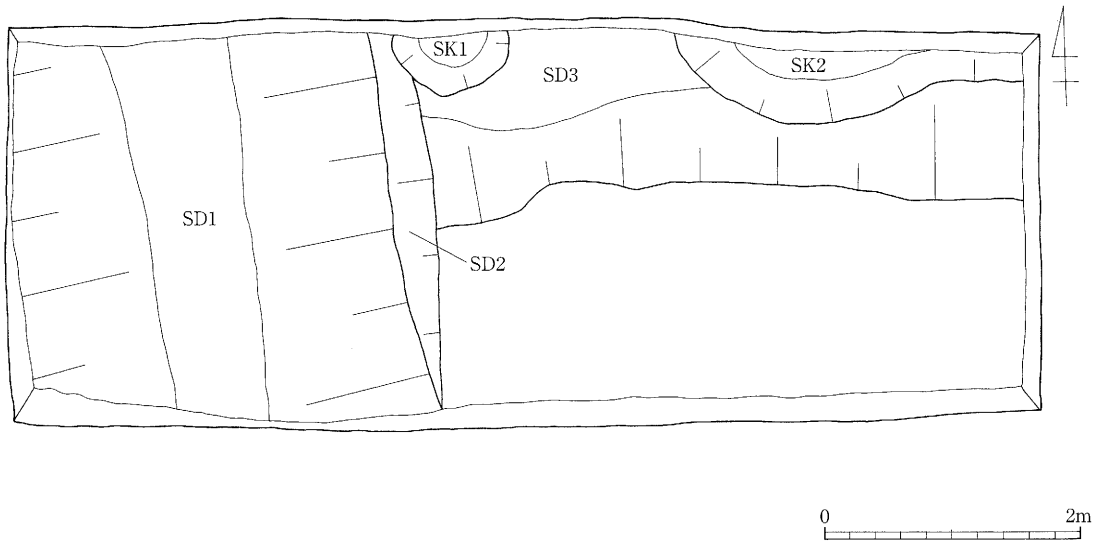
SK１土坑　調査区中央の北壁寄りで南半部のみ検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。規模は東西94cm・南北48cm以上で、深さ24cmである。

SK２土坑　調査区北東部で部分的に検出した。規模は東西280cm以上・南北30cm以上で、深さ20cm以上である。上部をⅢ層に覆われるため、SK１より古い遺構と考えられる。

SK３土坑　調査区北西角で部分的に検出した。規模は東西80cm以上・南北135cm以上で、深さ60cmである。Ⅵ層を切り、Ⅳ層に上部を覆われる。

3）ピット

ピットは４基検出したが、そのうちP２～４は北壁断面でのみ確認した。P１はSK３土坑の南側で検出し、径10cmの円形である。埋土は黒褐色の粘質土で、杭跡の可能性も考えられる。またP２～４の規模は幅25～50cmで、深さ25～50cmである。掘り込み面はⅢ層上面である。



第44図　溝跡・土坑平面図

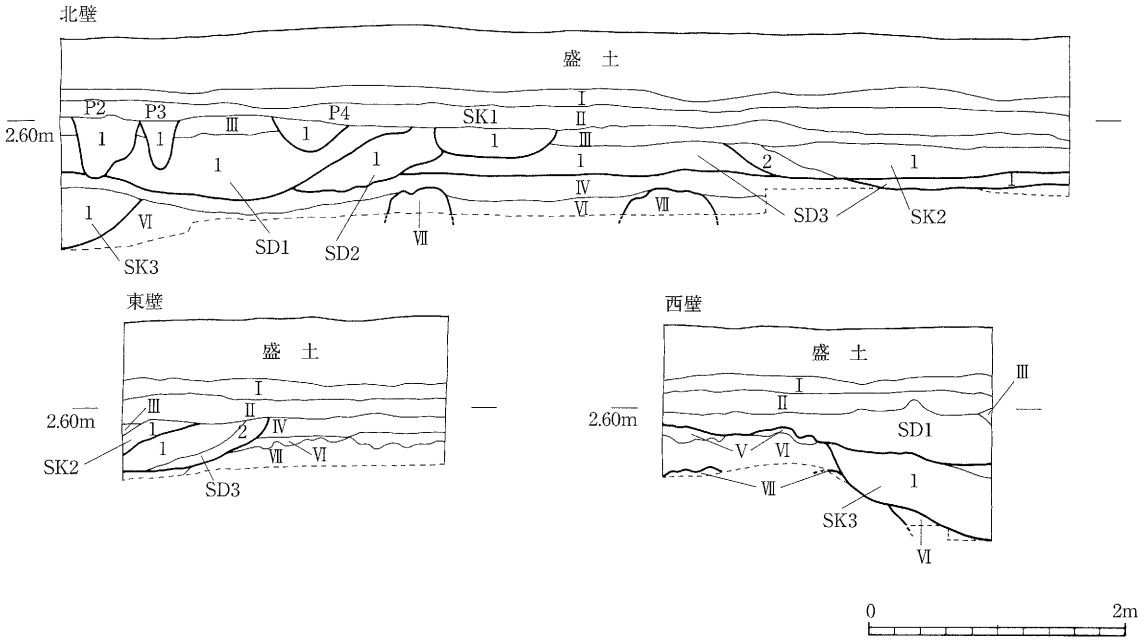
４）畦畔状遺構

調査区西側で、Ⅵ層の畦畔状の高まりを検出した。当初、溝跡底面の凹凸と判断し、土橋など溝の構造を示すものと考えた。しかし、調査区北壁沿いに設定した排水側溝を掘り下げる過程で、擬似畦畔Ｂ（斎野1987）と思われるⅦ層の高まりが確認されたため、Ⅵ層の高まり部分３か所にサブトレンチを設定し、Ⅵ層の掘り下げを行った。その結果、Ⅵ層の高まりに対応する形で直下にⅦ層の高まりが認められた。Ⅵ層下部でⅦ層の巻き上げも確認されたことから、Ⅵ層を水田層と判断した。畦畔の規模は、東西方向に延びる部分で幅約1.7m、高さ15～25cmである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

５）出土遺物

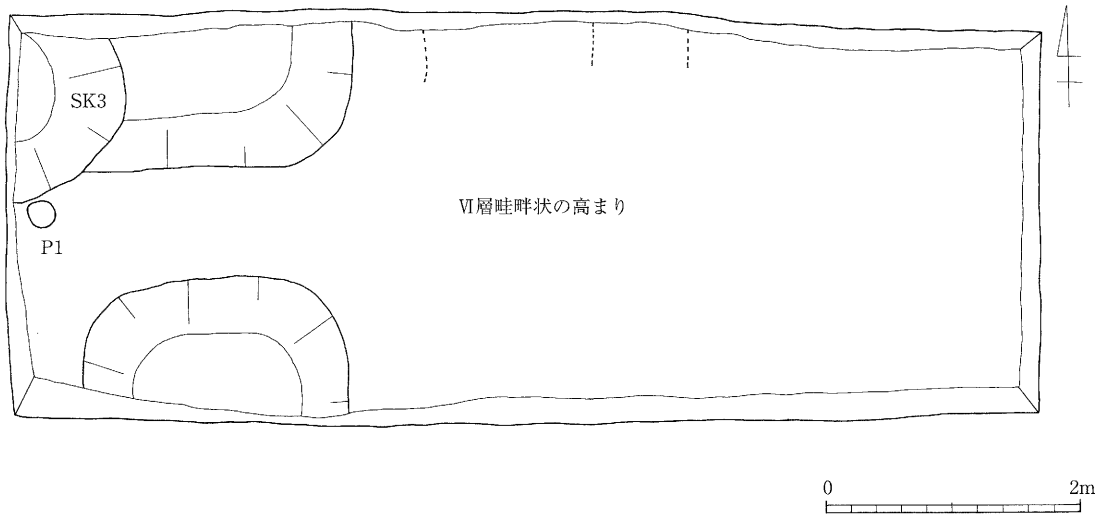
Ⅱ層からは17世紀～19世紀前半の陶磁器片が５点、Ⅵ層からは木製品が１点それぞれ出土した。

磁器片は４点出土した。肥前産の染付Ⅲ片は、丁寧に模様が描かれている。17世紀のものと見られる。同じく肥前産の染付草花文片は、湾曲の具合が比較的急なことから猪口で、時期は18世紀と考えられる。その他、19世紀前半のものと見られる瀬戸美濃産の染付碗、年代不明の肥前産染付碗が出土している。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	現代耕作土。
Ⅱ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	旧耕作土。近世陶磁器を含む。
Ⅲ	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	旧耕作土。1～3mmの炭化物粒をやや多量に含む。
Ⅳ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄をやや多量に含む。下面の凹凸と下層の巻き上げあり。水田土壌か。
Ⅴ	10YR2/1　褐灰色	シルト質粘土	水田土壌。酸化鉄を多量に含む。下面に著しい凹凸あり。調査区南半のみに分布。
Ⅵ	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	部分的に酸化鉄を多量に含む。下部に一部細粒砂の集積あり。下面に凹凸あり。
Ⅶ	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
SD1-1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	5～20cmのブロックを多量に含む。
SD2-1	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	5～20cmのⅤ層ブロックを少量含む。
SD3-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	5～20cmのⅦ層ブロックを少量含む。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄をやや多量に含む。
SK1-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層粒を少量含む。断面のみ検出。
SK2-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	3～10cmの炭化物ブロックを多量に含む。
2	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
SK3-1	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	5～20cmのⅥ層ブロックを多量に含む。
P1-1	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	杭跡の可能性あり。
P2-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層粒を少量含む。断面のみ検出。
P3-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層粒を少量含む。断面のみ検出。
P4-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層粒を少量含む。断面のみ検出。

第45図　調査区断面図



第46図　Ⅵ層遺構平面図

陶器片は１点で、大堀相馬産の土瓶又は徳利の破片と見られる。鉄絵が見られ、釉は外側にのみ施されている。19世紀前半のものと思われる。

木製品は、長軸約6.5cm、短軸約5.5cm、厚さ約2.3cmの薄い六角柱に似た形をしている。用途や時期などは不明である。

6　まとめ

① SD１・２・３の年代については、出土遺物がないため不明である。しかし、これらを覆う基本層のⅡ層から近世の陶磁器片が出土していることから、近世以前の遺構であると考えられる。

② Ⅵ層の水田跡から微小な土師器片が出土しており、古代まで遡る可能性も考えられるが、正確な時期は不明である。

＜参考文献＞

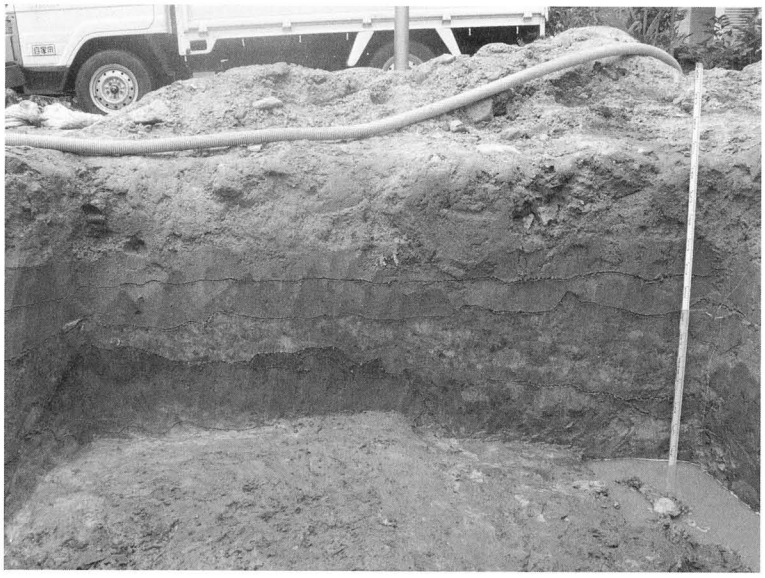
斎野裕彦1987『富沢』仙台市文化財調査報告書第98集

仙台市史編さん委員会2006『仙台市史・特別編７・城館』仙台市

渡部弘美1994『今泉遺跡第３次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第185集

渡部弘美1995『今泉遺跡第４次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第201集

1　遺構検出状況
（東から）



2　調査区西壁断面
（東から）

3　SD１検出状況
（北から）

図版35　遺構検出・断面状況

1　SD１・２完掘状況
（東から）

2　畦畔状の高まり検出状況
（東から）

3　畦畔状の高まり断面状況
（北西から）

図版36　溝跡・畦畦状の高まり

Ⅸ　大野田古墳群第12次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調 査 地 点	仙台市太白区大野田字王ノ壇20、25－１、25－10、水路、堤の各一部
調 査 期 間	平成19年２月26日～３月２日
調査対象面積	70.47㎡
調 査 面 積	45㎡（１トレンチ：27㎡、２トレンチ：18㎡）
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤　哲司　　文化財教諭　早川　潤一　藤田　雄介　佐伯　修一　佐々木　匠

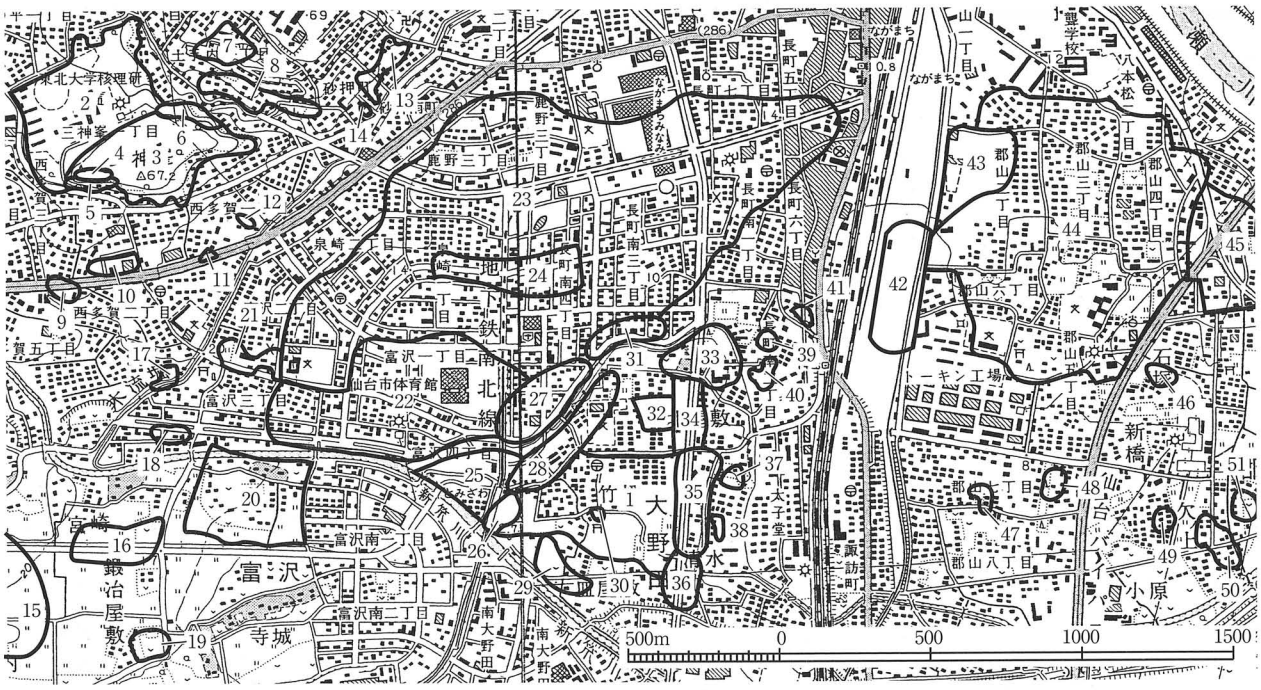
2　調査に至る経過と調査方法

平成19年２月７日付けで、地権者渡辺ゆみ子氏より深さ2.5mの柱状土壌改良を伴う個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施しその上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成19年２月26日に着手し、建物建築予定部分に東西９ｍ×南北４ｍのトレンチを設定して調査を行った。盛土が厚く排土場を確保するため、調査区の幅を南北３ｍに縮小した。重機により砕石および盛土、Ⅰ、Ⅱ層を除去した後に、Ⅲ層ならびにⅤ層上面を人力で精査して遺構の検出作業を実施した。Ⅴ層上面を精査したところ、大野田26号墳の周溝が検出されたため、引き続き本調査を実施した。当初設定した調査区（１トレンチ）を埋め戻した後に、南側に東西６ｍ×南北約３ｍの調査区（２トレンチ）を設定し、1トレンチと同様Ⅲ層ならびにⅤ層上面で遺構の検出作業を行った。検出された遺構を掘削し、さらに２トレンチ北西部で下層調査を実施した。平面図および断面図は１／20で作成した。

3　遺跡の位置と環境

大野田古墳群は地下鉄富沢駅の東側に接し、標高10～12m前後の名取川下流域左岸の自然堤防上の微高地に立地している。縄文時代および古墳時代から中世にかけての複合遺跡であり、これまで個人住宅や共同住宅建築に伴う調査のほか、「富沢駅周辺土地区画整理事業」の道路建設等に伴った調査が平成６年度以降継続的に実施されている。また遺跡の主体となる古墳時代中期から後期においては古墳群が形成され、平成19年末までに発見された古墳は大野田38号墳まで達し、春日社古墳、王ノ壇遺跡、六反田遺跡を含めて総数41基を数える。古墳の大部分は墳丘が削平されており、周溝のみが残存している。古墳の形状は、鳥居塚古墳が主軸長37mの前方後円墳であるほかは、ほとんどが円墳である。古墳からの出土遺物には土師器、円筒埴輪、形象埴輪等がある。古墳時代以降の遺構としては、古代の水田跡、河川跡、畑の耕作痕である小溝状遺構群などが検出されているほか、中世の道路跡、掘立柱建物跡、塀跡、柱列、土坑、小溝状遺構群が確認されている。

今回調査地点の西側では、平成９年度に富沢駅周辺区画整理事業に伴う調査が実施されており、Ⅲ層上面では溝跡・ピット、Ⅴ層上面で大野田26号墳周溝の西端部分や小溝状遺構群などが検出されている。

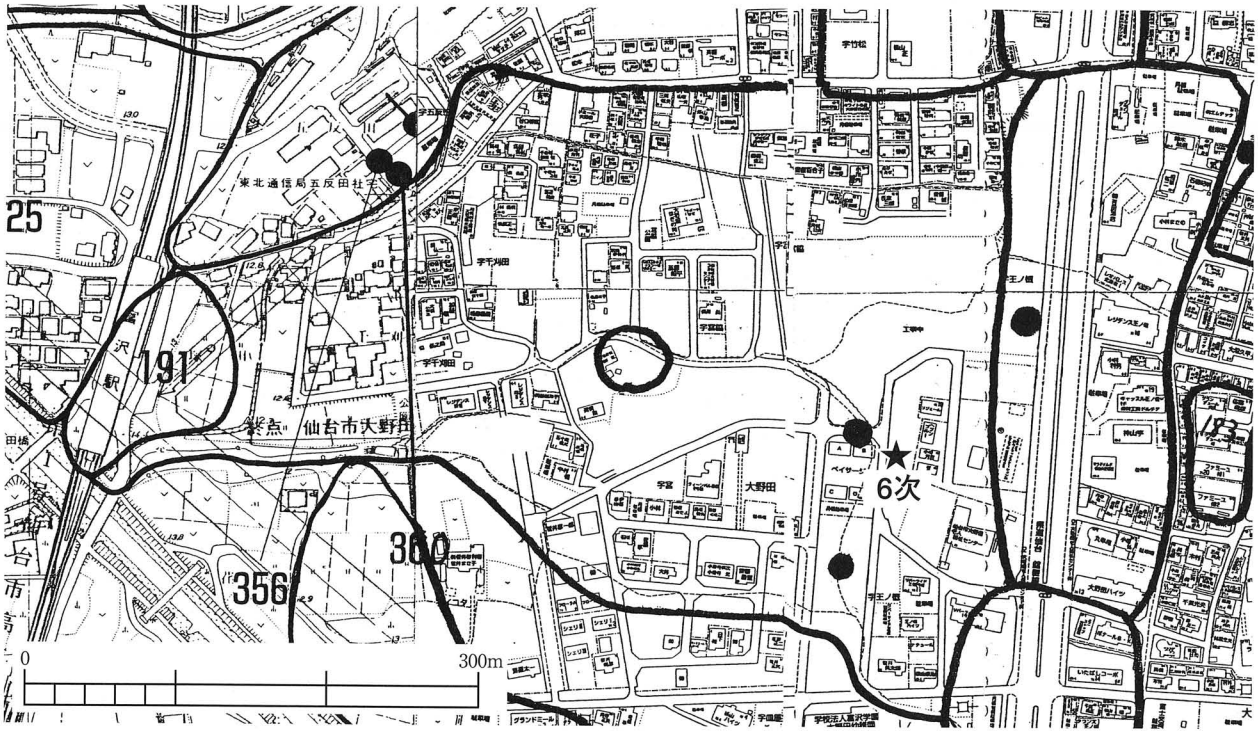


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	27	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文早・前・後、弥生～中世
2	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文早、弥生、平安	28	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生～平安、近世
3	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文前・中、平安	29	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
4	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳後	30	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中
5	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳、奈良、平安	31	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安、奈良
6	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末	32	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安
7	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～平安	33	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、奈良～近世
8	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳後、奈良	34	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文後、弥生中、古墳～平安
9	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	奈良、平安？	35	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文後、弥生～中世
10	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古墳、平安	36	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	奈良～中世
11	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳～平安	37	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
12	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安	38	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
13	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵麓	奈良、平安	39	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
14	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳	40	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
15	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安	41	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
16	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安	42	長町駅東遺跡	集落跡	鉄道敷地	弥生、古墳末、奈良初
17	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安	43	西台畑遺跡	包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳
18	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	44	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初
19	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	自然堤防	縄文、奈良、平安	45	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文後、弥生～近世
20	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	46	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
21	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	47	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
22	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文早・中～晩、弥生中、古墳～中世	48	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
23	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世	49	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳～中世
24	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡、墓跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳・平安、近世	50	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世
25	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生～中世	51	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
26	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後、古墳～平安					

第47図　遺跡の位置と周辺の遺跡

4　基本層序

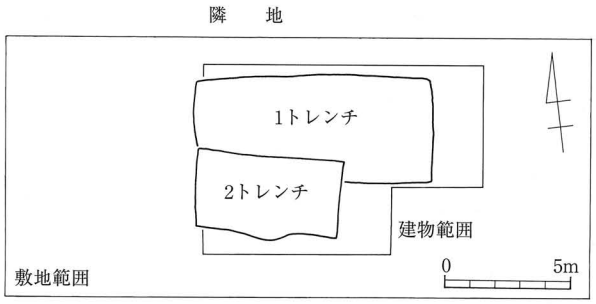
調査地点の盛土は最近の土地区画整理事業の砕石で、西部から東部にかけて傾斜しており、西部から中央部では65～80cm、東部にいたっては130cmあり、西部より東部が厚い。土色、土性から基本層を大別９層、細別10層に分けた。Ⅰa層が層厚４～20cm、Ⅰb層は旧水田耕作土で層厚６～18cmである。Ⅱ層は部分的に検出され、層厚４～15cm、Ⅲ層は層厚４～20cm、Ⅳ層は層厚８～15cmであり、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層とも下面に乱れが見られることから、旧耕作土と考えられる。遺構確認作業はⅢ層およびⅤ層上面で行った。これまでの周辺の調査成果から、Ⅲ層上面は中世、Ⅴ層上面は古墳時代～古代に相当するものである。また下層調査ではⅥ～Ⅸ層を確認した。Ⅴ層以下の層厚は、Ⅴ層は８～22cm、Ⅵ層は16～22cm、Ⅶ層は10～25cm、Ⅷ層は10～24cm、Ⅸ層は10cm以上である。



第48図　調査地点の位置

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面では掘立柱建物跡１棟、溝跡２条、土坑１基、掘立柱建物跡１棟を組む可能性があるものを含むピット19基が、Ⅴ層上面では大野田26号墳周溝、溝跡２条、ピット６基が発見された。



第49図　調査区配置図

①Ⅲ層上面検出遺構

1）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　底面において柱痕跡が確認されたP２、P５、P23、P22、P13で掘立柱建物跡の一部を形成するものと考えられる。P２、P23、P22がほぼ一直線に並んで南辺をなしているものと推定され、P２－P23の間隔が1.8m、P23－P22の間隔が約３mである。東辺はP２、P５を通る延長線上と考えられ、２基の間隔は約２mである。西辺はP22、P13を通る延長線からなり、２つの間隔は約4.2mあることから、１トレンチと２トレンチ間の未調査部分に柱穴が存在している可能性がある。掘立柱建物跡の東辺と西辺の方向が真北方向よりやや西に傾いており、規模は東西4.8m、南北4.2m以上の２間×３間以上からなるものと思われる。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、径30～40cmである。検出面からの深さは17～34cmである。柱穴の埋土は暗褐色もしくは黒褐色の粘土で、黄褐色あるいは灰黄褐色土のブロックを含んでいる。

2）溝跡

SD１溝跡　１トレンチの東壁中央部から北壁中央西寄りにおいて検出された。P４、P５、P12に切られている。東側は調査区外である。方向は１トレンチ東部ではN－68°－Wで、１トレンチ西部に入るとN－56°－Wに屈曲する。検出部分は長さ約5.8m、上端幅30～50cm、下端幅15～20cm、深さ10～20cmで、断面形は舟底形である。遺物は埴輪片がわずかに出土した。

SD２溝跡　１トレンチの北壁西隅あたりから２トレンチ南壁の中央部にかけて、おおむね南北方向に延びる形で検出された。P22に切られている。両端は調査区外に延びる。方向は１トレンチではN－２°－W、２トレンチではN－５～６°－Eである。検出部の長さ約６m、上端幅60～80cm、下端幅20～40cmを測る。深さ約30cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は２層に分けられる。遺物は板状の石材片１点が出土している。

３）土坑

SK１土坑　１トレンチの南東端で検出し、南側と東側は調査区外である。掘り込み面はⅢ層上面であり、検出部分の規模は上端幅1.1m、下端幅約0.5mを測る。深さ約50cmで、断面形は舟底形を呈するものと推定される。堆積土は２層に分けられる。遺物は出土していない。

４）ピット

１トレンチで15基、２トレンチで４基の計19基検出された。P25は北壁断面で確認し、ピットと認定した。底面で柱痕跡と思われるものを確認できたものはP１、P２、P４、P５、P13、P20、P21、P22、P23の９基である。P23はV層上面で検出されたが、堆積土の様相からⅢ層上面で検出されるピットと考えた。堆積土はおおむね暗褐色の粘土もしくはシルト質粘土である。平面形はおおむね円形もしくは楕円形を呈し、径20～30cmを測る。検出面からの深さは11～47cmである。遺物はP10、P18、P21から埴輪片がわずかに出土しただけである。

②V層上面検出遺構

１）大野田26号墳周溝

１トレンチの北壁西隅から南壁中央部付近を通り、２トレンチの南壁東隅にかけて弧を描く形で検出された。両端は調査区外である。SD４溝跡、P10、P12、P18、P23に切られている。掘り込み面はV層上面で、上端幅約1.8～2.2m、下端幅0.5～１m、深さ42～50cmを測り、断面形は舟底形を呈している。堆積土は１トレンチで５層に分けられる。遺物は１トレンチの２層中と、２トレンチの２ヶ所からは１層中の計３ヶ所で埴輪片がまとまって出土したほか、堆積土中で埴輪片が多く出土した。

２）小溝状遺構群

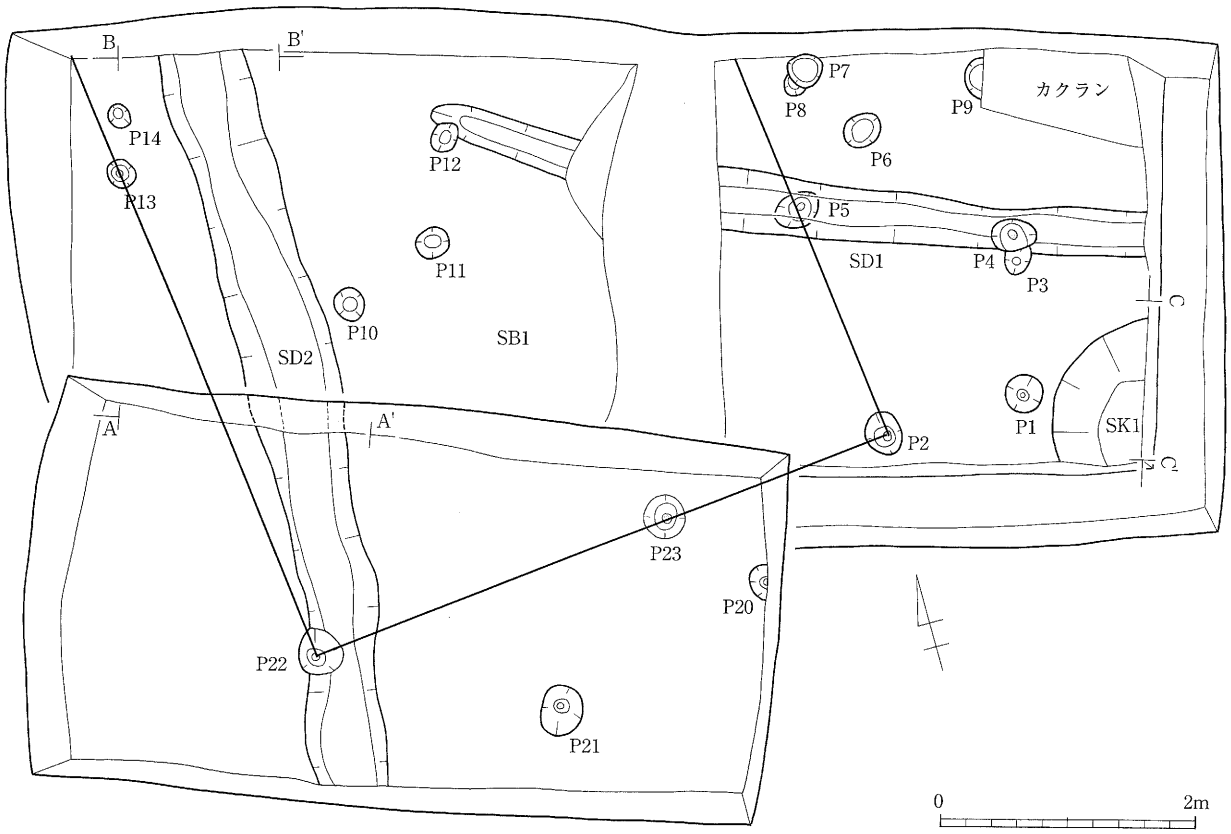
SD３溝跡およびSD４溝跡で小溝状遺構群１群をなすものと考えられる。

SD３溝跡　１トレンチの北壁東部から南壁東隅付近にかけて、ほぼ南北方向に延びる形で検出された。北側は調査区外である。方向はN－３°－Wで、掘り込み面はV層上面である。検出部の規模は長さ約2.2m、上端幅30cm、下端幅約15cmを測る。深さ約20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は１層であり、出土遺物はない。

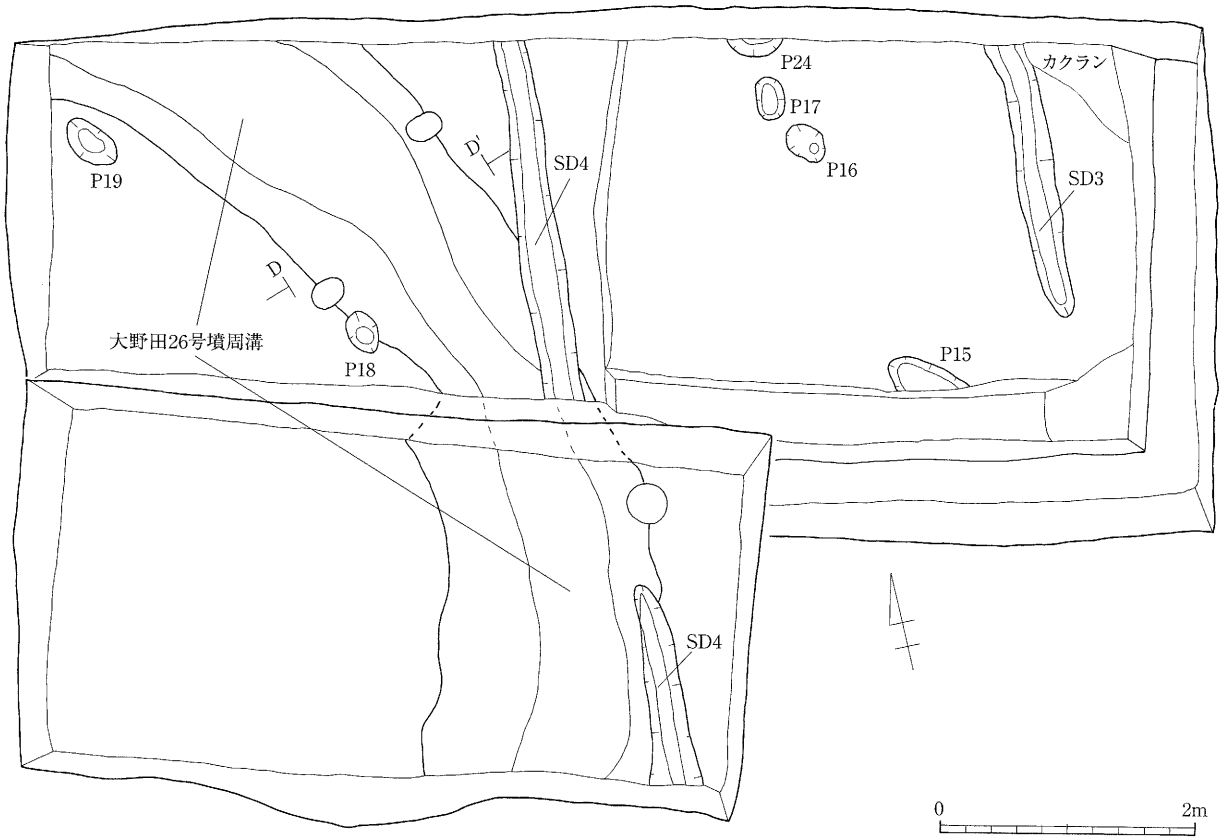
SD４溝跡　１トレンチの北壁中央部から南壁中央部にかけて、約5.8mにわたって26号墳周溝を切る形で検出された。方向は１トレンチではN－６°－E、２トレンチではN－７°－Eとほぼ南北方向に延びており、両端は調査区外に延びる。また、２トレンチの南壁東隅付近から調査区中央部東壁付近においても、約1.6mにわたって26号墳周溝の堆積土を切る形で検出された。南側は調査区外に延びる。上端幅30～50cm、下端幅15～20cm、深さ10～20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は１層であり、出土遺物はない。

３）ピット

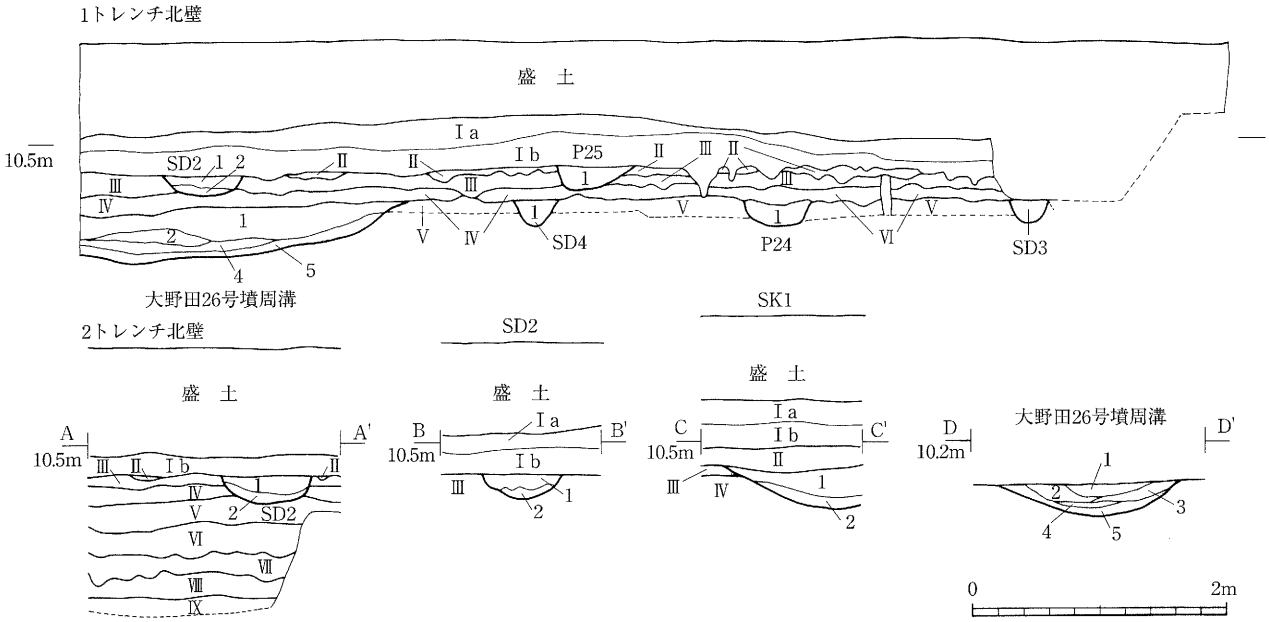
１トレンチで６基検出され、柱痕跡を確認できたものはなかった。堆積土はおおむね酸化鉄を少量含んだ、にぶい黄褐色の粘土もしくは粘土質シルトである。平面形は長径30～40cmの楕円形もしくは不整形を呈している。検



第50図　Ⅲ層上面遺構配置図



第51図　Ⅴ層上面遺構配置図



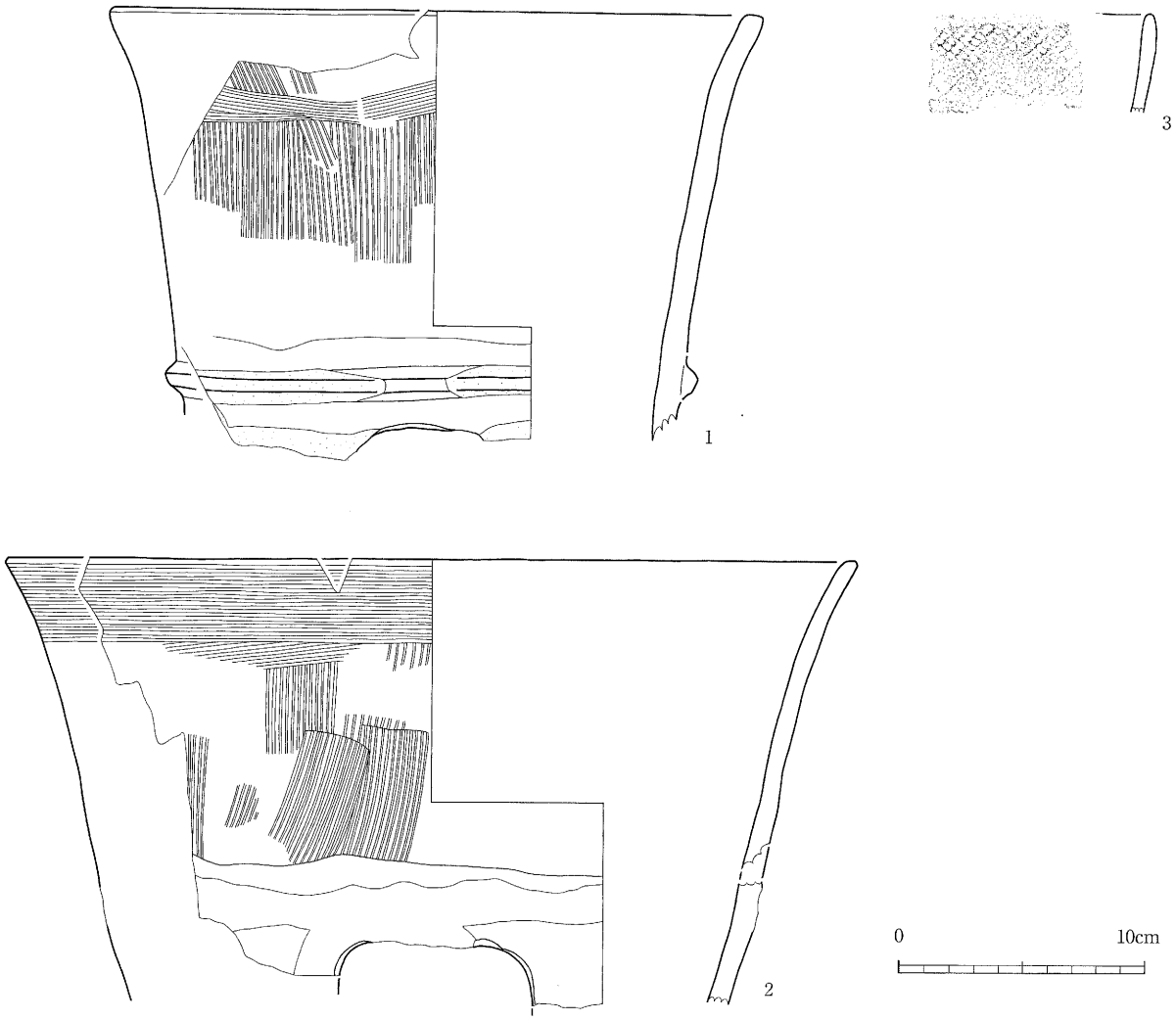
基本層	土　色		土　性	備　考
Ⅰa	2.5Y5/6	黄褐色	砂	灰オリーブ粘土をブロックないし縞状に含む。
Ⅰb	7.5Y4/2	灰オリーブ色	粘土	水田耕作土。一部オリーブ褐色（2.5Y4/4）。
Ⅱ	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土（10YR5/8）ブロックを少量含む。部分的に分布。
Ⅲ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	2～5mmのマンガン粒を多量に含む。
Ⅳ	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	
Ⅴ	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。
Ⅵ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄をまばらに針状に含む。
Ⅶ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	下部に黄褐色土ブロックを含む。
Ⅷ	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	砂を含む。にぶい黄橙色土をまだら状に含む。
Ⅸ	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	5cm前後の小礫をまばらに含む。
26号墳周溝	土　色		土　性	備　考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	埴輪片を含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	
4	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。
5	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	
層　位	土　色		土　性	備　考
SD2-1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	褐色土粒、炭化物粒、マンガン粒を多量に含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土ブロック（小）を多量に含む。酸化鉄粒を含む。
SD3-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む。
SD4-1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
SK1-1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土ブロックを含む。炭化物粒を含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土ブロック（小）を多量に含む。
P24-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	
P25-1	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。

第52図　調査区・遺構断面図

出面からの深さは7～20cmである。P15、P16、P17、P24は小溝状遺構の底面が部分的に現れた可能性も考えられる。

4）出土遺物

遺物は基本層Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層から多数の埴輪片、Ⅳ層から板状の大型石材（図版45－4）、大野田26号墳周溝から縄文土器の深鉢口縁部片1点（図版45－3）と多数の埴輪片が出土し、合わせてコンテナ1箱ほどであった。図版45－4の板状石材は、厚さ0.7～2.1cm、最大長51cmで、SD2溝跡出土遺物とともに組合式石棺の部材の可能性が考えられる。図化したのは、大野田26号墳出土の埴輪（第53図1・2）のみであり、ともに円筒埴輪の口縁部から体部上部が残存している。第53図1は、体部は直立気味で立ち上がり、口縁部がわずかに外傾し、端部はほぼ平坦である。突帯が体部にわずかに残っているが、大部分は剥離している。突帯の上幅7mm、下幅15mm、高さ7～8mmで、断面形は台形を呈し、やや下方に垂れる。突帯の下方には円形のスカシ孔が施されているように見受



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴・備考（調整・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		遺構名	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	埴輪-1	26号墳周溝		埴輪		(18.2)	26.6		円筒埴輪　外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、体部に突帯あり	45-1
2	埴輪-2	26号墳周溝		埴輪		(18.3)	34.4		円筒埴輪　外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	45-2
3	A-1	26号墳周溝		縄文土器	深鉢				外面：LR縄文	45-3

第53図　出土遺物

けられる。外面調整は口縁部が斜め方向のハケが施された後ヨコナデ、体部がタテハケで、突帯の上下はヨコナデである。鳥居塚古墳、大野田２号墳・10号墳出土の円筒埴輪に類似している。

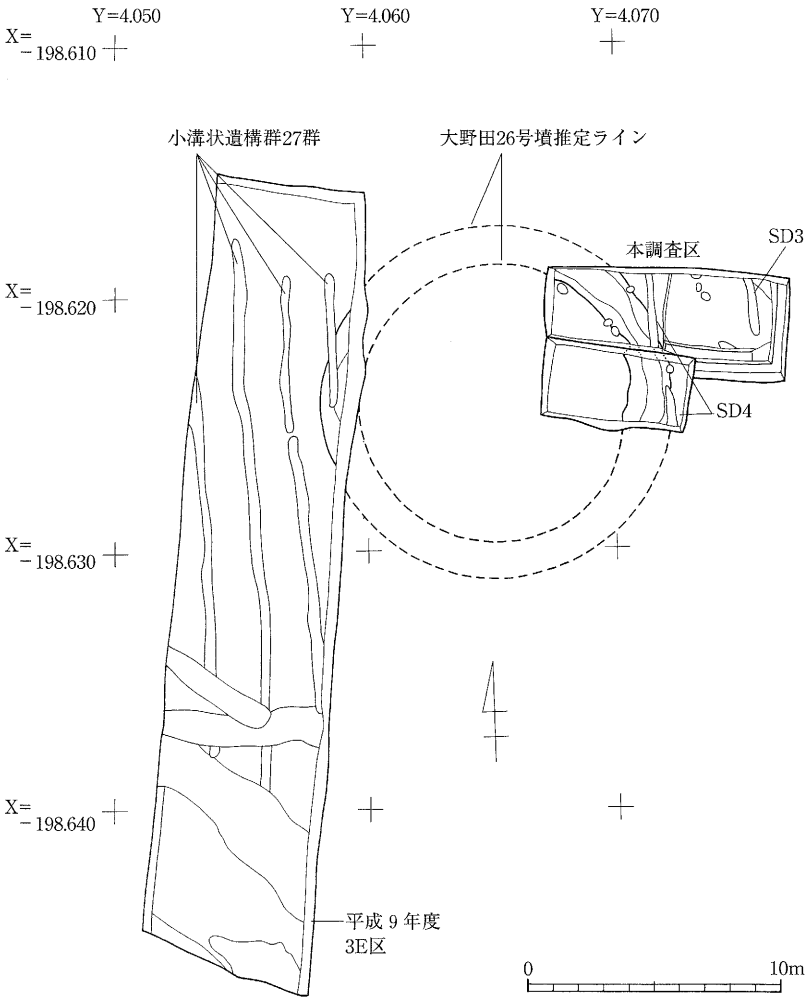
第53図２は第53図１より大型で、体部から口縁部にかけてゆるやかに外反して立ち上がり、端部はほぼ平坦である。突帯は残存しておらず、剥離痕跡が認められる。口縁部から突帯の痕跡までは13.5cmであり、突帯のやや下方には歪んだ円形と見られるスカシ孔が施されている。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部がタテハケのちナナメハケで、内面調整は口縁部がヨコハケののちナデである。大野田10号墳・24号墳の出土埴輪に類例が見られる。円筒埴輪の形態や調整方法から、第53図１・２とも藤沢編年の富沢窯跡系列２a段階（結城・藤沢1987）に位置づけられるものである。

6．まとめ

Ⅲ層上面からは掘立柱建物跡１棟、溝跡２条、土坑１基、ピット19基が発見された。周辺の調査成果から、時期は中世以降のものと考えられるが、出土遺物がないか、時期を特定できる遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

Ⅴ層上面からは平成９年度に発見された大野田26号墳周溝の一部分、溝跡２条からなる小溝状遺構群１群、ピット６基が検出された。平成９年度の調査区（３Ｅ区）と今回の調査地点を合わせた第54図で検討すると、次のように考えられる。

今回検出されたSD３溝跡とSD４溝跡は、平成９年度に発見された小溝状遺構群27群の方向とほぼ平行で、同じ群に属するものと考えられる。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、周辺の調査から、古墳時代中期以降平安時代前半までの時期と考えられる。



第54図　大野田26号墳推定図（渡邊・竹田2000を一部改変）

今回検出された周溝は、平成９年度検出された大野田26号墳の北東部分にあたる。墳丘は１トレンチ、２トレンチともに残存しておらず、Ⅳ層が堆積した時期には削平されていたものと考えられる。周辺の調査成果からも大野田26号墳が円墳である可能性が高く、周溝内縁径12m前後、周溝外縁径14m前後の規模と推定され、５世紀末～６世紀初め頃の円筒埴輪を伴う古墳である。

＜参考・引用文献＞

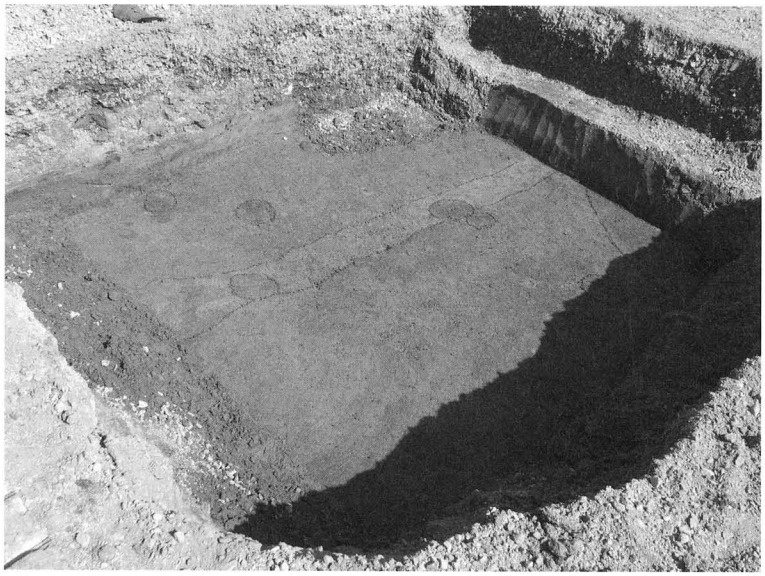
小川淳一・高橋綾子2000『王ノ壇遺跡―都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡―発掘調査報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第249集

工藤哲司2003「大野田古墳群第６次発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書266集pp.203-P211

篠原信彦・根本光一2002『原遺跡第４次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書257集

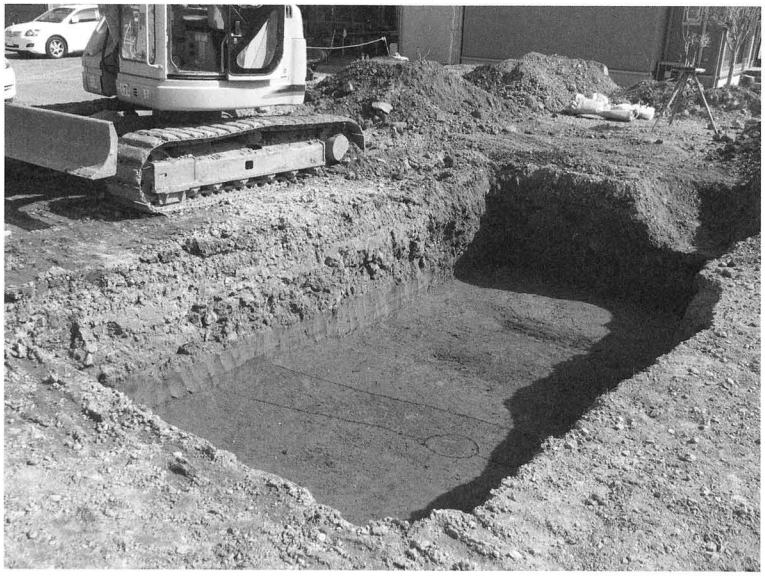
結城慎一・藤沢敦1987『大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書108集

渡邊誠・竹田幸司2000『大野田古墳群・王ノ檀遺跡・六反田遺跡―仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ―』仙台市文化財調査報告書243集



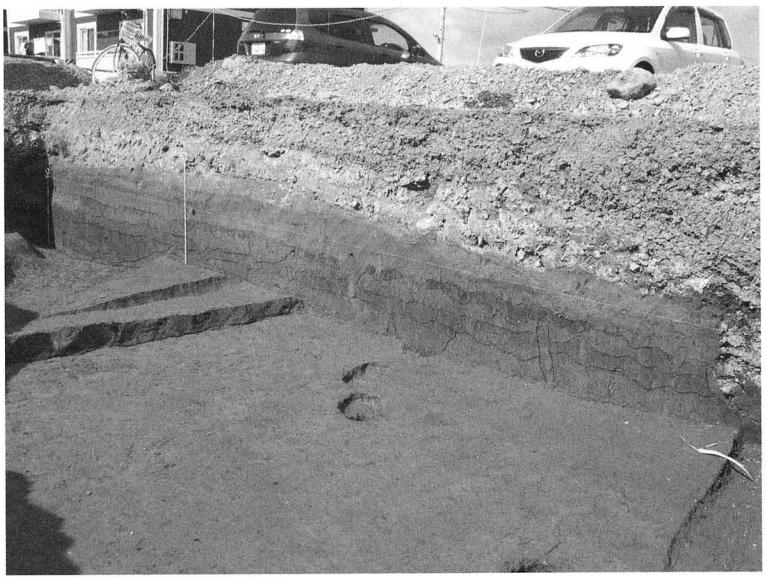
1　1トレンチ東部
（南西から）

2　1トレンチ西部
（西から）

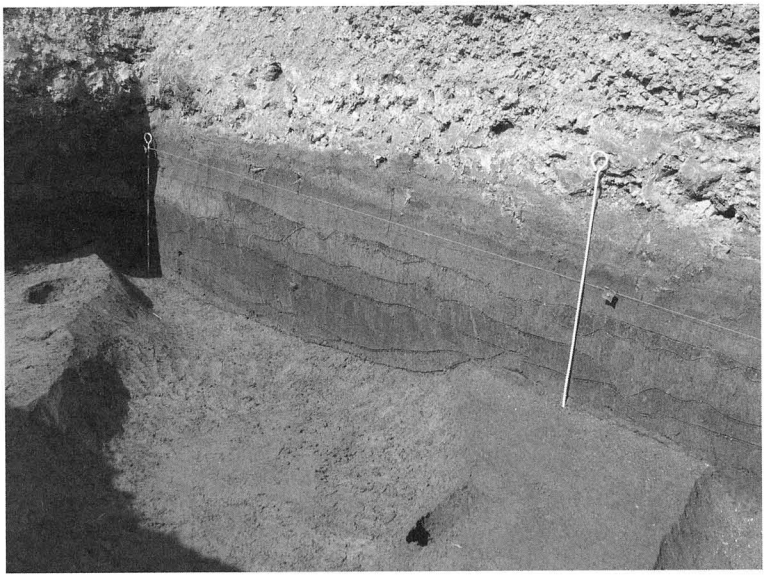


3　2トレンチ
（南西から）

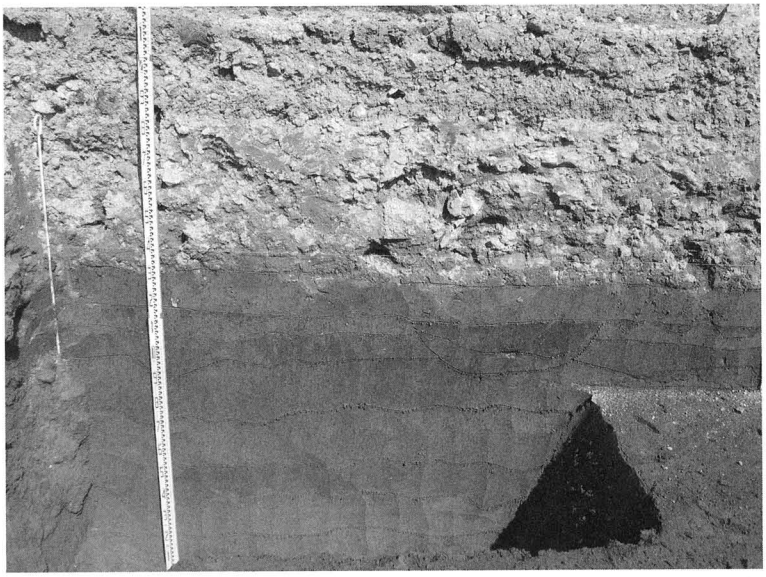
図版37　Ⅲ層上面遺構検出状況



1　1トレンチ北壁
（南東から）



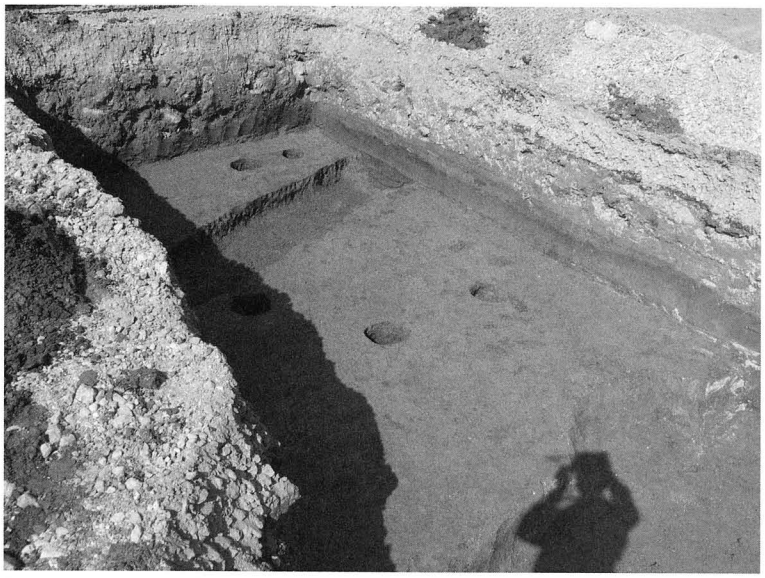
2　1トレンチ北壁西部
（南東から）



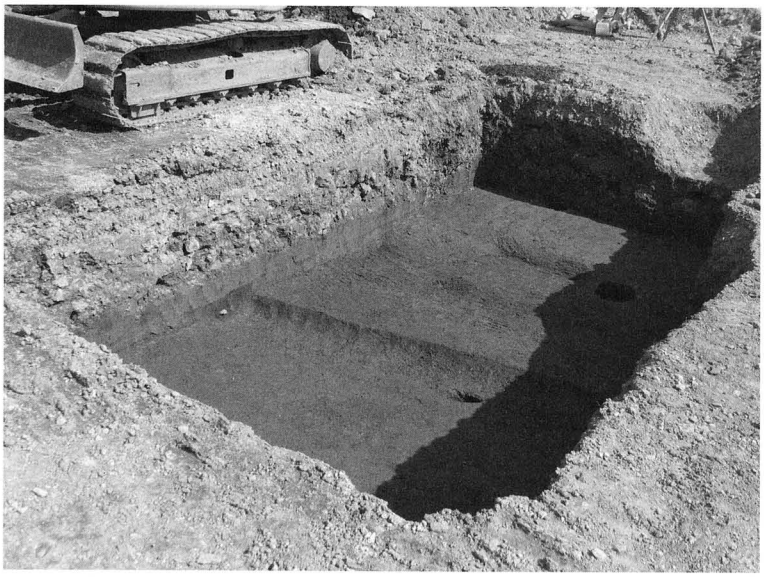
3　2トレンチ北壁西端
（南から）

図版38　基本層序

1　1トレンチ東部
（北西から）

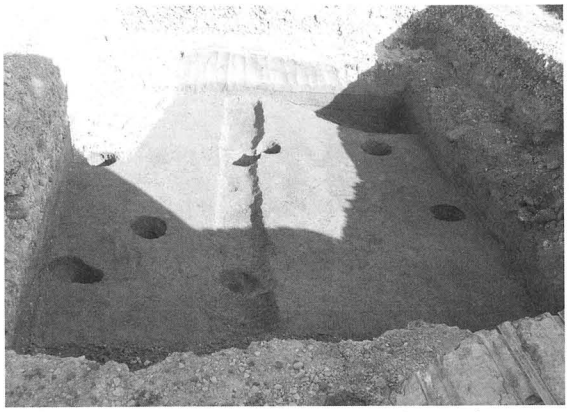


2　1トレンチ西部
（南東から）



3　2トレンチ
（南西から）

図版39　Ⅲ層上面遺構完掘状況

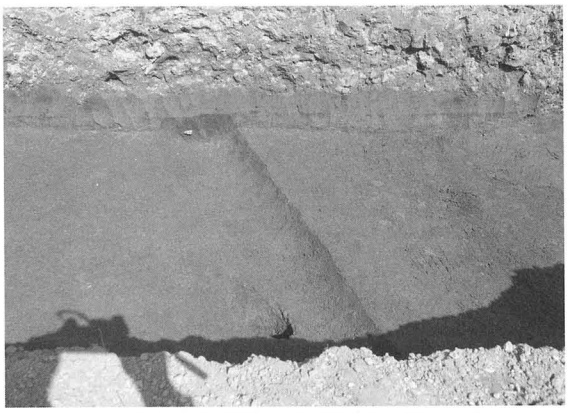


1　1トレンチSD1溝跡完掘（西から）

2　1トレンチSD1検出状況（北から）

3　1トレンチSD1溝跡完掘（南から）

4　1トレンチSD2溝跡完掘（南から）



5　2トレンチSD2溝跡完掘（南から）

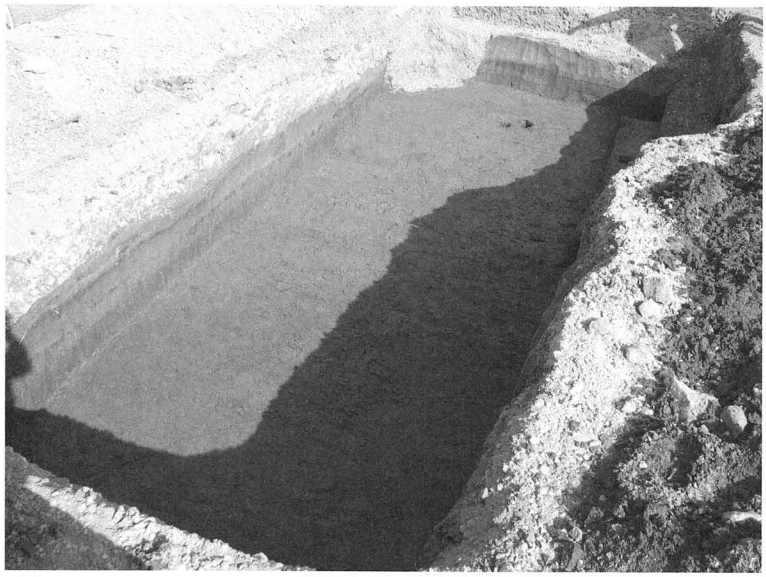
6　1トレンチSD2溝跡断面（南から）

7　1トレンチSK1土坑完掘（北西から）

8　1トレンチSK1土坑断面（東壁）

図版40　Ⅲ層上面遺構検出状況

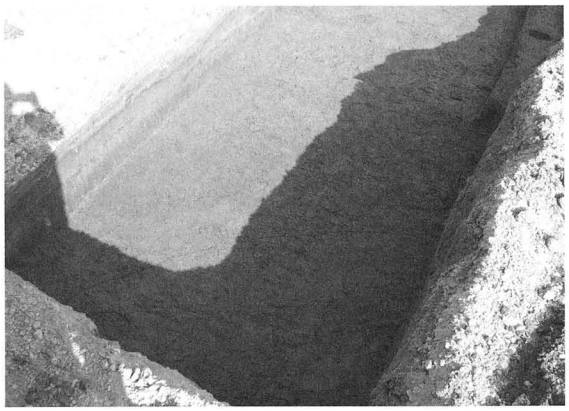
1　1トレンチ
（東から）



2　1トレンチ
（南西から）

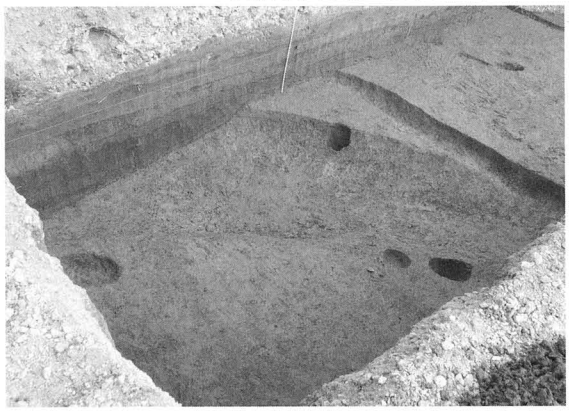
3　2トレンチ
（南西から）

図版41　Ⅴ層上面遺構検出状況

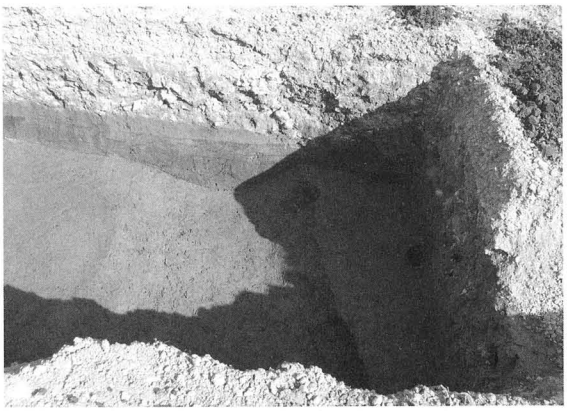


1　1トレンチ周溝検出状況（南西から）

2　2トレンチ周溝検出状況（南西から）



3　1トレンチ周溝完掘状況（南西から）

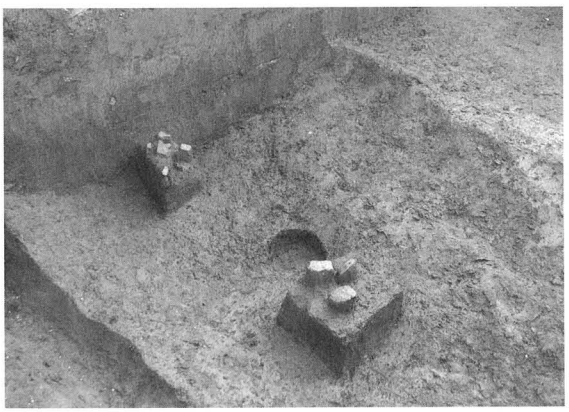


4　2トレンチ周溝完掘状況（南から）

5　1トレンチ26号墳周溝断面（南西から）

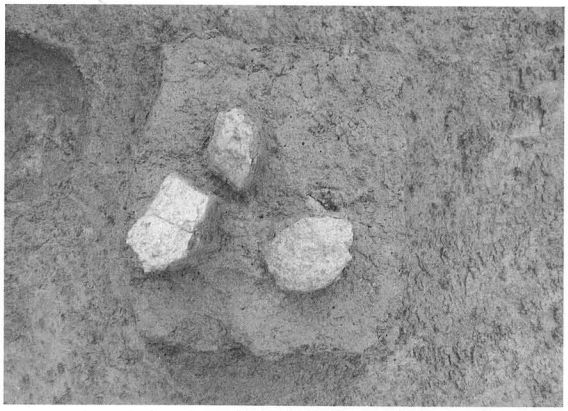
6　1トレンチ埴輪出土状況（西から）

7　1トレンチ埴輪出土状況（南から）



8　2トレンチ埴輪出土状況（北東から）

図版42　大野田26号墳周溝



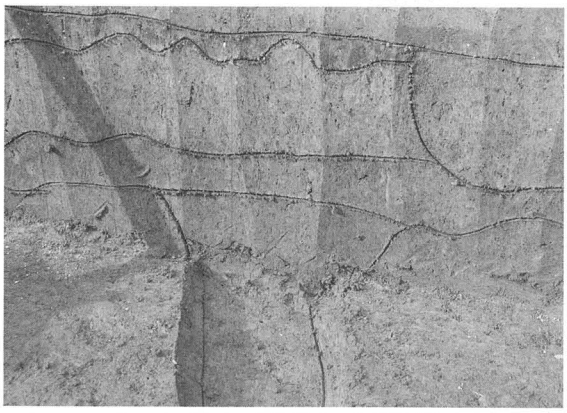
1　2トレンチ埴輪出土状況（南東から）

2　2トレンチ埴輪出土状況（北から）

3　1トレンチSD３溝跡完掘（南から）

4　1トレンチ北壁SD３溝跡断面

5　1トレンチSD４溝跡完掘（西から）



6　1トレンチ北壁SD４溝跡断面

7　2トレンチSD４溝跡完掘（北西から）

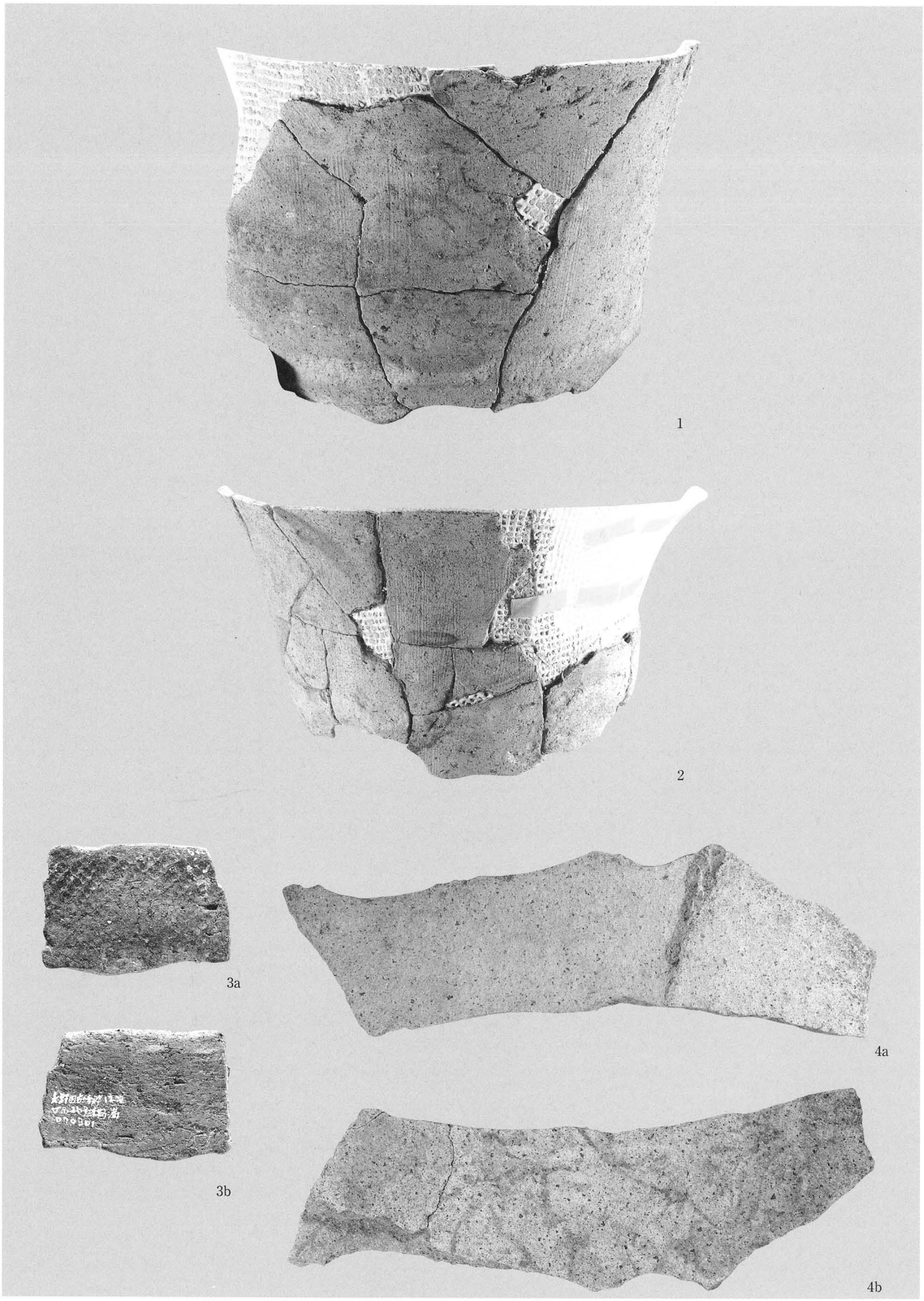
8　2トレンチ南壁SD４溝跡断面

図版43　Ⅴ層上面検出遺構

1　1トレンチ（東から）

2　2トレンチ（西から）

図版44　V層上面遺構完掘状況



図版45　大野田古墳群12次出土遺物

X　西台畑遺跡第６次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　西台畑遺跡（宮城県遺跡番号01005）

調 査 地 点　　仙台市長町副都心土地区画整理事業区域内20街区１番画地

調 査 期 間　　平成19年３月13日～３月20日

調査対象面積　　74.64㎡

調 査 面 積　　52㎡

調 査 原 因　　個人住宅建設

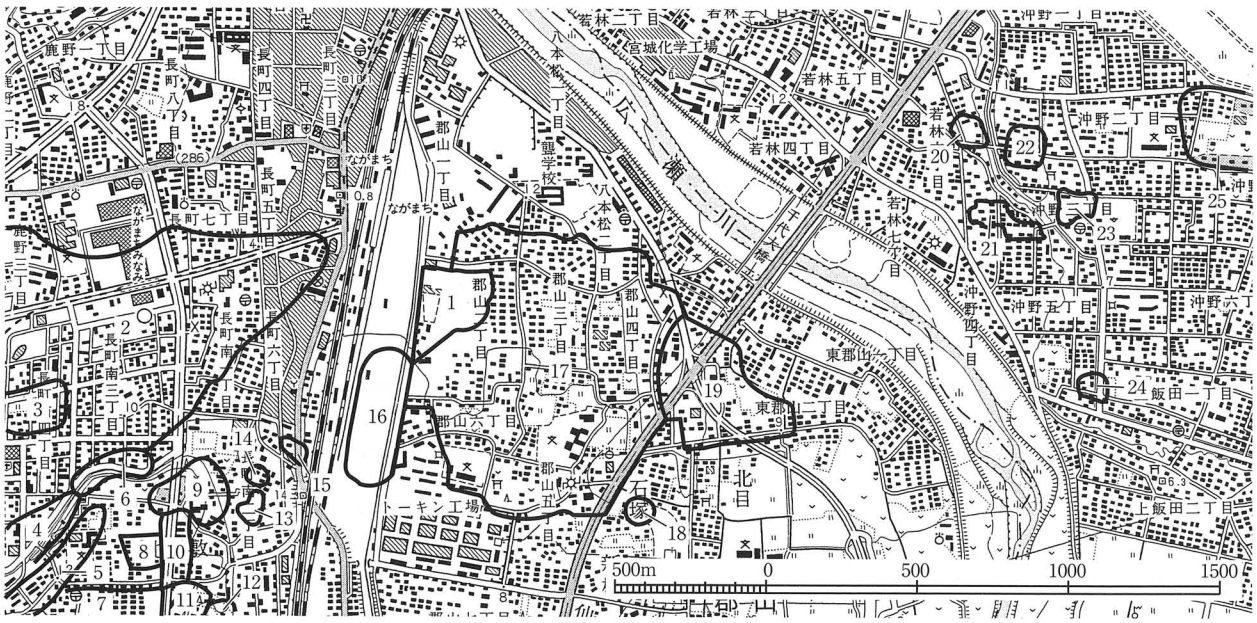
調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　主任　平間亮輔　　文化財教諭　早川潤一　藤田雄介　齋藤義彦

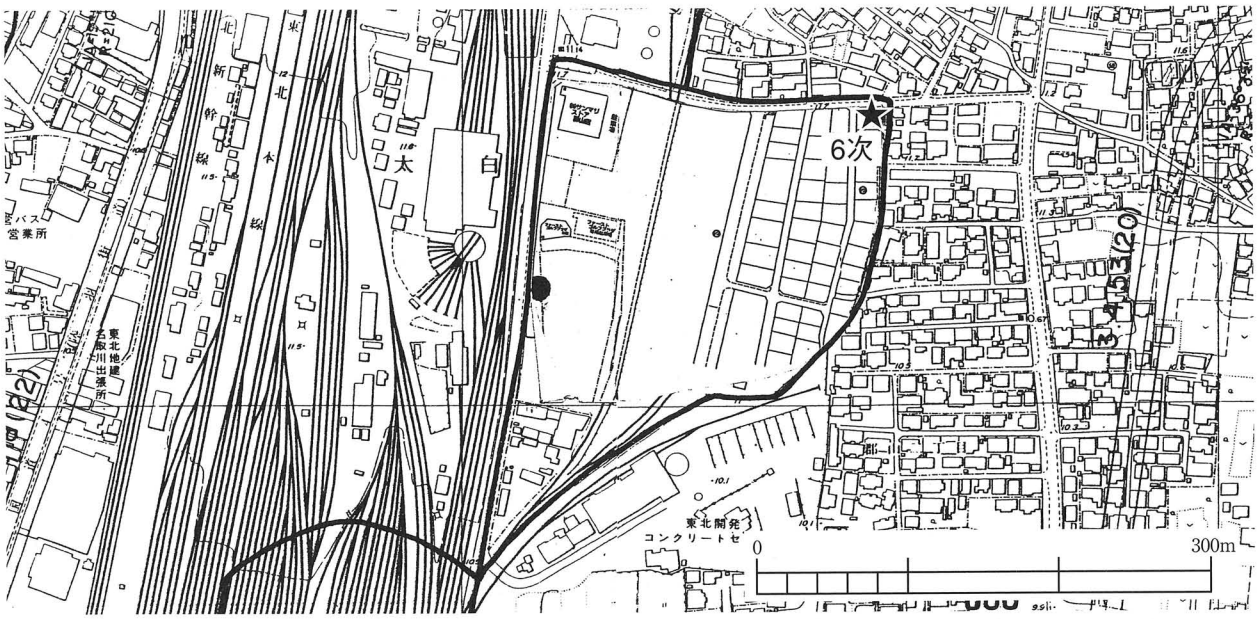
2　調査に至る経過と調査方法

平成19年２月２日付で、地権者相澤よね子氏より深さ６ｍのパイル打ちを伴う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施しその上で必要な場合は本調査を実施することとした。確認調査は３月13日に着手



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	西台畑遺跡	包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳	14	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
2	富沢遺跡	包含地・水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世	15	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
3	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡・墓跡	自然堤防・後背湿地	縄文～古墳・平安、近世	16	長町駅東遺跡	集落跡	鉄道敷地	弥生、古墳末、奈良初
4	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文早・前・後、弥生～中世	17	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初
5	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生～平安、近世	18	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
6	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安、奈良	19	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文後、弥生～近世
7	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	20	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
8	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安	21	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
9	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、奈良～近世	22	神柵遺跡	建物跡、包含地	自然堤防	奈良、平安
10	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文後、弥生中、古墳～平安	23	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～平安
11	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文後、弥生～中世	24	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
12	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	25	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
13	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安					

第55図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第56図　調査地点の位置

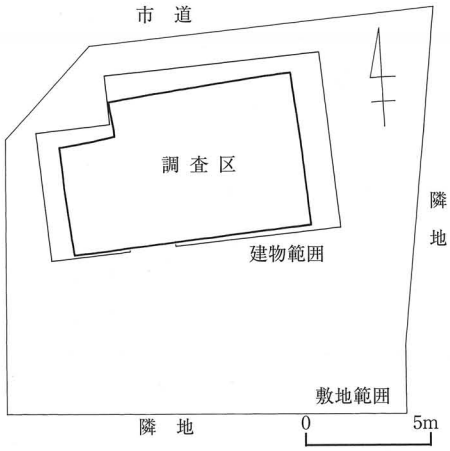
し、建物建築予定地に東西9.5m×南北６ｍの調査区を設定して調査を行った。重機により盛土、Ｉ層を掘り下げたところ、Ⅱ層上面から竪穴住居跡、溝跡、土坑などが検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区内に任意の国家座標２点Ⓐ、Ⓑを設定し、測量の基準点とした。平面図・断面図は1/20で作成した。

3　遺跡の位置と環境

ＪＲ長町駅から東方約100mの所にあり、東西220m、南北350mの範囲に広がっている。北を広瀬川、南を名取川が流れ、標高約11mの自然堤防上に立地している。調査地点は西台畑遺跡の北東隅に位置し、郡山遺跡の西に隣接している。

昭和32年、レンガ用の粘土採掘作業中に弥生時代中期の土器や埋設された合口土器棺墓が発見され、その後の調査で人骨片を伴った土坑墓も確認され、弥生時代の墓地であることが確認された。弥生時代中期の墓制と葬法を知る上で貴重な遺跡である。これまでに個人住宅建築や「あすと長町土地区画整理事業」に伴った発掘調査が実施されており、７世紀前半～８世紀初め頃の竪穴住居跡約140軒、古代の溝跡、土坑、掘立柱建物跡、中世の堀跡や井戸跡などが発見されている。出土遺物は７世紀中頃～８世紀初め頃の土師器・須恵器を中心に、弥生土器や関東系の土師器などが出土している。

近年の調査によって、西台畑遺跡は、長町駅東遺跡とともに、東に隣接する郡山遺跡の官衙や付属する寺院の造営や運営に関わった人々の集落であったことが明らかになってきている。



第57図　調査区配置図

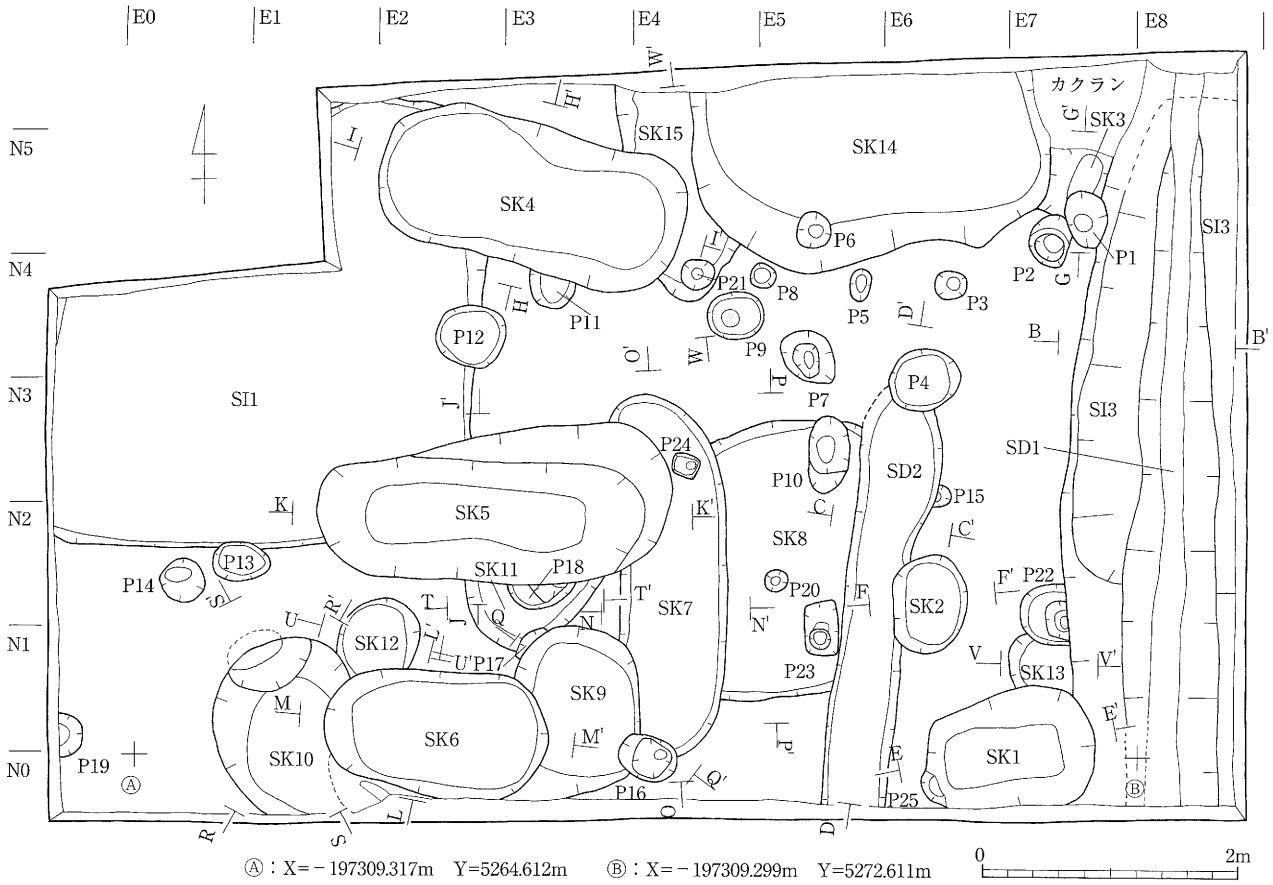
4　基本土層

調査地点の盛土は調査区東部にのみ分布し、東部での厚さは平均20cmあまりで、北側に向かって大きく傾斜し、調査区北東部では最大60cmを測る。基本層は土色、土性により大別２層、細別３層に分けた。Ｉ層はＩa層、Ｉb層に細分でき、調査区全体に見られるＩa層は下面に凹凸が見られることから旧耕作土と考えられる。Ｉb層は調査区西部に

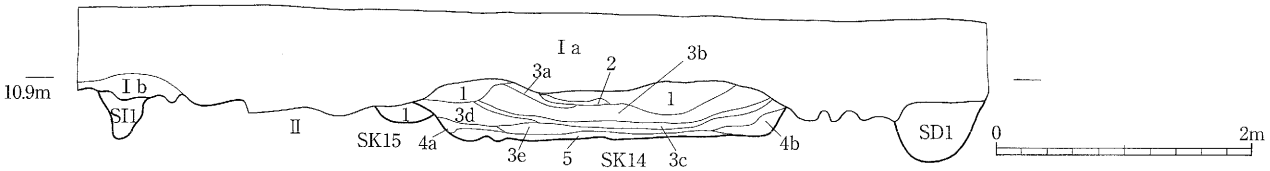
のみ見られた。遺構確認作業はⅡ層上面で行い、周辺の調査状況からこの面は古代の時期に相当する。

5　発見遺構と出土遺物

基本層Ⅱ層上面で、竪穴住居跡２軒、溝跡２条、土坑15基、ピット25基が発見された。

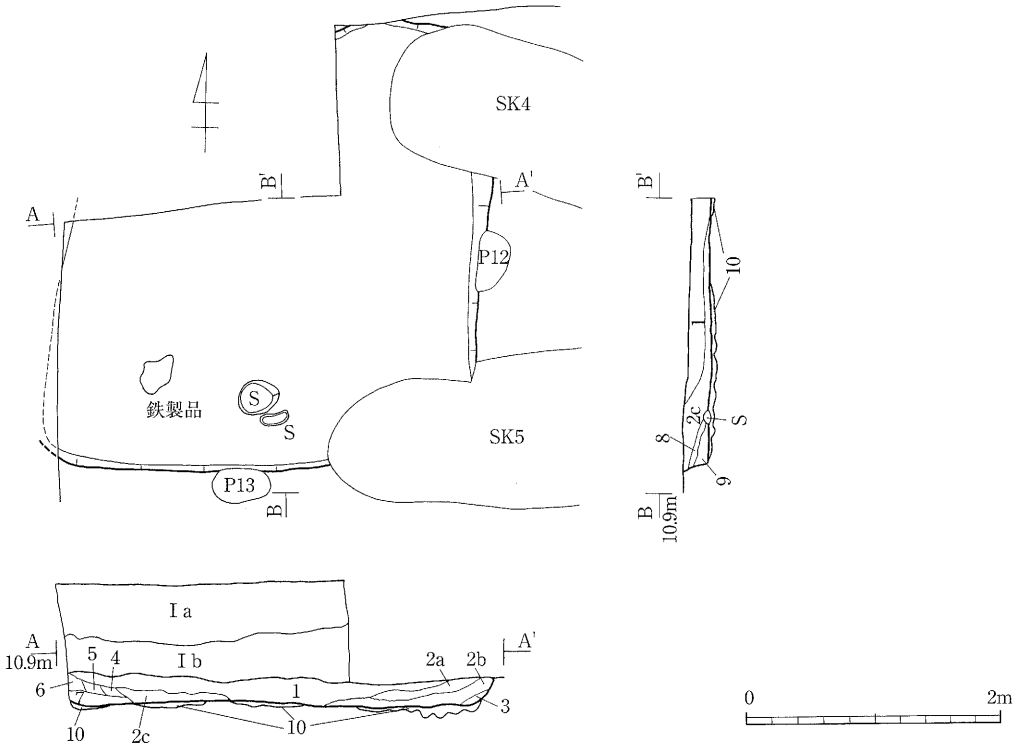


第58図　遺構配置図



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	小礫を多量に含む。褐色土ブロック（小）を多量に含む。
Ⅰb	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土をまだら状に多量に含む。炭化物粒を少量含む。
Ⅱ	10YR5/8　黄褐色	粘土	酸化鉄粒、炭化物粒を少量含む。
層　位	土　色	土　性	備　考
SK14-1	10YR5/8　黄褐色	シルト	東部に移行するにしたがって暗褐色土粒を多量に含み、同色に変化。
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒、焼土粒を少量含む。
3a	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物片、焼土粒を多量に含む。
3b	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	炭化物片、黄褐色土ブロック（小）をまばらに含む。
3c	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土、土器片、礫を多量に含む。
3d	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロックをまばらに含む。
3e	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土および黄褐色土を霜降状に含む。
4a	10YR5/6　黄褐色	シルト	暗褐色土ブロックを多量に含む。
4b	10YR5/6　黄褐色	シルト	暗褐色土を縞状に多量に含む。
5	10YR5/6　にぶい黄褐色	シルト質粘土	
SK15-1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロック（小）を多量に含む。

第59図　調査区北壁断面図



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SII-1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	暗褐色土と明黄褐色土をまだら状に多量に含む。
2a	10YR5/8　黄褐色	粘土	酸化鉄粒および炭化物粒を少量含む。
2b	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をまだら状に多量に含む。
2c	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	褐色土をまだら状に少量含む。
3	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	褐色土を霜降状に含む。
4	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒を少量含む。
5	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土粒を少量含む。
6	10YR6/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土をまだら状に少量含む。
7	10YR4/6　褐色	粘土	黄褐色土粒、ブロック（小）を少量含む。
8	10YR6/4　にぶい黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック（小）を少量含む。マンガン粒を少量含む。
9	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	下部に明黄褐色土が薄く堆積。
10	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	掘り方埋土。褐色粘土のブロック（小）およびにぶい黄褐色土のブロック（小）を多量に含む。一部グライ化。

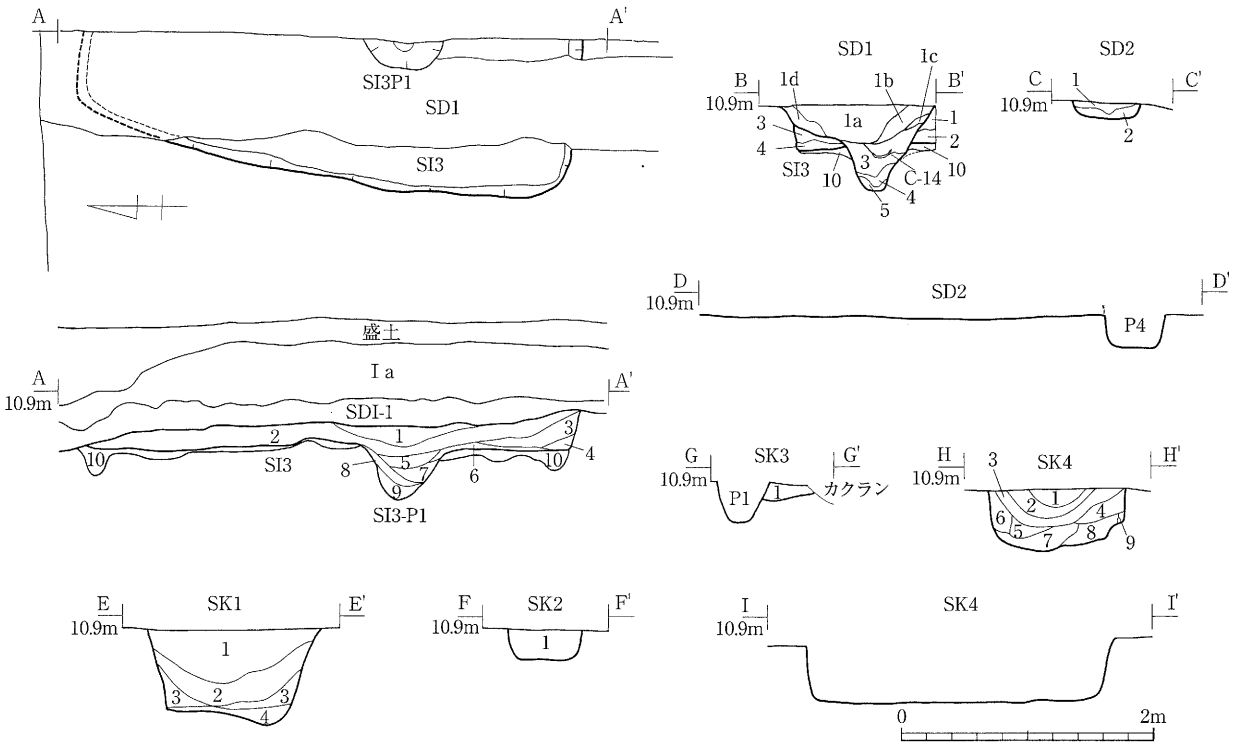
第60図　SI 1 竪穴住居跡平・断面図

1）竪穴住居跡

SI 1 竪穴住居跡　調査区北西部で検出された。遺構の北辺と北西部は調査区外に延びている。SK 4 土坑、SK 5 土坑およびP12、P13に切られている。検出部の最大長は南北約350cm、東西約340cmで、平面形は方形を呈するものと推察される。住居跡の南北軸は、東辺を基準としてN－5～6°－Wである。

堆積土は10層に分けられた。1層は人為的な埋め土、2～9層が自然堆積層、10層は掘り方の埋土であると考えられる。検出面から床面までは残りの良いところで20cm前後である。床面はほぼ平坦で、立ち上がりは直角に近い。床面で柱穴およびピット等は検出されなかった。カマドも検出されなかったが、北壁際の床面で焼土粒を多く含む部分が確認されていることから、調査区外の北辺中央付近にカマドが築かれていた可能性がある。掘り方の深さは3～10cmで、底面に大小の凹凸がある。出土遺物には、床面から出土したロクロ不使用の土師器坏（第64図1）がある。これは平底に近い丸底で、体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。外面調整は磨滅しており、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施された後に火熱を受け再酸化している。床面からはほかに須恵器、鉄製品などが出土し、堆積土中からも多数の土師器片や少数の須恵器片が出土している。

SI 3 竪穴住居跡　調査区北東部で検出された。遺構の東半部は調査区外に延びている。検出部のほぼ全面がSD 1 溝跡に切られている。検出部の最大長は南北約300cm、東西約140cmである。SD 1 溝跡の断面観察によって溝跡に切られる遺構であることが判明した。残存部から平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと推察される。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SI3－1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒をまだら状および縞状に含む。
2	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒を多量に含む。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を微量に含む。炭化物を含む。
4	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土をまだら状ないしブロック状に含む。
5	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土ブロック（小）・暗褐色土粒を多量に含む。
6	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒を微量に含む。
7	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土ブロック（小）・暗褐色土粒を多量に含む。
8	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロック（小）を少量含む。
9	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	暗褐色土を微量に含む。
10	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	掘り方埋土。暗褐色土ブロックを多量に含む。
SD1-1a	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を微量に含む。
1b	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒、暗褐色土ブロック（小）を多量に含む。
1c	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	暗褐色土が薄く堆積。
1d	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	褐色土粒を多量に含む。
2	10YR5/6　褐色	シルト	黄褐色土粒を霜降状に含む。下部に暗褐色土を多量に含む。土師器坏出土。
3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒をまだら状に含む。
4	10YR5/6　褐色	シルト質粘土	褐色土粒をまだら状に含む。
5	10YR5/8　黄褐色	砂質シルト	褐色土ブロック（小）を少量含む。
SD2-1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒および土器片を含む。
2	10YR4/6　褐色	シルト	暗褐色土ブロックを含む。
SK1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を霜降状に含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土粒を微量に含む。
3	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘土質シルト	暗褐色土を縞状に含む。
4	10YR3/3　暗褐色	粘土	にぶい黄橙色土ブロックを含む。
SK2-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	大小の褐色土ブロックを多量に含む。
SK3-1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒を霜降状に含む。
SK4-1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を霜降状に含む。
2	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色土を霜降状に含む。にぶい黄橙色土ブロックを含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄橙色土粒を微量含む。
4	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土ブロック（小）を縞状に含む。
5	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土粒を微量に含む。
6	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土ブロックを少量含む。
7	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄橙色土ブロックを含む。
8	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄橙色土ブロックを少量含む。
9	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土粒を微量に含む。

第61図　遺構平・断面図

床面で柱穴およびカマド、ピット等は検出されなかったが、調査区東壁を観察したところ、中央部にピット状の落ち込みが見られたため、SI３－P１とした。

調査区東壁での観察から、堆積土は11層に分けられた。そのうち１～５層が自然堆積層、６～８層はSI３－P１の堆積土で、11層は掘り方の埋土であると考えられる。床面はほぼ平坦で、立ち上がりは直角に近い。掘り方の深

さは３～10cmで、底面に大小の凹凸がある。SD１溝跡にほとんど切られていたため、遺物は確認されなかった。

２）溝跡

SD１溝跡　調査区東壁際で調査区を南北方向に横断するよう検出され、方向はおおむねＮ－３～４°－Ｅである。SI３竪穴住居跡を切り、SK１土坑に切られている。検出部での規模は上端幅70～135cm、下端幅15～25cm、深さは70cm前後で、断面形はおおむねＶ字形を呈している。堆積土は大別５層に分けられ、褐色もしくは黄褐色の粘土質シルトが主体である。遺物は、内面が黒色処理された体部外面に段を有する土師器坏（第64図５・６）、内面・外面ともにヘラケズリしてある甑底部片（第64図７）、口縁部内外に波状文のある須恵器壷片（第64図８）が堆積土の上層で出土したほか、多数の土師器片や須恵器片が出土した。

SD２溝跡　調査区中央やや東寄りでほぼ南北方向で検出された。南側は調査区外に延びている。方向はおおむねＮ－５～６°－Ｅである。SK２土坑、SK８土坑、P15を切り、Ｐ４に切られている。検出部での規模・形態は上端幅50～65cm、下端幅40～50cm、深さは７cm前後で、断面形は浅いＵ字形を呈している。堆積土は２層に分けられる。堆積土１層からは、口縁部が外反し、口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面はヘラケズリされているロクロ不使用の土師器高坏片（第64図３）が出土した。他に口縁部が短く直立し、口縁部内外面がヨコナデ、外面体部がヘラケズリ、体部内面がヘラミガキしてあるロクロ不使用の土師器坏片（第64図２）も出土した。

３）土坑

調査区内で15基検出された。平面形は楕円形や不整な隅丸方形などである。検出部での規模は、長軸40～290cm、短軸20～140cm、深さは16～68cmと、規模は多様である。堆積土は暗褐色ならびに黄褐色系の粘土質シルトおよびシルト質粘土が主体である。

SK１土坑　調査区南東部の南壁際で検出された。南側は調査区外に延びている。SD１溝跡、SK13土坑を切っている。平面形は不整な隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の最大長は東西約150cm、南北約80cmである。最深部の深さは76cmで、断面形は逆台形である。堆積土は大別４層に分けられる。遺物は土師器片が１点出土したのみである。

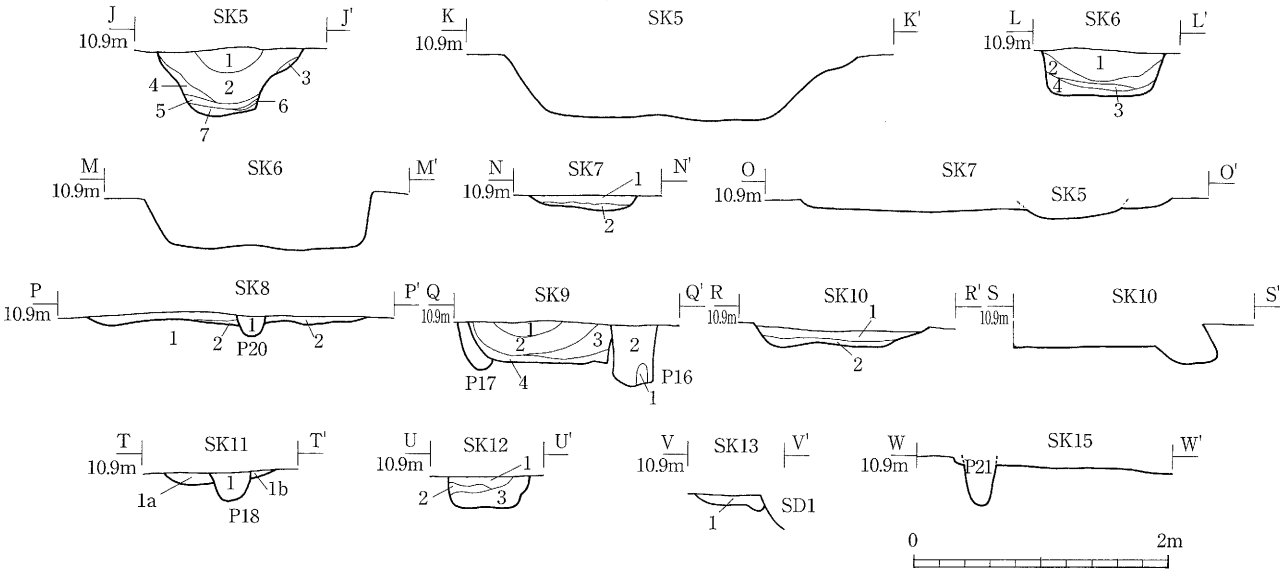
SK２土坑　調査区南東部で検出された。平面形は楕円形を呈している。SD２溝跡に切られている。検出部の最大長は南北約78cm、東西約58cmである。深さは24cmで、断面形はＵ字形を呈している。堆積土は大小の黄褐色土ブロックを多く含んだ暗褐色粘土質シルトである。遺物は土師器片が２点のみ出土した。

SK３土坑　調査区北東部で検出された。SD１溝跡、Ｐ１、Ｐ２に切られている。平面形は楕円形を呈するもの、と考えられる。検出部の最大長は南北約30cm、東西約20cmである。深さは24cmで、断面形は舟底形を呈するものと推察される。堆積土は１層である。遺物は土師器片が２点出土したのみである。

SK４土坑　調査区北西部で検出された。SI１竪穴住居跡、SK14土坑、P11を切っている。平面形は隅丸長方形を呈している。検出部の規模は南北約2.4m、東西約1.1m、深さは53cmで断面形はＵ字形を呈する。堆積土は大別８層に分けられた。遺物は土師器片９点や須恵器片１点が出土した。

SK５土坑　調査区中央部で検出された。SI１竪穴住居跡、SK７土坑、SK11土坑、P18を切っている。平面形は不整な楕円形を呈している。検出部の規模は東西約2.8m、東西約1.2m、深さは53cmで、断面形はおおむね舟底形を呈する。堆積土は大別７層に分けられた。遺物は土師器小片が20点余り出土した。

SK６土坑　調査区中央の南壁際で検出された。遺構の南東部分は調査区外に延びている。SK９土坑、SK10土坑、SK12土坑を切っている。平面形は不整な楕円形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の規模は南北約1.8m、東西約95cm、深さは37cmである。断面形は逆台形を呈している。堆積土は大別４層に分けられた。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SK5-1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒・黄褐色土粒を微量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	灰黄褐色土ブロックをまばらに少量含む。明黄橙色土粒を微量に含む。
3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土ブロック（小）を少量含む。酸化鉄粒を少量含む。
4	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘土質シルト	灰黄褐色土ブロックを部分的に含む。明黄褐色砂を微量に含む。
5	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土ブロック（小）を微量含む。褐灰色土を縞状に少量含む。
6	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土粒を少量含む。
7	10YR6/3　にぶい黄橙色	シルト	灰黄褐色土ブロック（小）を少量含む。下部に明黄褐色シルトをまだら状に少量含む。
SK6-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色土粒を部分的にまばらに含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色土をブロック状に含む。
3	10YR3/1　黒褐色	シルト	灰および炭化物を多量に含む。
4	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄色粘土ブロックを少量含む。
SK7-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	土器片、炭化物粒、褐色土粒をまばらに含む。
2	10YR5/6　灰褐色	粘土	暗褐色土ブロック、炭化物を含む。
SK8-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物、土器片を多量に含む。
2	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	焼土、炭化物を多量に含む。土器片を含む。
SK9-1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土ブロック（小）をまばらに含む。炭化物片を微量に含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	黒褐色土ブロック（小）、にぶい黄橙色土ブロックをまばらに含む。
3	10YR2/3　黒褐色	粘土	暗褐色土ブロック（小）を微量に含む。黄褐色土ブロックを少量含む。
4	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	暗褐色土、にぶい黄褐色土ブロックをまだら状に多量に含む。
SK10-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を霜降状に含む。礫を含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土ブロックを多量に含む。
SK11-1	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土、にぶい黄褐色土ブロック（小）を多量に含む。酸化鉄粒をまばらに含む。
2	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄粒および褐色土をまばらに含む。
SK12-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	土器片、褐色土ブロック、褐色土粒を多量に含む。
2	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土ブロック（小）をまばらに含む。
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒、黄褐色土粒を含む。
SK13-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土ブロックを多量に含む。
P16-1	10YR4/4　褐色	粘土	柱痕跡（直径約12cm）。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土	褐色土ブロックをまだら状ないし縞状に多量に含む。
P17-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄橙色土粒を微量に含む。
P18-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒、黄褐色土ブロック（小）をまばらに含む。
P20-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロック（小）、炭化物を含む。

第62図　土坑断面・エレベーション図

遺物は土師器片が20点ほど出土した。

SK７土坑　調査区中央南部で検出された。SK９土坑を切り、SK５土坑、P16、P24に切られる。平面形は楕円形を呈する。検出部の規模は南北約2.9m、東西約85cm、深さ10cmで、断面形は浅い舟底形である。堆積土は大別２層に分けられた。出土遺物は、口縁部と体部に段を持ち、口縁部が短く屈曲する土師器坏片（第63図３）のほか、土師器片が20点ほどである。

SK８土坑　調査区中央南部で検出された。SD２溝跡、SK７土坑、P10、P20、P23に切られる。平面形は不整な円形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。検出部の最大長は南北約2.2m、深さは10cmで、断面形は浅い舟底形を呈する。堆積土は２層に分けられた。出土遺物には、須恵器壷片のほか内面ナデ調整で口縁部が屈曲する土師

器坏（第63図１）と内面黒色処理された土師器坏（第63図２）などがある。

SK９土坑　調査区中央南部で検出された。SK12土坑を切り、SK９土坑、SK10土坑に切られる。平面形は不整な隅丸方形を呈している。検出部の最大長は南北約135cm、東西約95cmである。深さ35cmで、断面形は舟底形もしくは逆台形を呈している。堆積土は大別４層に分けられた。土師器片が約10点出土した。

SK10土坑　調査区南西部の南壁際で検出され、遺構の南側部分は調査区外に延びる。SK６土坑に切られている。平面形は不整な隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の規模は南北約1.4m、東西約1.1m、深さは15cmである。断面形は扁平な舟底形で、中央部に凹みが見られる。堆積土は大別２層に分けられた。遺物は土師器小片がわずかに出土した。

SK11土坑　調査区中央西部で検出された。平面形は不明である。SK５土坑、P18に切られている。検出部の最大長は東西約90cm、南北約50cmである。深さ10cmで、断面形は扁平なＵ字形である。堆積土は大別２層に分けられた。遺物は出土していない。

SK12土坑　調査区南西部で検出された。SK６土坑に切られている。平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。検出部の規模は東西約67cm、深さは25cmで、断面形は壁がほぼ直角に立つＵ字形である。堆積土は３層に分けられた。遺物は土師器片や須恵器片が出土した。

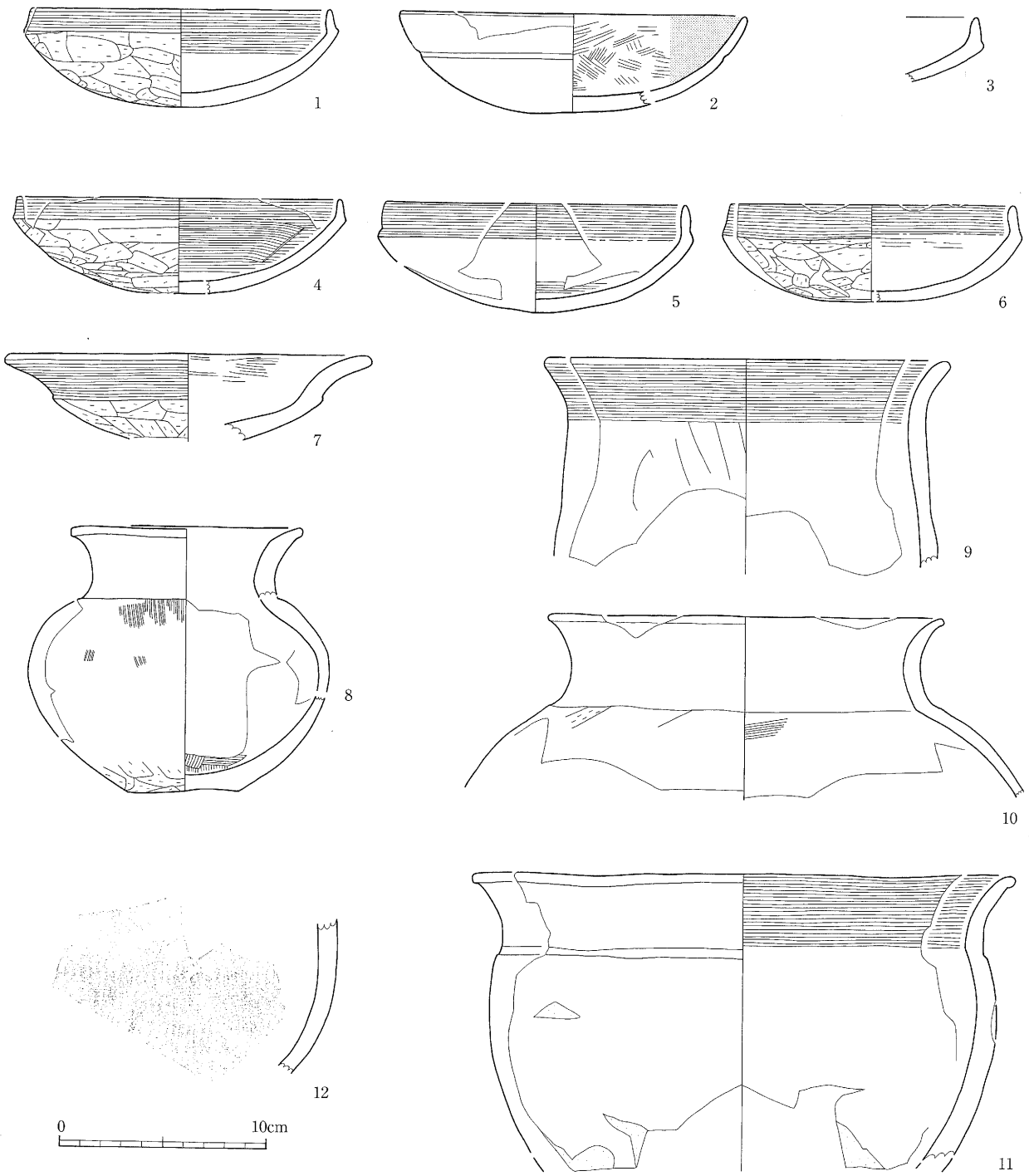
SK13土坑　調査区南東部で検出された。SD１溝跡、SK１土坑、P22に切られている。平面形は不明である。検出部の最大長は東西約12cmである。断面はSD１溝跡と接する側の東部のみくぼんでいるが、おおむね扁平な舟底形と推定でき、深さ７cm、最深部では12cmである。堆積土は１層である。遺物は土師器片が出土した。

SK14土坑　調査区北壁際やや東寄りで検出された。北側部分は調査区外に延びている。平面形は不整な隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の最大長は南北約1.5m、東西約2.7mで、断面形は舟底形、最も深い部分は約50cmである。調査区北壁での観察から、堆積土は大別５層に分けられた。遺物は高坏脚部を含む多数の土師器小片、須恵器片や大小の礫が多数出土した。口縁部内外面がヨコナデで、口縁部が屈曲する土師器坏３点（第63図４～６）、口縁部と体部の外面に段を持ち、口縁部が外傾しており、内面はヘラミガキのみで、SD２溝跡から出土した同一個体と思われる、脚部がない土師器高坏片１点（第63図７）、体部と口縁部がくびれ、口縁部が外反する土師器甕２点（第63図10・11）、体部と口縁部にくびれがなく、口縁部がゆるやかに外傾している土師器甕１点（第63図９）、小形の土師器壷１点（第63図８）といったロクロ不使用の土師器と、体部の内外面にタタキ目のある須恵器甕の体部片（第63図12）は図化した。

SK15土坑　調査区中央北壁際で検出された。北側部分は調査区外に延びている。SK４土坑、SK14土坑、P21に切られている。平面形は不明で、検出部分は南北約1.7mである。最も深い部分は15cmで、断面形は扁平な舟底形と考えられる。出土遺物はない。

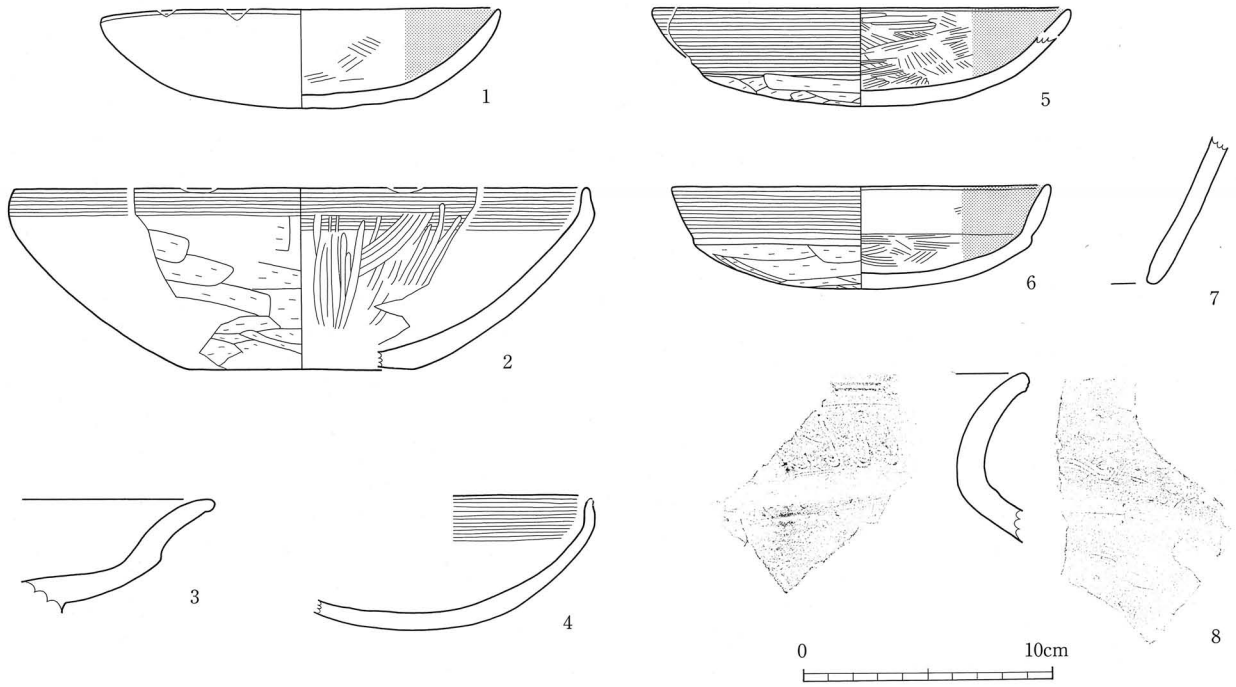
４）ピット

調査区内で25基検出された。P23、P24の平面形が隅丸方形以外は、円形ないし楕円形を基調とする平面形で、規模は長径20～55cm、短径20～50cm、深さは7～54cmである。柱痕跡はP16、P22、P23、P24の４基検出されたが、建物や塀など一連の遺構となるものはない。堆積土の多くは褐色ならびに暗褐色、にぶい黄褐色のシルト質粘土で、黄褐色ならびに褐色の小ブロックを含んでいる。遺物は、Ｐ４からは外面ヘラケズリ、内面ヨコナデで、口縁部と体部の境にわずかに段を有する土師器坏片が、P18からは内面ナデ調整され、口縁部が屈曲する土師器坏片（第64図４）が出土したほか、Ｐ５、Ｐ６、P11、P12、P15、P16、P24をのぞくピットの堆積土中から土師器片がそれぞれわずかに出土した。



図中番号	登録番号	出土地点 遺構名	出土地点 遺構層	分類 種別	分類 器種	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	特徴・備考（調整・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	C-18	SK8		非ロクロ土師器	坏				外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：口縁部～体部ヨコナデ	56-1
2	C-19	SK8	1	非ロクロ土師器	坏	4.9	16.8		外面摩滅　内面：ヘラミガキ、黒色処理	56-2
3	C-17	SK7	1	非ロクロ土師器	坏				外面：口縁部ヨコナデ、ウルシ仕上げ　内面：口縁部ヨコナデ	56-3
4	C-2	SK14		非ロクロ土師器	坏	5.3	14.6		ウルシ仕上げ　外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：ヨコナデ　蓋の可能性あり	56-4
5	C-1	SK14		非ロクロ土師器	坏	4.7	15.7		ウルシ仕上げ　外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	56-5
6	C-6	SK14		非ロクロ土師器	坏	4.7	13.6		外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	56-6
7	C-9	SK14		非ロクロ土師器	高坏	(4.1)	17.4		外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ	56-7
8	C-4	SK14		非ロクロ土師器	壺	12.9	11.1	5.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ　底部：ヘラケズリ	56-11
9	C-8	SK14		非ロクロ土師器	甕	(9.7)			外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ	56-9
10	C-5	SK14		非ロクロ土師器	甕				外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ　内面：ヘラナデ	56-10
11	C-3	SK14		非ロクロ土師器	甕	(13.5)	26.0		内外面摩滅	56-12
12	E-1	SK14	3	須恵器	甕				外面：タタキ　内面：タタキ	56-8

第63図　出土遺物１



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴・備考（調整・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
		遺構名	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	C-11	SI1	底面	非ロクロ土師器	坏	4.0	19.9		外面摩滅　内面：ヘラミガキ黒色処理後再酸化	57-1
2	C-16	SD2	1	非ロクロ土師器	坏				外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	57-6
3	C-15	SD2	1	非ロクロ土師器	高坏				C-9と同一個体か	57-3
4	C-20	P18		非ロクロ土師器	坏				外面：口縁部ヨコナデ	57-4
5	C-12	SD1	1	非ロクロ土師器	坏	3.9	16.9		外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	57-5
6	C-14	SD1	2	非ロクロ土師器	坏	4.2	15.0		外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ　内面：口縁部～体部ヘラミガキ	57-2
7	C-13	SD1		非ロクロ土師器	甑				外面：ヘラケズリ	57-7
8	E-2	SD1	1,2	須恵器	甕				内外面：口縁部波状沈線	57-8

第64図　出土遺物２

５）出土遺物

基本層Ⅰ・Ⅱ層から土師器片や少量の須恵器片が出土し、調査区全体からテンバコ４箱ほどの遺物が出土した。ロクロ不使用の土師器18点、須恵器２点を掲載した。

ロクロ不使用の土師器の甕や高坏、須恵器は、破片資料のため器形・器高が明らかではなく、時期を特定するには不十分と考え、形態や調整技法がわりと明瞭な土師器の坏と小形壷の時期を検討した。

出土した土師器坏は、東北地方南部における古墳時代後期の土師器型式である栗囲式期の土師器と関東系土師器に分けられる。栗囲式期の坏は、外面の口縁部と体部に段や稜を有した丸底で、内面にはヘラミガキが施され、黒色処理されることが特徴的である。口縁部が外傾しているもの（第64図６）、口縁部が内弯気味に立ち上がるもの（第64図５）、口縁部がゆるやかに外傾しているもの（第63図２）の他に、平底に近い丸底で体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの（第64図１）などがある。それぞれ郡山Ⅰ期官衙期からⅡ期官衙期にかけて類例が見られる。

関東系土師器は、関東地方における古墳時代後期の土師器型式である鬼高式や真間式と呼ばれる土師器と同様か、類似している土師器のことをいい、過去に西台畑遺跡や郡山遺跡、長町駅東遺跡でも多く出土している。そのうち鬼高式土師器に近いものは、ヘラケズリを施される体部外面とヨコナデで仕上げられる口縁部が直立ないし内傾して立ち上がり、内面調整はヨコナデであることが特徴とされる。第63図４、５は口縁部と体部の外面に稜を有し、口縁部は短くほぼ直立し、内外面とも漆で仕上げられている。これと同様に内外面とも漆で仕上げのものが、プレⅠ－Ａ期にあたる郡山遺跡の官衙以前の竪穴住居跡で出土している。口縁部は短く直立もしくは内弯し、内面は口

縁部のみか体部上部にかけてヨコナデされている坏（第63図１・６、第64図４）は、郡山プレⅠ－Ｂ期の遺物に類似例がある。口縁部が短く直立し、口縁部内外面がヨコナデ、外面体部がヘラケズリ、体部内面がヘラミガキしてある平底の坏（第64図２）は、郡山プレⅠ－Ａ期の竪穴住居跡出土のものに類似している。

口縁部内外面はヨコナデ、体部上部はハケメ、体部下部はヘラケズリ、体部内面はヘラケズリで、最大径が球形の体部にある平底の小型壷（第63図８）は、郡山廃寺の井戸跡から形状や調整技法が類似しているものが出土しており、８世紀初頭の郡山Ⅱ－Ｂ期にあたる。

6　まとめ

基本層Ⅱ層上面で、竪穴住居跡２軒、溝跡２条、土坑15基、ピット25基が発見され、遺物はロクロ不使用の土師器、関東系土師器、須恵器などが出土した。

出土遺物の検討と過去の周辺の調査成果をふまえた結果、遺構の時期や性格は次のように考えられる。

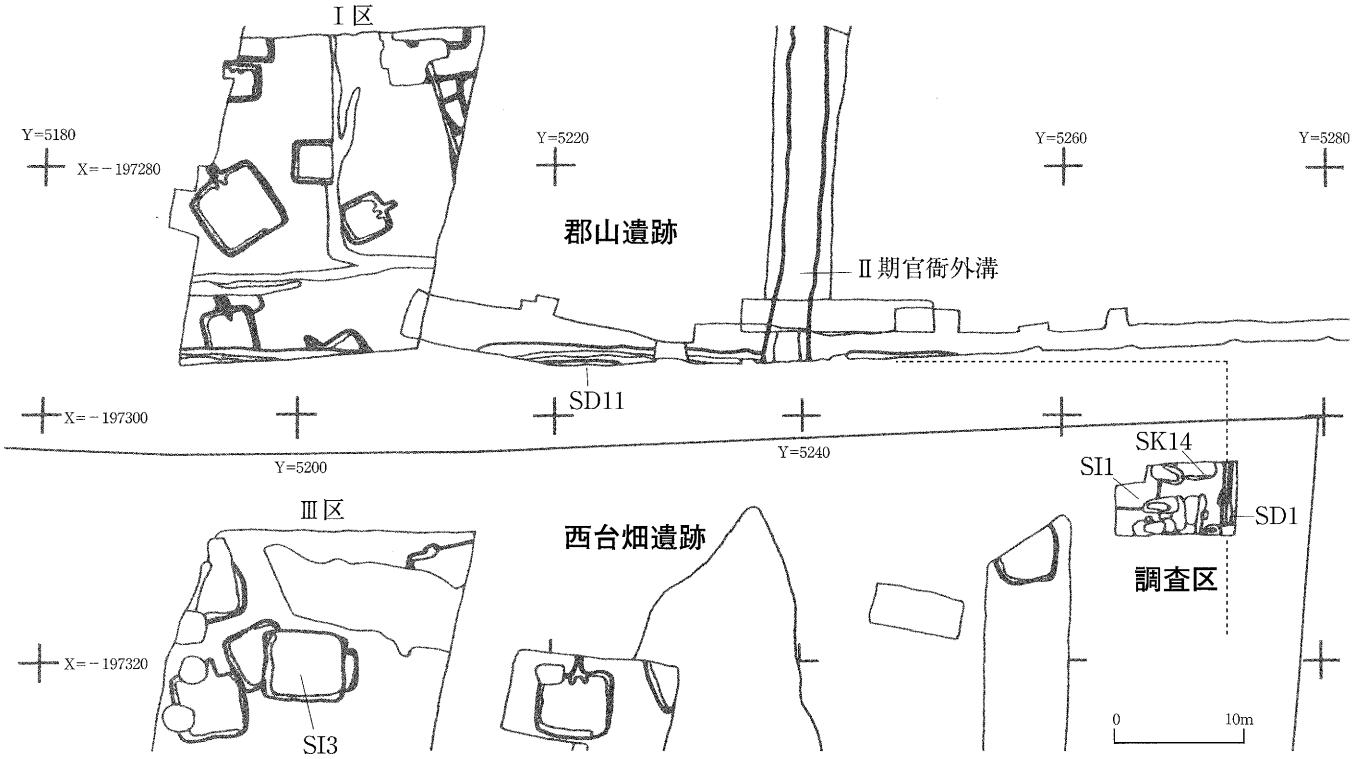
① SD１溝跡は、出土遺物の堆積状況から７世紀中頃～後半にかけての郡山Ⅰ期官衙期中頃から末期までには埋まっている可能性がある。本調査区から北東に位置する郡山遺跡Ⅰ区で発見されたSD11溝跡と本調査区のSD１溝跡は連続する遺構で、郡山プレⅠ－Ｂ期の区画溝との指摘がある（註１）が、限られた範囲の調査のため、今後も周辺の調査成果を取り入れながら検討を要する。

② SD１溝跡に切られているSI３竪穴住居跡はSD１溝跡より古く、７世紀中頃以前にさかのぼると考えられる。

③ SI１竪穴住居跡は、第65図の西台畑遺跡Ⅲ区SI３竪穴住居跡とほぼ方向が同じである。西台畑遺跡Ⅲ区SI３竪穴住居跡は、郡山Ⅱ期官衙期に相当する時期のものと考えられており、本調査区のSI１竪穴住居跡は郡山Ⅱ期官衙期前半の７世紀末から８世紀初め頃に機能していたことが考えられる。

④ SK14土坑の堆積土からは、郡山プレⅠ－Ａ期から郡山Ⅱ－Ｂ期にかけての栗囲式土師器や関東系土師器の破片が混在しまとまって出土していることから、８世紀初頭以降に一括して廃棄された可能性がある。

（註１）「長町駅東遺跡・西台畑遺跡の調査から」（工藤信一郎2008）の中で指摘されている。本調査区から北東に位置する郡山遺跡Ⅰ区で発見されたSD11溝跡（以下「SD11溝跡」と記す）は、ほぼ東西方向に伸びており、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の外溝に切られている。この溝跡と郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙大溝推定ラインの西辺とほぼ並行している今回検出されたSD１溝跡は、規模、断面の形状および堆積土の状況から連続する遺構と考え、「SD11溝跡」がSD１溝跡の延長上の方四町Ⅱ期官衙外郭大溝の北西隅近くで南に曲がることを想定している。「SD11溝跡」とSD１溝跡は郡山遺跡Ⅰ期官衙が置かれる以前のプレⅠ－Ｂ期に形成された区画溝の可能性を考えている。



第65図　周辺の調査成果（工藤信一郎2008を一部改変）

＜引用・参考文献＞

工藤信一郎2007『長町駅東遺跡第４次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第315集

工藤信一郎2008「長町駅東遺跡・西台畑遺跡の調査から」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.75-98

工藤哲司2004「非ロクロ土師器の変遷」『鴻ノ巣遺跡第７次発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第280集pp.246-276

長島榮一2005『郡山遺跡発掘調査報告書』総括編１仙台市文化財調査報告書第283集

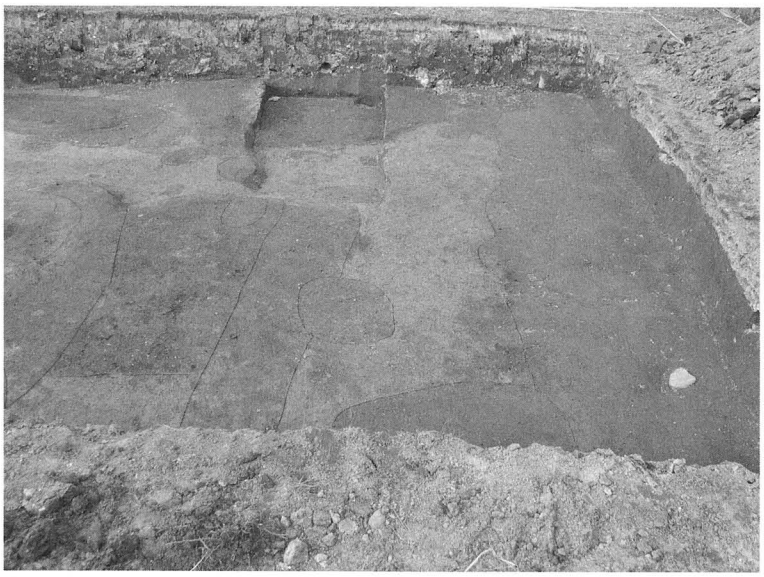
村田晃一1998「栗囲式土器の成立と展開」『東北大学文学部考古学研究会会報』２pp.36-41

村田晃一2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学』２pp.45-80

村田晃一2007「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
東北学院大学文学部pp.119-163

1　調査区全景
（南東から）

2　調査区西部
（南から）



3　調査区東部
（南から）

図版46　遺構検出状況

1　調査区全景
（南東から）

2　調査区西部
（南から）

3　調査区東部
（南から）

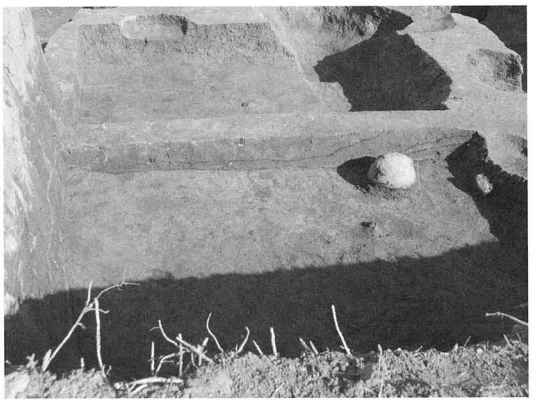
図版47　遺構完掘状況

1　北壁

2　北壁中央

図版48　基本層序

1　完掘状況（東から）



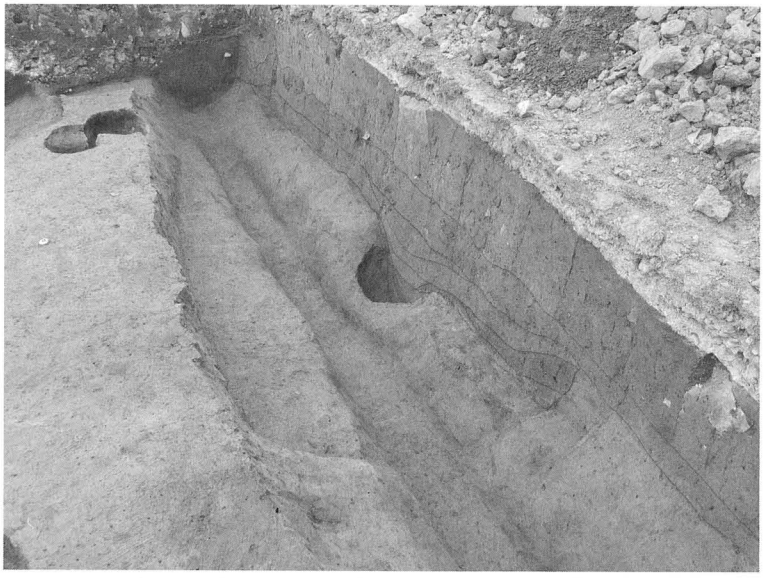
2　南北ベルト（西から）

3　東西ベルト（南から）

4　鉄製品出土状況（東から）

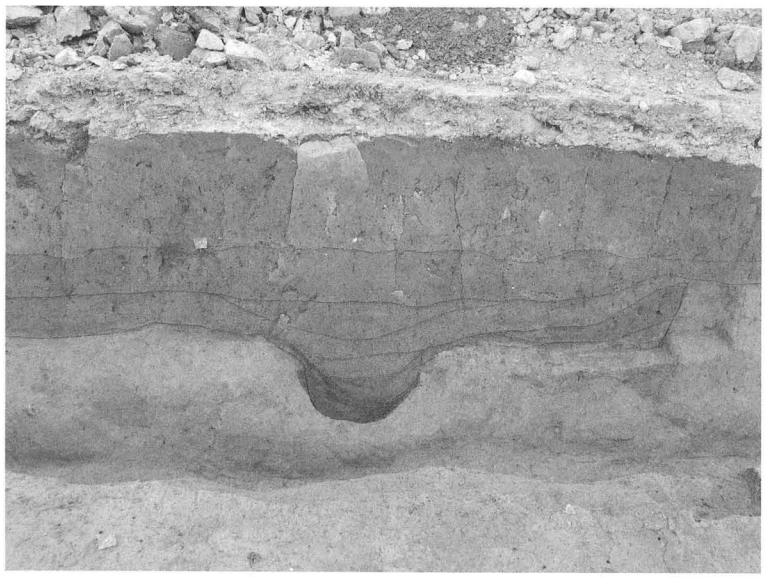
5　遺物出土状況（南東から）

図版49　SI 1 竪穴住居跡



1　完掘状況
（南から）

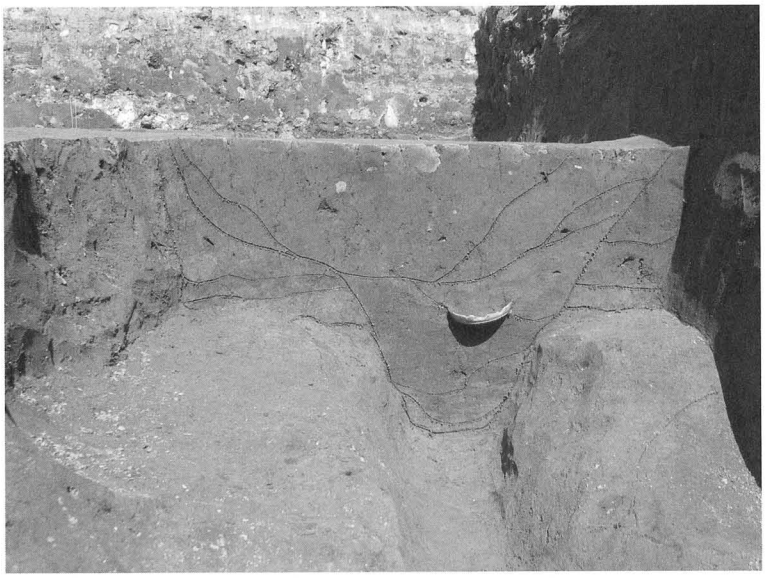
2　東壁北部断面



3　東壁南部断面

図版50　SI３竪穴住居跡

1　完掘状況
（南から）



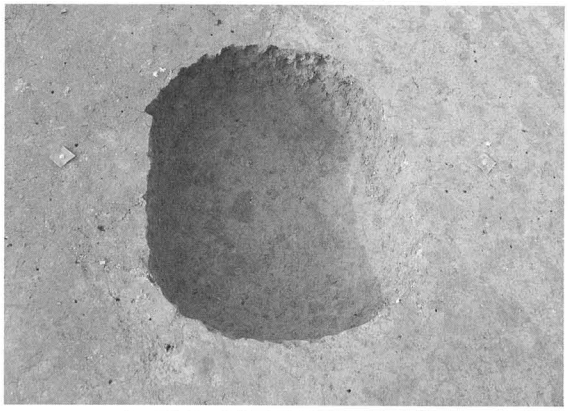
2　SD１溝跡断面
（南から）

3　坏（第64図６）出土状況
（南から）

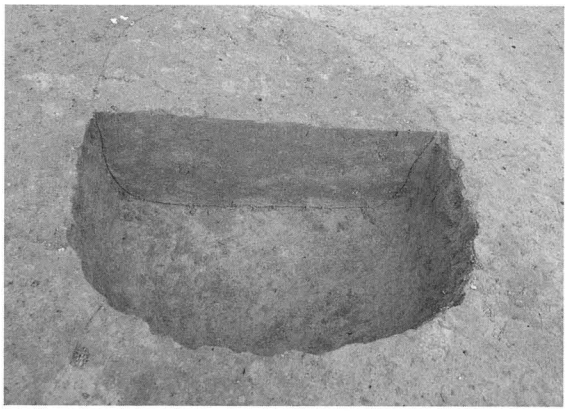
図版51　SD１溝跡

1　SK１土坑完掘状況（東から）

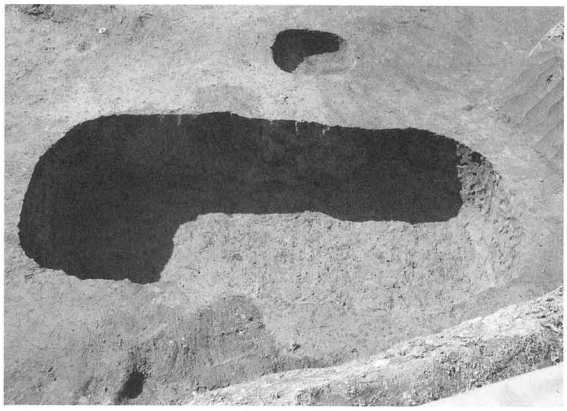
2　SK１土坑断面（南東から）



3　SK２土坑完掘状況（南から）



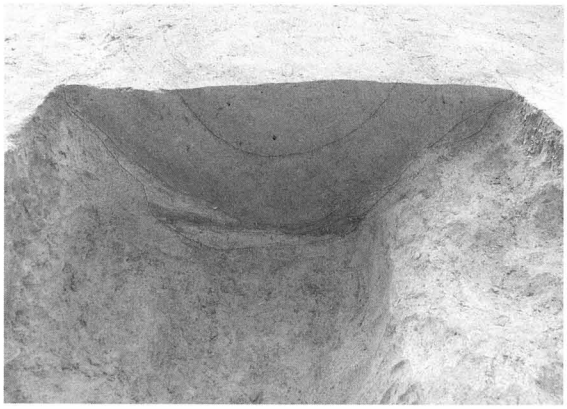
4　SK２土坑断面（南から）



5　SK４土坑完掘状況（北から）

6　SK４土坑断面（東から）

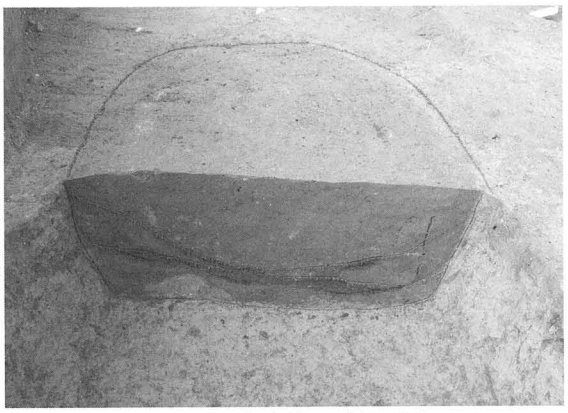
7　SK５土坑完掘状況（南東から）



8　SK５土坑断面（東から）

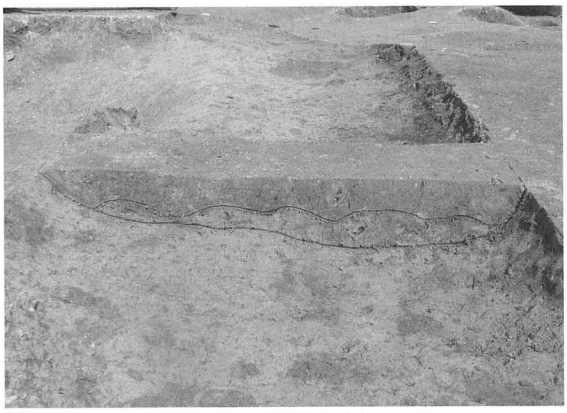
図版52　土坑１

1　SK 6 土坑完掘状況（東から）



2　SK 6 土坑断面（東から）

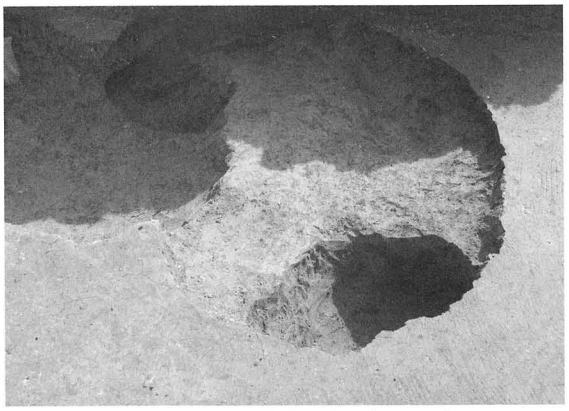
3　SK 7 土坑完掘状況（南西から）



4　SK 7 土坑断面（南から）

5　SK 8 土坑完掘状況（南から）

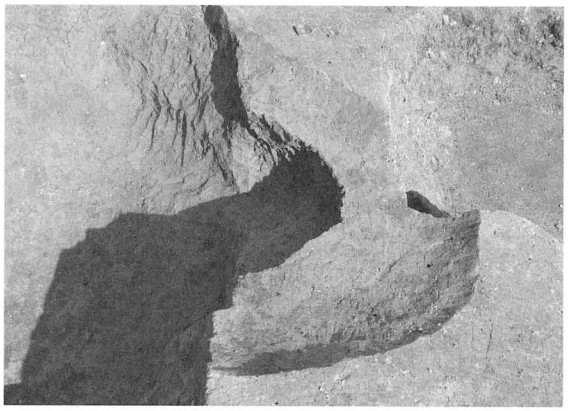
6　SK 8 土坑断面（西から）



7　SK10土坑完掘状況（北から）

8　SK10土坑断面（東から）

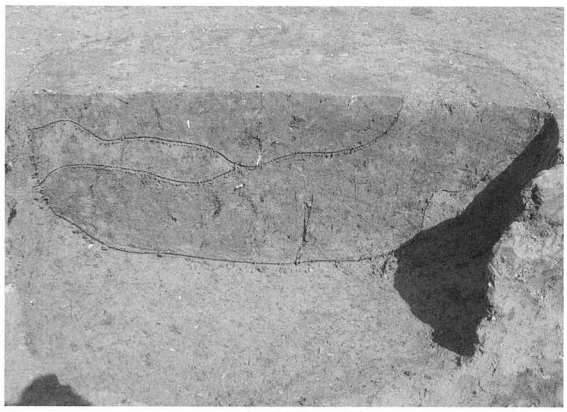
図版53　土坑 2



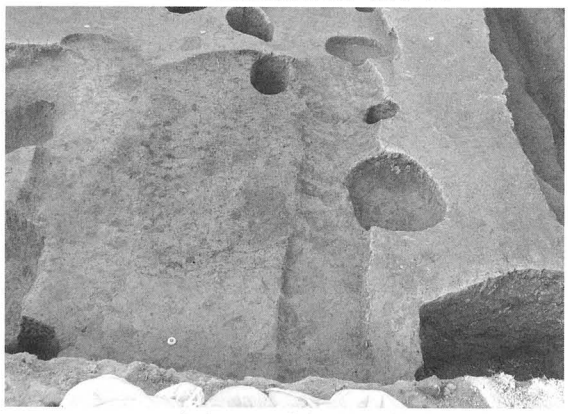
1　SK11土坑・P18完掘状況（西から）

2　SK11土坑・P18断面（南から）

3　SK12土坑完掘状況（南から）



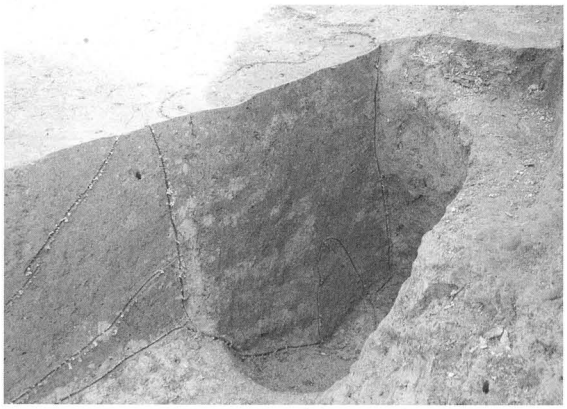
4　SK12土坑断面（南から）



5　SK13土坑・P22完掘状況（南東から）

6　SK13土坑断面（南から）

7　P16完掘状況（南から）



8　P16断面（南西から）

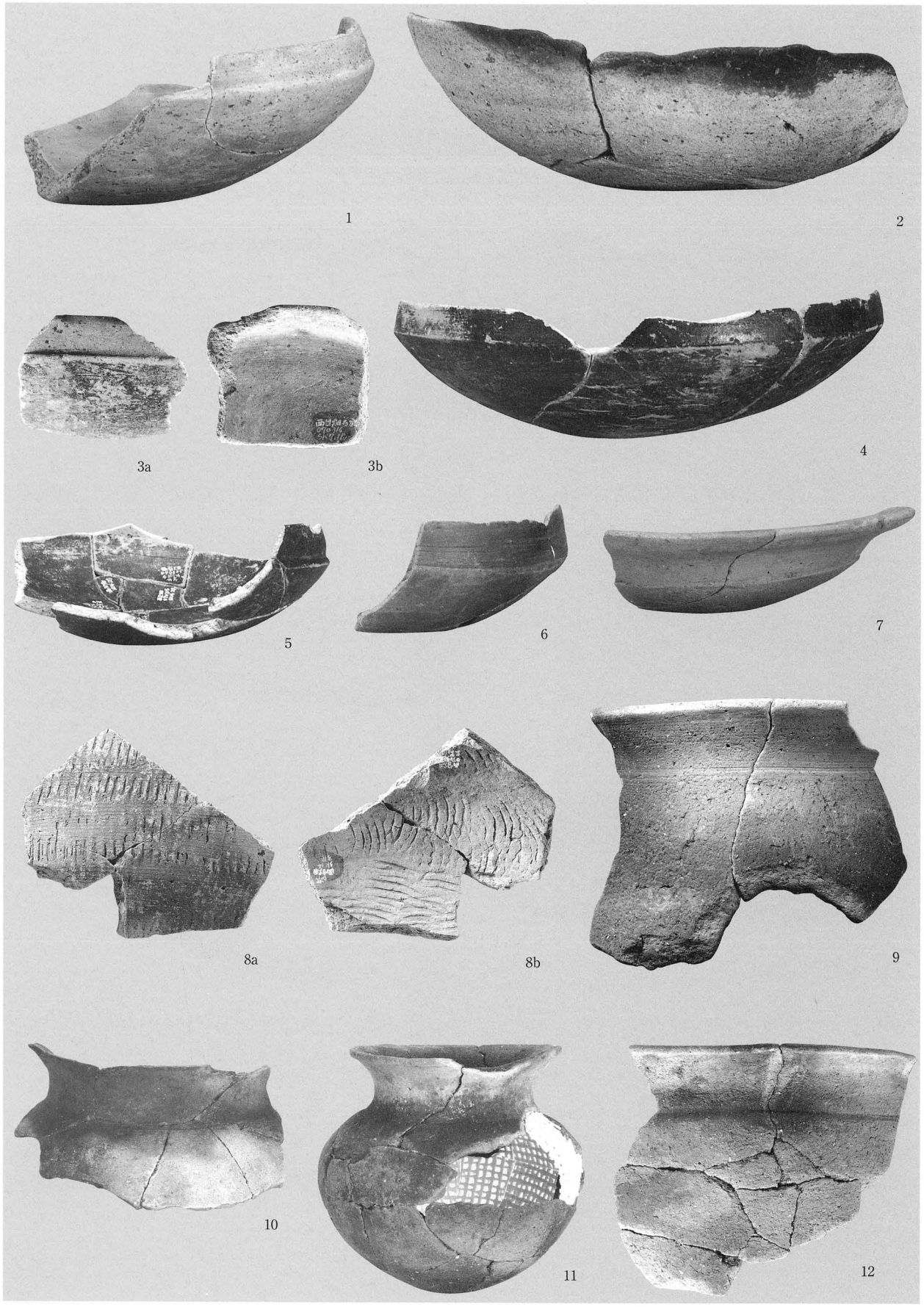
図版54　土坑・ピット

1　SK14土坑遺物出土状況
（南から）

2　SK14・15土坑完掘状況
（南から）

3　SK14・15土坑断面
（南から）

図版55　SK14・15土坑



図版56　西台畑遺跡６次出土遺物１

図版56　西台畑遺跡 6 次出土遺物 2

XI　中田南遺跡第４次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　中田南遺跡（宮城県遺跡番号01272）
調 査 地 点　　仙台市太白区中田７丁目216－１、216－２
調 査 期 間　　平成19年４月25日～４月27日
調査対象面積　　101㎡
調 査 面 積　　36㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　長島　榮一　　主事　加藤　隆則　　文化財教諭　工藤　慶次郎　　志賀　雄一

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年２月19日付で、鎌田光博氏より5.5～6.5mの湿式柱状改良を伴う木造２階建て個人住宅建設に伴う発掘届が提出されたため、まず確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成19年４月25日より着手し、建物建設予定地に東西12m×南北３mの調査区を設定して調査を行った。その結果、竪穴住居跡などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

中田南遺跡は、仙台市の南東部に位置し、南側は名取市が隣接している。遺跡はJR南仙台駅の南東約１kmに所在し、国道４号線の旧道付近から同バイパスにかけて、東西500m、南北200mの範囲に広がっている。名取川やその支流によって形成された標高７～８mの自然堤防に立地しており、調査地点の標高は7.3mである。

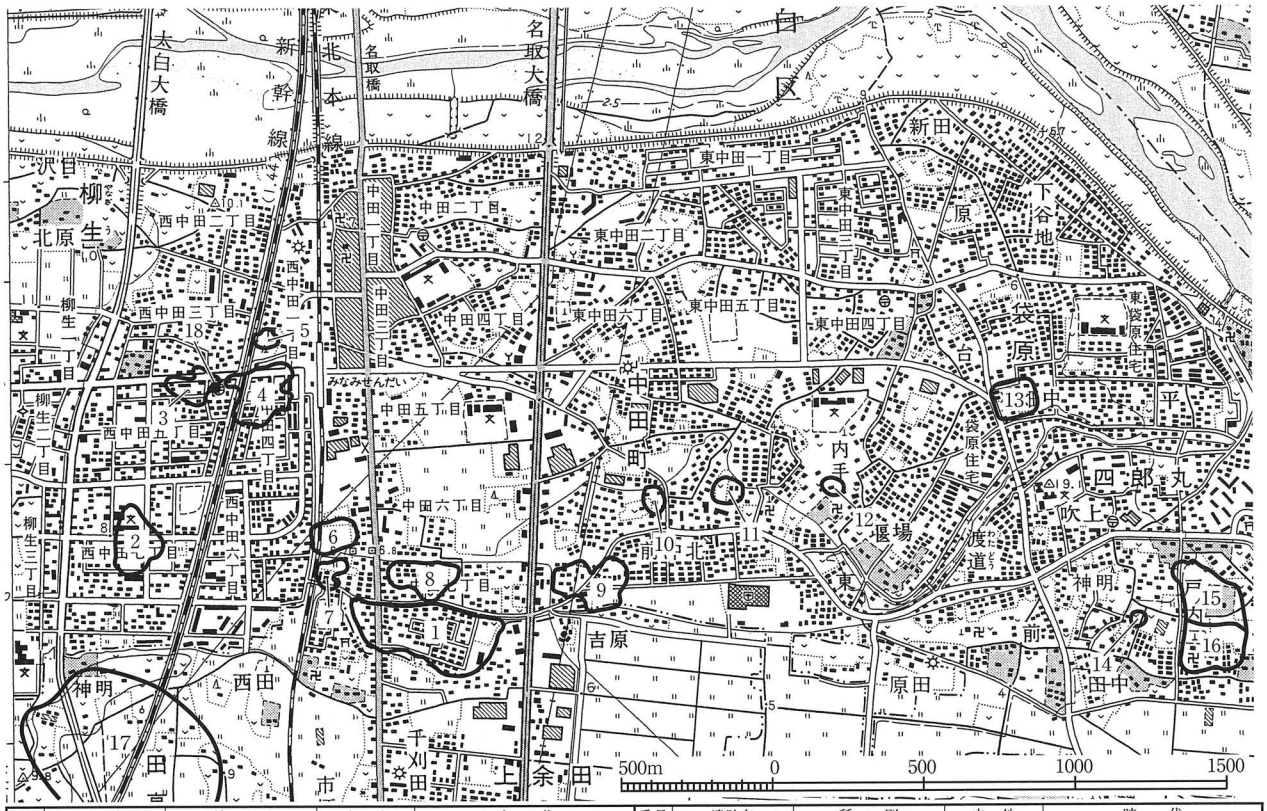
同遺跡は、これまでに３次の調査が実施され、縄文時代晩期中葉から近世の複合遺跡として知られている。遺跡は特に、古墳時代中期から平安時代前半の集落、鎌倉から室町時代の屋敷跡として理解される。遺跡範囲の北側中央に位置する今回調査地点では、古墳時代から古代のものと思われる竪穴住居跡１軒を検出した。

本遺跡の古墳時代から古代の集落について、第１次調査では「古代Ⅲ期」（＝８世紀前葉）の集落が、前時期とは断絶しており、急激な拡大・発展を経て急激に衰退したこと、また、住居や建物方向が真北を指向するという特徴に加え、銅鋳造関連遺物や関東系土器の存在などから一定の規定のもとに形成された計画集落、とりわけ「地方官衙の組織の中で、主として銅製品の生産に関わる役割を果たしていた」集落と理解している。

同時期頃の栗遺跡（２）や清水遺跡（17）、壇腰遺跡（６）は集落遺跡であり、特に前二者は規模が大きくかついわゆる「関東系土器」を伴うことに特徴がある。また安久諏訪古墳（18）の横穴式石室（胴張り河原石小口積み、ハの字に広がる前庭部）は、埼玉県北西部から群馬県地域に見られる技術が用いられており、中田南遺跡を含めた名取川右岸地域一帯に、関東地方からの人やモノ、技術や思想などが入り込んだ様相が伺える。

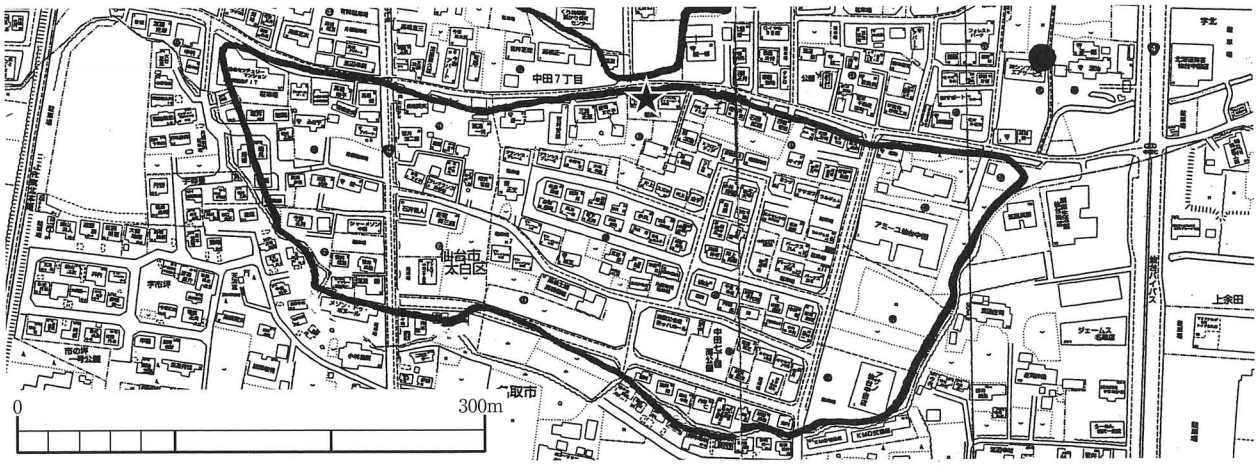
また第１次調査で見られた「古代Ⅲ期」集落の拡大・発展、建物方向の真北への指向性は、清水遺跡でも確認され、条里制地割との関連で捉えられている。

奈良・平安時代になると、本遺跡西側で清水遺跡、安久遺跡（３）、安久東遺跡（７）、壇腰遺跡など、また本遺跡や中田北遺跡（８）の東側で後河原遺跡（９）や中田畑中遺跡（13）、戸ノ内遺跡（14）や四郎丸館跡（15）な



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	中田南遺跡西台畑遺跡	集落跡、屋敷跡包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文晩、弥生中、古墳～中世	10	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
2	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安	11	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
3	安久遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩、弥生、奈良～中世	12	内手遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
4	安久東遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然堤防	弥生～近世	13	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	奈良、平安
5	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安	14	神明遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
6	前田館跡	城館跡	自然堤防	中世	15	戸ノ内遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然堤防	弥生～中世
7	壇腰遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	16	四郎丸館遺跡	方形周溝墓、集落跡、城館跡	自然堤防	古墳、平安、中世
8	北遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	17	清水遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩、弥生柱、古墳～中世
9	後河原遺跡	水田跡	自然堤防、後背湿地	弥生、奈良～近世	18	安久諏訪古墳	古墳	自然堤防	古墳時代終末

第66図　遺跡の位置と周辺の遺跡



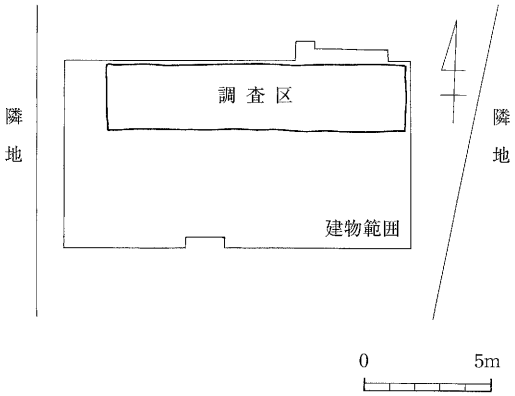
第67図　調査地点の位置

どが展開している。本遺跡第１次調査では、「古代Ⅳ期」の集落を、鉄製品の生産が行われていること、９世紀代で消滅する集落であること、また円面硯や石帯などの出土から、居住者は地方官衙と関わりをもった地方有力者であるとしている。また、同調査では遺跡南側で河川跡を検出し、第2次調査では遺跡北東部で小溝状遺構群を検出した。北側に隣接する中田北遺跡でも同時期の竪穴住居跡を検出し、「古代Ⅳ期」集落の河川と居住域、生産域の関係が明らかになりつつある。

4　基本層序

基本層は４層確認した。Ⅰ層は現代の畑耕作土で、黒褐色粘土質シルトである。層厚は40～60cmあり、SI１竪穴住居跡を大きく壊している。Ⅱ層は明黄褐色、Ⅲ層はにぶい黄橙色の粘土層で、

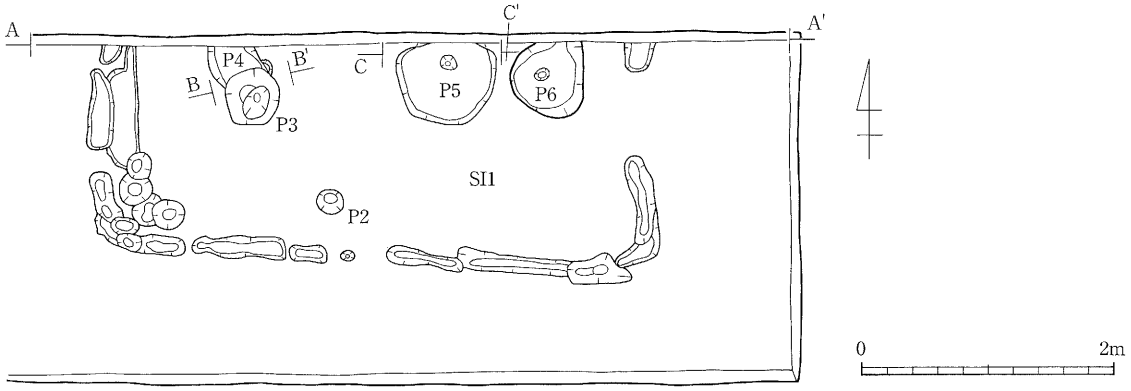
ともに層厚10～15cm。遺構確認面はⅡ層上面である。



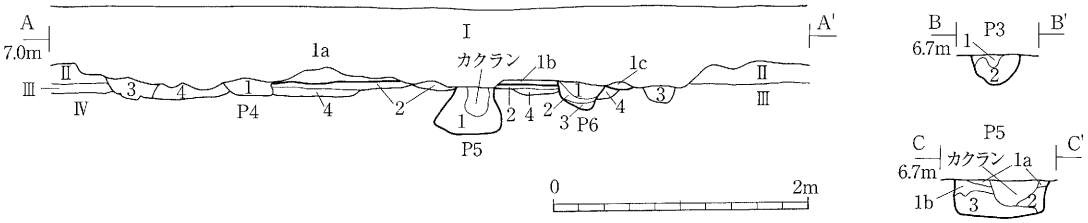
第68図　調査区配置図

5　発見遺構と出土遺物

今回の調査では、Ⅱ層上面で、竪穴住居跡1軒、ピット５基を検出した。



第69図　遺構平面図



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	旧畑耕作土（天地返しあり）。
Ⅱ	10YR6/6　明黄褐色	粘土	
Ⅲ	10YR7/1　にぶい黄橙色	粘土	
Ⅳ	10YR4/6　褐色	シルト	砂を少量含む。
層　位	土　色	土　性	備　考
SI1-1a	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	黄色粘土質シルトブロックを含む。
1b	10YR7/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
1c	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
2	10YR7/3　にぶい黄褐色	粘土	貼り床。黒色、黄色粘土質シルトを帯状に含む。
3	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	壁溝堆積土。シルト質粘土（10YR7/6）ブロックを多量に含む。
4	10YR6/6　明黄褐色	シルト質粘土	掘り方埋土。黒色、白色粘土ブロックを含む。
P3-1	10YR3/2　黒褐色	粘土	
2	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
P4-1	10YR3/2　黒褐色	粘土	
P5-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを含む。
1a	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト	黒色粘土を少量含む。
1b	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト	黒色粘土を多量に含む。
2	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	
3	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む。
P6-1	10YR3/1　黒褐色	粘土	
2	10YR2/1　黒色	粘土	
3	10YR5/6　黄褐色	シルト	炭化物ブロックを含む。

第70図　遺構断面図

1）竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡　調査区東側に位置し、北側は調査区域外に及んでいる。現代の耕作土により遺構上部を大きく壊されており、竪穴自体の掘り込みはほとんど確認できない。断面では遺構堆積土、貼り床を確認したが、平面的に検出できたのは壁溝および掘り方埋土のみである。規模は、検出範囲で東西3.5m、南北1.0mで、おおむね南北方向に主軸をもつ方形プランである。壁溝は幅10～30cmで、長さ30～100cm程度の小溝、あるいはピット状の掘り込みの連続として確認される。このほかにピットを５基検出した。Ｐ４～６は、本遺構の堆積土（１層）を掘り込んでおり、住居には伴わない。P2・３の所属は不明である。

遺構堆積土は大別４層である。１a～c層が竪穴住居床上の堆積層で、２層が貼り床である。３層は壁溝堆積土で、４層が掘り方埋土である。出土遺物はなく、時期は不明である。

2）ピット

SI１竪穴住居跡内で５基検出した。Ｐ４～６は調査区域外に及んでいる。先述のように、Ｐ４～６はSI１竪穴住居跡よりも新しく、Ｐ２・３は同遺構との新旧関係は不明である。また、Ｐ４はP３を切っている。Ｐ５は焼土ブロックを、またP６は炭化物ブロックを多く含んでいる。いずれも柱痕跡は見られない。それぞれのピット規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ２＝22×20×７cm、Ｐ３＝45×40×41cm、Ｐ４＝40×（34）×９cm、Ｐ５＝80×65×39cm、Ｐ６＝68×62×８cmである。

遺物は、Ｐ５で土師器甕の小破片３点、Ｐ６で土師器甕の小破片１点が出土したが、時期の特定はできなかった。

6　まとめ

SI１竪穴住居跡は、出土遺物がなく時期の特定はできなかった。しかしながら、「古代Ⅲ期」以降の建物配置や軸方向に強い規制が見られるというこれまでの成果を参照するなら、本遺構も同期以降の所産と捉えられよう。

また今回の調査により、「古代Ⅲ期」以降の遺構分布がさらに北側に拡大することが明らかとなった。北側に隣接する中田北遺跡や西側の壇腰遺跡でも９世紀代の竪穴住居跡を検出しているが、今後は周辺遺跡を含めた、時期ごとの集落の広がりを抑えていく必要がある。

＜参考文献＞

浅野克樹　2006「中田南遺跡第３次発掘調査報告書」『前田館跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第301集pp.15-21
伊藤信雄　1975『仙台市中田町　安久遺跡発掘調査略報』仙台市中田第一土地区画整理組合
太田昭夫　1994『中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第182集
工藤哲司　2006「中田北遺跡発掘調査報告書」『前田館跡他発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第301集pp.23-32
丹羽　茂　1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書－Ⅴ－』宮城県文化財調査報告書第77集pp.3-540
三塚　靖　1995『中田南遺跡第２次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第206集
渡部弘美　2004『壇腰遺跡』仙台市文化財調査報告書第277集

1　遺構検出状況（東から）

2　遺構完掘状況（東から）

図版58　調査区全景

1　SI 1 竪穴住居跡検出状況
（南から）

2　SI 1 竪穴住居跡完掘状況
（南から）

3　P 5 完掘
（南から）

図版59　竪穴住居跡・ピット

XII　茂ヶ崎城跡発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	茂ヶ崎城跡（宮城県遺跡番号01119）
調 査 地 点	仙台市太白区茂ヶ崎２－１
調 査 期 間	平成18年６月18日～６月21日、7月28日～31日
調査対象面積	400㎡
調 査 面 積	72㎡
調 査 原 因	野草館の改築、園路広場の整備、擁壁の設置に伴う切土など
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主任　長島　榮一　　文化財教諭　志賀　雄一

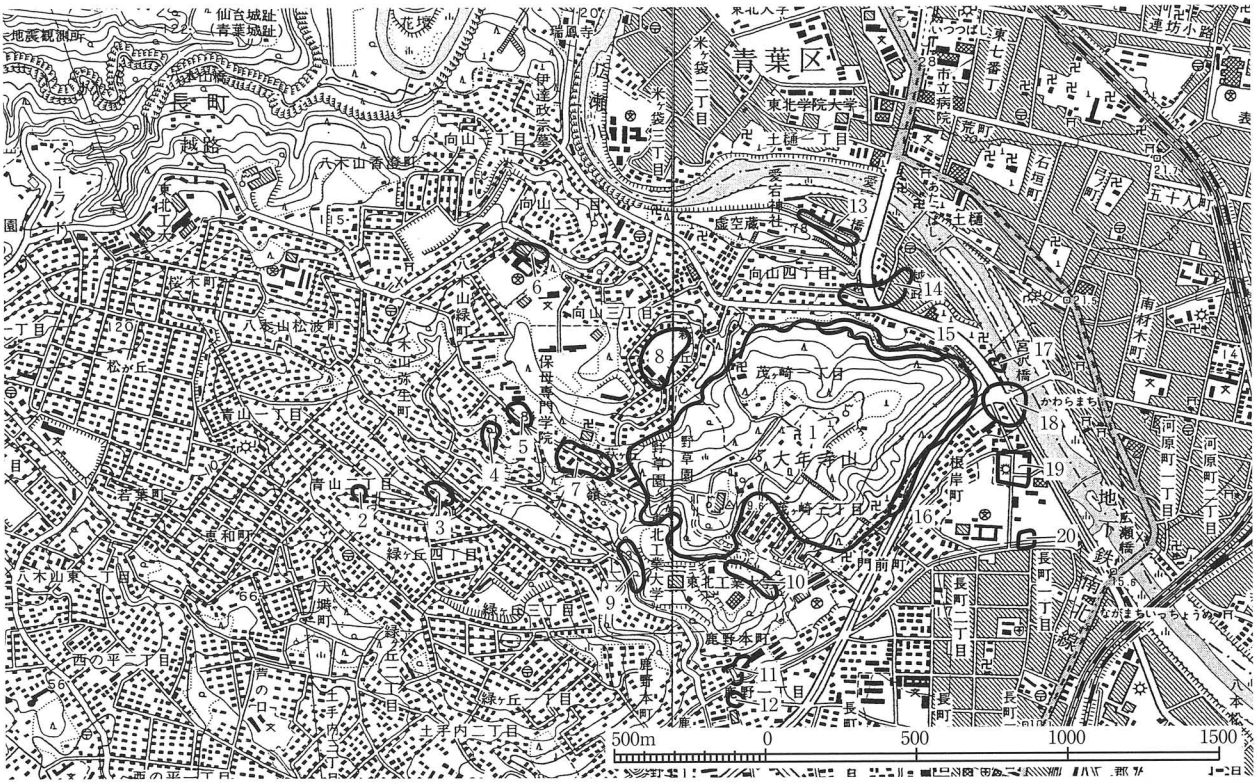
2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年４月20日付けで、仙台市長梅原克彦氏より野草館の改築、園路広場の整備、擁壁の設置に伴う切土などの工事に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施した。確認調査は、平成19年６月18日から実施し、建物や擁壁の建設予定地にそれぞれ14箇所の調査区を設定して調査を行った。年代の新しい溝跡のみ検出されただけであった。これにより当初の建築計画の通り野草館、擁壁等の建築に着手することになった。

擁壁の工事が６割ほど進行した７月28日に、野草園長より文化財に該当するものの発見があった旨の連絡があり、佐藤調査係長、長島主任が現地に赴き確認した。工事業者が掘削中に板石がありそれを撤去したところ、大甕が出土し、中に人骨の一部が見られた。上に板石が３枚並べられていたとのことである。現地では近接する箇所まで擁壁のベースができあがった状況で、緊急に発掘調査を実施した。なお確認調査を実施した際には、工事用車両の出入口と職員駐車場となっていたため、調査を実施できなかった箇所である。

3　遺跡の位置と環境

当該地は、仙台駅の南方約３kmに位置にあり、仙台市街地東南部の大年寺山あるいは茂ヶ崎と称される丘陵上にある。大年寺山の名称は、元禄４年（1691）開基の仙台藩主伊達家の菩提寺である黄檗宗大年寺に由来する。大年寺は往時には広大な寺域を有していたが、明治に衰退し、伽藍のほとんどは失われ、寺域の中心部に土塁で囲まれた方形の区画（200m×150m）を残すのみである。この区画のすぐ東側には、「茂ヶ崎城」の標柱が立つ。丘陵最頂部は仙台放送の敷地で、その北東側にはNHK大年寺テレビ放送局がある。丘陵北西側には仙台市野草園、南側は東北工業大学二ツ沢キャンパス、東側には茂ヶ崎団地があり、後世の改変が著しく、茂ヶ崎城の城域がどこまで広がるのかは不明である。これまで遺構の状況を明確に示した研究は無かったが、旧仙台放送南側、同敷地北東側（NHK大年寺テレビ放送局との境）に二つの空堀跡が残ることが確認されている。この二本の空堀で区画された旧仙台放送の敷地が最も標高が高く、茂ヶ崎城の主郭（本丸）であると考えられている。その他、旧仙台放送側の西側に二段にわたるテラス状の地形が観察される。また、現在「ロータリーの丘」と称する公園に南と東で接する道路は、緩くカーブを描く付近の他の道路とは異なり、直角に折れ曲がっている。本来は堀であったものを拡張あるいは掘り下げて道路とした可能性がある。この公園も一つの曲郭であった可能性がある。（「仙台市史特別編７城館」による）



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世	11	鹿野屋敷遺跡	散布地	丘陵南斜面	古墳～平安
2	青山二丁目B遺跡	包含地	丘陵斜面	旧石器、縄文	12	鹿野一丁目遺跡	散布地	丘陵麓	縄文、弥生、奈良、平安
3	青山二丁目遺跡	散布地	丘陵斜面	奈良、平安	13	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵北東斜面	古墳末
4	二ツ沢遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文	14	愛宕山横穴墓群B・C地点	横穴墓	丘陵南東斜面	古墳末、奈良
5	八木山緑町遺跡	散布地	丘陵	縄文、奈良、平安	15	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵北斜面	古墳後
6	向山高裏遺跡	散布地	丘陵北東斜面	縄文中	16	杉土手（鹿除土手）	土手	丘陵、段丘	近世
7	萩ヶ丘B遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文	17	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳後
8	萩ヶ丘遺跡	散布地	丘陵	縄文、奈良、平安	18	根岸遺跡	集落跡	段丘	縄文中
9	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	丘陵西斜面	古墳	19	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳中
10	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳末、奈良	20	小兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳

第71図　遺跡の位置と周辺の遺跡

『古城書上』によれば、東西八六間、南北六一間で、本丸と二の丸の間が二八〇間で山続きの平地とし、二の丸は東西三八間（八三間とする写本もある）・南北四〇間とするが、二の丸の規模を記さない写本もある。城主は名取郡北方三十三郷旗頭の粟野大膳とする。一方、『残月台本荒秋』は、城の名前を「野出口山城」と伝え、島津陸奥守が住んだとするが、詳細は不明である。『封内名蹟志』では、応永年中（1394～1428）に粟野大膳がいたとしている。

これまでの調査では、平成３年にNHK放送所の南隣接地点において共同住宅建設に伴う確認調査が実施されたが、遺構や遺物は検出されなかった。

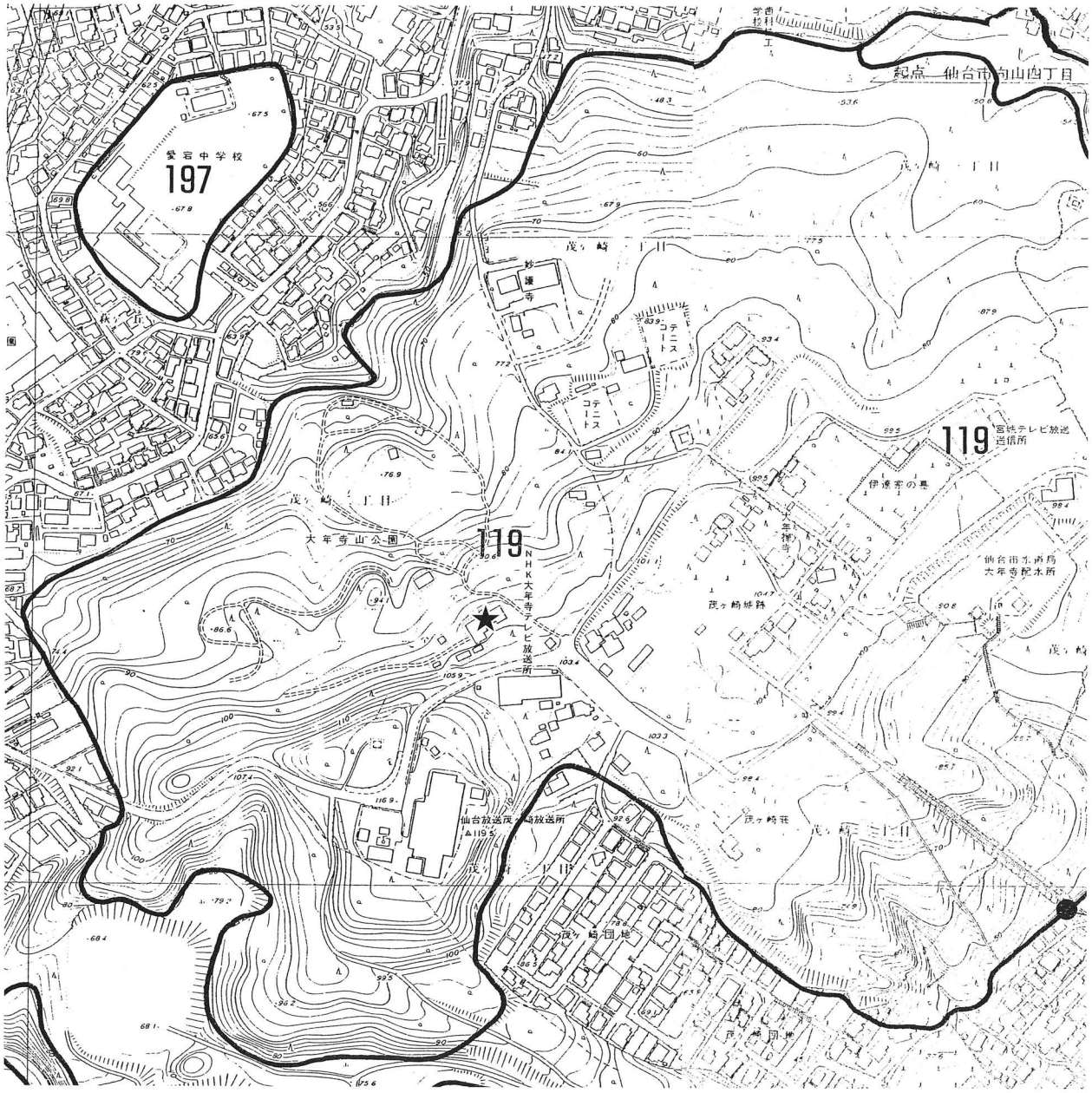
4　基本層序

調査地点は、中央部から北側が大きく削平されている。また、調査区北側は既存建物による影響を受け、Ⅰ層とⅡ層の大部分が削平されている。また、調査区南側は盛土が40cm前後あり、Ⅰ層は樹木根が多く残存している。調査区の中央、削平部分の断面に沿って調査を行ったところ、基本層は５層に分けられた。

Ⅰ層：10YR3/4暗褐色シルト。　層厚は約55cm。

Ⅱ層：10YR5/6シルト質粘土。　層厚は約190cm。

Ⅲ層：10YR8/3浅黄橙色粘土　層厚は約８cm。底面に酸化鉄を含む。



第72図　調査地点の位置

Ⅳ層：10YR7/6明黄褐色粘土　層厚は約35cm。

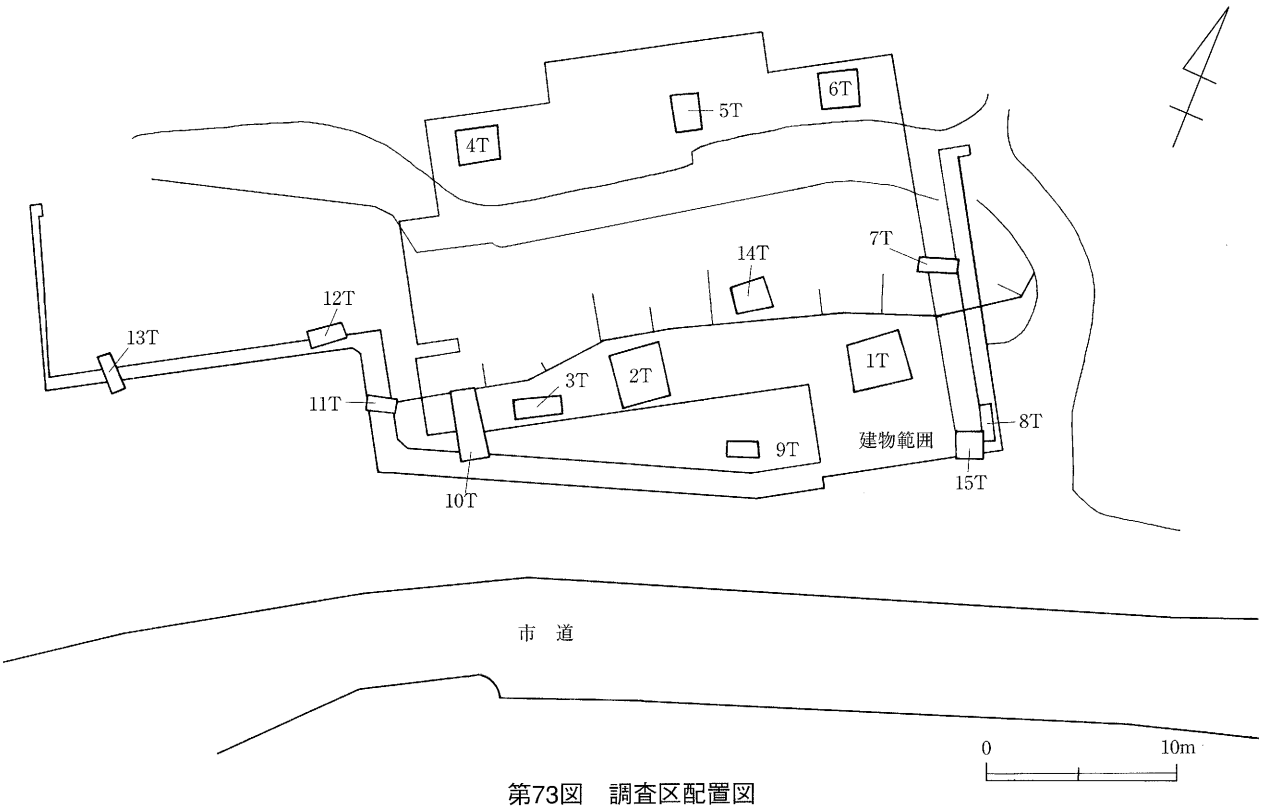
Ⅴ層：10YR7/6明黄褐色粘土　層厚は１m以上。拳大から人頭大の礫を多く含む。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で甕棺１基、溝跡１条が検出された。

1）溝跡

SD１溝跡　10トレンチの中央部、Ⅱ層上面で検出された。南北に伸びる幅45cm～65cmの溝跡であり、南から北へ傾斜する斜面に沿って下りながら延びている。北側は旧野草館あるいは園路工事により削平され、消失している。溝の断面形はU字型を呈すが、堆積土は基本層位Ⅰ層と同じで、年代のさかのぼる遺構とは考えられない。遺物は



第73図　調査区配置図

出土しなかった。

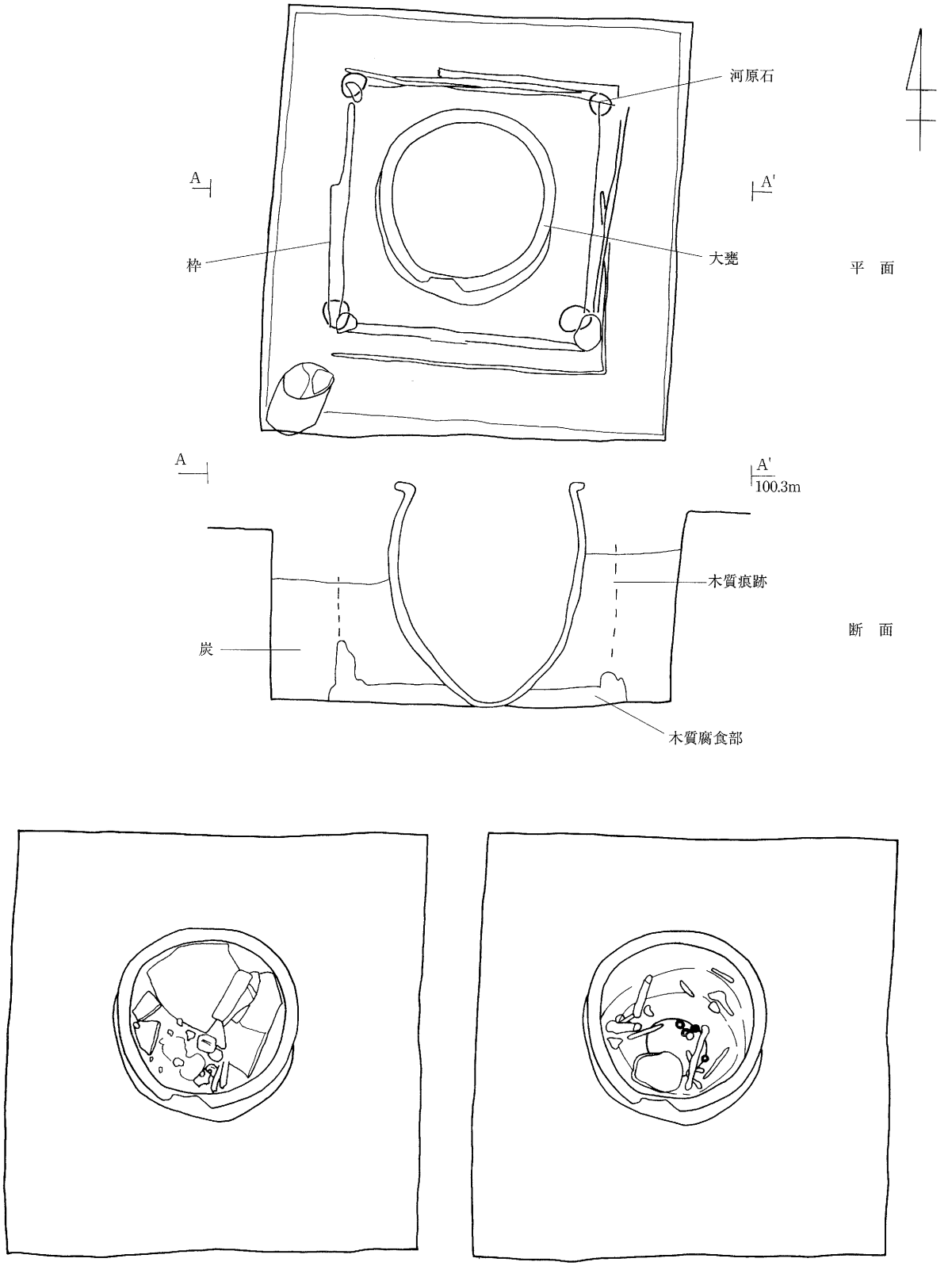
2）木槨甕棺墓

15トレンチで検出された。基本層第Ⅱ層が大きく削平され、現表土より既に2.3mほど低くなっていたが、本来は上方より掘り方が連続していたものと推定される。発見された段階では、陶器の蓋が割れて大甕内に落下していたが、本来は大甕の上に置かれていたものである。さらにその上方に粘板岩製の板石が３枚敷かれていた。

掘り方は検出した上面で135cm四方、深さ57cmで、大甕の高さが77cmあることから、それ以上の深さを有していたと推定される。この掘り方底面の四隅に直径８～10cm程の扁平な河原石が敷かれ、その上に一辺85cmの箱が置かれていた。箱は横方向の板材が組まれ、底面には枠が残っている。木質は脆弱で、原形を留めていない。この中に堤焼きの大甕が入れられ、箱と掘り方の中には炭が充填されていた。大甕は口径62cm、器高77cmで、緑色の器面に白色の釉が大きく垂れている。内部には落下した蓋と少量の石灰が認められた。その下に成人男性と見られる人骨が南西方向を向いて入れられている。人骨は甕の底面から25cm程の厚さの中で、上方から崩れて重なる状況で重なっていた。人骨の右前に雲母片（図版63-３）が出土し、甕の底面には５枚の銅銭が敷かれていた。少量の白色粘土が堆積していたが、その中に木製の数珠玉が95個（図版63-5・6）含まれていた。（※人間の脂肪分の可能性があるという）

3）出土遺物

甕棺から、数珠玉、人骨、古銭、不明金具が見つかった。出土した甕は施釉された陶器である。大型の甕で、器高76.0cm～77cm、口径60.5cm～62cm、胴径64.6cm、底部内径16.5cm～17cm、底径20cmである。口縁は平坦に帯状に外に折れている。頸部の外面は直線的に屈曲し、内部はそれに対応するよう緩やかに折れ曲がる。胴部は丸味



第74図　木槨甕棺墓実測図

を帯び、接合に伴う4段ほどの凹凸がある。内面には接合痕が釉の上からも2カ所観察される。底部は平坦で回転糸切り後、周縁部のみにヘラケズリによる調整が入れられている。釉は5Y6/4オリーブ黄から7.5Y2/1黒にかけての濃緑色を呈し、その上から白濁した7.5Y8/2灰白色の海鼠釉がかけられている。仙台市内北部の台原・小田原丘陵で生産された堤焼きの製品である。1830年代以降の製品と見られる。

出土した人骨は1体分であり、部位が特定できる骨は、頭骨（図版63-8a、8b、8c、8d）、下顎骨（図版63-9）、左上腕骨（図版63-12）、左大腿骨（図版63-13）などである。この個体は男性で、背骨のゆがみ等から50～60代以上と考えられる。また鎖骨の大きさや肩幅が広く大柄で、身長は160cm後半と推測される。外傷の跡等は確認できなかったが、歯が折れた跡や手首の骨折又は脱臼の跡が確認された。

水晶玉が13個（図版63-5）、木製の玉（図版63-6）が完形80個の計93個、木製の玉の破片15個出土した。また、古銭が甕底部に5枚付着していた。いずれも保存状態が悪く、種類等は明らかでない。さらに、古銭の破片と指の骨と思われる骨片とが癒着した状態（図版63-7a、7b）で出土した。遺物の全容は明らかでないが、埋葬に伴うものであると考えられる。

6　まとめ

甕は江戸時代末頃の堤焼きと見られる。今回発見された木郭甕棺墓は19世紀中頃の墓である。この時期の墓で調査された例は少なく、当地方では青葉区北根にあった新妻家墓地のみである。新妻家墓地でも堤焼きの甕が甕棺として用いられ、明和7年（1770）から慶応2年（1866）までの5基が存在した。それらはいずれも素焼きのもので、今回出土した施釉されたものとは大きく異なっている。

正徳元年（1711）7月に埋葬された伊達家4代藩主綱宗の墓所の善応殿からは、常滑焼の甕（口径63.4cm、器高80cm）が木製の箱（一辺90cm四方、高さ110cm程）に入れられ石室内に納められていた。

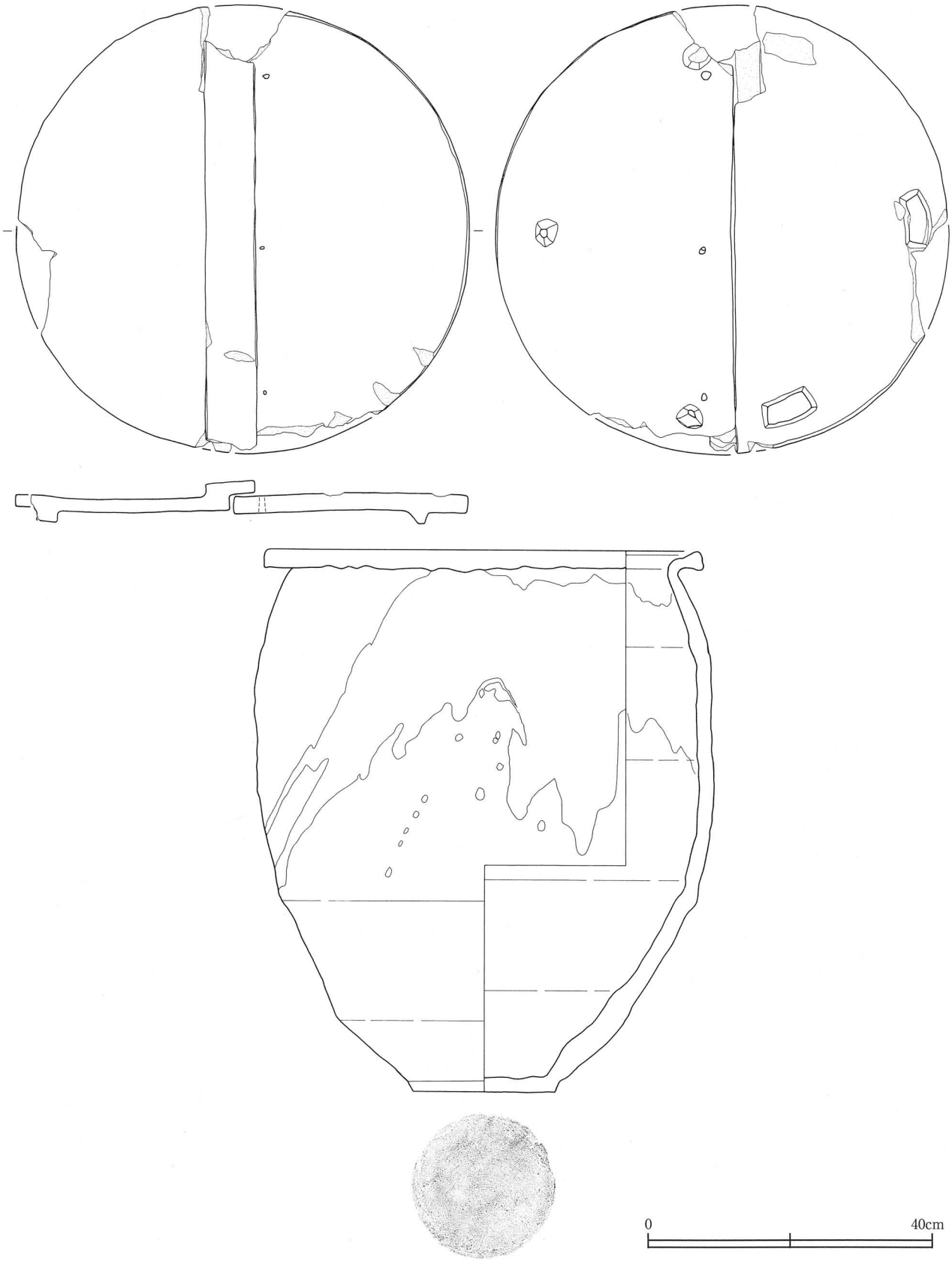
今回の発見は江戸時代にこのような大甕を甕棺として用い、木箱に入れて埋葬する葬制（木槨甕棺墓－図説江戸考古学研究事典－）があり、幕末の19世紀中頃まで継続していたことを示す貴重な例である。

今回の被葬者については、施釉された甕は武士階級である新妻家の墓地からも出土しておらず、丁寧に掘り方を木炭で埋めていることからも、一定の身分を有した者と考えられる。野草園内には元文5年（1740）銘のある石塔があり、僧侶の墓であると言われている。その場所には大千院という大年寺の子院があったと伝えられている。江戸時代の大年寺の様子が描かれた「両足山志」（1734作成）－仙台市博物館蔵－によれば、今回の墓があった地点には「四天王院」という子院が所在していたようである。断定することは難しいが、周囲からは他に墓は発見されていないことから、単独で葬られた僧侶の墓の可能性を考えておきたい。

＜参考文献＞

古泉弘2001「Ⅳ江戸の墓と葬制2埋葬形式」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編　pp.142-146

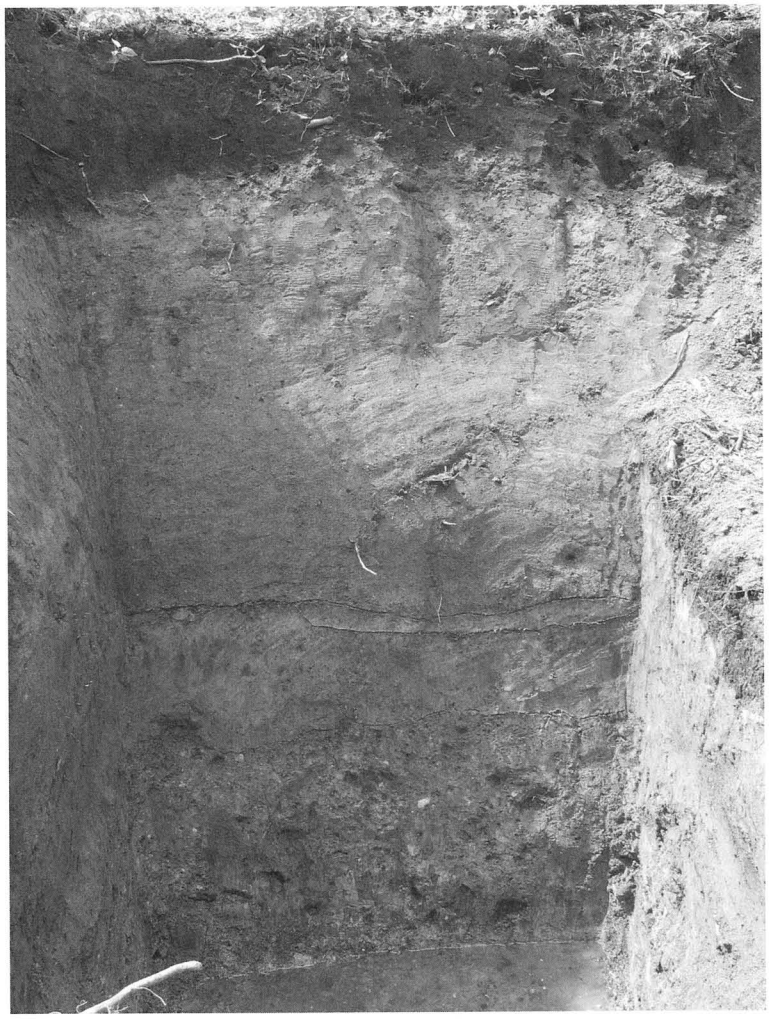
仙台市史編纂委員会2006『仙台市史　特別編7城館』



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量（cm・g）				特徴・備考（調整・素材・産地・文様等・時期）	写真図版
		トレンチ	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	I-2	15T	甕棺墓			瓦質土器	蓋	63.0		2.0		長さは直径の値　三箇所に釘穴あり	63-2
2	I-1	15T	甕棺墓			陶器	甕	76.6	60.5		20.0	堤　海鼠釉	63-1

第75図　出土遺物

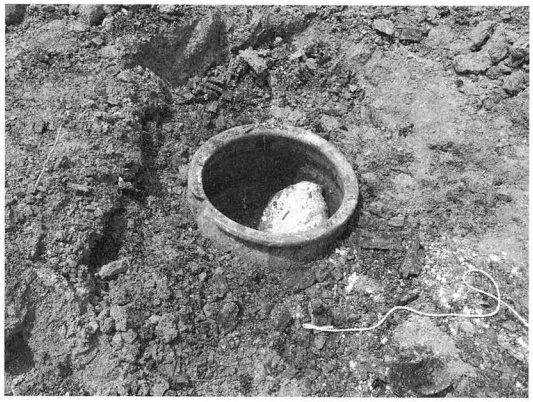
1　10トレンチ完掘状況
（南から）



2　14トレンチ基本層序
（北壁）

図版60　10・14トレンチ

1　掘り方検出状況（南から）



2　発見直後（東から）

3　蓋石

4　甕棺内部１

5　甕棺内部２

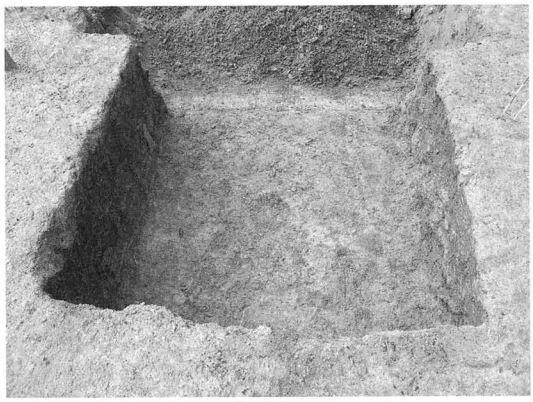
図版61　木槨甕棺墓１

1　断面状況（北から）

2　甕棺　痕跡（北から）

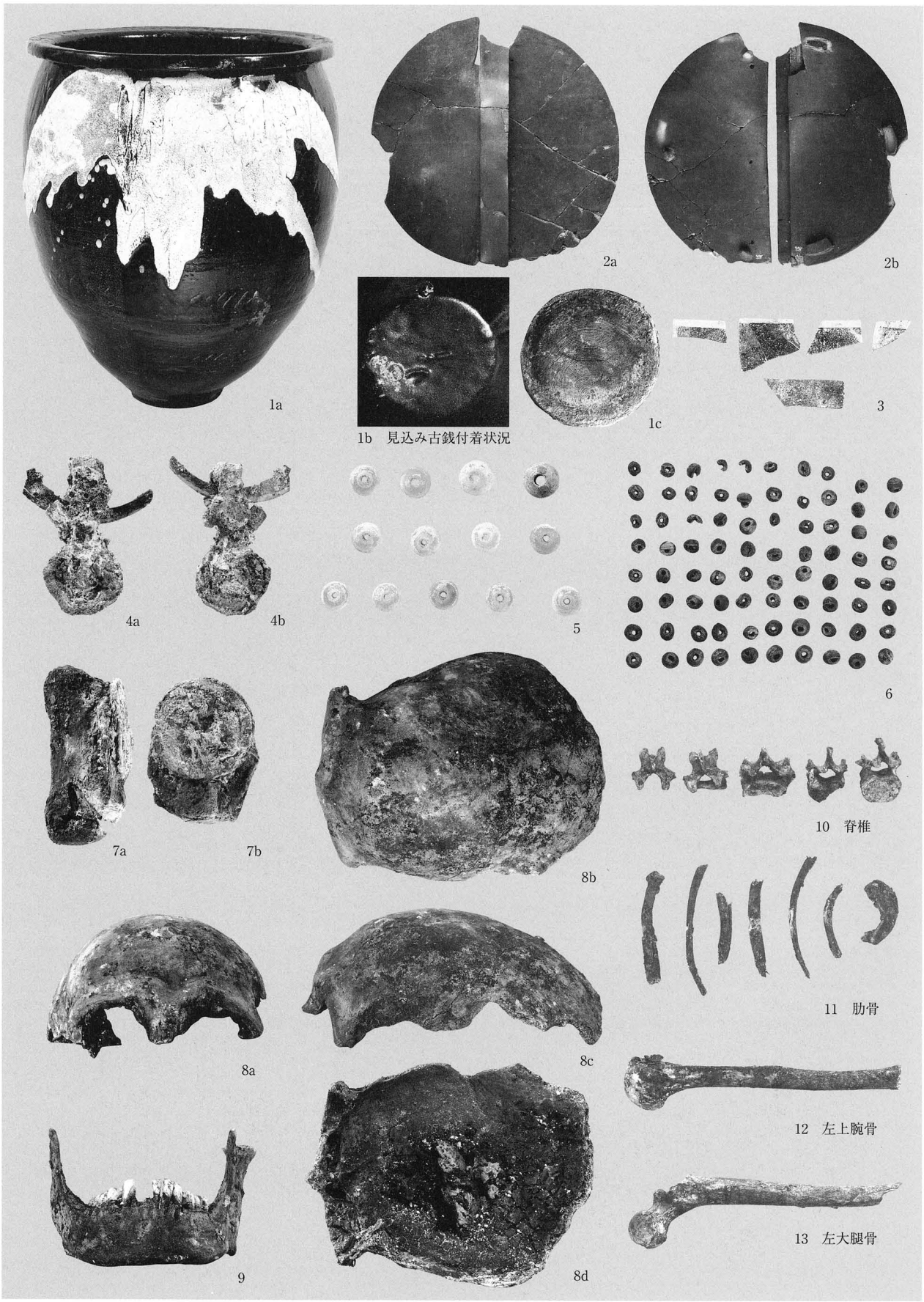
3　木郭残存状況（南から）

4　河原石設置状況（南から）



5　完掘状況（南から）

図版62　木槨甕棺墓２


1a
2a
2b
1b　見込み古銭付着状況
1c
3
4a
4b
5
6
7a
7b
8b
10　脊椎
11　肋骨
8a
8c
12　左上腕骨
9
8d
13　左大腿骨

図版63　出土遺物

XIII　伊古田B遺跡第２次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	伊古田B遺跡（宮城県遺跡番号01480）
調 査 地 点	仙台市仙台市太白区大野田字イコタ（63ブロック４ロットの一部、５ロット）
調 査 期 間	平成19年７月17日～８月10日
調査対象面積	390.44㎡
調 査 面 積	250㎡
調 査 原 因	共同住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事　鈴木　隆　　文化財教諭　志賀　雄一　　臨時職員　森田　賢司

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成17年10月18日付けで、地権者森優氏より、深さ５ｍの柱状土壌改良を伴う鉄筋コンクリート造７階建共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年11月７日～８日に実施した。建物建築予定地の東端に東西13ｍ×南北12ｍの調査区を設定して調査を行ったところ、調査区内から遺構が検出され、本調査が必要と判断されたため遺構の掘り込みは行わず、確認調査を終了した。この確認調査の結果を受けて、平成19年７月17日～８月10日に建物建築予定地に東西25ｍ×南北10ｍの調査区を設定して、本調査を実施した。

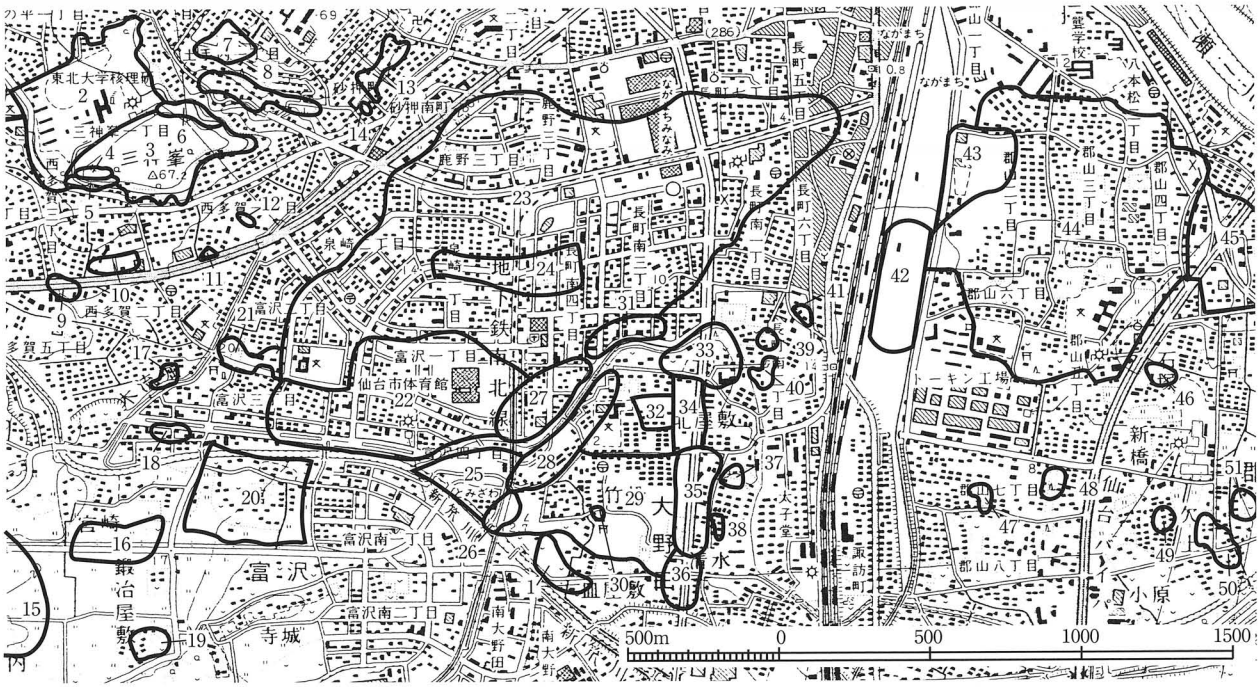
3　遺跡の位置と環境

伊古田B遺跡は、仙台市南東部の地下鉄富沢駅から南東方向約200mにあり、名取川と笊川によって形成された自然堤防上に立地している。調査区付近の標高は12m前後である。周辺には自然堤防は古い時代に形成され、縄文時代以来多くの遺跡が密に存在している。

縄文時代早期では下ノ内遺跡で竪穴住居・落とし穴、中期では六反田遺跡・下ノ内遺跡で竪穴住居跡、後期では六反田遺跡で竪穴住居跡、大野田遺跡で環状配石遺構が発見されている。周辺の自然堤防上では縄文時代早期以来、活発な人間活動が行われていたことが窺われる。弥生時代では、自然堤防上の下ノ内浦遺跡では後期の竪穴遺構や土壙墓・壺棺が、後背湿地の富沢遺跡では中期から後期の水田跡が重層的に発見されている。古墳時代では、前期、後期の竪穴住居跡が検出されている。大野田古墳群では中期末から後期の前方後円墳や円墳があるほか、石棺墓、木棺墓なども発見されている。奈良・平安時代では、各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。伊古田遺跡では、縄文時代後期中頃の遺物包含層と古墳時代・奈良時代・平安時代の集落跡が確認されている。縄文土器等の多量の遺物が確認されており、特に仙台市指定有形文化財指定の４点の土偶が注目される。

また、古墳時代から平安時代のおもな遺構としては、18軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡1棟が発見されている。

伊古田Ｂ遺跡では、平成16年度に第１次調査が行われ、溝跡、小溝状遺構、土坑、河川跡等が検出されている。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	27	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文早・前・後、弥生～中世
2	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文早、弥生、平安	28	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生～平安、近世
3	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文前・中、平安	29	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
4	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳後	30	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中
5	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳、奈良、平安	31	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安、奈良
6	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末	32	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安
7	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～平安	33	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、奈良～近世
8	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳後、奈良	34	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文後、弥生中、古墳～平安
9	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	奈良、平安？	35	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文後、弥生～中世
10	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古墳、平安	36	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	奈良～中世
11	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳～平安	37	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
12	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安	38	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
13	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵麓	奈良、平安	39	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
14	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳	40	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
15	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安	41	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
16	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安	42	長町駅東遺跡	集落跡	鉄道敷地	弥生、古墳末、奈良初
17	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安	43	西台畑遺跡	包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳
18	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	44	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初
19	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	自然堤防	縄文、奈良、平安	45	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文後、弥生～近世
20	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	46	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
21	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	47	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
22	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文早・中～晩、弥生中、古墳～中世	48	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
23	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世	49	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳～中世
24	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡、墓跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳・平安、近世	50	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世
25	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生～中世	51	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
26	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後、古墳～平安	52				

第76図　遺跡の位置と周辺の遺跡

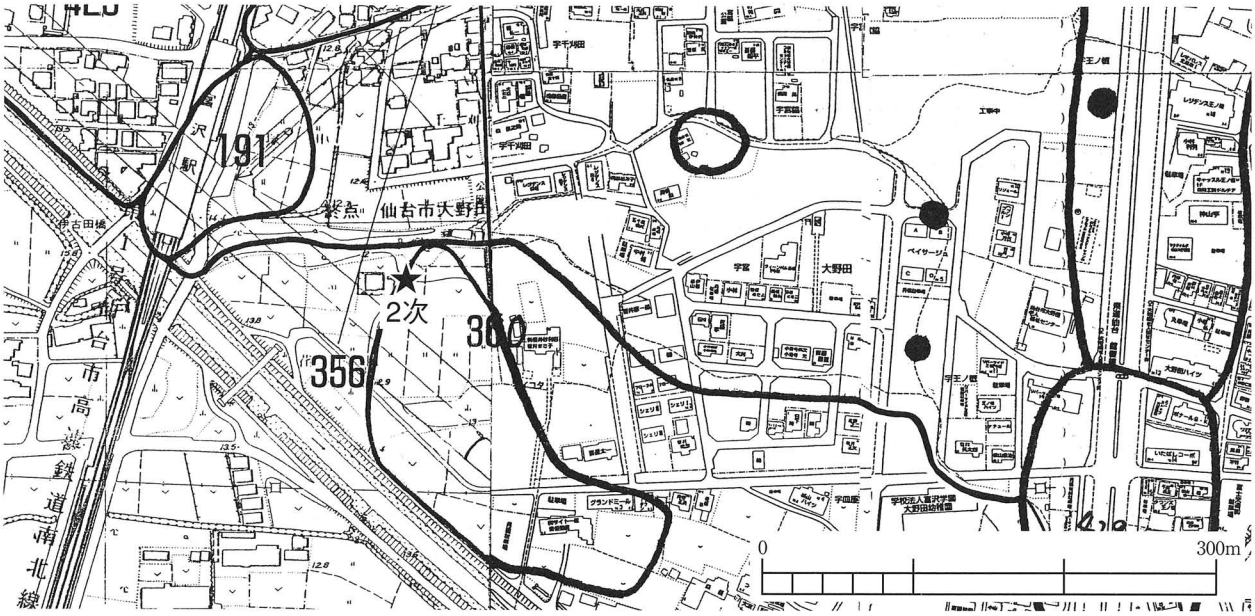
4　基本層序

北壁の東端と中央部の2箇所で深堀を行い土層を観察した。Ⅰ～Ⅴ層は富沢駅周辺の調査での基本層に対応する。

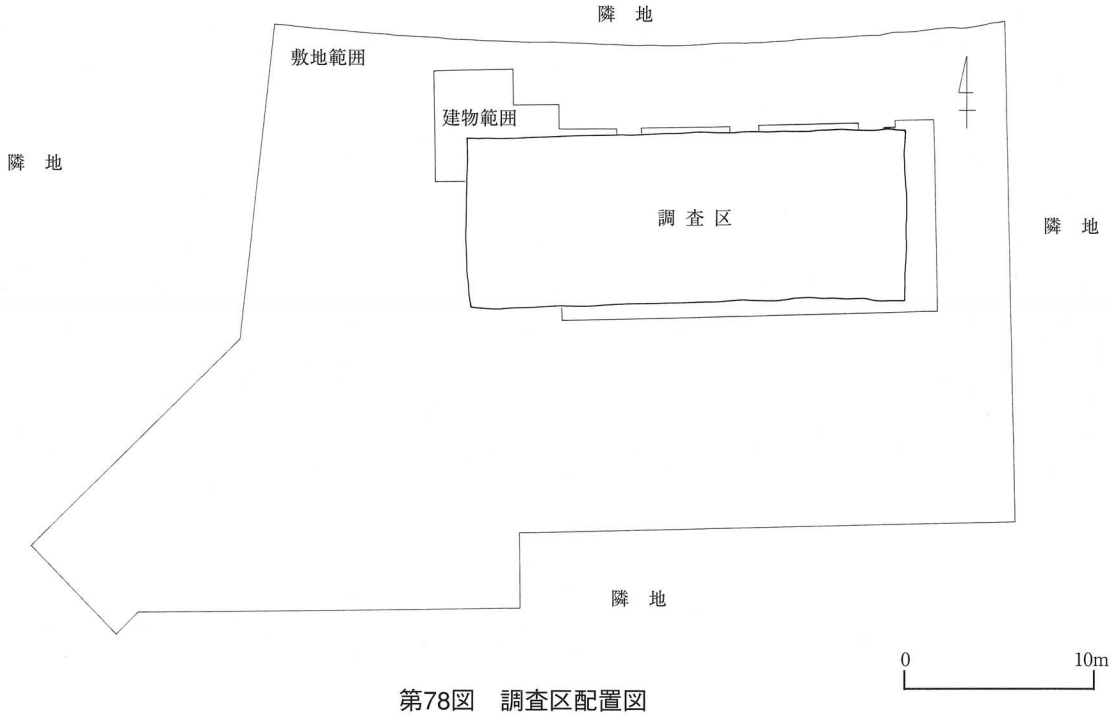
土色、土性の違いから、Ⅰ層は３層に、Ⅴ層は２層に細分した。Ⅴb層より下の層については富沢駅周辺の調査での基本層に対応するものがないため仮の名称をつけ、A～G層とした。SD１溝跡以外の遺構はすべてⅤa層上面で検出した。Ⅴ層は、近隣の調査において古墳時代・古代の遺構が検出されている層である。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面もしくはⅣ層上面で溝跡を１条（SD１）、Ⅴ層上面で、２時期の小溝状遺構（小溝１群、小溝２群）、溝跡を１条、土坑を２基、竪穴住居跡を１基、ピットを40基、性格不明遺構１基（SX１）を検出した。また、Ⅰ



第77図　調査地点の位置

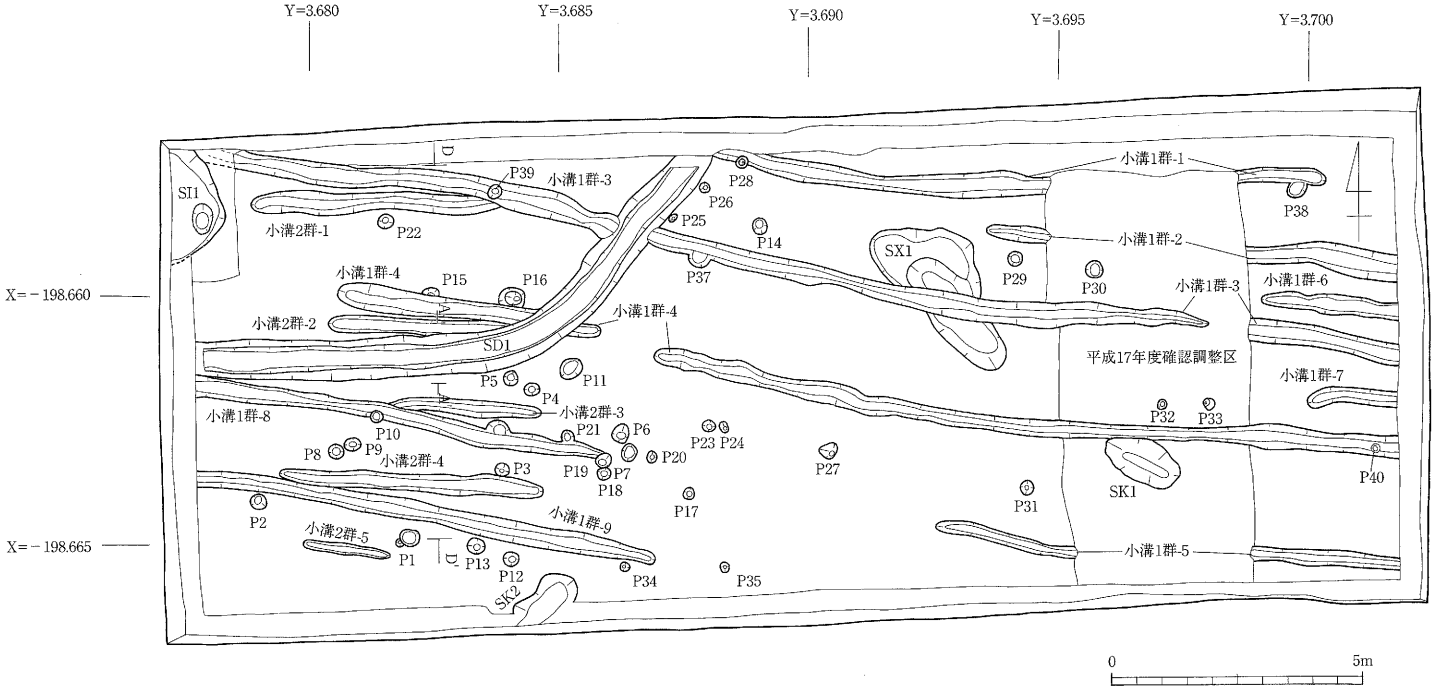


第78図　調査区配置図

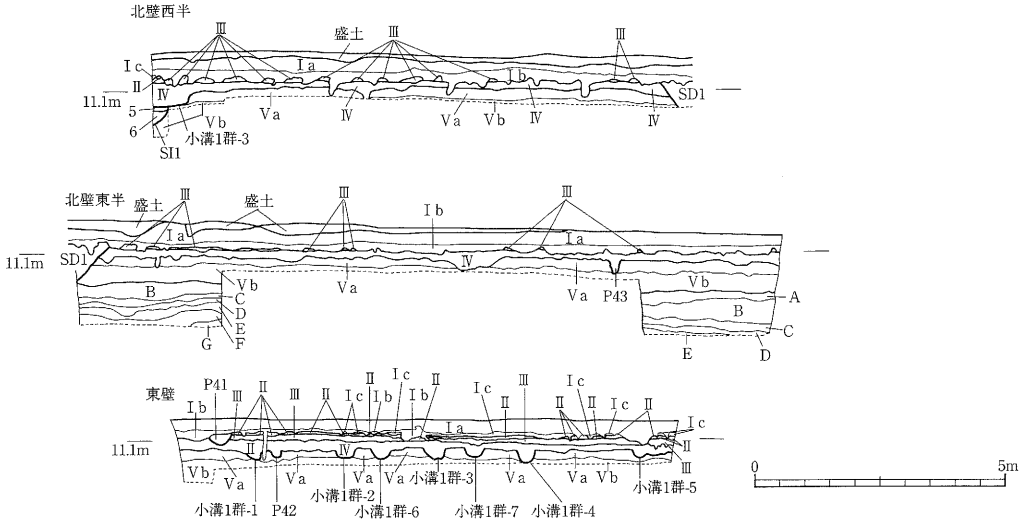
層上面から明治後半の磁器椀１点（図版64－２）、Ⅳ・Ⅴ層上面、ピット、小溝跡等から土師器片が平箱1/2程度、礫石器（第84図－１）が１点出土した。

１）竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡　調査区北西部で検出され、西壁に接し調査区外に広がっている。住居の規模は不明だが、調査区内では北東側の辺が170cm、南東側の辺が140cm検出された。調査区西壁から遺構東端までの長さは約１ｍである。掘り込み面から底面までの深さは70cm～80cmである。掘り込み面はⅤa層上面だが小溝遺構１群に切られており、小溝遺構１群よりも古い時代の住居であると考えられる。遺構内でピットが１基（SI１－P１）検出された。堆積



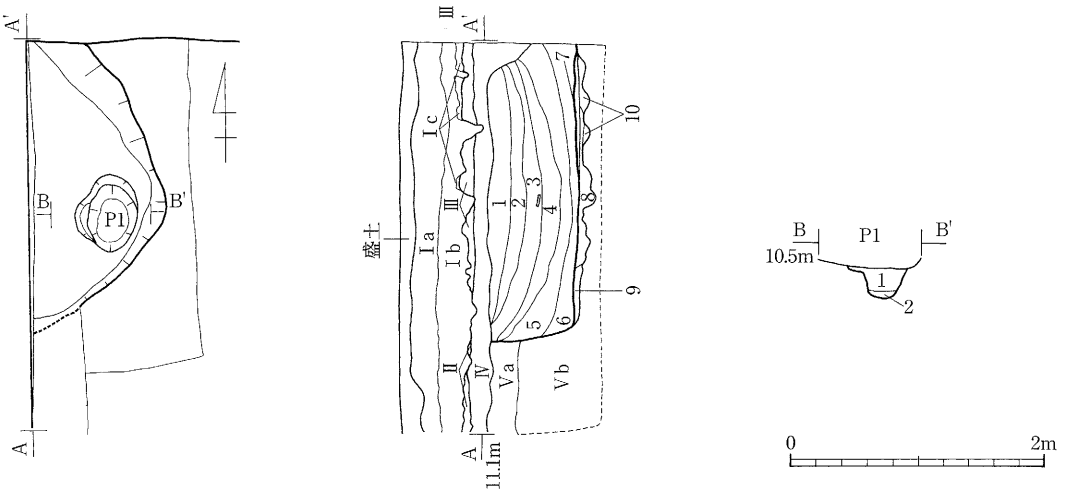
第79図　遺構配置図



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	現代耕作土。
Ⅰb	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	現代耕作土。調査区北半に分布。
Ⅰc	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、炭化物をやや多量に含む。
Ⅱ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄をやや多量に含む。
Ⅲ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
Ⅳ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	上部にマンガンが集積する。
Va	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	
Vb	10YR4/4　褐色	シルト質砂	
A	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	
B	10YR4/4　褐色	シルト質砂	細粒砂（10YR4/2）をまだら状に含む。
C	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	
D	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
E	10YR4/4　褐色	砂質シルト	
F	10YR3/4　暗褐色	細粒砂	1～3mmの円礫を少量含む。
G	10YR4/4　褐色	細粒砂	

第80図　調査区断面図

土は10層に分けられるが、床面は６層下面と考えられる。遺物は土師器片が数点検出された。住居が完全に埋没した後にⅣ層が堆積していることから、Ⅳ層堆積時に既に廃絶していたものと考えられる。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SI1-1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物をやや多量に含む。
3	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。
4	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物をやや多量に含む。
5	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。
6	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	3～10cmのⅤb層ブロックを少量含む。
7	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む。
8	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	砂質シルト（10YR4/6）をまだら状に少量含む。
9	10YR4/6　褐色	砂質シルト	
10	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	1～2cmの砂質シルト（10YR4/6）を少量含む。
SI1-P1-1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。SI1-9層ブロックを含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	

第81図　SI１竪穴住居跡平・断面図

２）溝跡

SD１溝跡　北壁と西壁に接し、西壁から約６ｍは東西方向に伸び、さらに４ｍほど北東方向に伸び北壁に接している。小溝状遺構（１群、２群）を切っている。掘り込み面は、上部を天地返しにより撹乱されているため不明であるが、Ⅲ層上面もしくはⅣ層上面と考えられる。検出面での溝の幅は約80cm、深さは約50cmである。断面形は椀型を呈するが、底面近くでは壁が垂直に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は６層あり底に近づくほど細砂を含んでいるので、水路の跡であると考えられる。出土遺物は土師器が数点である。

３）土坑

SK１土坑　調査区東部で検出された。小溝１群－４を切っている。平面形は不整な楕円形であり、遺構検出面での大きさは、南北80cm、東西110cmである。深さは約80cmで、底面は東西に細長い楕円形である。堆積土は４層にわけられ、土師器片が数点出土している。

SK２土坑　調査区南側で検出された。北東から南西方向に広がり南西側は南壁に接する。平面形は不整な楕円形で、検出面での規模は南北110cm、東西70cmである。深さは20cmである。堆積土は１層で、出土遺物はない。

４）小溝状遺構群

調査区全面にわたって東西方向に伸びる小溝が14条検出された。方向と重複の状況から、以下のように２つの小溝状遺構群に分類した。

①１群・・調査区全面をほぼ東西方向に横切り比較的規模の大きいもの、またそれらと同じ方向に延びるもの。

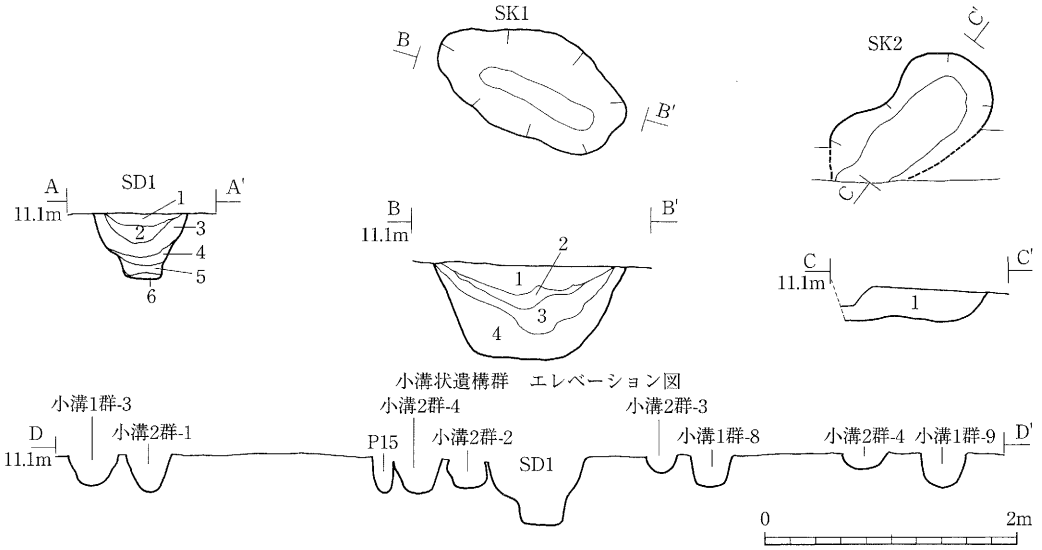
②２群・・調査区西側１／３で検出され、１群よりもやや北東から南西方向に延びており、１群に切られるもの。

小溝状遺構１群　調査区全面にわたって９条検出された。そのうち比較的規模の大きい溝は５条あり、1m50cm～２ｍの間隔で検出された。検出面での幅は30cm～50cm、深さは約20cm～30cm、断面形は船底形を呈する。さらに調査区東側では、比較的小規模な溝が３条検出され、規模の大きいものを含めると30cm～50cmの間隔で検出された。検出面での幅は約30cm、深さは約10cm、断面形は船底形を呈す。いずれも堆積土は１層で、基本層のⅣ層に対応する。溝の堆積土からは、土師器片が合わせて平箱１／５程度検出された。ロクロ成形のものは確認できなかった。調整は外面、内面ともにハケメである。周辺調査では、小溝状遺構の時期は古墳時代から奈良時代とされており、今回検出の小溝群もこの範囲を超えるものではないと考えられる。

小溝状遺構２群　調査区西側に５条検出された。１群よりもやや北東から南西方向に延びており、調査区の西側2/3あたりの位置で途切れている。１ｍ～２ｍの間隔で検出された。検出面での幅は約30cm、深さは10cm～20cm、断面形は船底形を呈する。どの溝も小溝１群に切られており、１群よりも古い時代のものと考えられる。いずれも堆積土は１層で、基本層のⅣ層に対応する。溝の堆積土からは、非ロクロの土師器片が平箱１／５程度検出された。

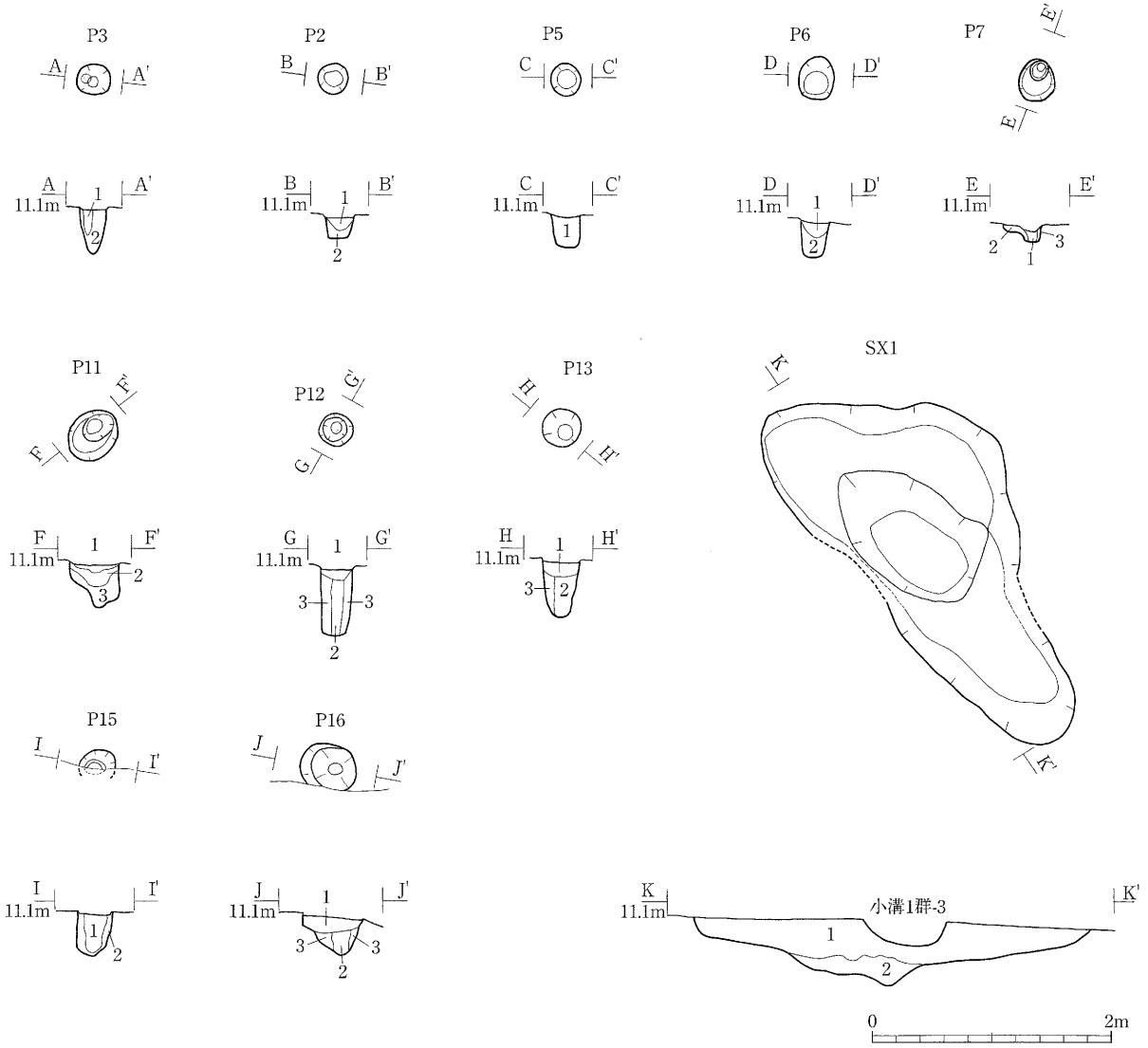
５）ピット

調査区全体でⅤ層上面から40基検出された。このうち柱状痕が確認されたのはP３、P７、P12、P13、P15、P16の６基である。また多くのピットの堆積土は１層であり、基本層のⅣ層に相当する。遺物は、土師器片が全体で数点出土した。P10の堆積土１層から土師器甕または壺の破片（第84図－２）が出土した。全体の形状や成形は明らかでないが、調整は内外面ともにハケメである。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
SD1-1	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	細粒砂（10YR4/3）をまだら状に少量含む。酸化鉄を多量に含む。
2	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	３～５cmの細粒砂（10YR4/3）ブロックを含む。酸化鉄を多量に含む。
3	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルト（10YR4/3）を多量に含む。酸化鉄をやや多量に含む。
4	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	細粒砂（10YR4/4）をラミナ状に多量に含む。
5	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	細粒砂（10YR4/3）をまだら状に多量に含む。酸化鉄を多量に含む。
6	10YR4/4　褐色	砂質シルト	粘土質シルト（10YR5/2）を少量含む。酸化鉄を少量含む。
SK1-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅴb層を５～10mmの粒状に少量含む。
2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	３～５mmのⅤb層ブロックをやや多量に含む。
3	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	３～５mmのⅤb層をブロックを少量含む。
4	10YR4/4　褐色	シルト質砂	粘土質シルト（10YR4/4）を少量含む。炭化物を少量含む。
SK2-1	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒をやや多量に含む。

第82図　遺構平・断面図、エレベーション図



層　位	土　　色	土　性	備　　考
P3-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む。
2	10YR4/4　褐色	シルト	
P4-1	10YR4/4　褐色	シルト	酸化鉄を少量含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	
P5-1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
P6-1	10YR4/4　褐色	シルト	酸化鉄をまだら状に含む。
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
P7-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	酸化鉄をまだら状に含む。
P11-1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	１～２cmの粘土質シルト（10YR5/2）ブロックを多量に含む。酸化鉄を少量含む。
3	10YR4/3　褐色	シルト質粘土	１～２cmの粘土質シルト（10YR5/2）ブロックを多量に含む。酸化鉄を少量含む。
P12-1	10YR4/4　褐色	シルト質砂	粘土質シルトをまだら状に少量含む。
2	10YR4/3　褐色	シルト質粘土	柱痕跡。
3	10YR4/4　褐色	シルト質砂	１～２cmの粘土質シルト（10YR4/3）ブロックを少量含む。
P13-1	10YR4/4　褐色	シルト質砂	粘土質シルト（10YR4/3）を少量含む。炭化物を少量含む。
2	10YR4/3　褐色	シルト質粘土	１～２cmのシルト質砂（10YR4/4）粒を少量含む。柱痕跡か。
3	10YR4/4　褐色	シルト質砂	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に含む。
P15-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	粘土質シルト（10YR3/4）をまだら状に含む。
P16-1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	抜取穴。粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に多量に含む。炭化物を少量含む。
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	粘土質シルト（10YR4/4）をまだら状に少量含む。炭化物を多量に含む。
3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	砂質シルト（10YR3/4）をまだら状に少量含む。
SX1-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	１～５cmの粘土質シルト（10YR5/2）ブロックを含む。
2	10YR4/4　褐色	シルト質砂	１～５cmの粘土質シルト（10YR5/2）ブロックをやや多量に含む。

第83図　遺構平・断面図

柱状痕が確認されたピット、堆積土が複数の層になるピットは以下の通りである。

P３　調査区東側、小溝２群－４の北側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径約20cmである。堆積土は２層に分かれ、深さは35cmである。１層は柱痕跡と見られる。

P４　調査区東側、小溝２群－３の東端付近で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径約20cmである。堆積土は２層に分かれ、深さは15cmである。

P５　調査区東側、SD１の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径20cmである。堆積土は１層で、深さは25cmである。

P６　調査区中央部、小溝１群－８の東端付近で検出された。平面形は不整な円形で、遺構検出面での大きさは25cmである。堆積土は２層に分かれ、深さは30cmである。

P７　調査区中央部、小溝１群－８の東端付近で検出された。平面形は不整な楕円形で、遺構検出面での大きさは直径35cmである。堆積土は２層に分かれ、深さは15cmである。１層は柱痕跡と見られる。

P11　調査区中央部、SD１の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径40cmである。堆積土は３層に分かれ、深さは40cmである。

P12　調査区中央部で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径25cmである。堆積土は３層に分かれ、深さは55cmである。２層は柱状痕と見られる。

P13　調査区西側、小溝１群－９の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径30cmでる。堆積土は３層に分かれ、深さは45cmである。２層は柱痕跡と見られる。

P15　調査区中央部、小溝１群の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは、直径30cmである。堆積土は２層に分かれ、深さは35cmである。１層は柱痕跡と見られる。

P16　調査区中央部南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは50cmである。堆積土は３層に分かれ、深さは30cmである。２層は柱痕跡と見られる。

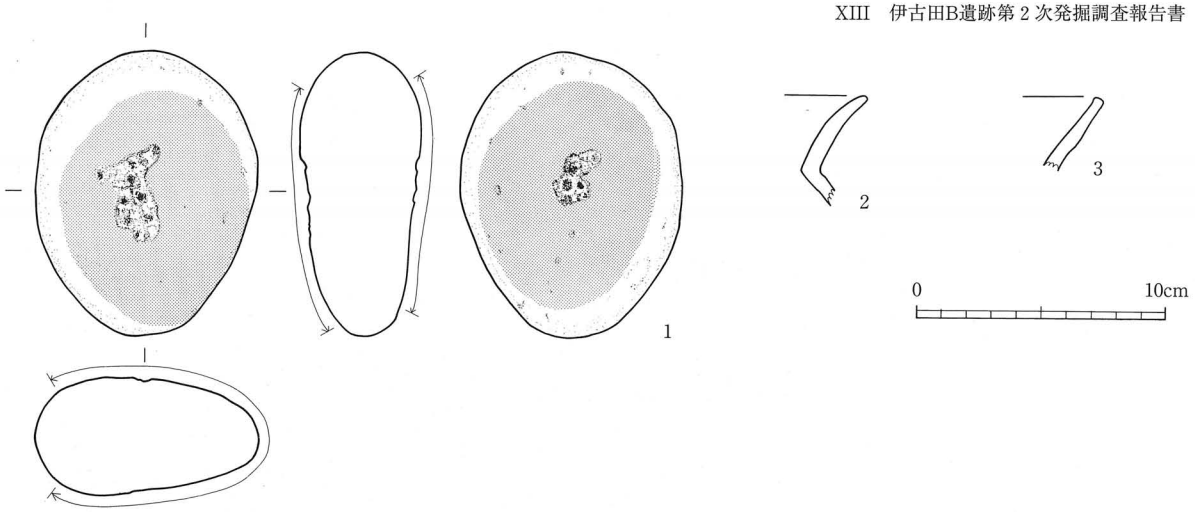
６）性格不明遺構

SX１　調査区中央部で検出された。１小溝群－３を切っている。平面形は不整な三角形であり、遺構検出面での大きさは、南北約２m50cm、東西約２mである。深さは50cm～60cmで、底面は楕円形である。堆積土は２層に分けられ、土師器片が数点出土している。

６．まとめ

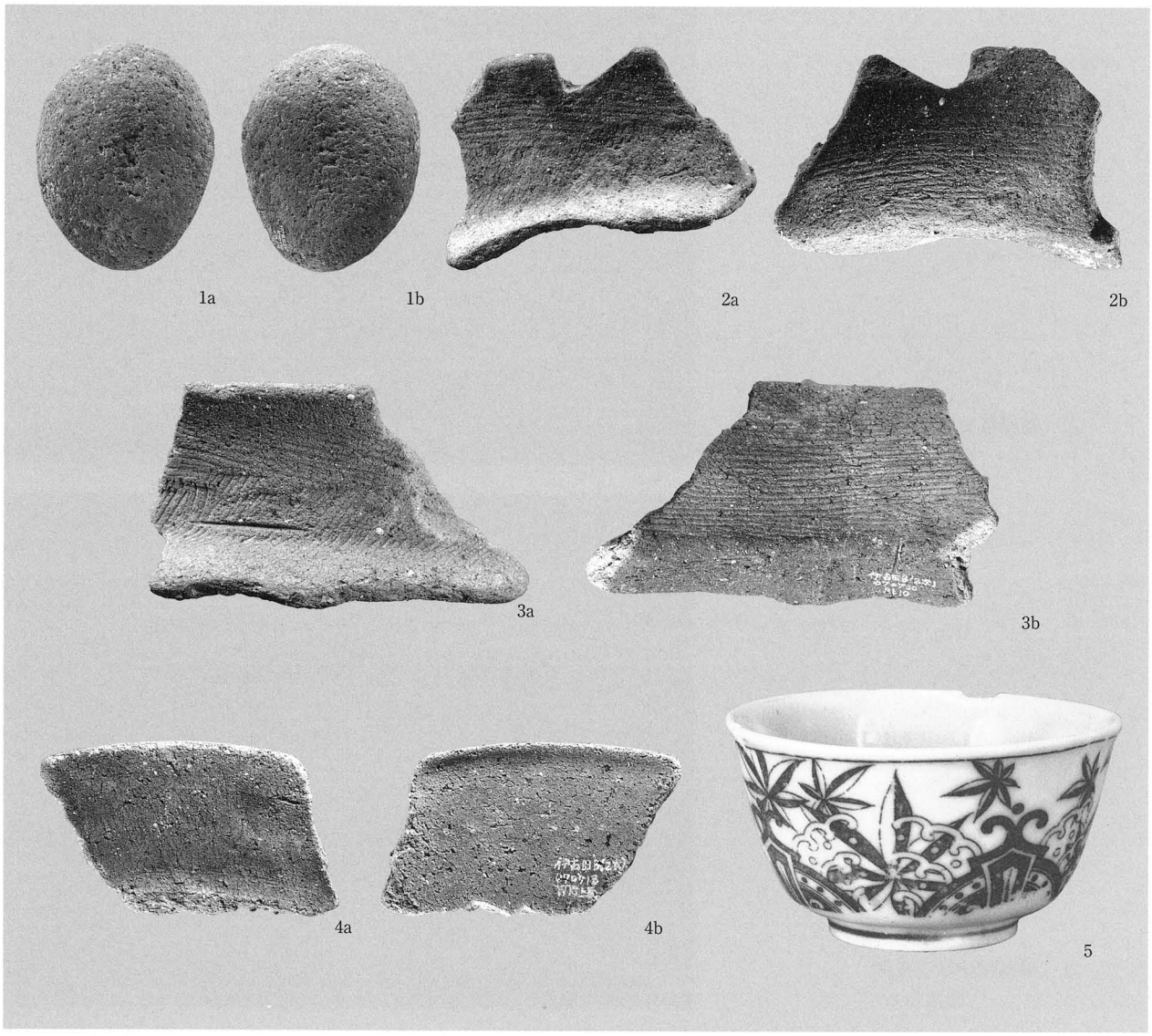
① 今回の調査地点では、溝跡１条、竪穴住居跡１基、２時期の小溝状遺構（小溝１群、小溝２群）、土坑を２基、性格不明遺構１基（SX１）、ピットを40基を検出した。

② 小溝状遺構は小溝群によって時期は異なるものの、いずれも周辺調査の状況から古墳時代から奈良時代のものと考えられる。また竪穴住居跡は小溝状遺構よりも古い遺構であり、古墳時代に属する可能性が高いと考えられる。



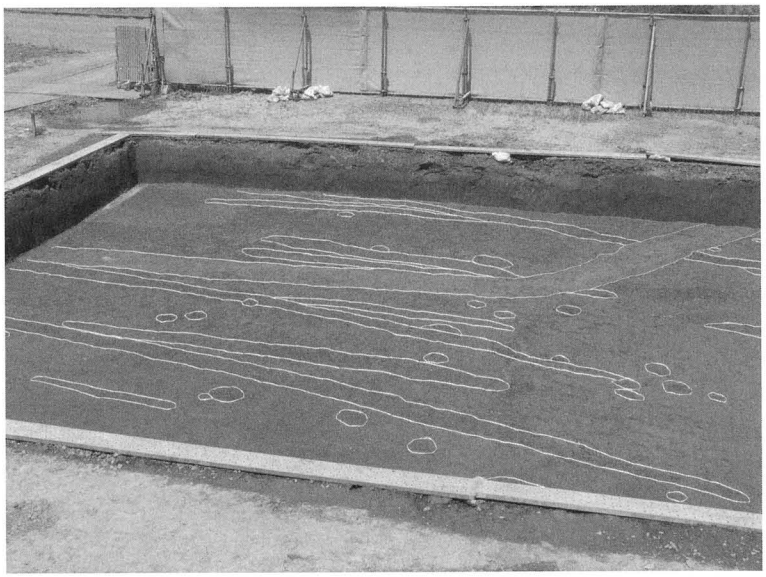
図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量（cm・g）				特徴・備考（調整・素材・産地・文様等・時期）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	K-1		小溝1群4	1		石器	磨凹石	11.4	8.9	4.8	675	安山岩　網かけは磨面の範囲	64-1
2	C-2		P10	1		非ロクロ土師器	甕or壺					外面：口縁部ハケメ　内面：口縁部ハケメ	64-3
3	C-3	Ⅳ上面				非ロクロ土師器	壺？					外面：口縁部ハケメ後ヨコナデ　内面：口縁部ヨコナデ	64-4
	C-1		小溝1群9	1		非ロクロ土師器	甕					外面：口縁部ハケメ　内面：口縁部ハケメ	64-2
	J-1	Ⅰ				磁器	碗	4.4	8.0		3.7	端反碗　銅版転写　19c後	64-5

第84図　出土遺物



図版64　伊古田Ｂ遺跡２次出土遺物

1　遺構検出状況
（北西から）

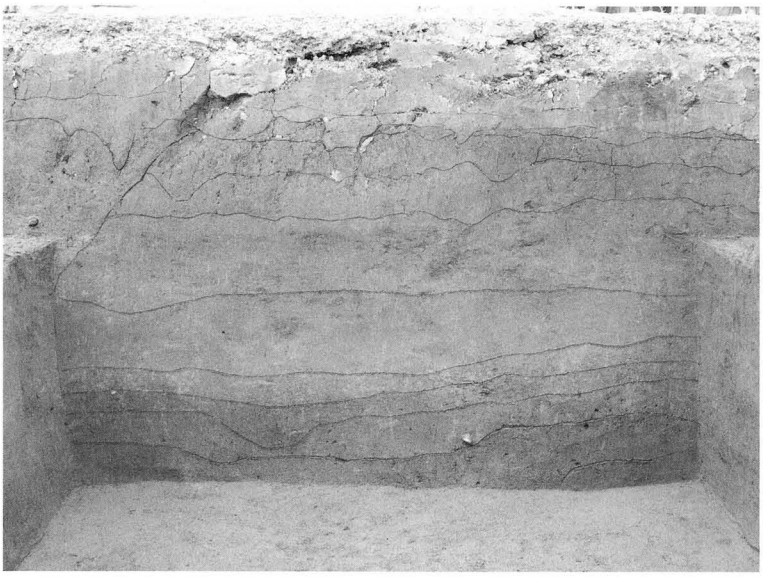


2　遺構検出状況西側
（南東から）

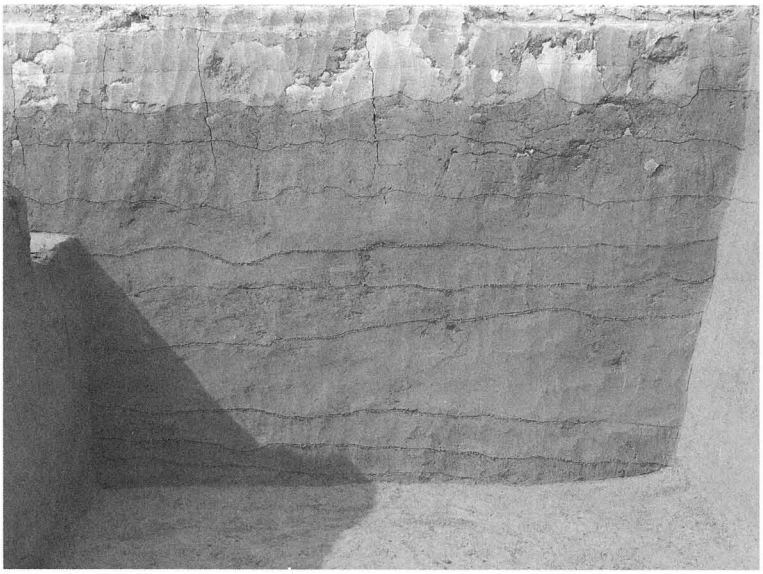
3　遺構検出状況東側
（南西から）

図版65　遺構検出状況

1　北壁全景
（南西から）



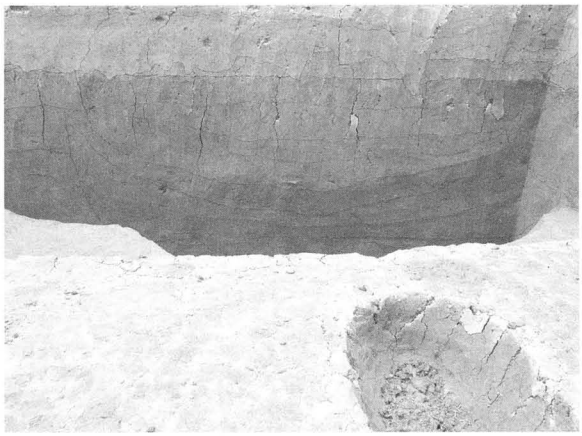
2　基本層序
（北壁中央部）



3　基本層序
（北壁東端部）

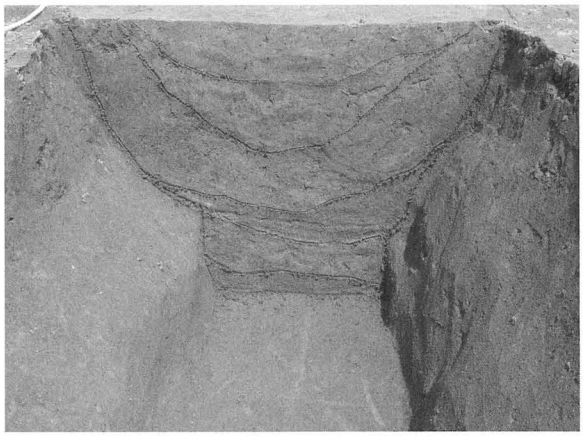
図版66　基本層序

1　SI 1 竪穴住居跡
（南から）

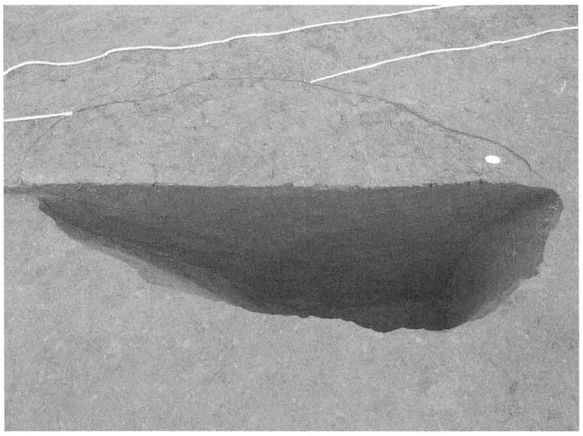


2　SI 1 竪穴住居跡断面（西壁）

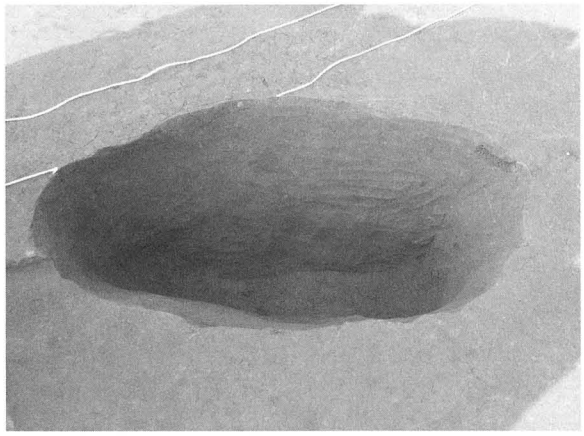
3　SD 1 溝跡完掘（北東から）



4　SD 1 溝跡断面（西から）

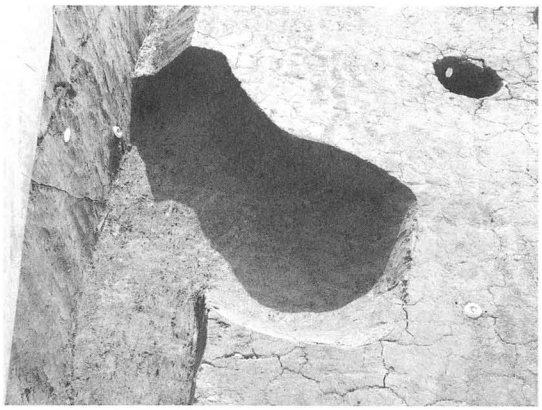


5　SK 1 土坑断面（南から）

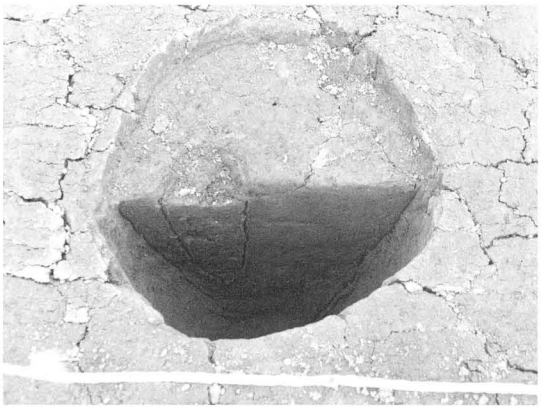


6　SK 1 土坑完掘（南から）

図版67　竪穴住居跡、溝跡、土坑

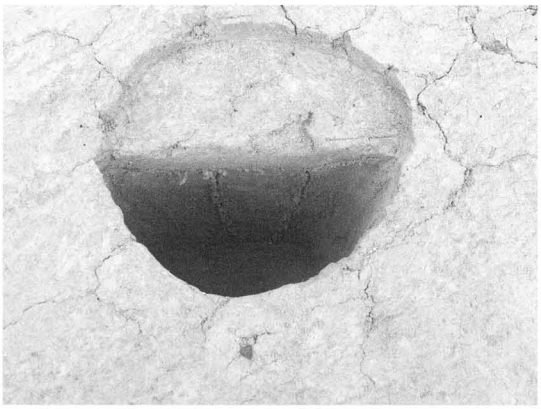


1　SK２土坑完掘（東から）

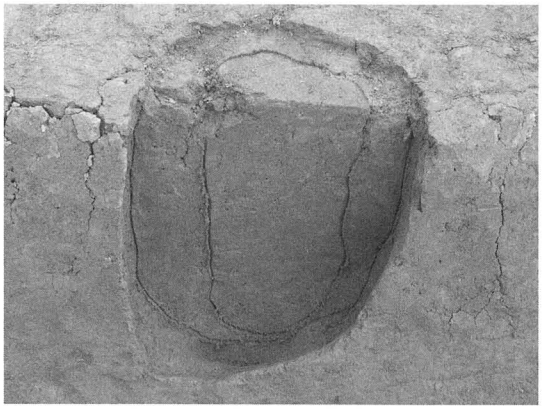


2　P３断面（南から）

3　P７断面（東から）



4　P12断面（東から）

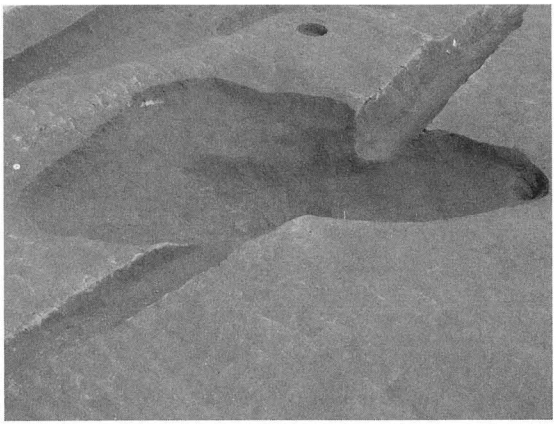


5　P15断面（南から）

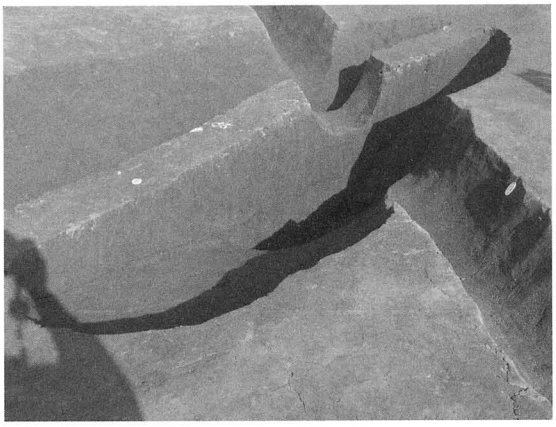
6　P16断面（南から）

7　小溝状遺構群断面
（東壁）

図版68　土坑・ピット・小溝状遺構群



1　SX１性格不明遺構（南西から）



2　SX１性格不明遺構断面（北西から）

3　完掘全景（西から）

図版69　性格不明遺構・完掘全景

XIV　北目城跡第７次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	北目城跡（宮城県遺跡番号01029）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山字東郡山２丁目106－7、107－5
調 査 期 間	平成19年11月７日～９日
調査対象面積	79.24㎡
調 査 面 積	25.5㎡
調 査 原 因	GL－4500mmの杭打ちを伴う木造２階建て個人専用住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事　鈴木　隆　　加藤　隆則　　臨時職員　森田　賢司

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年９月18日付けで、鈴木　實・鈴木愛子氏より、深さ4.5mの杭打ちを伴う木造２階建て個人専用住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、平成19年11月７日に調査を実施した。建物建築範囲に東西8.5m×南北3.0mの調査区を設定して調査を行なったところ、調査区内から遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。

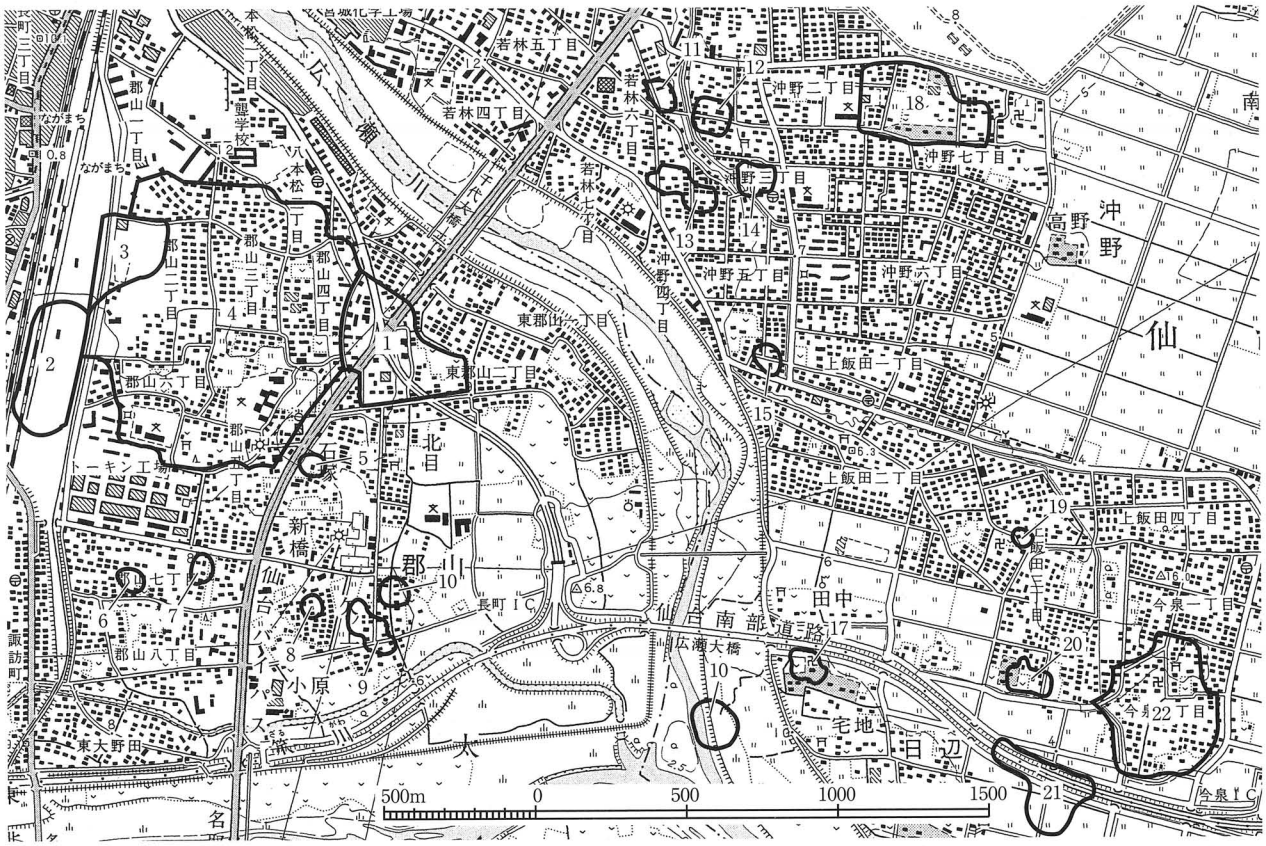
3　遺跡の位置と環境

北目城跡はＪＲ長町駅の南東1.5kmに所在する遺跡で、仙台市街の南東部、太白区郡山字北目宅地から郡山四丁目に所在し、北東を広瀬川、南部を名取川、また西を長町－利府構造線に画された郡山低地に位置する。遺跡は、広瀬川右岸の標高約８～11mの自然堤防上に立地し、調査地点付近の標高はこのうちでもっとも低い標高８m前後である。遺跡の北東を流れる広瀬川は、遺跡の1.5km南東で名取川と合流し、さらに6.0km東側で仙台湾へと注ぎ込む。

遺跡は、東西450m、南北450mの規模であり、遺跡範囲の東側は、本調査地点に隣接する道路によって画されている。一方、西側は郡山遺跡と接しており、遺跡範囲外（郡山遺跡の範囲内）には現在も「郡山堀」と呼ばれる堀が見られる。この堀は、明治時代中期の地籍図から、北目城の外堀である可能性が高い。また、遺跡の北側は、北西方向から南東方向にかけて広瀬川の旧河道が走り、現在は標高が1.5～2.0mほど低くなっている。また、地積図には南側範囲の限界である道路も表れているほか、遺跡周辺には屈曲する水路や城館に特有な「折れ」のある地割りなど、かつての北目城を偲ばせる景観が現在も残っている。

北目城は、延宝年間（1670年代）に記された史料『仙台領古城書上』によると、16世紀後半までは粟野氏の居城として機能していたことが知られる。その後、伊達政宗が慶長５年（1600）、関ヶ原の戦いで白石城の上杉景勝を討つための前線基地として、仙台城の完成まで入城していたとされている。同史料によれば、城の規模は記載内容から、東西四十六間（約370m）、南北五十六間（約280m）とあるが、地籍図に見る城の痕跡はさらに広域に及んでいることから、これは主郭のみを指していると考えられる。

北目城跡周辺には、旧石器時代から近世までの多くの遺跡が残されている。特に北目城に関連の深い同時期の遺跡として、本遺跡の北東1.6kmに沖野城跡（18）が、また南東2.8kmに今泉遺跡（22）、同1.8kmに日辺館跡（17）があげられる。いずれも広瀬川の左岸に位置する中世の城館跡（日辺館跡の詳細は不明）であるが、六郷地区と七



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文後、弥生～近世	12	神柵遺跡	建物跡、包含地	自然堤防	奈良、平安
2	長町駅東遺跡	集落跡	鉄道敷地	弥生、古墳末、奈良初	13	砂押Ⅱ遺跡		自然堤防	
3	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳	14	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～平安
4	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初	15	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
5	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	16	日辺遺跡	散布地	河川敷	古墳
6	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	17	日辺館跡	城館跡	自然堤防	中世
7	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	18	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
8	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳～中世	19	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
9	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世	20	高田A遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
10	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	21	高田B遺跡	集落跡、建物跡、水田跡、河川跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安～近世
11	砂押Ⅰ遺跡				22	今泉遺跡	集落跡、城館跡、包含地	自然堤防	縄文～近世

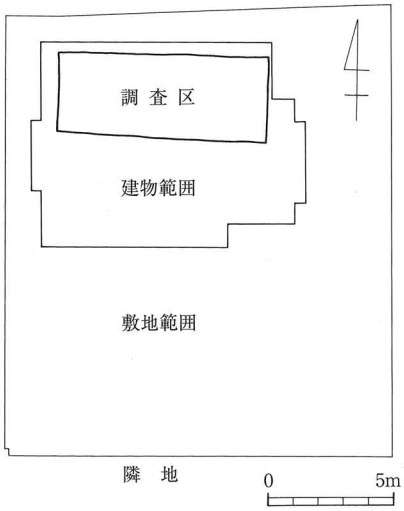
第85図　遺跡の位置と周辺の遺跡

郷地区との境界付近に旧河道が確認されることから、本来的には広瀬川の右岸に位置し、同河川が名取郡と宮城郡の境界となっていたものと思われる。

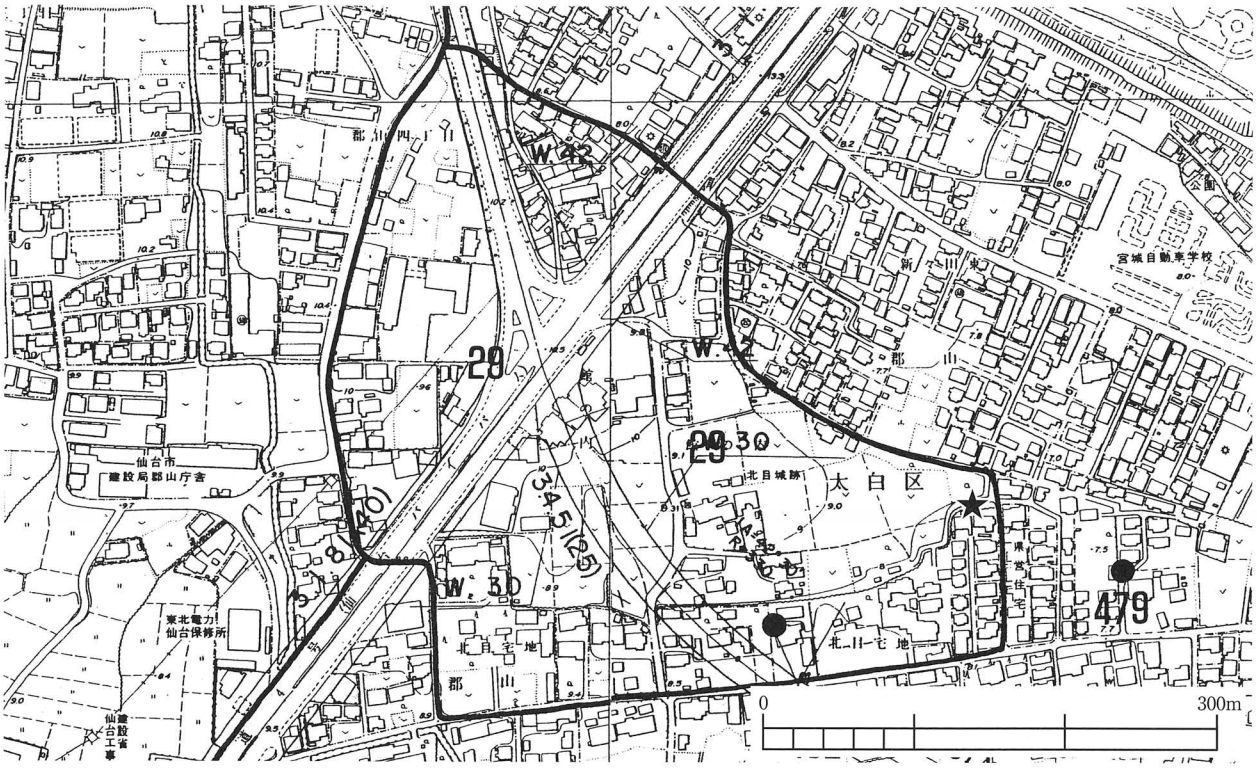
沖野城は、『仙台領古城書上』によれば、粟野大膳の居城とされている。同城跡の記録は多数残されているが、発掘調査の成果から、北側と東側に二重の堀が巡っていることが明らかになっている。今泉城は『仙台領古城書上』によれば、須田玄蕃を城主としたとある。今泉遺跡の概要については、本書「Ⅶ　今泉遺跡第５次」を参照されたい。

北目城跡はこれまでに、第１～６次調査を実施し、古くは縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑（第１次調査）、縄文時代後期末葉～晩期初頭の土器など（第６次調査）を検出している。

今回の第７次調査は、遺跡範囲の最東端に位置し、戦国時代末期～近世初頭の堀跡を検出した。同時期の遺構は、第６次を除くすべての調査で検



第86図　調査区配置図



第87図　調査地点の位置

出されている。中でも第１次調査は、障壁のある鈎型に屈曲する規模の大きな堀跡（SD１堀跡）を検出しており、南側で検出したSD15堀跡と併せて、北目城の主郭を画する堀跡と見られる。

同堀跡の底面から下層では陶磁器、朱塗鞘の脇差や短刀、曲尺、加飾漆器、木製品（下駄、柄杓など）のほか、クリ、クルミ、ヒシなどの植物遺存体、巻貝などの動物遺存体が出土した。水成植物であるヒシの存在は、同堀跡が水堀であった可能性を示している。また、中間層では寺社などの建築部材である虹梁や18世紀前半の肥前磁器、火縄銃の弾丸が、上層では19世紀代の陶磁器や木刀、下駄などの木製品が多量に出土している。

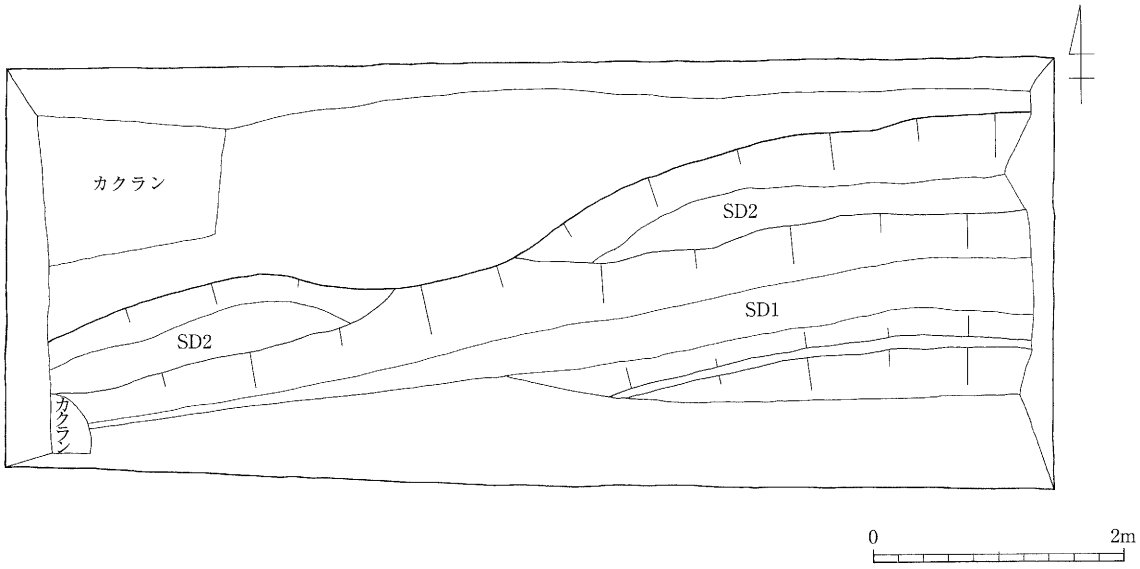
一方、第４次、第５次調査でも16世紀後半の土坑や井戸跡が検出され、北目城関連の遺構である可能性が高い。また、遺跡北西部の第２次調査で検出した溝跡は、地籍図から外堀であろう。このほか、調査次数は付されていないが、平成12年に本地点の西側隣接地で、個人住宅建設に伴う確認調査を実施し、障壁のある堀跡を検出している。

4　基本層序

調査地点は50～70cmの盛土がある。南側ほど土層が厚く、堀は近年まで窪地としての景観を残していたようである。Ⅰ層は堀跡の窪地に堆積した土層で盛土同様、堀の中央に向かって傾斜している。Ⅱ層は東壁の基本層序に表れていないが、北壁のほぼ全面に層厚10～20cmの明褐色砂質シルト土として確認される。Ⅲ層は黒褐色シルト質粘土で、SD１堀跡ないしはSD２溝跡に掘り込まれている。Ⅲ層以下は褐色や灰黄橙の水成堆積層で、酸化鉄を多量に含み、層中に黒褐色粘土層や炭化物、未分解腐食土層をラミナ状に含んでいる。Ⅲ層以下の水成堆積層は、西側隣接地でも確認されている。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層でSD１堀跡、SD２溝跡を検出した。遺物は、SD1堀跡の底面から土製品が１点出土している。

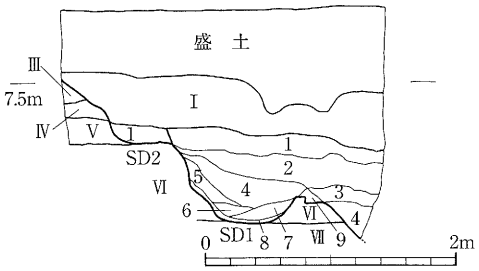


第88図　遺構配置図

1）堀跡・溝跡

SD１堀跡　調査区を東西方向に延びており、南側は調査区域外におよんでいる。北側でSD２溝跡と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。北側の立ち上がりは80～100cm底面は基盤層を掘り残して、堀と平行の障壁を設けている。障壁南側は堀の中央に向かって下がっている。規模は検出長8.1m。検出面から底面までの深さは、障壁北側で約75cm、南側の最深部で90cm、方位はN－70°－Eである。堆積層は１～９層を確認した。堀跡底面付近の土層（４～８層）はⅤ・Ⅵ層ブロックを多く含んでいる。水成堆積を示すラミナ状堆積は見られない。

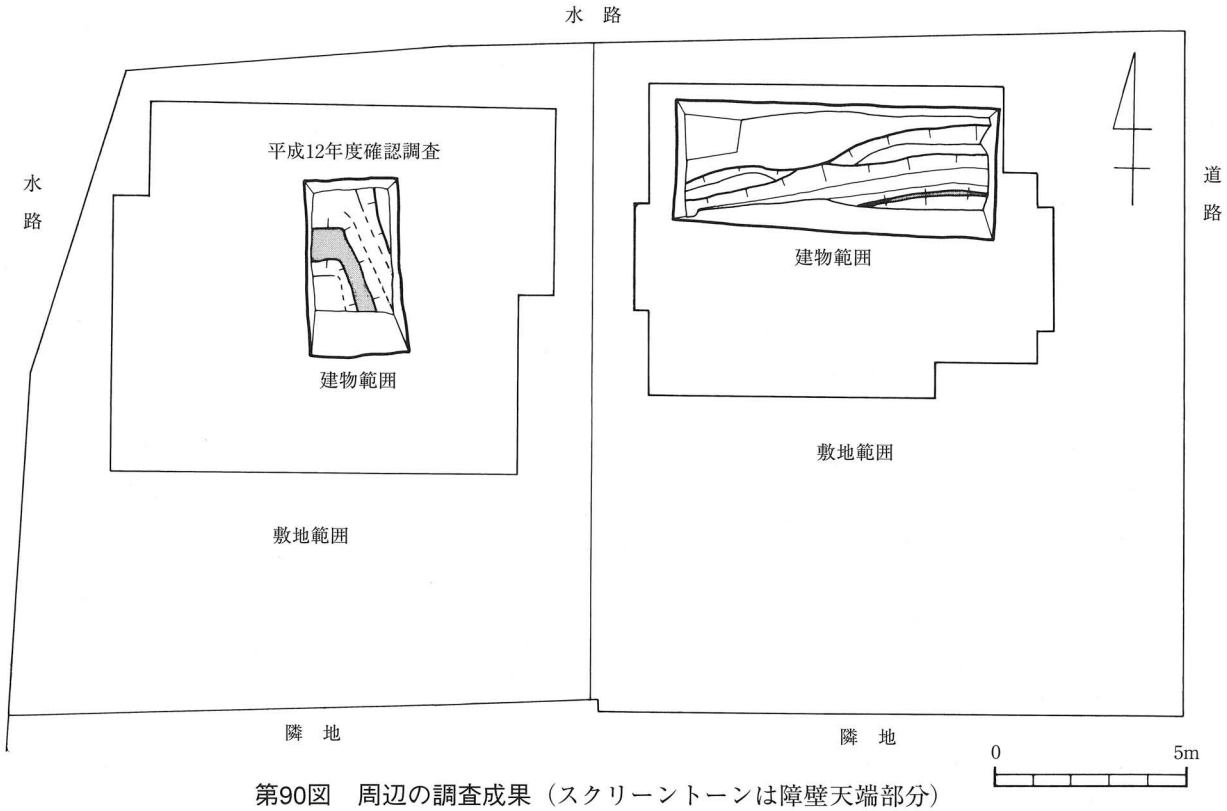
出土遺物は、調査区東寄りの障壁北側、底面から若干浮上した位置で土製品１点が出土した。土製品は直径2.8～3.2cm、高さ8.5cm、底面に向かってわずかに広がる中実円筒形である。端部の一方はわずかに内側に入る上げ底状で、他方はやや外反するが破損しており不明である。色調は明赤褐色で、外面はタテ方向にケズられる。



SD２溝跡　調査区をSD１堀跡と平行して東西方向に延び、南側は

基本層	土　色		土　性	備　考
Ⅰ	10YR4/4	褐色	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを部分的に含む。
Ⅱ	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	
Ⅲ	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層ブロックを多量に含む。
Ⅳ	10YR4/1	褐色	粘土質シルト	Ⅴ層ブロックを多量に含む。
Ⅴ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	
Ⅵ	10YR6/2	灰黄橙色	粘土質シルト	粘土（10YR4/1）、炭化物をラミナ状に含む。
Ⅶ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	
層　位	土　色		土　性	備　考
SD1-1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	２層をまだら状に含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	Ⅴ層粒を少量含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	
4	10YR5/2	灰黄橙色	粘土質シルト	
5	10YR5/2	灰黄橙色	粘土質シルト	Ⅴ層をまだら状に少量含む。
6	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	４層をまだら状に少量含む。
7	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層粒をやや多量に含む。
8	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層粒、Ⅵ層粒を少量含む。
9	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅵ層起源の黒色粘土粒を少量含む。
SD2-1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	Ⅴ層ブロックを多量に含む。

第89図　調査区東壁断面図



第90図　周辺の調査成果（スクリーントーンは障壁天端部分）

同遺構により切られている。犬走り状の施設とも考えられたが、SD１堀跡と切り合っており、かつ堆積土も明瞭に異なることから、同堀跡に先行する遺構と考えられる。出土遺物はない。

6　まとめ

今回の調査では、障壁をもつ堀跡を検出した。平成12年度には西側隣接地点より、同じく障壁をもつ堀跡を検出し（第90図、写真１）、調査地点付近において堀跡が東西方向に展開している可能性が高いことが明らかになった。

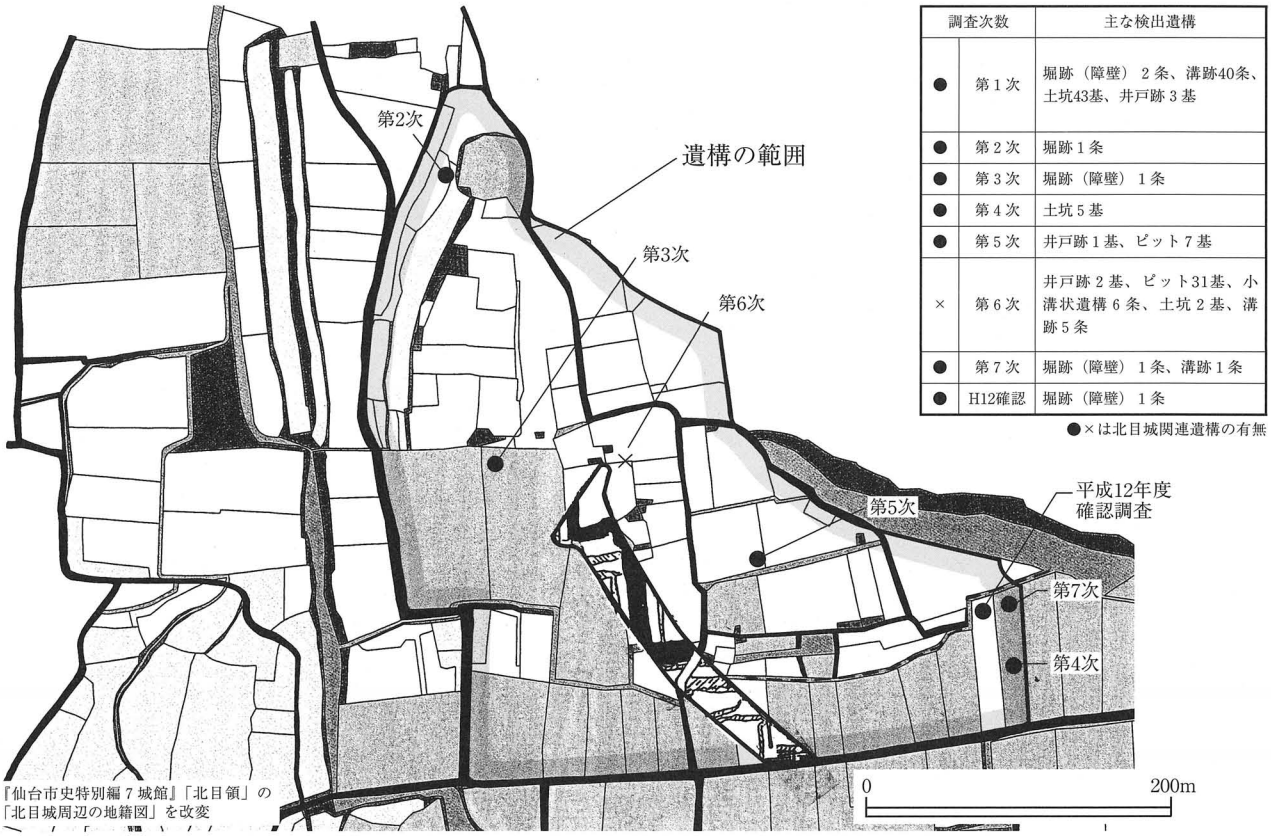
第１次調査では、障壁をもつ非常に大規模な堀跡（SD１堀跡・SD15堀跡）を検出した。SD15堀跡は現在の用水路と一致していることが明らかとなった。明治時代中期頃の地籍図にも示された同用水路は、現在もまったく同位置にあり、第１次調査区から東へ200mほど延び、北側、東側への屈曲を経て本調査地点北側の水路に至る。また現在も水路南側に連なる屋敷地は、明治初年の『郡山村絵図』にも示されていることから、水路や屋敷地などの現況が明治時代頃の景観をある程度残していると見てよい。

以上のように、明治時代の地籍図に辿れる現況が近世の景観を反映したものと仮定するなら、本調査地点の堀跡もSD15堀跡の延長という考えが成り立つ。さらにSD15堀跡やSD１堀跡が北目城の主郭を画する内堀と推測されていることから（金森1995）、本地点の堀跡も、北目城の内堀の可能性が考えられる。

＜参考文献＞

金森安孝1995『北目城跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第197集
金森安孝1996「関ヶ原の戦いの出撃基地　北目城を掘る」『「歴史群像」名城シリーズ-仙台城』
工藤信一郎2007『北目城跡第6次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第314集
工藤哲司2006「北目城跡第４次発掘調査報告書」『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集pp.69-74
工藤哲司2006「北目城跡第５次発掘調査報告書」『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集pp.75-79

佐藤　洋1999「北目城跡（第２次調査）」『陸奥国分尼寺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第238集pp.86-89
豊村幸弘2004「北目城跡（第３次）」『保春院前遺跡他』仙台市文化財調査報告書第274集pp.97-101
柳原敏昭2006「北目城」『仙台市史』特別編７城館　仙台市pp.165-169



調査次数		主な検出遺構
●	第１次	堀跡（障壁）２条、溝跡40条、土坑43基、井戸跡３基
●	第２次	堀跡１条
●	第３次	堀跡（障壁）１条
●	第４次	土坑５基
●	第５次	井戸跡１基、ピット７基
×	第６次	井戸跡２基、ピット31基、小溝状遺構６条、土坑２基、溝跡５条
●	第７次	堀跡（障壁）１条、溝跡１条
●	H12確認	堀跡（障壁）１条

●×は北目城関連遺構の有無

第91図　北目城関連の調査成果

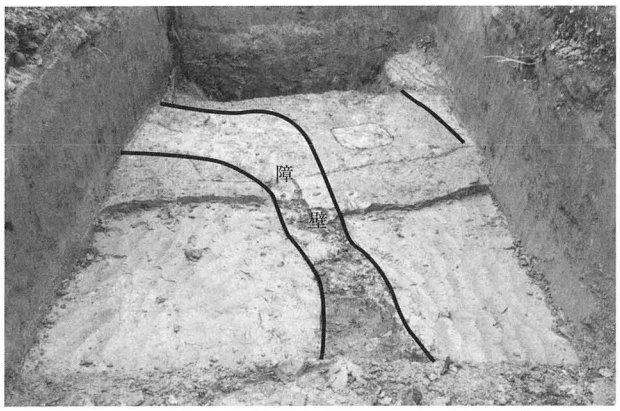


写真１　平成12年度調査区・全景（南から）

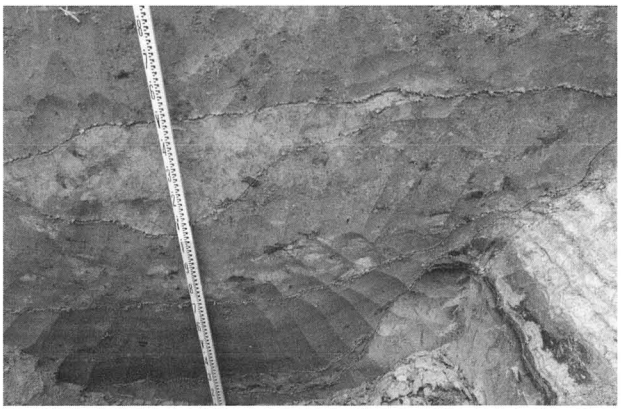


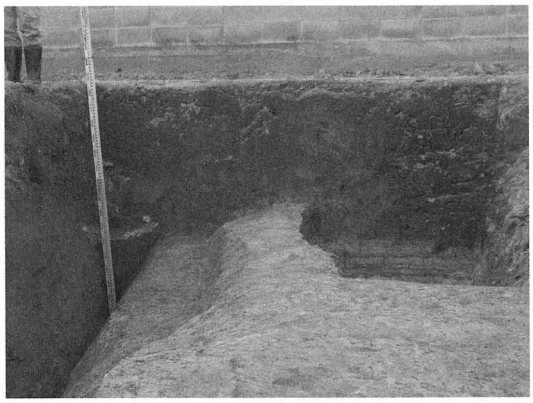
写真２　平成12年度調査区・北壁断面

1　SD１堀跡検出状況（東から）

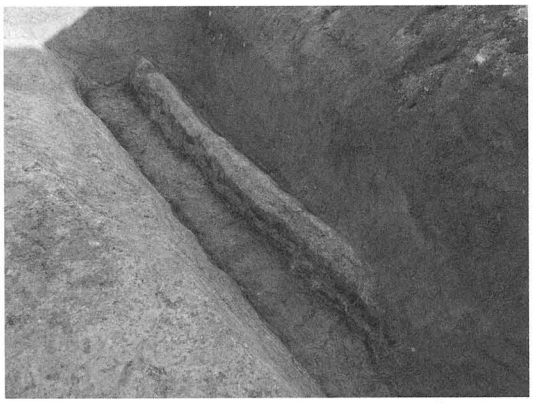
2　SD１堀跡完掘（東から）

図版70　調査区全景

1　調査区東壁



2　調査区西壁



3　SD 1 堀跡完掘（北西から）

4　SD 1 堀跡遺物出土状況（底面）

5　SD 1 堀跡出土遺物

図版71　調査区断面・遺構・出土遺物

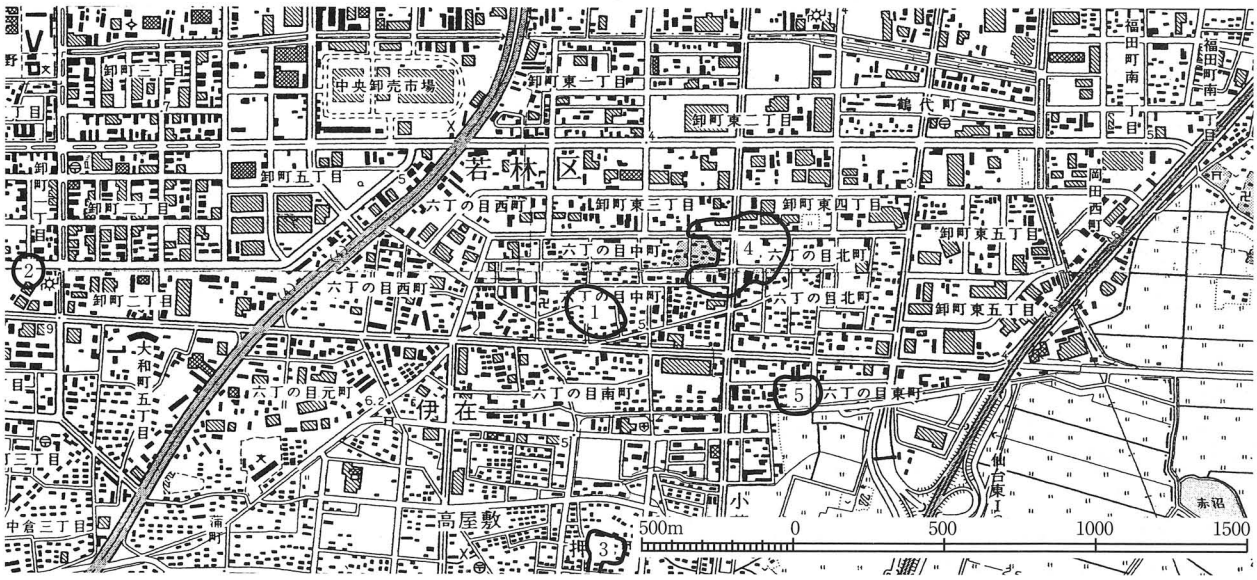
XV　北屋敷遺跡第４次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　北屋敷遺跡（宮城県遺跡番号01220）
調 査 地 点　　仙台市若林区六丁の目中町14－２
調 査 期 間　　平成19年11月19日～20日
調査対象面積　　27㎡
調 査 面 積　　17㎡
調 査 原 因　　仙台市消防局40㎥級防火水槽新設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　志賀　雄一　　工藤　慶次郎

2　調査に至る経過と調査方法

平成19年９月13日付けで、仙台市消防局局長の藤橋孝彰氏より、40㎥級防火水槽新設工事に伴う「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出され、平成19年９月20日付で、宮城県教育委員会教育長宛に進達した。この回答を受けて確認調査を行った。防火水槽新設予定地に４ｍ×２ｍのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝などの遺構を検出したため、引き続き本調査を実施した。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	北屋敷遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世	4	明屋敷遺跡	散布地	自然堤防	平安
2	谷地館跡	城館跡	自然堤防	中世	5	地蔵浦遺跡	散布地	自然堤防	中世
3	押口遺跡	河川跡、水田跡、包含地	自然堤防、後背湿地	弥生～中世					

第92図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3　遺跡の位置と環境

本遺跡は、仙台市東部、県道仙台塩釜線沿いにあり、六丁の目交差点より東方約１kmに位置している。標高は約５mで、七北田川と広瀬川の間に広がる沖積平野上の微高地に立地している。登録されている遺跡の範囲は、東西約180m・南北約200mである。区画整理以前の小字名は「六丁の目字北屋敷」で、周辺には同様に「明屋敷」「屋敷」「鹿子屋敷」「中屋敷」「札屋敷」など、屋敷の所在を示す小字名が多数見られる。また区画整理以前は「居久根」と呼ばれる屋敷林もよく残り、古き農村集落の景観をとどめていたが、開発が急速に進み、ほとんど見られなくなってきている。

今回の調査地点は、本遺跡のほぼ中央部に位置する。昭和53年（1987年）、六丁目コミュニティーセンターの建設に伴い行った第1次調査で、平安時代から近世にかけての遺跡であることが明らかになった。遺跡の中心となるのは、江戸時代の仙台平野に形成された農村の屋敷跡と考えられる遺構である。屋敷は堀と考えられる溝で囲まれ、その中に掘立柱建物跡・土坑・井戸跡等の遺構を発見した。堀は屋敷を囲むほかに、隣の屋敷との区画施設の役割も果たしている。屋敷内からは、瀬戸産・美濃産の陶器、大堀相馬陶器、肥前産磁器、瓦質陶器、灯明皿、漆器、などの遺物が出土している。また17～19世紀の墓石が見つかっており、中には天明４年（1784年）の銘が刻まれたものもあった。平成10年実施の２次調査では、溝跡７条・溝状土坑１基・土坑２基を検出し、近世陶磁器などの遺物が多く出土している。東西方向に重複して延びる溝跡は、「宮城郡国分六町目村全圖」から、屋敷の南側を区画する堀跡ではないかと想定される。また堀の護岸の「しがらみ」の遺構も見つかっている。平成13年実施の第３次調査では、第２次調査で検出した溝跡群に関連すると考えられる溝跡や、杭列、陶磁器類が発見されている。

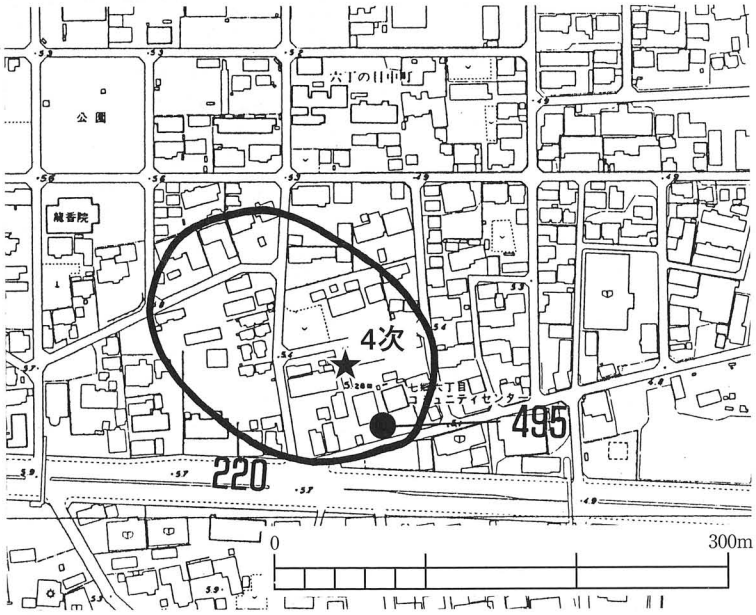
4　基本層序

基本層序は、約20mの盛土下に大別では３層、細別では４層確認された。

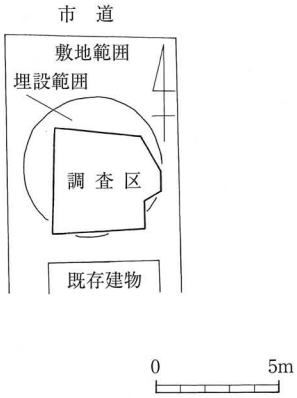
Ⅰ層は盛土前の旧表土で、層厚は５～65cmである。

Ⅱ層は下部にⅢａ層の巻き上げが見られた。水田層の可能性がある。層厚は０～15cmである。

Ⅲ層は、シルト質粘土層と砂質シルト層の違いにより、２層に分けられた。Ⅲa層は層厚０～25cm、Ⅲb層は層厚80cmである。Ⅲb層は細砂・粗砂をラミナ状に含み、河川堆積の可能性が考えられる。



第93図　調査地点の位置



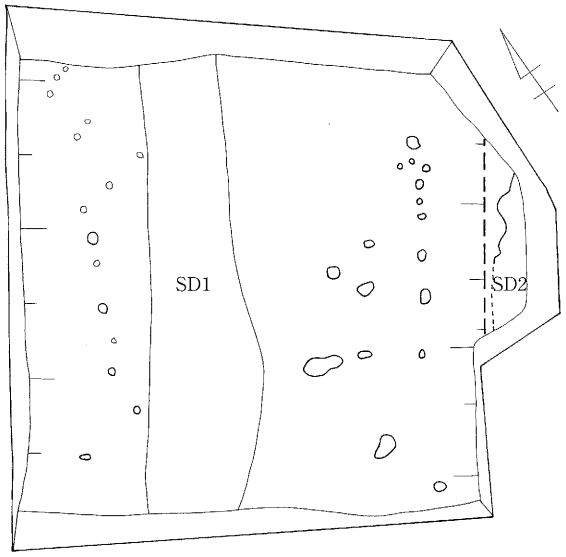
第94図　調査区配置図

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲa層上面で溝跡を２条検出した。また、陶器が23点、磁器が52点、石製品が１点、鉄製品が１点、瓦が１点出土した。

１）溝跡

SD１溝跡　Ⅱ層上面で検出した。南北に延びる溝跡で、東側は一部で立ち上がりを検出したが、西側は調査区域外に及んでいる。東側はSD２と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。断面形は上底が長い台形を呈する。検出した限りでの上端幅は約3.7m、下端幅は0.6m～0.9m、深さは1.2mである。堆積土は３層に分けられるが、いずれも自然堆積によるものと考えられる。西側の斜面では杭列を検出した。残存している杭が10本、痕跡のみのものが5基あり、南北にほぼ交互に配置されている。しがらみ状の遺構であった可能性が考えられる。残存する杭または杭跡の直径は５～15cmである。また、東側の斜面でも杭跡と見られるものを17基検出した。こちらは杭が残存するものはなく、杭跡の直径は５～20cmである。

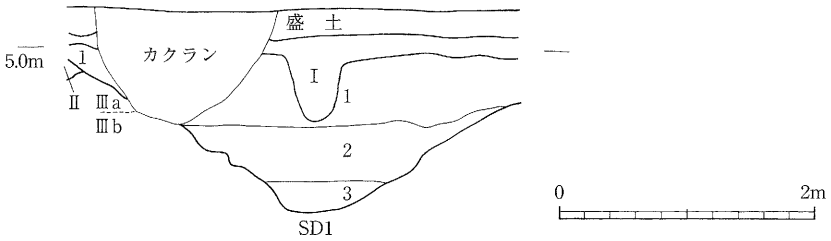


※スクリーントーンは杭が残存　0　2m

第95図　遺構配置図

SD１の１層から出土した遺物は、陶器４点、磁器７点、石製品１点、鉄製品１点で、いずれも破片である。２層から出土した遺物は磁器片５点である。また３層から出土した遺物は陶器18点・磁器35点・瓦１点で、全て破片である。いずれの層にも近世の遺物が含まれている。

特に３層からは、17世紀後半～19世紀後半の陶磁器が出土している。肥前産の陶器である呉器手腕（第97図１）は、灰釉が施され漆継痕がある。年代は17世紀後半のものと見られる。同じく肥前産磁器の染付皿（図版75－６）には、蛸唐草文とコンニャク印判による菊花文が施されている。また焼継痕が見られる。焼継の技法は、19世紀に



基本層	土　色		土　性	備　考
Ⅰ	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	旧表土。
Ⅱ	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	下部にⅢa層の巻き上げあり。水田層か。
Ⅲa	5Y5/2灰	オリーブ色	シルト質粘土	
Ⅲb	5Y4/2灰	オリーブ色	砂質シルト	細粒砂、粗粒砂をラミナ状に含む。河川堆積土か。
層　位	土　色		土　性	備　考
SD1-1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	自然堆積層。ビニール等を含む。
2	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	自然堆積層。ビニール等を含む。
3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	Ⅲb層をまだら状に少量含む。近世陶磁器を含む。

第96図　調査区・南壁断面図

確立してきたものであることから、この皿は19世紀又はそれ以前に作られ継ぎ直されたものと推定される。

また切込産磁器の染付碗（第97図－３）には、蝶文と源氏香文が施され、見込文様も見られる。時期は19世紀前半と推定される。この碗に描かれた香文は、源氏物語を利用した香道の楽しみ方の一つである「源氏香の図」に似ている。「源氏香の図」は、享保の頃成立したと考えられており、着物や帯・重箱の模様にもよく使われている。描かれている香文は、「行幸」の図をデザイン化したものではないかと思われる。一緒に描かれた蝶は、源氏物語では「梅のをり枝、てう、鳥とびちがひ、唐めいたる白き小袿に、濃きがつややかなる重ねて・・・」（玉鬘）といったように衣装などの装飾を描写する際に登場しており、この碗にも源氏物語と関連する文様として用いられたものと考えられる。これと同じ文様の碗は、平成13年実施の第３次調査でも出土している。

その他産地は不明だが、19世紀中～後半の陶器で灰釉を施した段重（第97図－２）と、19世紀後半の磁器で見込み摺絵文様を施し蛇の目凹高台をもつ染付の鉢又は皿（図版75－５）と見られるものが出土している。

SD１の１層から出土した鉄製品は鎹（図版75－７）で、最大長17.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ82gである。SD１の東西斜面で多数の杭跡を検出していることから、これに関連して使用されていた可能性が考えられる。同じく１層からは長さ9.3cm、幅4.1cm、厚さ3.3cm、重さ160gの砥石（図版75－４）も出土している。材質は凝灰岩と見られ、両側面に擦切り痕がある。

SD２溝跡　調査区の東側拡張部で検出した。SD１と重複しており、新旧関係はSD１よりも古く、掘り込み面はⅢa層上面である。遺物は出土しなかった。

6　まとめ

① 南北に延びる溝跡を２条検出した。掘り込み面が異なることから、SD１がより新しい溝跡である。

② SD１は、Ⅱ層中より18世紀代と考えられる陶器片が出土していることから、18世紀以降に形成されたと考えられる。また、３層から近世の陶磁器に加え、明治期の染付皿が出土していることから、この頃までは一定の深さを保ち、機能していたものと推測される。また１・２層には共にビニール等が含まれ、近隣住民の話等も勘案すると、戦前頃までは溝跡が残存していたと考えられる。

③ SD１の東西両斜面からは杭跡が検出された。西側は特に杭がよく残存しており、一定範囲に交互に配置されていることから、しがらみ等の可能性が高い。

④ SD１の南側延長線の東に第１次調査で検出した溝跡等があることから、SD１はその規模から判断すると、東側の屋敷地を囲む堀として第１次調査の西側まで延びていた可能性が高いと考えられる。

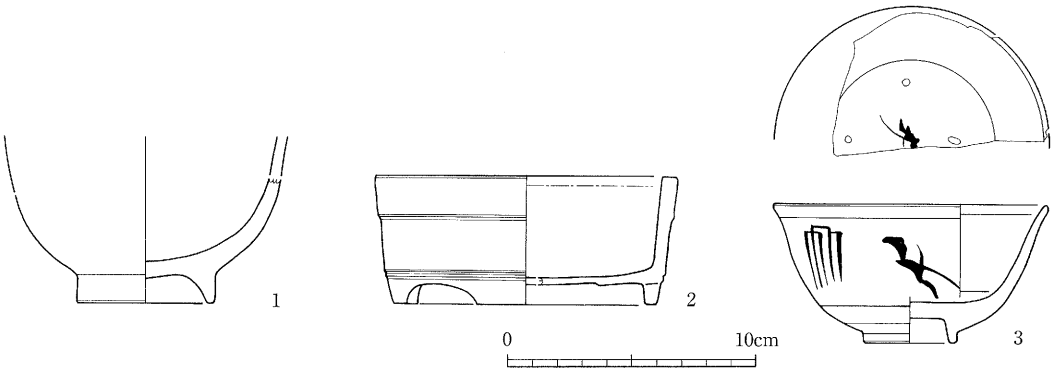
⑤ SD２は、第１次調査区北側で検出した屋敷の区画溝と同様の遺構と考えられる。

＜参考文献＞

阿部秋夫、他校注・訳2004『新編日本古典文学全集　源氏物語③』小学館

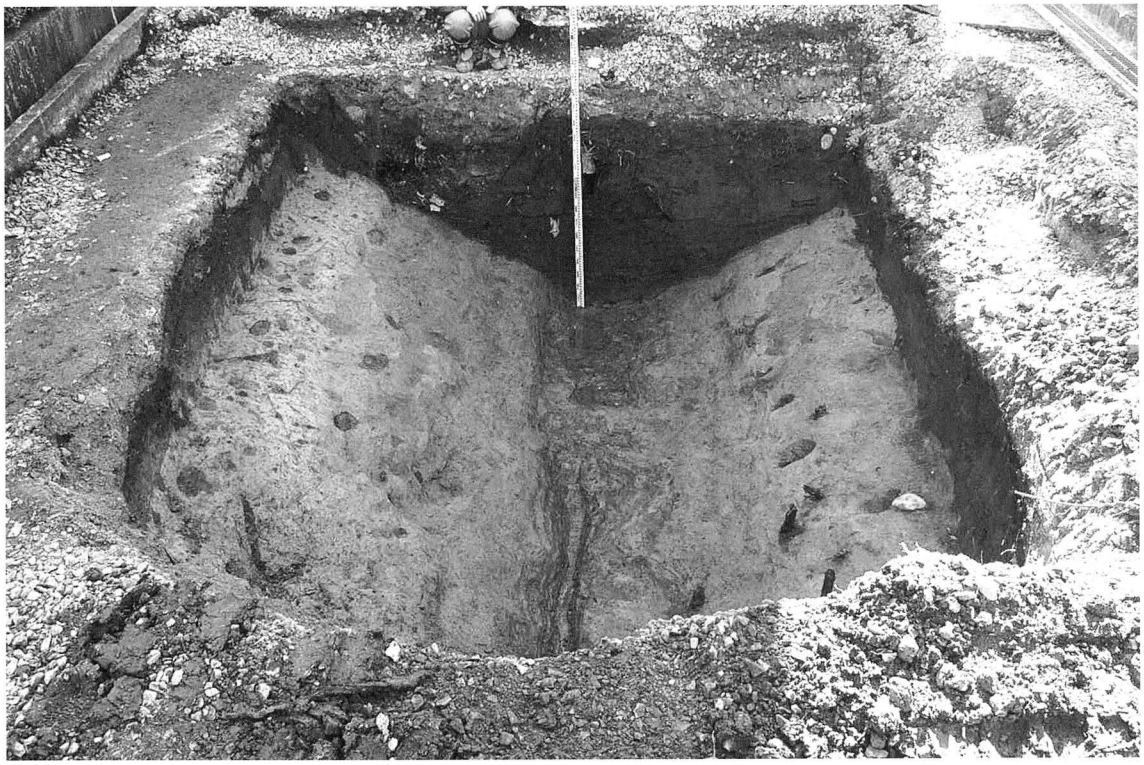
伊東真文・竹田幸司1999「北屋敷遺跡（第２次調査）」『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第238集pp.90-106

木村浩二1979『北屋敷遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第17集



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）				特徴・備考（産地・釉薬・文様等・時期・材質）	写真図版
		遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	I-1	SD1	3	6	陶器	碗	(6.8)			5.6	肥前　灰釉　呉器手碗　漆継痕　17c後	75-1
2	I-2	SD1	3	6	陶器	段重	5.2	(12.2)		(10.6)	産地不明　灰釉　19c中～後	75-2
3	J-1	SD1	3	7	磁器	碗	5.6	(11.0)		3.9	切込　染付　蝶文、源氏香文　見込み文様あり　19c前	75-3
	J-2	SD1	3	7	磁器	鉢or皿					産地不明　染付　見込み摺絵文様あり　蛇ノ目凹高台　19c後	75-5
	J-3	SD1	3	6	磁器	皿					肥前　染付　蛸唐草文、菊花文（コンニャク印判）　焼継痕　18c後	75-6
	K-1	SD1	1	4	石製品	砥石	9.3	4.1	3.3	160	凝灰岩か　両側面に擦切り痕あり	75-4
	N-1	SD1	1	4	鉄製品	鎹	17.3	1.5	0.5	82	長さは最大長で計測	75-7

第97図　出土遺物



1　遺構完掘状況（北から）

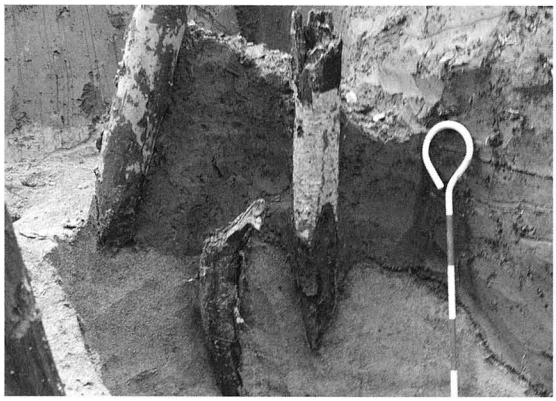
2　基本層序（南・東壁）

図版72　調査区全景・基本層序

1　溝跡南壁断面

2　杭跡検出状況（東から）

3　杭跡検出状況（北東から）



4　SD１杭跡断ち割り断面状況（東から）

5　堆積土３層染付皿出土状況

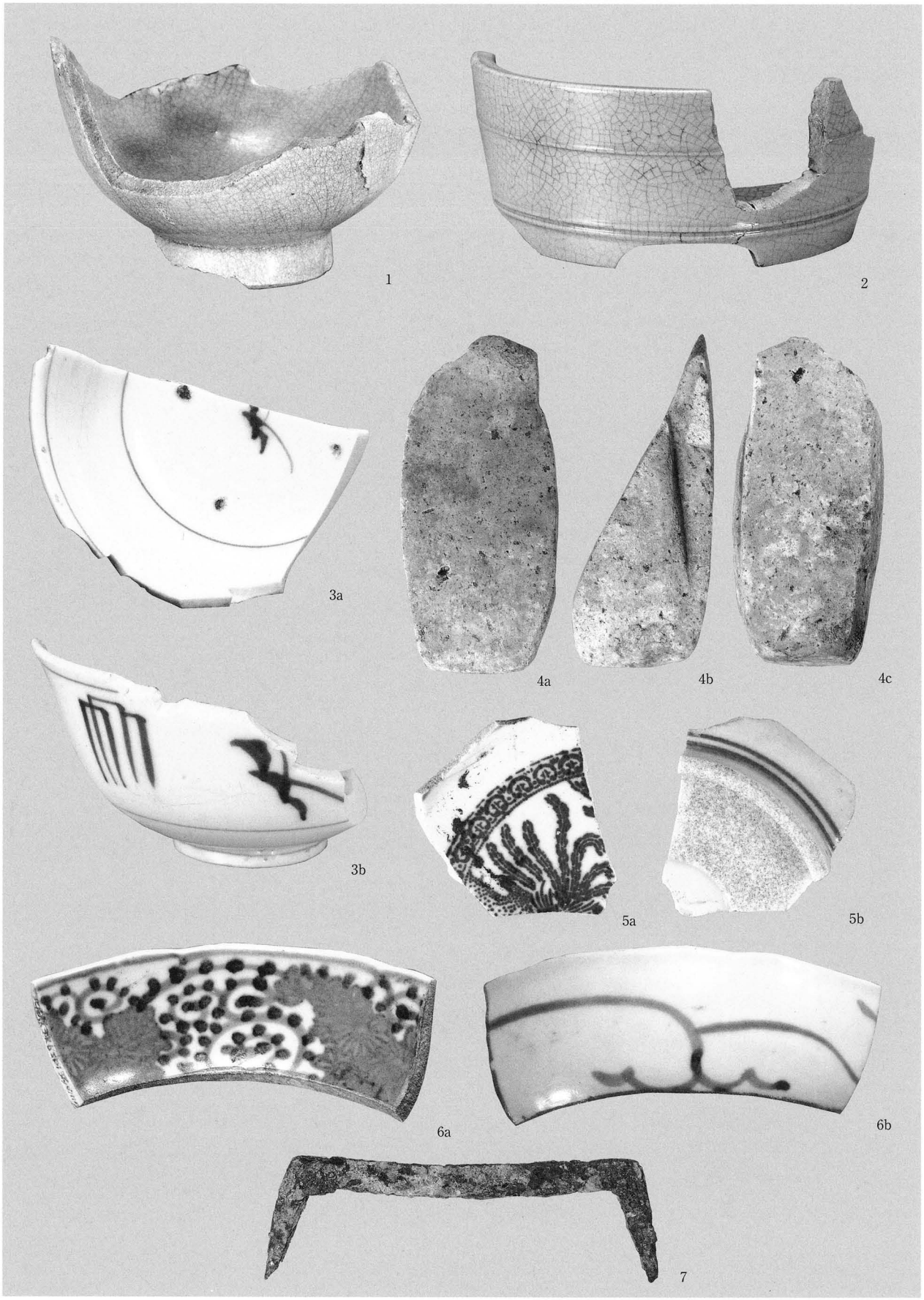
図版73　SD１溝跡

1　検出状況
（南から）

2　検出状況
（北から）

3　南壁断面
（北から）

図版74　SD２溝跡



図版75　北屋敷遺跡４次出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみこいずみいせきほか
書名	南小泉遺跡他
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第326集
編著者名	長島榮一　鈴木隆　加藤隆則　早川潤一　藤田雄介　工藤慶次郎　志賀雄一　森田賢司
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　　電話　022-214-8894
発行年月日	平成20年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
南小泉遺跡 （第52次）	仙台市若林区一本杉町26－1	04100	01021	38°14′33″	140°54′28″	2007.1.29 2007.1.31	20㎡	薬局建築
南小泉遺跡 （第53次）	仙台市若林区遠見塚1丁目6－29	04100	01021	38°14′11″	140°54′24″	2007・2・19 2007・2・22	42㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡 （第54次）	仙台市若林区一本杉町22－9	04100	01021	38°14′34″	140°54′23″	2007・3・5 2007・3・7	33㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡 （第55次）	仙台市若林区遠見塚1丁目44－5の一部、44－51、52、53	04100	01021	38°14′17″	140°54′38″	2007・4・18～4・19 2007・6・18～6・21	96.6㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡 （第56次）	仙台市若林区遠見塚2丁目140－577	04100	01021	38°14′23″	140°54′32″	2007・5・14 2007・5・18	19㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡 （第57次）	仙台市若林区一本杉町22－7、8	04100	01021	38°14′35″	140°54′23″	2007・10・15 2007・10・18	40㎡	個人住宅建築
今泉遺跡 （第5次）	仙台市若林区今泉2丁目82番4、82番8	04100	01235	38°12′38″	140°55′42″	2007・2・13	21㎡	個人住宅建築
今泉遺跡 （第6次）	仙台市太白区今泉2丁目4799	04100	01235	38°12′41″	140°55′45″	2007・7・2 2007・7・6	24㎡	個人住宅建築
大野田古墳群 （第12次）	仙台市太白区大野田字王ノ檀20、25－1、25－10、水路、堤の各一部	04100	01361	38°12′48″	140°52′35″	2007・2・26 2007・3・2	45㎡	個人住宅建築
西台畑遺跡 （第6次）	仙台市長町副都心土地区画整理事業区域内20街区1番画地	04100	01005	38°13′31″	140°53′32″	2007・3・13 2007・3・20	52㎡	個人住宅建築
中田南遺跡 （第4次）	仙台市太白区中田7丁目216－1、216－2	04100	01272	38°11′29″	140°53′14″	2007・4・25 2007・4・27	36㎡	個人住宅建築
茂ヶ崎城跡	仙台市太白区茂ヶ崎2－1	04100	01119	38°14′20″	140°52′25″	2007・6・18～6・21 2007・7・28～7・31	72㎡	野草園改築
伊古田B遺跡 （第2次）	仙台市太白区大野田字イコタ63ブロック4ロットの一部、5ロット	04100	01480	38°12′46″	140°52′19″	2007・7・17 2007・8・10	250㎡	共同住宅建築
北目城跡 （第7次）	仙台市太白区東郡山2丁目106－7、107－5	04100	01029	38°13′16″	140°54′05″	2007・11・7 2007・11・9	25.5㎡	個人住宅建築
北屋敷遺跡 （第4次）	仙台市宮城野区六丁の目中町14－2	04100	01220	38°15′05″	140°56′27″	2007・11・19 2007・11・20	17㎡	防火水槽建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南小泉遺跡 第52次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡、溝跡 土坑・ピット	土師器、須恵器	
南小泉遺跡 第53次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	竪穴住居跡、河川跡 掘立柱建物跡、溝跡	土師器、陶磁器	
南小泉遺跡 第54次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡、土坑 小溝状遺構、ピット	土師器、須恵器	
南小泉遺跡 第55次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡、土坑、ピット 性格不明遺構	土師器、石器 弥生土器、陶磁器	
南小泉遺跡 第56次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡、土坑、流路跡	陶磁器、瓦 木製品、土師器	
南小泉遺跡 第57次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡、ピット 性格不明遺構	土師器	
今泉遺跡 第5次	集落跡・城館跡・ 包含地	縄文～近世	溝跡	弥生土器、土師器 剥片	
今泉遺跡 第6次	集落跡・城館跡・ 包含地	縄文～近世	溝跡、土坑 畦畔状遺構	陶磁器、木製品	
大野田古墳群 第12次	集落跡・円墳群	縄文～中世	掘立柱建物跡 周溝、溝跡、土坑、ピット	埴輪片、縄文土器 石材	
西台畑遺跡 第6次	包含地、甕棺墓	縄文～古墳	竪穴住居跡、溝跡 土坑、ピット	土師器、須恵器 鉄製品	
中田南遺跡 第4次	集落跡、屋敷跡	縄文～中世	竪穴住居跡、ピット	土師器	
茂ヶ崎城跡	城館跡	中世	甕棺墓	甕棺、人骨、数珠 古銭、金具	
伊古田B遺跡 第2次	散布地	古墳～平安	竪穴住居跡、溝跡 土坑、小溝状遺構	土師器、石器、 陶磁器	
北目城跡 第7次	城館跡、集落跡、 水田跡	縄文～近世	堀跡、溝跡	土製品	
北屋敷遺跡 第4次	集落跡	平安～中・近世	溝跡	陶磁器、石製品 鉄製品	

仙台市文化財調査報告書第326集

南小泉遺跡他
発掘調査報告書

2008年３月

発　行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　022(214)8894

印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 022(263)1166